

# 京都府遺跡調査概報

## 第111冊

1. 大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野条里制遺跡
2. 岡ノ遺跡第2次
3. 高梨遺跡第3次
4. 国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡  
大淵遺跡第4次
5. 平安京跡右京一条三坊九・十町(第10次調査)
6. 長岡京跡右京第787次・友岡遺跡
7. 西ノ口遺跡

2004

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



(1)調査トレンチ全景(南から)



(2)調査トレンチ全景(西から)

# 序

京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、発掘調査については、その内容を出来るだけ早く公表する必要がありますが、当センターでは、それに対応するために3種の刊行物を刊行してまいりました。すなわち、発掘調査の速報と職員の論考等を『京都府埋蔵文化財情報』によって、発掘調査成果の概要報告を『京都府遺跡調査概報』によって公表しています。そして、特に著しい成果のあったものについては、『京都府遺跡調査報告書』を刊行しております。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成14・15年度に実施した発掘調査のうち、京都府土木建築部、国土交通省、近畿農政局、京都府教育府管理部の依頼を受けて行った大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野条里制遺跡、岡ノ遺跡第2次、高梨遺跡第3次、国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡、平安京跡右京一条三坊九・十町(第10次調査)、長岡京跡右京第787次・友岡遺跡、西ノ口遺跡に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への关心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、宮津市教育委員会、福知山市教育委員会、京北町教育委員会、亀岡市教育委員会、京都市教育委員会、長岡京市教育委員会、山城町教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成16年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター  
理 事 長 上 田 正 昭

## 凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

1. 大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野条里制遺跡
2. 岡ノ遺跡第2次
3. 高梨遺跡第3次
4. 国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡
5. 平安京跡右京一条三坊九・十町(第10次調査)
6. 長岡京跡右京第787次・友岡遺跡
7. 西ノ口遺跡

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および概要の執筆者は下表のとおりである。

	遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1.	大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野条里制遺跡	宮津市大字大垣小字宮の下ほか	平15.10.15～平16.1.20	京都府土木建築部	石尾政信
2.	岡ノ遺跡第2次	福知山市東岡・南岡	平15.7.29～平16.2.20	国土交通省	戸原和人
3.	高梨遺跡第3次	北桑田郡京北町周山中山	平15.10.30～12.12	京都府土木建築部	田代 弘
4.	国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡	近畿農政局			
	大淵遺跡第4次	亀岡市保津町替田	平14.10.28～平15.3.7		伊野近富 戸原和人 田代 弘
5.	平安京跡右京一条三坊九・十町(第10次調査)	京都市北区大将軍坂田町	平14.10.28～平15.3.10	京都府教育府管理部	村田和弘
6.	長岡京跡右京第787次・友岡遺跡	長岡市梅ヶ谷一丁目	平15.10.20～12.19	京都府土木建築部	竹井治雄
7.	西ノ口遺跡	相楽郡山城町綺田	平16.1.6～2.17	京都府土木建築部	柴 晓彦

3. 本書で使用している座標は、国土座標第6座標系によっており、方位は座標の北をさす。

また、国土地理院発行地形図の方位は経度の真北をさす。

4. 本書の編集は、調査第1課資料係が当たった。なお、遺物の写真撮影は、同資料係主任調査員田中彰が行った。

## 本文目次

1. 大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野条里制遺跡平成15年度発掘調査概要	1
2. 岡ノ遺跡第2次発掘調査概要	13
3. 高梨遺跡第3次発掘調査概要	23
4. 国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡平成14年度発掘調査概要	27
5. 平安京跡右京一条三坊九・十町(第10次調査)発掘調査概要	47
6. 長岡京跡右京第787次・友岡遺跡発掘調査概要	77
7. 西ノ口遺跡発掘調査概要	89

## 挿図目次

### 1. 大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野条里制遺跡

第1図 調査地および周辺主要遺跡分布図	2
第2図 大垣・一の宮地区トレント配置図	3
第3図 大垣遺跡・一の宮遺跡上層遺構平面図	4
第4図 大垣遺跡・一の宮遺跡下層遺構平面図	4
第5図 大垣遺跡・一の宮遺跡3トレント下層遺構平面図	5
第6図 大垣遺跡・一の宮遺跡土層断面図	6
第7図 難波野条里制遺跡トレント配置図	7
第8図 難波野条里制遺跡柱状土層断面図	8
第9図 大垣遺跡・一の宮遺跡出土遺物実測図・拓影	10
第10図 難波野条里制遺跡出土遺物実測図・拓影	11
第11図 大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野条里制遺跡出土渡来錢拓影	12

### 2. 岡ノ遺跡第2次

第12図 調査地位置図	14
第13図 トレント配置図	15
第14図 10~12トレント遺構配置図	16
第15図 3トレント遺構配置図	17
第16図 6・16トレント遺構配置図	18

第17図	出土遺物実測図(1)-----	20
第18図	出土遺物実測図(2)-----	21
3. 高梨遺跡第3次		
第19図	調査地位置図および周辺遺跡分布図-----	23
第20図	調査トレンチ配置図-----	24
第21図	土層断面図-----	25
第22図	トレンチ遺構配置図-----	25
第23図	出土土器実測図-----	26
第24図	石槍-----	26
4. 国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡		
大淵遺跡第4次		
第25図	調査地位置図-----	28
第26図	トレンチ配置図-----	29
第27図	B W地区遺構配置図-----	30
第28図	遺構実測図-----	31
第29図	遺構断面図(1)-----	32
第30図	遺構断面図(2)-----	33
第31図	竪穴式住居跡 S H106・107・119実測図-----	34
第32図	B E地区遺構配置図-----	35
第33図	溝 S D100出土遺物実測図-----	37
第34図	溝 S D101出土遺物実測図(1)-----	38
第35図	溝 S D101出土遺物実測図(2)-----	39
第36図	溝 S D108出土遺物実測図(1)-----	40
第37図	溝 S D108出土遺物実測図(2)-----	41
第38図	そのほかの遺構出土遺物実測図(1)-----	42
第39図	そのほかの遺構出土遺物実測図(2)-----	43
第40図	そのほかの遺構出土遺物実測図(3)-----	44
第41図	そのほかの遺構出土遺物実測図(4)-----	44
5. 平安京跡右京一条三坊九・十町(第10次調査)		
第42図	調査地位置図-----	47
第43図	平安京条坊図と調査位置-----	49
第44図	上層(中世ほか)遺構図-----	50
第45図	平安時代の遺構図-----	51
第46図	下層(古墳時代)遺構図-----	52
第47図	遺構土層断面図-----	53

第48図	掘立柱建物跡 S B 02165平・断面図-----	54
第49図	現地説明会風景-----	55
第50図	小穴 S P 02046遺物出土状況-----	56
第51図	遺物出土状況-----	57
第52図	築地内溝 S D 02018出土遺物実測図(1)-----	58
第53図	築地内溝 S D 02018出土遺物実測図(2)-----	59
第54図	築地内溝 S D 02018出土遺物実測図(3)-----	60
第55図	北側溝 S D 02022出土遺物実測図-----	60
第56図	南側溝 S D 02109出土遺物実測図-----	61
第57図	溝 S D 02090出土遺物実測図-----	61
第58図	溝 S D 02097出土遺物実測図-----	62
第59図	土坑 S K 02127出土遺物実測図-----	63
第60図	そのほかの遺構出土遺物実測図(1)-----	64
第61図	掘立柱建物跡 S B 02165出土遺物実測図-----	64
第62図	包含層出土遺物実測図-----	65
第63図	不明土坑 S K 02026出土遺物実測図-----	65
第64図	築地内溝 S D 02018出土遺物実測図-----	66
第65図	そのほかの遺構出土遺物実測図(2)-----	67
第66図	九・十町Ⅰ期の遺構-----	69
第67図	九・十町Ⅱ-a・b期の遺構-----	70
第68図	九・十町Ⅱ-c期の遺構-----	71
第69図	九・十町Ⅲ期の遺構-----	72

#### 6. 長岡京跡右京第787次(7ANNM-4地区)・友岡遺跡

第70図	調査地位置図-----	77
第71図	A～D調査区位置図-----	78
第72図	A地区遺構平面実測図-----	79
第73図	A地区掘立柱建物跡 S B 01平・断面実測図-----	80
第74図	A地区土坑 S K 02平・断面実測図-----	81
第75図	B地区遺構平面図-----	82
第76図	C地区遺構平面実測図-----	83
第77図	C地区掘立柱建物跡 S B 02平・断面実測図-----	84
第78図	D地区遺構実測図-----	85
第79図	D地区掘立柱建物跡 S B 03平・断面実測図-----	85
第80図	D地区土坑 S K 07平・断面実測図-----	85
第81図	出土遺物実測図-----	86

## 7. 西ノ口遺跡

第82図	調査地位置図-----	89
第83図	基本土層柱状図-----	90
第84図	調査地平面図-----	91
第85図	包含層出土遺物実測図-----	92
第86図	池状遺構 S G 01出土遺物実測図-----	93

# 図版目次

## 1. 大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野条里制遺跡

図版第 1	(1) 大垣遺跡・一の宮遺跡調査地近景(東から) (2) 大垣遺跡・一の宮遺跡 2 トレンチ溝 S D01柱列(西から) (3) 大垣遺跡・一の宮遺跡 2 トレンチ南壁断面溝 S D02(北から)
図版第 2	(1) 大垣遺跡・一の宮遺跡 2 トレンチ溝 S D01断面、推定道路断ち割り状況(西から) (2) 大垣遺跡・一の宮遺跡 3 トレンチ近世耕作遺構(畝・溝)(西から) (3) 大垣遺跡・一の宮遺跡 3 トレンチ溝 S D01西壁(東から)
図版第 3	(1) 大垣遺跡・一の宮遺跡 3 トレンチ柱列検出状況(西から) (2) 大垣遺跡・一の宮遺跡 3 トレンチ柱列完掘状況(西から) (3) 大垣遺跡・一の宮遺跡 3 トレンチ柱列完掘状況(東から)
図版第 4	(1) 大垣遺跡・一の宮遺跡 3 トレンチ溝 S D01内の柱列 3・4(西から) (2) 大垣遺跡・一の宮遺跡 3 トレンチ柱列 1-3 検出状況(西から) (3) 大垣遺跡・一の宮遺跡 4 トレンチ全景(東から)
図版第 5	(1) 難波野条里制遺跡 1・2 トレンチ調査前風景(西から) (2) 難波野条里制遺跡 1 トレンチ全景(西から) (3) 難波野条里制遺跡 1 トレンチ北壁断面(南から)
図版第 6	(1) 難波野条里制遺跡 1 トレンチ東端土器出土状況(南から) (2) 難波野条里制遺跡 1 トレンチ下層土器出土状況(南から) (3) 難波野条里制遺跡 4 トレンチ全景(東から)
図版第 7	(1) 難波野条里制遺跡 4 トレンチ柱穴群検出状況(東から) (2) 難波野条里制遺跡 5 トレンチ全景(東から)

(3) 難波野条里制遺跡 5 トレンチ北壁断面(南から)

図版第8 (1) 難波野条里制遺跡 6・7 トレンチ調査前風景(東から)

(2) 難波野条里制遺跡 7 トレンチ全景(東から)

(3) 難波野条里制遺跡 7 トレンチ北壁断面(南から)

図版第9 出土遺物(1)

図版第10 出土遺物(2)

## 2. 岡ノ遺跡第2次

図版第11 (1) 調査地遠景(東から) (2) 3・10~12 トレンチ全景(上が北)

(3) 6・16 トレンチ全景(上が北)

図版第12 (1) 10 トレンチ全景(北西から) (2) 11 トレンチ全景(東から)

(3) 11 トレンチ溝 S D1103 検出状況(北東から)

図版第13 (1) 11 トレンチ溝 S D1103 断面(北東から)

(2) 11 トレンチ溝 S D1103 遺物出土状況(北から)

(3) 12-1 トレンチ全景(西から)

図版第14 (1) 12-2 トレンチ全景(東から) (2) 3 トレンチ全景(北西から)

(3) 3-1 トレンチ全景(南から)

図版第15 (1) 3-2 トレンチ遺構検出状況(北から)

(2) 3-2 トレンチ S X0301 検出状況(北から)

(3) 3-2 トレンチ P24 検出状況(北から)

図版第16 (1) 3-3 トレンチ堅穴式住居跡 S H0309 検出状況(南から)

(2) 3-3 トレンチ堅穴式住居跡 S H0309 遺物出土状況(1)(南から)

(3) 3-3 トレンチ堅穴式住居跡 S H0309 遺物出土状況(2)(南から)

図版第17 (1) 3-3 トレンチ溝 S D0311 検出状況(東から)

(2) 3-3 トレンチ溝 S D0311 遺物出土状況(1)(東から)

(3) 3-3 トレンチ溝 S D0311 遺物出土状況(2)(北から)

図版第18 (1) 3-3 トレンチ溝 S D0311 遺物出土状況(3)(北から)

(2) 3-3 トレンチ溝 S D0311 遺物出土状況(4)(西から)

(3) 6 トレンチ全景(西から)

図版第19 (1) 16 トレンチ調査状況(西から)

(2) 16 トレンチ堅穴式住居跡 S H1602 検出状況(東から)

(3) 16 トレンチ土坑 S K1603 検出状況(北から)

図版第20 出土遺物

## 3. 高梨遺跡第3次

図版第21 (1) 調査トレンチ全景(北から) (2) 調査トレンチ全景(南東から)

(3) 東壁土層堆積状況(西から)

- 図版第22 (1) 遺構検出状況(南東から) (2) 遺構検出状況(北から)  
 (3) 下層遺構確認グリッド掘削風景(西から)
- 図版第23 (1) 溝 S D01検出状況(東から) (2) 土坑 S K04検出状況(西から)  
 (3) ピット検出状況(西から)
- 図版第24 (1) 土坑 S K03検出状況(北西から) (2) 土層堆積状況(南西から)  
 (3) 土層堆積状況(西から)

#### 4. 国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡

##### 大淵遺跡第4次

- 図版第25 (1) 調査地遠景(北から) (2) 調査地遠景(南から)  
 (3) 調査地全景(上が北)
- 図版第26 (1) B W地区井戸 S E 104(南から) (2) B W地区井戸 S E 104木枠(上が東)  
 (3) B W地区井戸 S E 110(東から)
- 図版第27 (1) B W地区井戸 S E 117(東から)  
 (2) B W地区溝 S D 108 P - P'断面(西から)  
 (3) B W地区集石遺構 S X 103(東から)
- 図版第28 (1) B W地区集石遺構 S X 105(東から)  
 (2) B W地区柱穴 P - 64(南東から)  
 (3) B W地区柱穴 P - 94(南から)
- 図版第29 (1) B W地区溝 S D 100(東から)  
 (2) B W地区溝 S D 100 A出土遺物(東から)  
 (3) B W地区溝 S D 100 B出土遺物(東から)
- 図版第30 (1) B W地区溝 S D 100 A - A'断面(東から)  
 (2) B W地区溝 S D 100 C - C'断面(東から)  
 (3) B W地区溝 S D 101北半(南から)
- 図版第31 (1) B W地区溝 S D 101南半(北から)  
 (2) B W地区溝 S D 101 D - D'断面(東から)  
 (3) B W地区溝 S D 101 G - G'断面(南から)
- 図版第32 (1) B W地区溝 S D 101 J - J'断面(南から)  
 (2) B W地区溝 S D 102 L - L'断面(南から)  
 (3) B W地区溝 S D 114断面(南東から)
- 図版第33 (1) B W地区堅穴式住居跡 S H 106・107・119(北から)  
 (2) B E地区溝 S D 114(南東から)  
 (3) B E地区溝 S D 114(南東から)
- 図版第34 出土遺物(1)
- 図版第35 出土遺物(2)

図版第36 出土遺物(3)

5. 平安京跡右京一条三坊九・十町(第10次調査)

図版第37 (1)調査トレンチ全景(上が北) (2)調査トレンチ全景(西から)

図版第38 (1)調査前風景(北東から) (2)調査前風景(北西から)

(3)重機掘削作業風景(南西から)

図版第39 (1)上層遺構(攪乱)掘削作業(南東から)

(2)中世遺構検出作業(東から)

(3)溝S D02018掘削作業(南東から)

図版第40 (1)小穴S P02046遺物出土状況・上層(北から)

(2)小穴S P02046遺物出土状況・中層(北から)

(3)小穴S P02046遺物取り上げ後(北から)

図版第41 (1)溝S D02018検出状況(西から) (2)溝S D02018完掘状況遠景(西から)

(3)溝S D02018内出土石材(西から)

図版第42 (1)溝S D02018内瓦出土状況(東から) (2)溝S D02018内瓦出土状況(東から)

(3)溝S D02018内瓦出土状況(南から)

図版第43 (1)土坑S K02127出土遺物No.155(上が東)

(2)土坑S K02127出土遺物No.141(上が北)

(3)溝S D02109出土遺物No.111(上が南)

図版第44 (1)完掘状況遠景(北東から) (2)完掘状況遠景(東から)

(3)完掘状況遠景(西から)

図版第45 (1)築地跡遠景(東から) (2)鷹司小路北側溝S D02022(西から)

(3)築地内溝S D02018(西から)

図版第46 (1)南西拡張部全景(南から) (2)南東拡張部全景(南から)

(3)空中撮影作業風景(南東から)

図版第47 (1)築地基底部断ち割り(西から) (2)溝S D02097完掘状況(北東から)

(3)溝S D02097完掘状況(南西から)

図版第48 出土遺物(1)

図版第49 出土遺物(2)

図版第50 出土遺物(3)

図版第51 出土遺物(4)

図版第52 出土遺物(5)

6. 長岡京跡右京第787次(7ANNNM-4地区)・友岡遺跡

図版第53 (1)調査前風景(南から) (2)調査前風景(北から)

(3)A地区トレンチ全景(北から)

図版第54 (1)A地区土坑S K02(北から)

- (2) A 地区掘立柱建物跡 S B01柱穴 P - 7 断面(東から)
  - (3) A 地区掘立柱建物跡 S B01柱穴 P - 72 断面(南から)
- 図版第55 (1) B 地区トレンチ全景(南から) (2) B 地区北半部分(北から)  
(3) B 地区東壁断面(西から)
- 図版第56 (1) B 拡張区(西から) (2) C 地区トレンチ全景(南から)  
(3) C 地区掘立柱建物跡 S B02(西から)
- 図版第57 (1) C 地区柱穴 P - 5 (南から) (2) D 地区トレンチ全景(北から)  
(3) D 北拡張区(南から)
- 図版第58 (1) D 地区土坑 S K07(東から)  
(2) D 地区土坑 S K07 遺物出土状況(北から)  
(3) D 地区土坑 S K04(東から)

## 7. 西ノ口遺跡

- 図版第59 (1) 調査前の状況(北から) (2) 災害記念塔(西から)  
(3) 記念塔碑文(東から)
- 図版第60 (1) 調査地全景(北から) (2) 調査地全景(南から)  
(3) 流路跡 S R02 断面(西から)

# 1. 大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野条里制遺跡 平成15年度発掘調査概要

## 1. はじめに

大垣遺跡・一の宮遺跡、難波野条里制遺跡は、宮津市字大垣・難波野ほかに所在する。特別名勝天橋立の北側一帯に広がる。

今回の調査は、京都府土木建築部の依頼により、同部が計画・推進する国道178号線府中道路(通称「府中バイパス」)新設改良事業に先行して、遺跡の実態を把握するために昨年度から継続して実施している試掘調査および発掘調査である。

現地調査は、調査第2課課長補佐兼調査第1係長奥村清一郎、調査第2係専門調査員石尾政信、調査第1係調査員石崎善久が担当した。本概要報告の編集・執筆は、石尾が担当した。

調査は、平成15年10月15日に着手し、フェンス工事などを行うとともに、重機掘削を開始した。重機掘削の終了後に人力による掘削作業を行い、遺構・遺物の有無、基本的な層位の把握を主目的として記録作業を実施した。また、調査の終了した地点から、適時埋め戻し作業を行った。

現地調査は平成16年1月20日に終了した。調査面積は約800m<sup>2</sup>である。なお、発掘調査に係る経費は、京都府土木建築部が全額負担した。

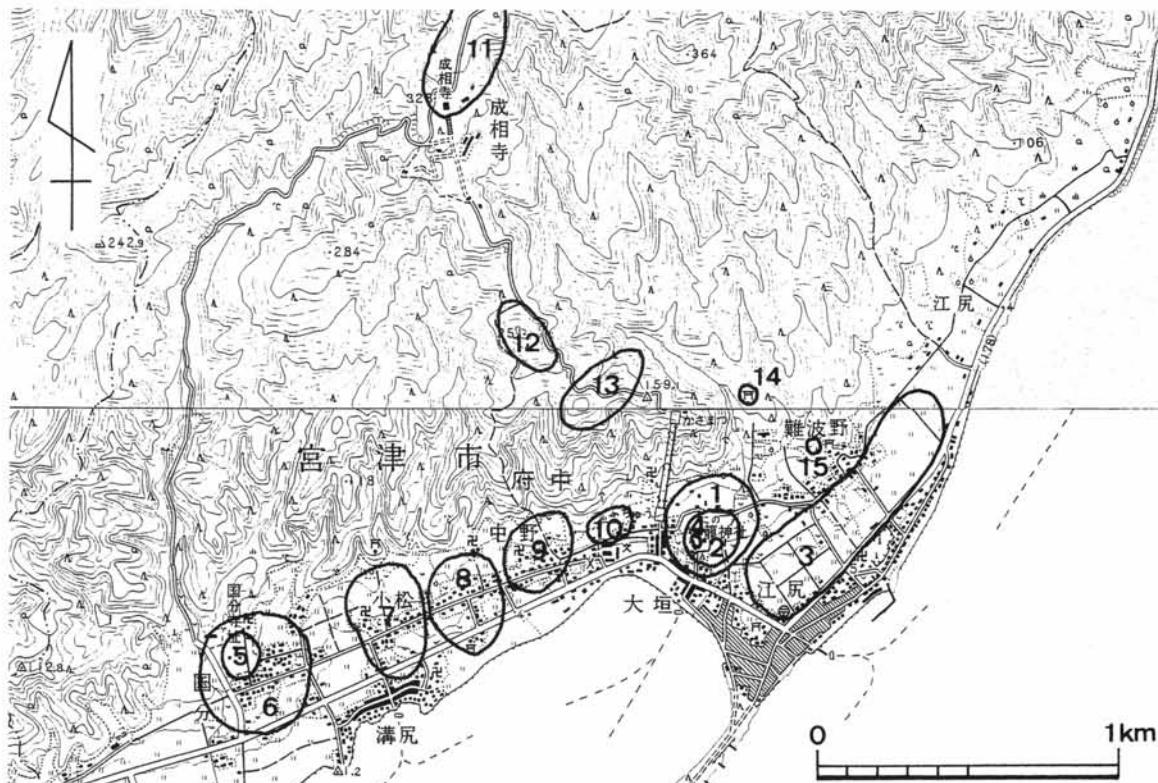
調査にあたっては、関係諸機関・地元自治会・個人などのご指導・ご協力があった。また、現地調査・整理作業には、地元住民の方々などの参加・協力があった。<sup>(注1)</sup>記して感謝したい。

## 2. 位置と環境

大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野条里制遺跡は、日本三景のひとつ天橋立の北側、成相山系と阿蘇海・宮津湾に挟まれた狭小な緩斜面上に位置している。

大垣遺跡・一の宮遺跡は、丹後一宮である籠神社を中心に展開する中世集落遺跡と推定されている。また、籠神社周辺では、弥生時代後半から古墳時代初頭の遺物も採集されている。遺跡周辺の現況は、国道178号を中心に土産物屋・旅館・食堂などが建ち並び、休日には観光客で賑わう場所である。難波野条里制遺跡は、府中から国道178号線を伊根方面に進んだ左手、江尻集落の西側の扇状地に位置する。この一帯の農道や水田畦畔には、現在でもおよそ一町(約109m)四方の方形区画が認められる部分があり、条里施行に伴う条里制地割の可能性が指摘してきた。

この地域は、成相山系から幾筋もの小河川が、阿蘇海・宮津湾に注ぎこみ、扇状地群が連なり一部では段丘状を呈する場所も見られる。阿蘇海沿岸域には、縄文時代から室町・江戸時代にわたる遺跡・墳墓などが濃密に分布しており、ここが府中とよばれるのは、丹後国府が置かれて以後のことである。丹後国府の場所はいまだ明らかでなく、その候補地として中野遺跡をあげる意



第1図 調査地および周辺主要遺跡分布図(国土地理院1/25.000日置・宮津)

- |           |             |               |               |
|-----------|-------------|---------------|---------------|
| 1. 大垣遺跡   | 2. 一の宮遺跡    | 3. 難波野条里制遺跡   | 4. 籠神社(籠神社経塚) |
| 5. 丹後国分寺  | 6. 国分遺跡     | 7. 小松遺跡       | 8. 安国寺遺跡      |
| 9. 中野遺跡   | 10. 慈光寺遺跡   | 11. 成相寺旧境内    | 12. 阿弥陀ヶ峰城跡   |
| 13. 今熊野城跡 | 14. 真名井神社経塚 | 15. 難波野千体地蔵遺跡 |               |

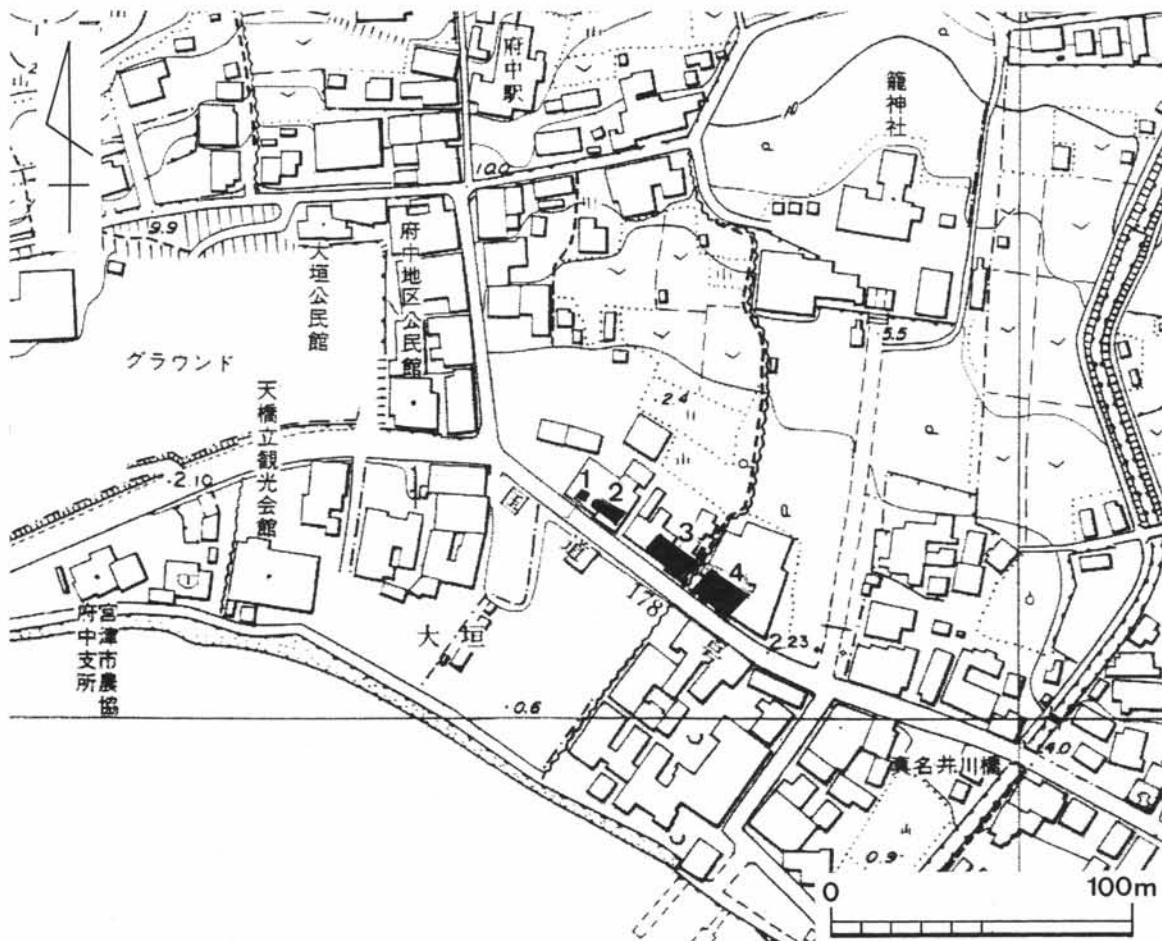
見もある。中野遺跡からは、奈良～室町時代にかけての遺構・遺物が検出されている。

丹後国分寺跡は、宮津市宇国分の地に、礎石・基壇などが残されているが、この遺構群は創建当時のものではなく『丹後国分寺再興縁起』に記された再建金堂(1326～1334年)であり、創建時の遺構については確認されていない。

『延喜式』神明帳に記される式内社の籠神社があり、ここには国宝の海部氏系図が伝わっており、境内から経塚が検出されている。経塚には銘文を有する銅製経筒が納められ、文治四年(1188年)采女秋重などが法華経を納めたことが記されている。また、同時に銅鏡2面も検出されている。

成相山中腹の標高330m付近には、平安時代後期に創建されたと伝えられる山岳寺院の成相寺があり、現在も古本堂と呼ばれる地区を中心に平坦地が多数見られる。それより南、府中の裏山にも標高250mに阿弥陀ヶ峰城跡、標高200mに今熊野城跡などの中世山城が所在する。

こうした遺跡以外に、中世の府中を知る手がかりとして注目されているのが、雪舟等楊(1420～1506?年)筆『天橋立図』である。天橋立を中心に当時の府中の様子が詳しく描かれている。この絵画資料に記されている地名が、現在も小字にみることができる。今後の調査に大きな手がかりを与えるものである。



第2図 大垣・一の宮地区トレーニング配置図(宮津市都市計画図1/2,500に加筆)

### 3. 調査概要

遺跡の範囲は、成相山系の今熊野から天橋立に向かう真名井川により、市街地を中心とした大垣遺跡・一の宮遺跡と、水田耕作地を中心とした難波野条里制遺跡に大きく分けられる。大垣・一の宮地区は阿蘇海に、難波野地区は宮津湾にそれぞれ面している。

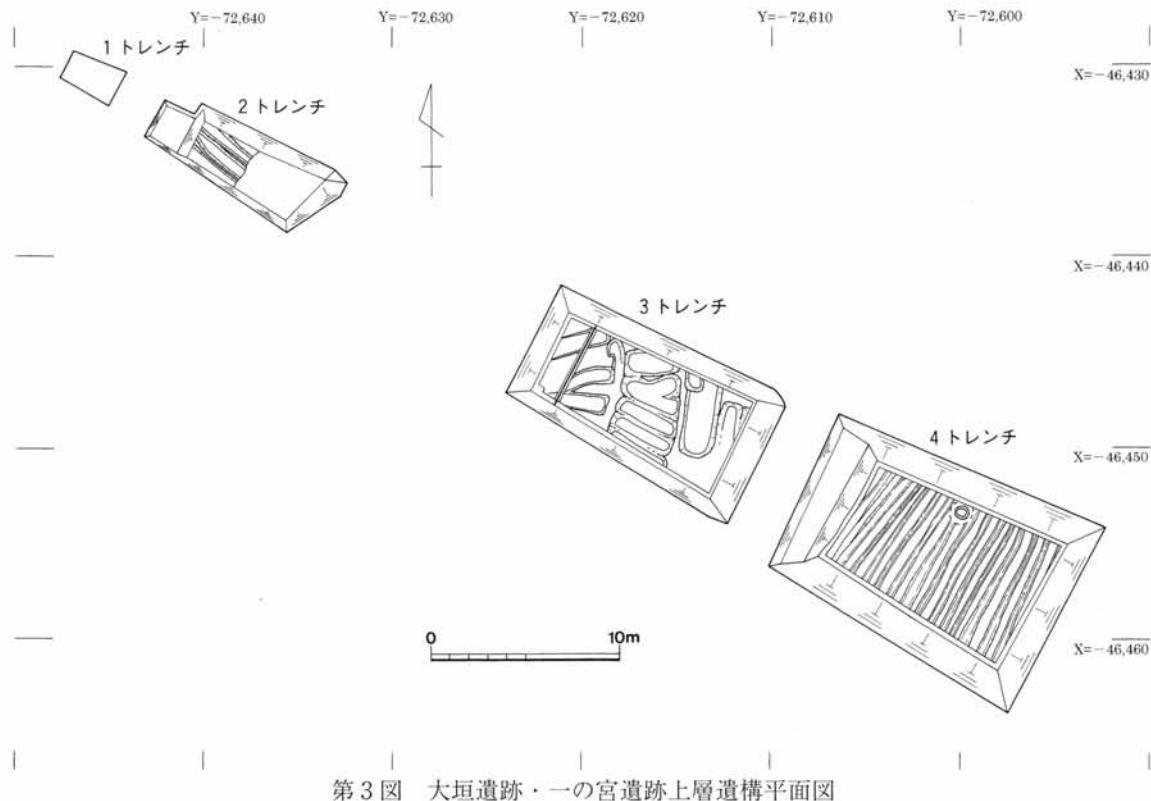
#### (1) 大垣・一の宮地区

大垣・一の宮地区は、水路や商店進入路を確保した後、4か所のトレーニングを設定し周囲にフェンスを設置した。調査地点が商店の前にあたるため、重機掘削や人力掘削の廃土はダンプカーで持ち出した。

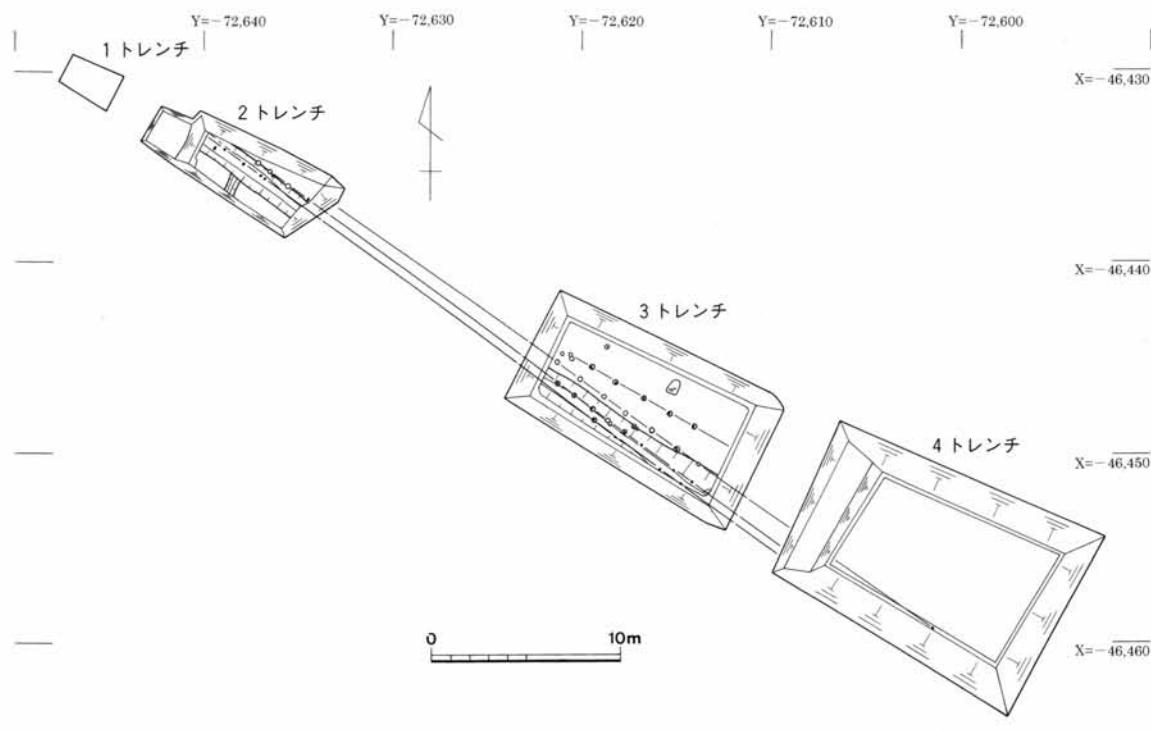
1 トレーニング 2×3 mと掘削範囲が狭いため、遺物採集と堆積層観察の後、埋め戻した。

2 トレーニング 基本層序は攪乱・盛土の下が、淡黄灰色・灰色砂層、暗灰色砂質土、濁茶褐色粘質土、黄灰色砂層、暗褐色粘質土(砂質)、濁灰色・濃灰色砂層、灰色砂層となる。濁茶褐色粘質土は近世の耕土で、その下に、暗褐色粘質土・暗褐色粘質土(砂質)を耕土とする江戸時代前期の耕作遺構(畝・溝)を検出した。畝・溝は概ね北西から南東方向を向く。

下層の砂層面で幅約1.4m、深さ約25cmの素掘り溝(S D01)、柱列を検出した。溝から16世紀中頃の土師器皿・木製品などが出土した。S D01南側の灰色砂層の間に暗灰色砂層が帯状に堆積し、その灰色砂層は固く締まり道路面の可能性が高い。道路面でS D01に直行する素掘り溝(S



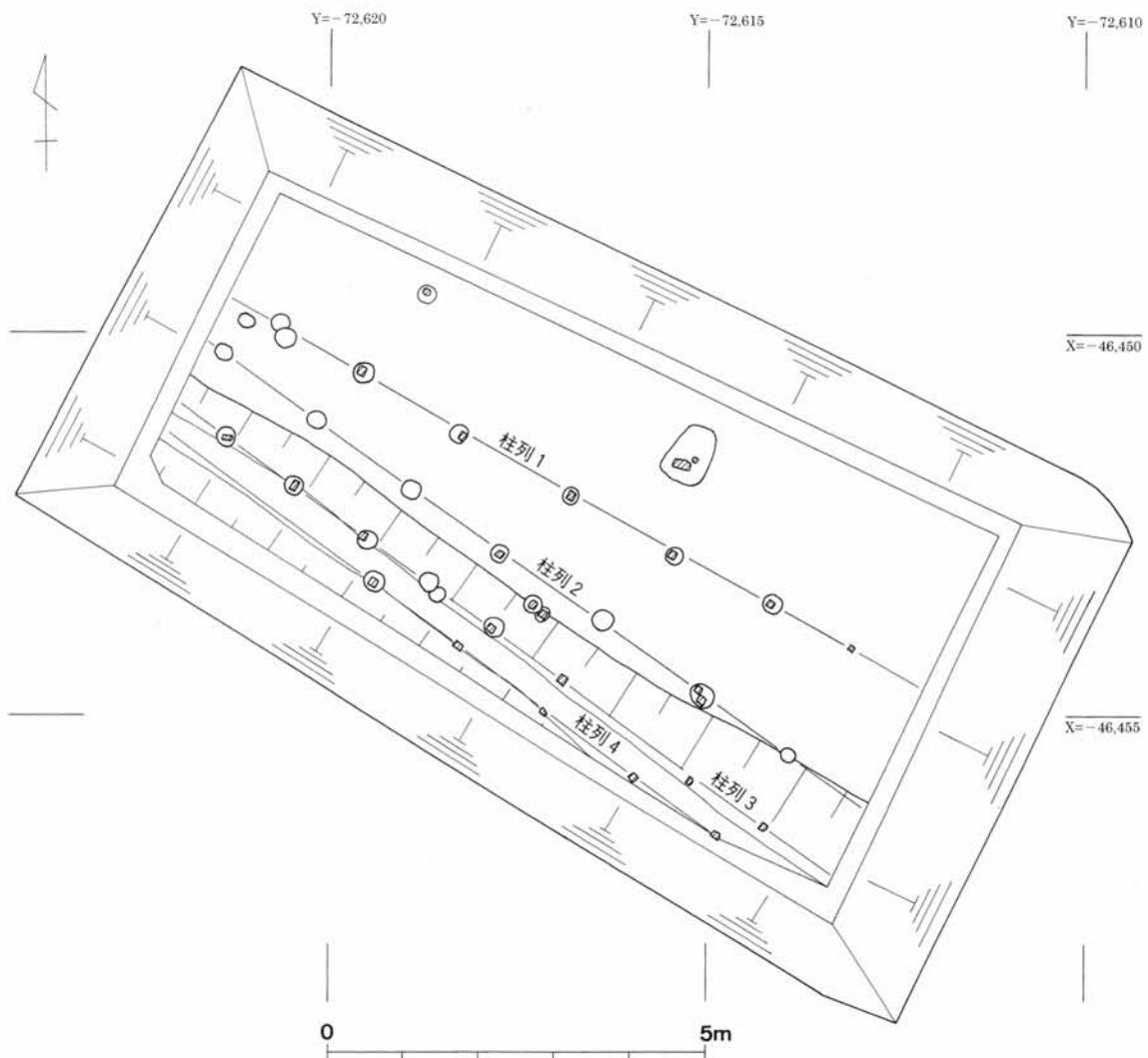
第3図 大垣遺跡・一の宮遺跡上層遺構平面図



第4図 大垣遺跡・一の宮遺跡下層遺構平面図

D02)を検出した。柱列は溝の中および溝に近接したものがあり、2列が確認できた。溝に近接する柱の西側で、灰色砂層面に円形の掘形を検出した。柱はいずれも方形である。

3トレンチ 基本層序は2トレンチとほぼ同様である。粘質土を耕土とする江戸時代前期の耕



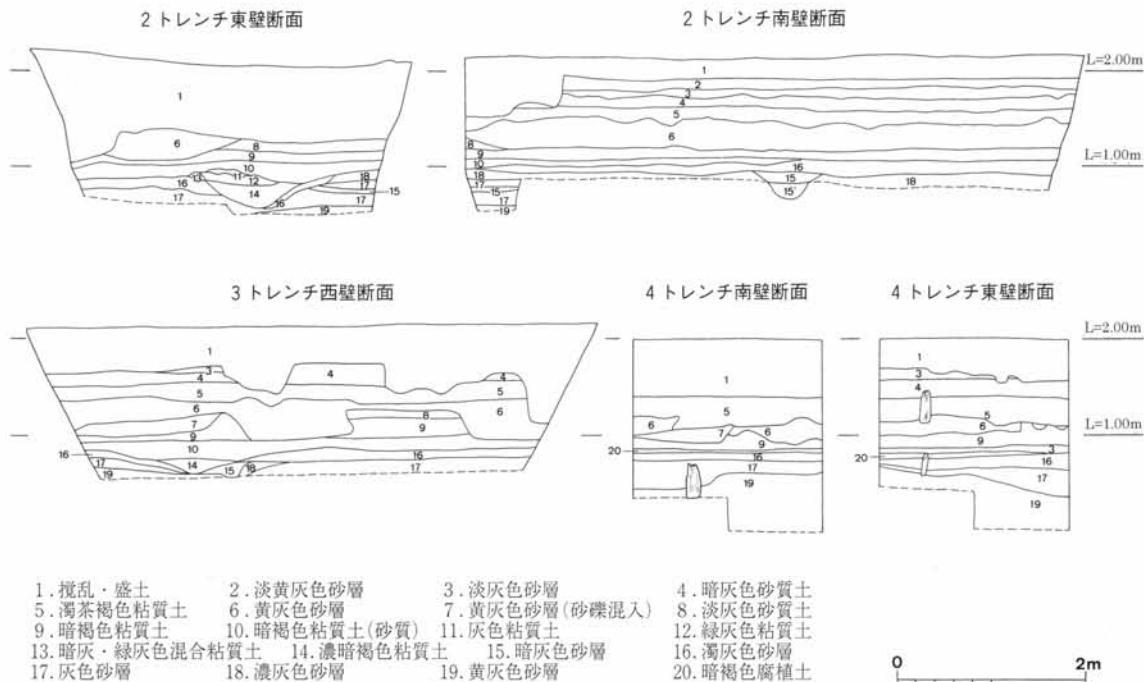
第5図 大垣遺跡・一の宮遺跡3トレンチ下層遺構平面図

作遺構(畝・溝)を検出した。畝・溝の方向が西と東で異なる。暗褐色粘質土の下層で素掘り溝 S D01の延長部分にあたる溝・柱列を検出した。S D01は東部では、幅が広がり落ち込み状になり範囲が明確でない。柱列は北から柱列1～4と呼称する。柱列は溝の中で並行するもの(柱列3・4)、溝に近接するもの(柱列2)、それらとは方向が異なるもの(柱列1)がある。溝中の柱に焼けた痕跡をとどめるものがある。溝 S D01から16世紀中頃の土師器皿・渡来銭・木製品・松毬などが出土した。包含層から渡来銭・銅製鉢・象嵌木製横櫛・漆器・陶磁器などが出土した。

4トレンチ 上層で江戸時代前期の耕作遺構(畝・溝)を検出した。畝・溝の方向は同一で2・3トレンチのものとは異なり規則的に並び幅40cm前後を測る。砂層面で3トレンチの柱列3の延長にあたる柱1本を検出した。包含層から漆器椀・木製品・渡来銭・輸入陶磁器などが出土した。

## (2) 難波野地区

1トレンチ 調査地は真名井川が形成した扇状地の中央付近にあたり、難波野条里制地割がみられる府中公園北側に設定した幅3.5m、長さ22mのトレンチである。基本層序は、暗灰褐色土(耕作土)、淡灰褐色土、濁灰褐色、濁灰褐色砂質土、暗灰色砂礫混入土、淡灰黄色砂礫層、暗灰



第6図 大垣遺跡・一の宮遺跡土層断面図

褐色砂礫層となる。淡黄色砂礫層から大量の古墳時代～中世の土器、滑石製石鍋、渡来銭、綠釉陶器などが出土した。この層には古墳時代や平安時代後期の土器が多い。東端で、近世耕作に関連する石列、暗灰褐色砂礫層上面で平安時代後期の台付皿が出土した土坑や溝を検出した。暗灰褐色砂礫層にも古墳時代前・中期の土器などを包含することを確認したので、遺構面が複数存在するものと推定する。また、トレンチの西側にも遺構・遺物の拡がりが推定される。

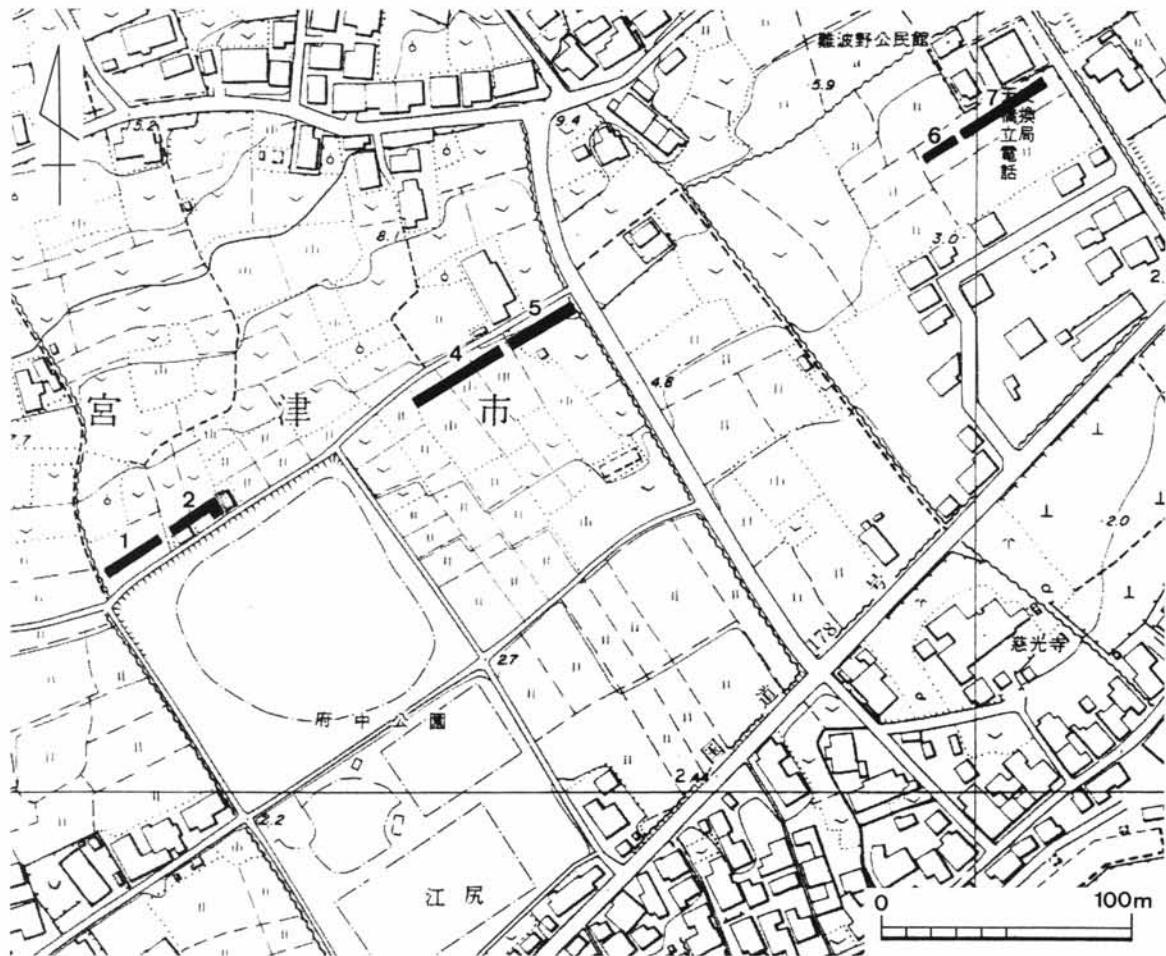
**2 トレンチ** 1トレンチの東側に設定した逆「L」字形の幅3.5m、長さ20mおよび幅3m、長さ6mのトレンチである。1トレンチ同様に淡黄色砂礫層から大量の古墳時代～中世の土器、渡来銭などが出土した。暗灰褐色砂礫層上面で柱1本を検出した。遺物包含層である淡黄色砂礫層は東側に拡がっている。

**3 トレンチ** 農作業小屋移転工事中のため調査を中止した。

**4 トレンチ** 難波野条里制地割の範囲に含まれる府中公園の東方に設定した幅3.5m、長さ40mのトレンチである。基本層序は、暗灰褐色土(耕作土)、暗灰色土、灰褐色土(砂質)、淡灰褐色砂質土となる。その下に砂層・砂礫層が堆積することが断割りで確認できた。表土から約0.5m下の砂質土上面で柱穴群・土坑を検出した。これらは集落の一部と推定される。

包含層から平安時代後期の黒色土器・越前焼き練り鉢などが出土した。トレンチの東部では長径約0.4mの礫を包含する場所があり流路跡と推定される。

**5 トレンチ** 4トレンチの東に設定した幅4m、長さ30mのトレンチである。灰褐色土などの近世以降の整地層が厚く堆積しているため、表土から2m近く掘削した。4トレンチと同様堆積層が確認できたが、湧き水が多く柱穴などは検出できなかった。包含層から平安時代後期の土器・木製下駄などが出土した。



第7図 難波野条里制遺跡トレンチ配置図(宮津市都市計画図1/2,500に加筆)

6トレンチ 幅3.5m、長さ15mのトレンチである。基本層序は濁灰褐色土(耕作土)、濃暗灰色土、暗灰色砂質土、淡黄灰色砂層、灰色砂層、暗灰褐色粘質土、濁灰色砂層、濃灰褐色粘質土、淡灰色砂層、暗灰色砂層、淡黄灰色砂礫層となる。灰褐色粘質土層は、旧耕作土層と思われる。包含層から土師器皿片が出土した。

7トレンチ 6トレンチの東に設定した幅4m、長さ31mのトレンチである。基本層序は6トレンチと同様である。灰褐色粘質土の耕作面を確認した。包含層から陶磁器片が出土した。

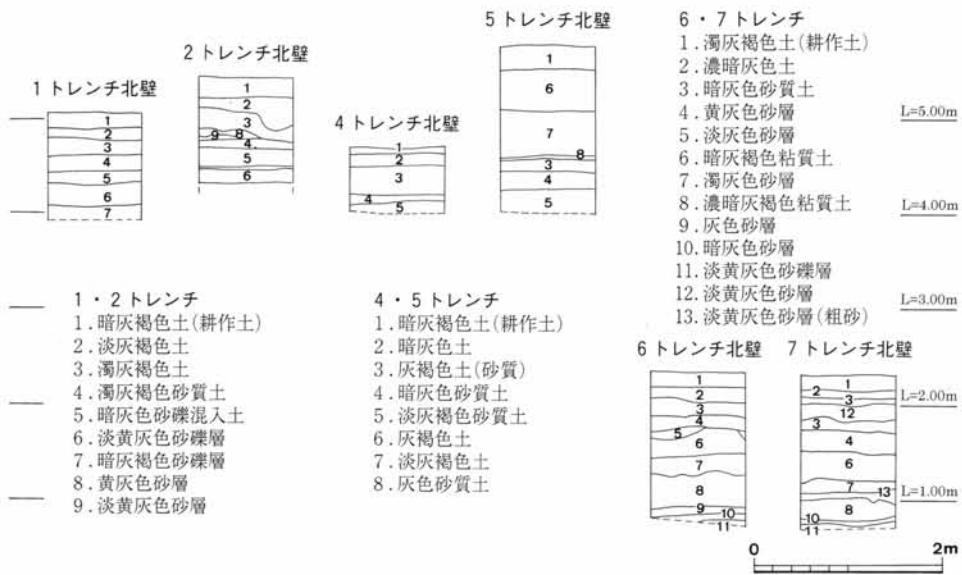
#### 4. 検出遺構(大垣・一の宮地区)

素掘り溝S D01 2トレンチでは幅約1.3m、深さ約0.3mを測り、3トレンチ西端で幅約1.4m、深さ約0.2mを測る。濃暗褐色粘質土が堆積する。3トレンチ東端では幅が広がり南方への落ち込み状になる。

素掘り溝S D02 2トレンチの灰色砂層面で検出したS D01に直行する素掘り溝である。幅約0.6m、深さ約0.2mを測る。暗灰色砂層が堆積する。

柱列1 3トレンチの暗褐色粘質土下層の濁灰色砂層で柱を検出し、灰色砂層面で暗灰色砂層の円形掘形を検出した。柱間は1.2~1.6mを測る。柱は合計6本でいずれも方形である。

柱列2 3トレンチで柱列1と同様に検出した。柱間は1.3~1.6mを測る。掘形に2本残存す



第8図 難波野条里制遺跡柱状土層断面図

るものがある。4トレンチ南壁で延長部分と推測される柱を検出した。

柱列3 3トレンチの溝(SD01)中で検出した。柱間は1.0m前後を測る。柱5本と2か所で残欠を検出した。黄灰色砂層に埋まっている部分が腐植したものがある。2トレンチの北側柱列が、北西方向の延長部分に相当するものと思われる。

柱列4 3トレンチの溝(SD01)の中で検出した。柱間は1.3~1.5mを測る。柱は合計5本で先端を尖らせたものがある。また、柱上部が焼け焦げた様なものがある。2トレンチ南側柱列が、北西方向の延長部分に相当すると推定される。

## 5. 出土遺物(第9~11図)

今回の調査ですべてのトレンチから数量の差はあるが遺物が出土している。図示したのはその一部分である。以下に簡単に記述する。

(1) 大垣遺跡・一の宮遺跡出土遺物(第9図)

1～4は扁平な底部から外上方に開く口縁部をもつ土師器皿である。胎土は精良で淡灰褐色系を呈する、京都系の皿である。底部と口縁部の境界がわずかに屈曲し、ヨコナデの施し方から16世紀中頃のものといえる。1は口径17.8cm、4は口径10.6cmを測る。1・2は2トレンチSD01から、3・4は3トレンチSD01から出土した。5・7は4トレンチ第17層、6は4トレンチ第16層から出土した土師器皿である。8は4トレンチ第16層から出土した土師器皿である。これらは13世紀のものである。9は3トレンチ第17層から、10は3トレンチSD01から出土した土師器台付皿である。11は瀬戸・美濃焼香炉の底部である。底部外面に墨痕がある。12は瀬戸・美濃焼皿の底部である。内面に緑灰色の釉薬がかかり、焼台(トチン)跡が付く。13は白磁皿の底部である。14は青磁碗の口縁部である。15は染付け碗底部である。16は瓦質土器火鉢の底部である。17は越前系甕の底部である。18～21は土錘である。22は茶臼受部である。これらは3・4トレンチ第10～17層から出土した。

木製品には次のものがある。23～25は4トレンチ第17・20層から出土した箸である。26は3トレンチ第17層から出土した草花文を象嵌した櫛である。27は3トレンチSD01から出土した櫛である。28～30は4トレンチ第10・17層上面から出土した漆椀である。28は黒漆に赤漆で花を描く。31は4トレンチ第17層上面から出土した漆被膜である。32は2トレンチSD01から出土したほぞをもつ部材である。33は3トレンチ第16層から出土したほぞをもつ部材である。34～37は4トレンチ第16・18層から出土した有孔の部材である。38は3トレンチSD01から出土した折敷の側板である。39は4トレンチ第20層から出土した下駄である。40は2トレンチSD01から出土した雲形製品である。41は4トレンチ第10層から出土した栓である。42は2トレンチSD01から出土した楔形製品である。

43は3トレンチ第10層から出土した銅製鉢である。重さ1.8gを量る。

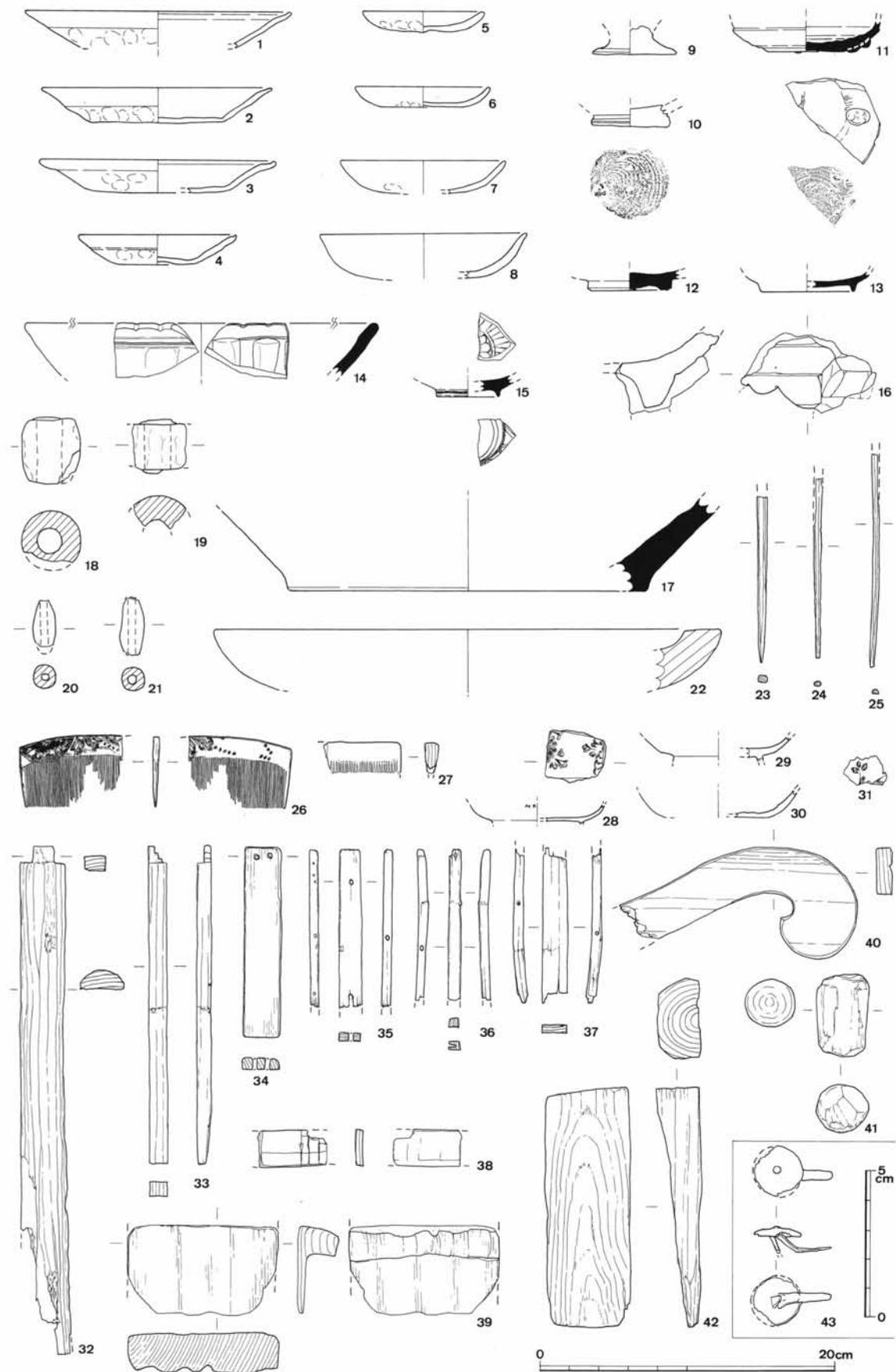
## (2) 難波野条里制遺跡出土遺物(第10図)

44～47は1トレンチ第6層から出土した白磁口縁部である。48は1トレンチ第6層から出土した白磁底部である。49・50は4トレンチ包含層から出土した青磁底部である。49は淡青灰色の釉薬がかかり、50は濁青灰色の釉薬がかかる。51は底部糸切りの須恵器椀である。52・53は底部に断面三角形の高台を貼り付け、高台と体部下半の境界を横方向に削る越前系の練り鉢である。52は4トレンチ包含層から、53は1トレンチ第6層から出土した。54は1トレンチ第6層から出土した土師器台付皿である。55は4トレンチ包含層から出土した黒色土器椀である。56は1トレンチ第6層から出土した黒色土器椀である。57・58は1トレンチ第6層から出土した球形の土錘である。これらは、平安時代後期～鎌倉時代前期のものである。59は1トレンチ第6層から出土した須恵器杯Bで、奈良時代(8世紀前半)のものである。

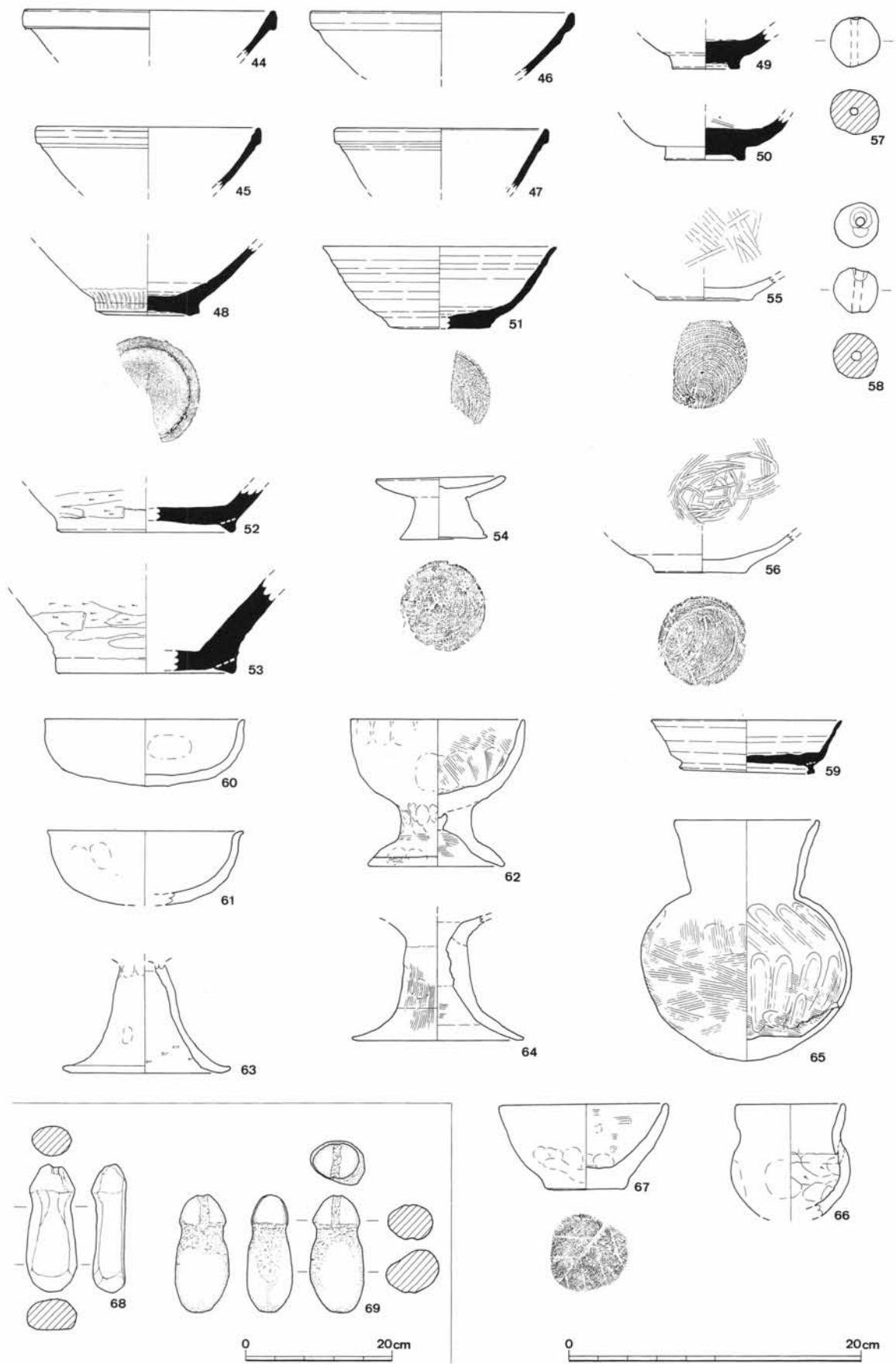
60は2トレンチ第6層から、61は1トレンチ第6層から出土した土師器杯である。60は淡赤褐色を呈し、61は淡橙褐色を呈する。62は淡赤褐色を呈する1トレンチ第7層から出土した土師器高杯である。63は1トレンチ第7層から出土した土師器高杯脚部である。64は1トレンチ第6層から出土した土師器器台脚部である。65は1トレンチ第7層から出土した土師器直口壺である。66は1トレンチ第7層から出土した土師器小型丸底壺である。67は1トレンチ第6層から出土した土師器鉢である。底部に木の葉痕跡が残る。60～68は古墳時代前期末～中期のものである。

68は1トレンチ第6層から出土した大型石錘である。長さ17.7cm、幅6.8cm、厚さ4.3cm、重さ705gある。風化が進み亀裂がはいる。69は1トレンチ第7層から出土した大型石錘である。長さ16.3cm、幅7.4cm、厚さ6.3cm、重さ850gある。

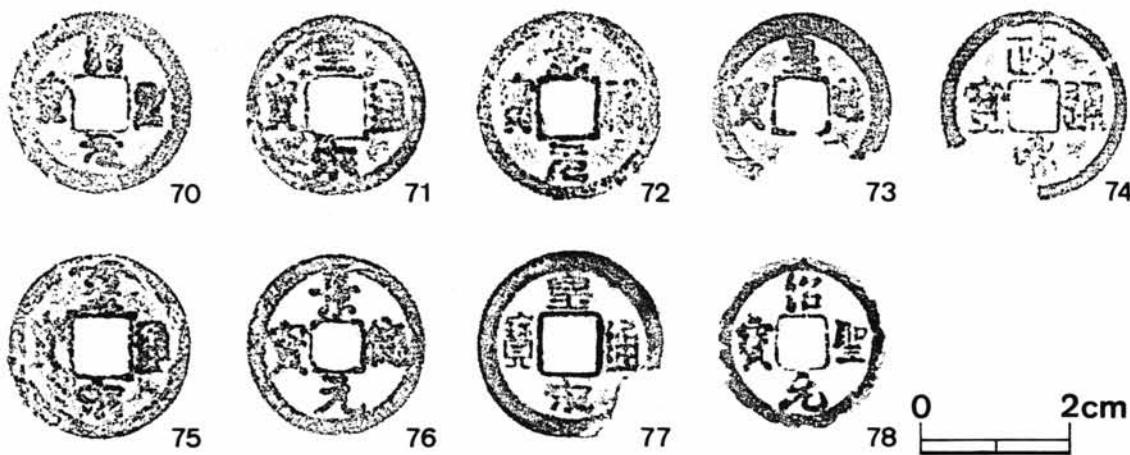
渡来銭(第11図)は、70・78が紹聖元寶(初鑄1094年)、71・73・75・77は皇宋通寶(初鑄1038年)、72は景祐元寶(初鑄1034年)、74は政和通寶(初鑄1111年)、76は景德元寶(初鑄1004年)である。70～72は大垣遺跡・一の宮遺跡3トレンチSD01から、73は同2トレンチSD01から、74・75は同3トレンチ第9層から、76は同4トレンチ第9層から、77は難波野条里制遺跡1トレンチ第6層から、78は同2トレンチ第6層から出土した。



第9図 大垣遺跡・一の宮遺跡出土遺物実測図・拓影



第10図 難波野条里制遺跡出土遺物実測図・拓影



第11図 大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野条里制遺跡出土渡来銭拓影

## 6. まとめ

今回の調査で明らかになったことを列記し、まとめとしたい。

①大垣遺跡・一の宮遺跡で、江戸時代前期と推定される耕作遺構(畝・溝)を検出した。畝・溝の方向は各トレーニングで異なり、畝幅も差があることが判明した。

②大垣遺跡・一の宮遺跡の調査地点は雪舟『天橋立図』の籠神社鳥居西側の空白部分にあたり、柱列は参道西側に描かれた柵列と同様の柵列が、南側にも存在したことを窺わせる遺構である。

③大垣遺跡・一の宮遺跡で検出した素掘り溝 S D01の南側は、ベースの砂層に別種砂層が入り、固く締まっているので、道路面の可能性が高い。素掘り溝 S D01は道路側溝と推定できる。溝の方向が国道178号線とほぼ一致することから、現国道は中世の道路を踏襲したものと推定できる。

④大垣遺跡・一の宮遺跡で検出した柱列 4 には焼けた痕跡があり、16世紀初頭の一色氏と武田氏の争乱で被災した可能性が高い。一色氏が武田・細川氏の侵攻に備えて今熊野城・阿弥陀ヶ峰城に籠城する際、府中の街にみずから火を放ったことが記録に見られる(宮津市史資料編別掲596)。

⑤素掘り溝 S D01から多くの松毬が出土しており、周辺が松林であったと推定できる。雪舟『天橋立図』の場景がうかがえる資料を得た。

⑥難波野条里制遺跡では、断面観察でも条里に関連する遺構は検出していないが、1・2・4トレーニングを中心とする範囲に古墳時代～中世にかけての集落遺跡が展開していることが判明した。

(石尾政信)

注1 調査参加者は以下のとおりである(順不同・敬称略)。

作業員 岳崎巖・椋平利矩男・丸谷明彦・桜井ふきの・桜井玲子・長谷川節子・中田由紀子・平田裕子・斎藤秀明・後藤香代子・坂根宏則・長谷川弘則 調査補助員 山本多美子・小笠原順子・野澤雅人・村上雅紀 整理員 藤村文美・寺尾貴美子

また、次の関係諸機関・個人からご協力・ご教示を得た。京都府文化財保護課・京都府立丹後郷土資料館・宮津市教育委員会・安藤信策・伊藤太・福島孝行・中島陽太郎・東高志・原田三壽・椋平正盛・後藤幸男

## 2. 岡ノ遺跡第2次発掘調査概要

### 1. はじめに

岡ノ遺跡は、福知山市の中北部にある南から北にのびる横山丘陵状に立地しており、その先端部には天正期に明智光秀によって築かれたとされる福知山城がその名残を留めている。福知山城の石垣調査の際には、天守台の平坦部で弥生時代の集落跡を確認しており、また平成14年度には、今回の調査地の隣接地で発掘調査(第1次)が行われて、弥生時代の墓域および古墳・奈良時代～中世にかけての集落遺跡であることが判明している。

今回、国土交通省近畿地方整備局により国道9号線の拡幅計画がなされたことにより、周辺部での調査結果をふまえ、事前に発掘調査を実施することとなった。調査地は、京都府福知山市東岡町～南岡町内の総延長約500mが対象となった。

調査面積は、当初1,300m<sup>2</sup>であったが、協議により約500m<sup>2</sup>が追加され、丘陵の東寄りを中心約1,535m<sup>2</sup>、西端で約250m<sup>2</sup>の合計約1,785m<sup>2</sup>となった。

調査は、調査第2課第2係長伊野近富、主任調査員戸原和人、専門調査員石尾政信が担当した。調査期間は、平成15年7月29日～平成16年2月20日である。調査に係わる経費については、全額、国土交通省近畿地方整備局が負担した。

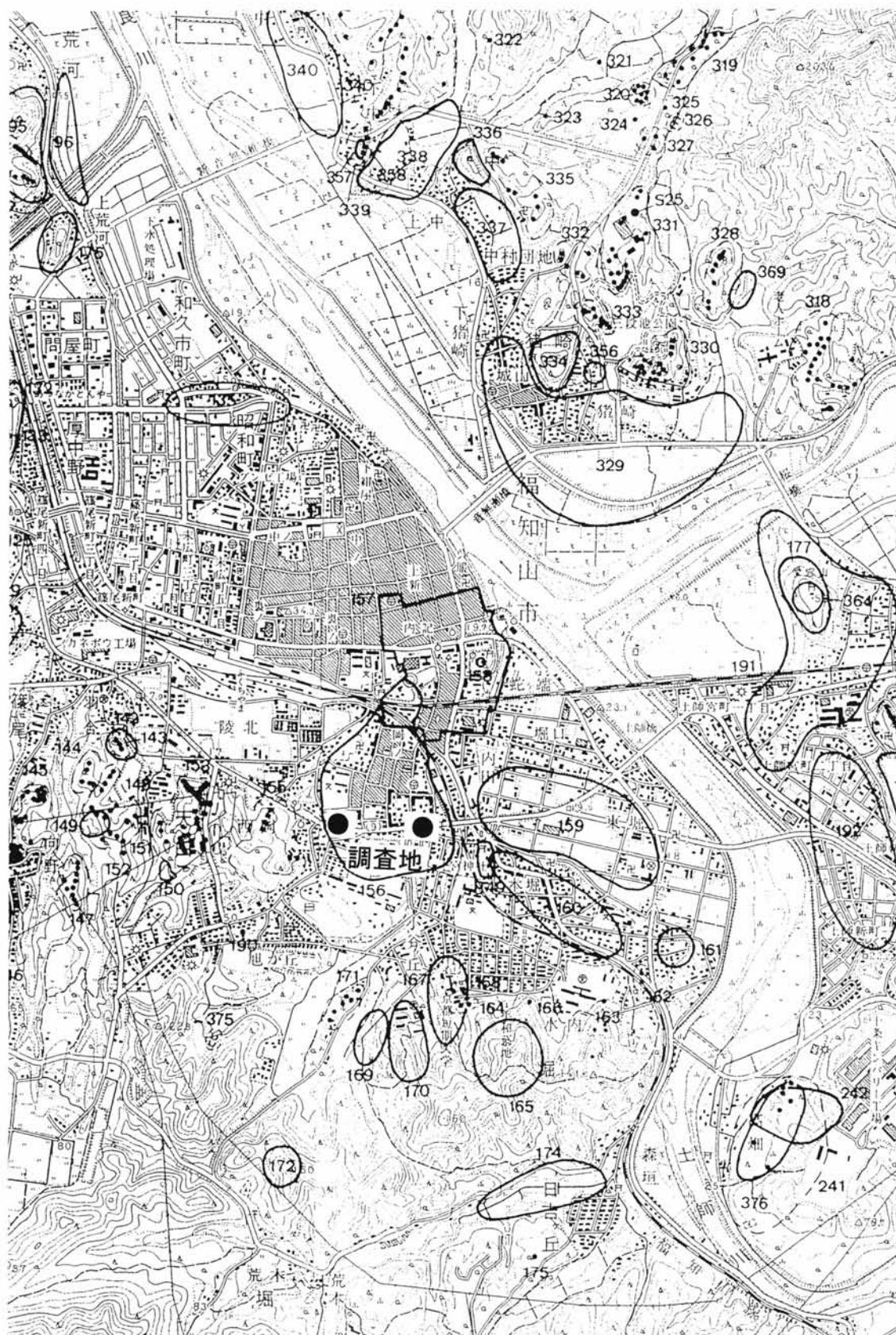
今回の報告は、当初計画により行った約1,300m<sup>2</sup>についてのものであり、追加された485m<sup>2</sup>については、次年度以降に報告する予定である。

調査にあたっては、本事業を計画された国土交通省近畿地方整備局福知山河川国道事務所・京都府教育委員会・福知山市教育委員会に数多くの御指導・助言を得た。また現地作業では、南岡町・東岡町・緑ヶ岡町・北小谷ヶ丘町各自治会の方々の御理解と御支援をいただいた。厚く御礼申し上げます。

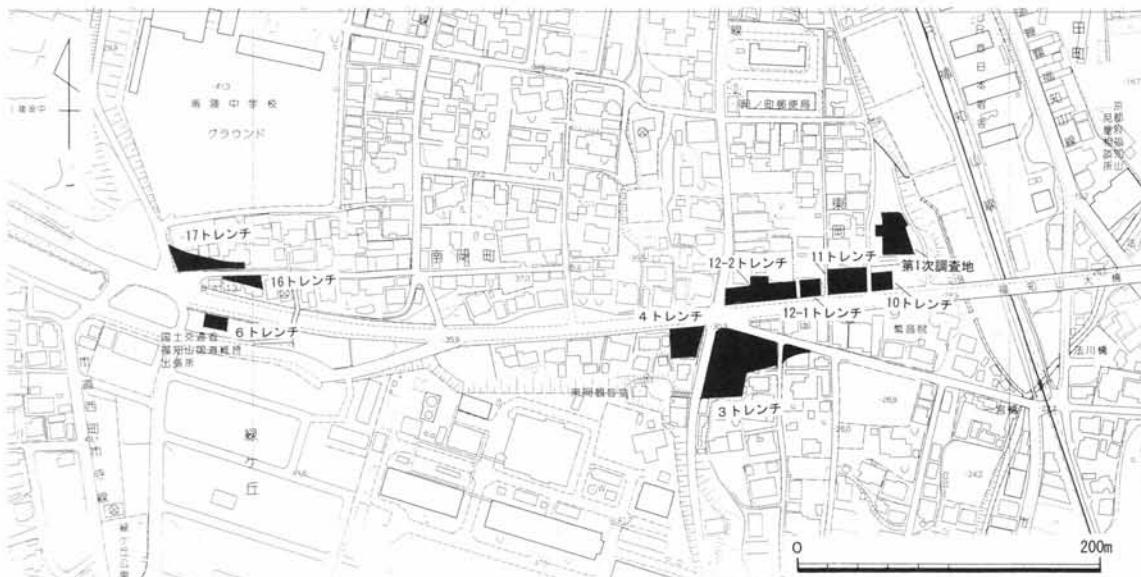
### 2. 調査概要

先に述べたように調査地は、大きくは東西の2か所に分かれている。調査対象地の東端では、当初、標高約27mの地点で、国道を挟んだ南北に5か所のトレンチ(3・10・11・12-1・12-2)を設定し、その後、協議により国道の南で1か所のトレンチ(4トレンチ)を追加した。西端では、当初、標高約42mの地点で国道を挟んだ南北にそれぞれ1か所の試掘トレンチ(6・16トレンチ)を設定した。その後、協議により北に1か所のトレンチ(17トレンチ)を追加した。本稿では、当初計画による7か所のトレンチ(3・6・10・11・12-1・12-2・16トレンチ)について説明する。

調査によって検出した遺構は、弥生時代の住居跡・溝・柱跡、古墳時代の住居跡や平安時代の



第12図 調査地位置図(『京都府遺跡地図』より転載。国土地理院1/25,000福知山東部・西部)



第13図 トレンチ配置図

柱跡・土坑、中世の柱跡、近世の井戸・柱跡などである。

### 3. 検出遺構 (第14~16図・図版第12~19)

調査地の東端では、国道の北側で、隣接する第1次調査で検出した弥生時代の方形周溝墓を画する溝 S D02・03と並行する同時期の溝 S D1103や中世・近世の土坑・ピット、近世の井戸を検出した。

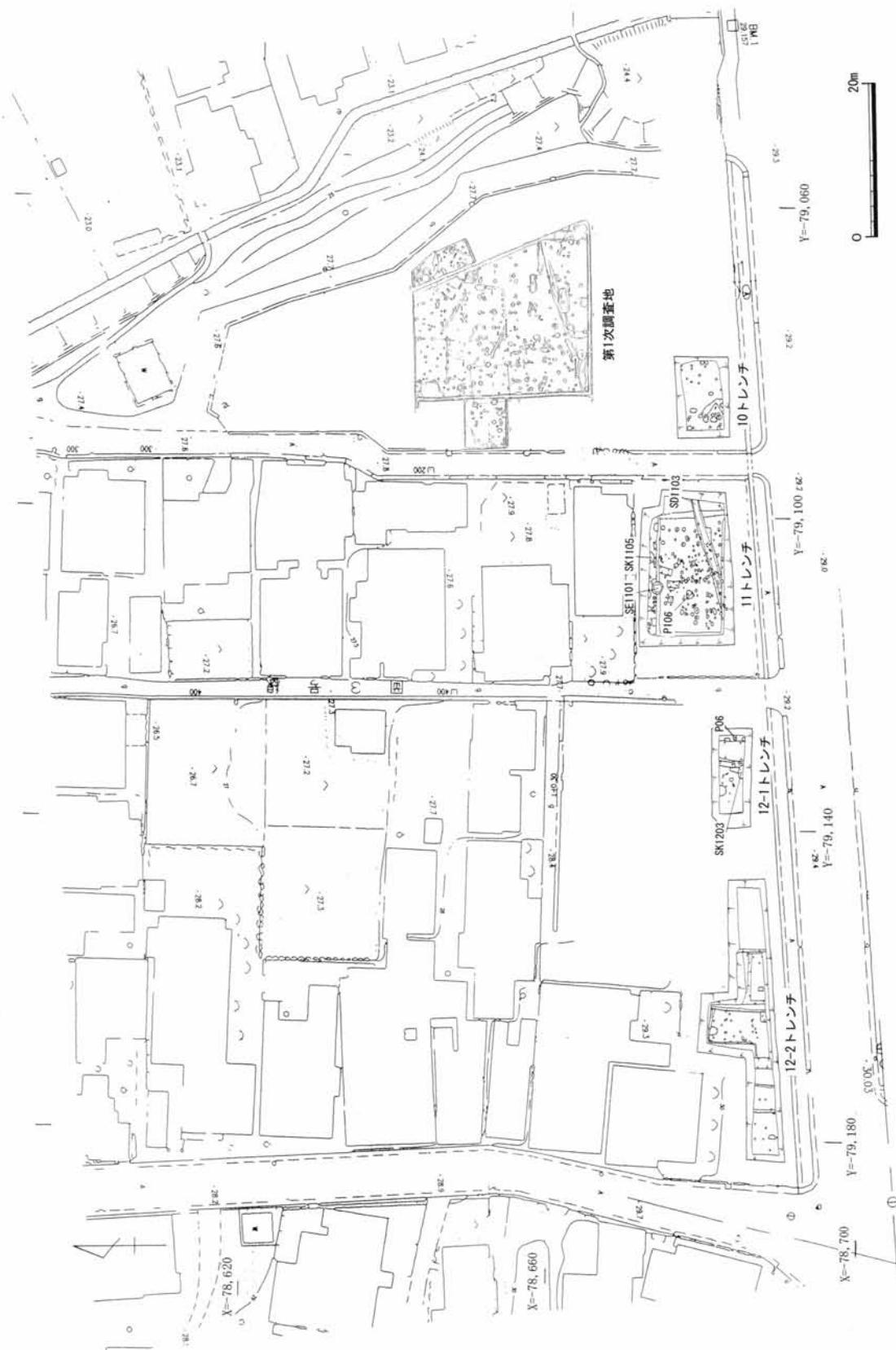
国道の南側では、弥生時代の竪穴式住居跡 S H0309・溝 S D0311、平安時代の遺物を出土するピット・土坑や、近世の井戸・土坑を検出した。

調査地の西端では、弥生時代末~古墳時代初めにかけての竪穴式住居跡の一部と、掘立柱建物跡・ピット・土坑などを検出した。

(1) 10・11トレンチ 国道の北側に東から西に向かって10・11トレンチを設定した。地表面の標高は約29mを測る。基本的な層位は、所有者であった旧国鉄によって約1.4mのコーケスによる盛土がされており、標高約27.5mで暗褐色粘質土となり、厚さ約20cmの黒色粘質土、以下約27.1mで黄褐色粘質土(ベース)となる。暗褐色粘質土の上面からは、近世福知山城期のピットが掘込まれている。これら近世のピットは、暗褐色粘質土を埋土としている。11トレンチでは、トレンチ南辺に並行する柱列を約3.6mの間隔で検出した。これらのピットは、一辺約0.3~0.4mのやや歪な方形掘形内に直径10cmの柱根が残り、拳大の円礫によって根固が施されている。柱列は12-1トレンチへものびている。

溝 S D1103 11トレンチで検出した弥生時代の溝である。断面逆台形を呈し、上面の幅約1.2~1.5m、下面の幅約0.5~0.8m、深さ約0.3mを測り、約14mにわたって検出した。埋土は黒色粘質土の1層で、溝内からは弥生土器壺・甕が出土した。

井戸 S E1101 調査地の北辺中央で検出した。掘形の直径は約1.4mを測り、直径約1.0mの井戸枠が木製縦板で組まれている。この井戸は近年まで使用されているもので、井戸の改修が幾度も行われている。掘形内より瓦器椀・皿・土錘などが出土している。

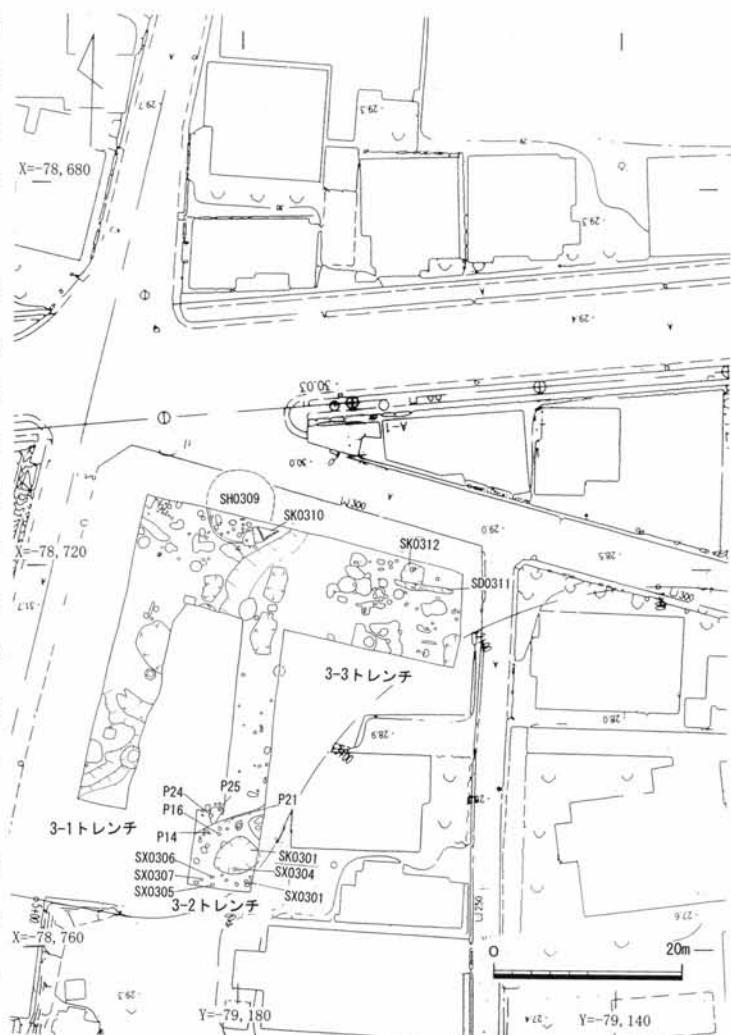


土坑SK1105 調査地の北辺東寄りで検出した。幅約1.4mで調査地の北に広がる。埋土は暗褐色粘質土で、土坑内から瓦器椀・土師器甕などが出土した。

(2) 12-1・2トレンチ 地表面の標高は、29.3~29.7mを測り、約1.5mの盛土層の下に近代の盛土が約0.3mある。これ以下は黄褐色粘質土(ベース)となる。黄褐色粘質土の上面には、暗褐色の粘質土・黒色粘質土が部分的に認められるが、弥生時代や古墳時代の遺構は遺存しておらず、近世の地境溝・ピットなどを検出したのみである。

土坑SK1203 調査地南辺で検出した。1辺約1.0mの方形を呈し、大半が調査地の南に広がる。擂り鉢などが出土した。

柱穴P06 調査地東辺で検出し



第15図 3トレンチ遺構配置図

た。1辺約0.5mを測り、丸瓦・土師器が出土した。

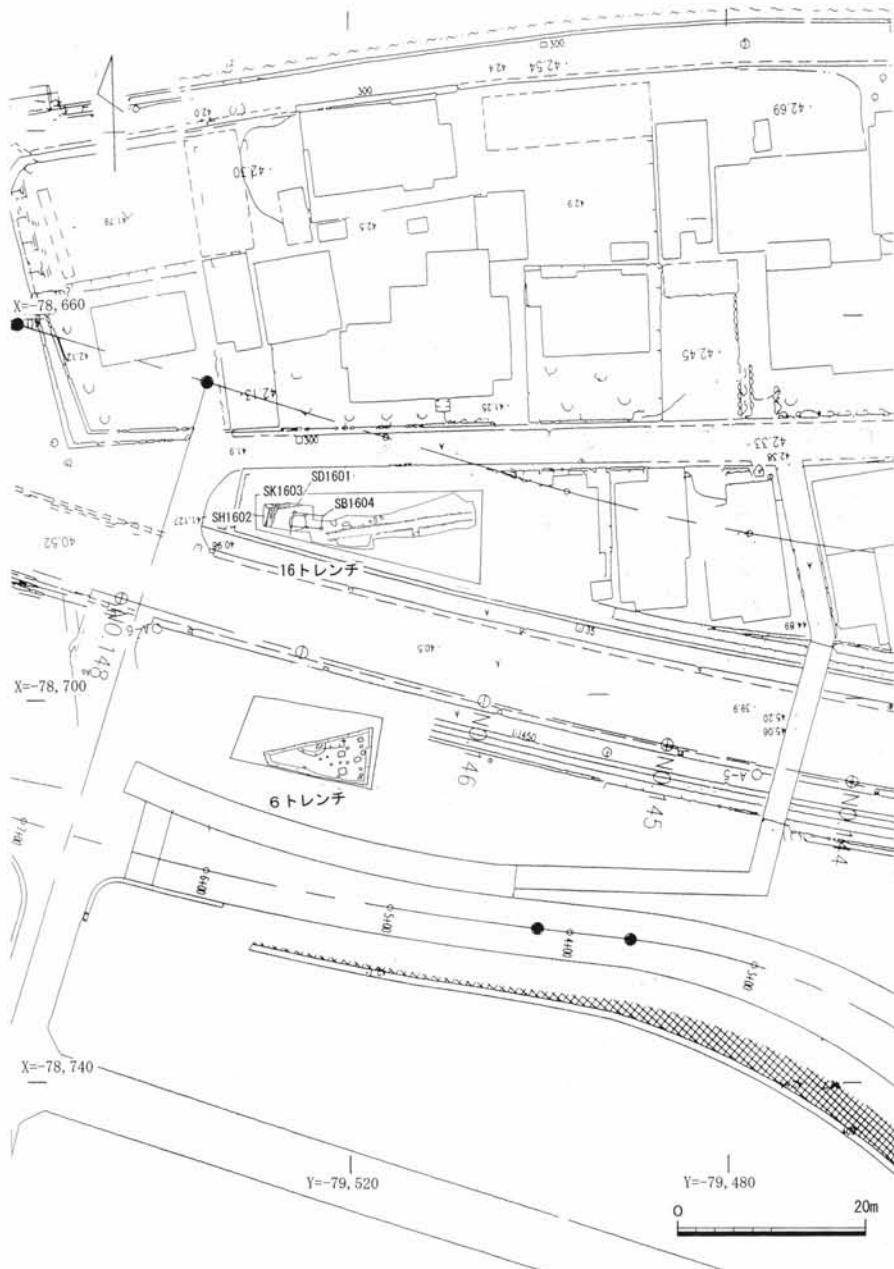
(3) 3トレンチ 国道の南側で、交差点拡幅予定地に設定したトレンチである。南西から北東への傾きをもつ丘陵斜面地で、後世の削平により数段の削り出しを受けている。現地表面は、南北隅で標高33.3m、東で標高28.9mを測る。基本的な層位は、もっとも遺存状態のよい調査地の南で、近世以降の盛土、暗褐色粘土層、黒色粘土層、黄褐色粘質土層(ベース)となっている。

竪穴式住居跡SH0309 調査地の北西で検出した弥生時代後期の住居跡である。復原直径約6.6mを測る平面円形を呈し、住居の約1/2を検出した。壁溝内より高杯・器台・甕が出土した。

溝SD0311 調査地の北東で検出した断面「U」字形を呈し、幅約0.3m、深さ約0.4mを測る溝である。東西約6.4mにわたって検出した。溝内からは台付無頸壺・甕が出土した。

柱穴P14・16・21・24・25 3-2トレンチ拡張部で検出した柱穴である。柱穴内より綠釉陶器椀・須恵器杯蓋・壺・土師器杯などが出土した。

SX(P)0301・0304~0307 3-2トレンチ南端部で検出した。遺構検出面が黑色粘質土をベースとしており、埋土も黒色土であるため掘形を確認することができず、土器の集中する部分の範囲をS(X)とし、登録した。綠釉陶器・須恵器杯・壺・土師器杯などが出土した。



第16図 6・16トレンチ遺構配置図

することはできない。

(5)16トレンチ 国道の北側に設置したトレンチである。調査地の標高は42.3mを測り、基本的な層位は、約0.3mの盛土層の下に約0.1mの暗褐色の粘質土があり、調査地の西端で部分的に0.3mの黒色粘質土が認められる。以下黄褐色の粘質土(ベース)となる。

検出した遺構は、石組みの溝・竪穴式住居跡・土坑・溝・溝・ピットなどである。石組みの溝は、調査地の中央で東西方向に築造されており、幅約0.5~0.8m、深さは北側で約0.4mを測り、南側では約0.2mが遺存していた。東西約16mにわたって検出した。使用された石は割石と河原石で大きいものは一辺0.5mほども有り、小さい石は2段に組まれている。検出した当初、福知山城に關係するものかと考えられたが、その後の検討で、調査地の南に所在する旧陸軍福知山連隊

### 土坑 SK0301

3-2 トレンチ拡張部の中央部で検出した直径約3.5mの土坑である。

### (4) 6トレンチ

調査地の西端、国道の南側に設置したトレンチである。当初設定した調査範囲の大半にコンクリート基礎があったため変形した調査区となった。調査地の標高は42.2mを測り、基本的な層位は、0.4~0.5mの盛土層の下に約0.3mの暗褐色の粘質土、約0.3mの黒色粘質土が認められ以下黄褐色の粘質土(ベース)となる。黄褐色の粘質土上面でピットを検出したが、出土遺物がなくその時期を決定

に関するものであることが判明した。

**溝 S D1601** 調査地の北辺に沿って検出した、断面「U」字状で、幅0.2m、深さ0.1mの溝である。東西7.2mにわたって検出した。

**竪穴式住居跡 S H1602** 調査地の西端で検出した竪穴式住居跡の一部である。南北方向に2条の壁溝を検出しており、この住居の建て替えが行われたことをうかがわせる。

**土坑 S K1603** S H1602内で検出した住居内の土坑である。復原径約1.2m、深さ約0.3mを測る。土坑内からは甕・高杯が出土した。

**掘立柱建物跡 S B1604** 竪穴式住居跡 S H1602の東で検出した東西2間、南北1間以上の建物である。柱穴は、直径約0.2m、深さ約0.2mで、柱間は、約1.2mを測る。

#### 4. 出土遺物（第17・18図・図版第20）

##### (1) 10~12トレンチ（第17図）

近世では、土坑・ピットから福知山城下町に係わると考えられる陶磁器や瓦などが出土している。中世の遺物としては、井戸・土坑内より瓦器椀・擂り鉢などが出土している。

奈良・平安時代の遺物としては、土坑・包含層中から、土師器鍋、須恵器杯B・甕などが出土している。

弥生時代の遺物としては、溝中から弥生土器の壺・甕が出土している。また、このほかに包含層中より石棒と考えられる製品(13)の一部が出土している。

近世の出土遺物としては、P 106出土の陶器椀(2)、P 06出土の軒丸瓦(15)などがある。

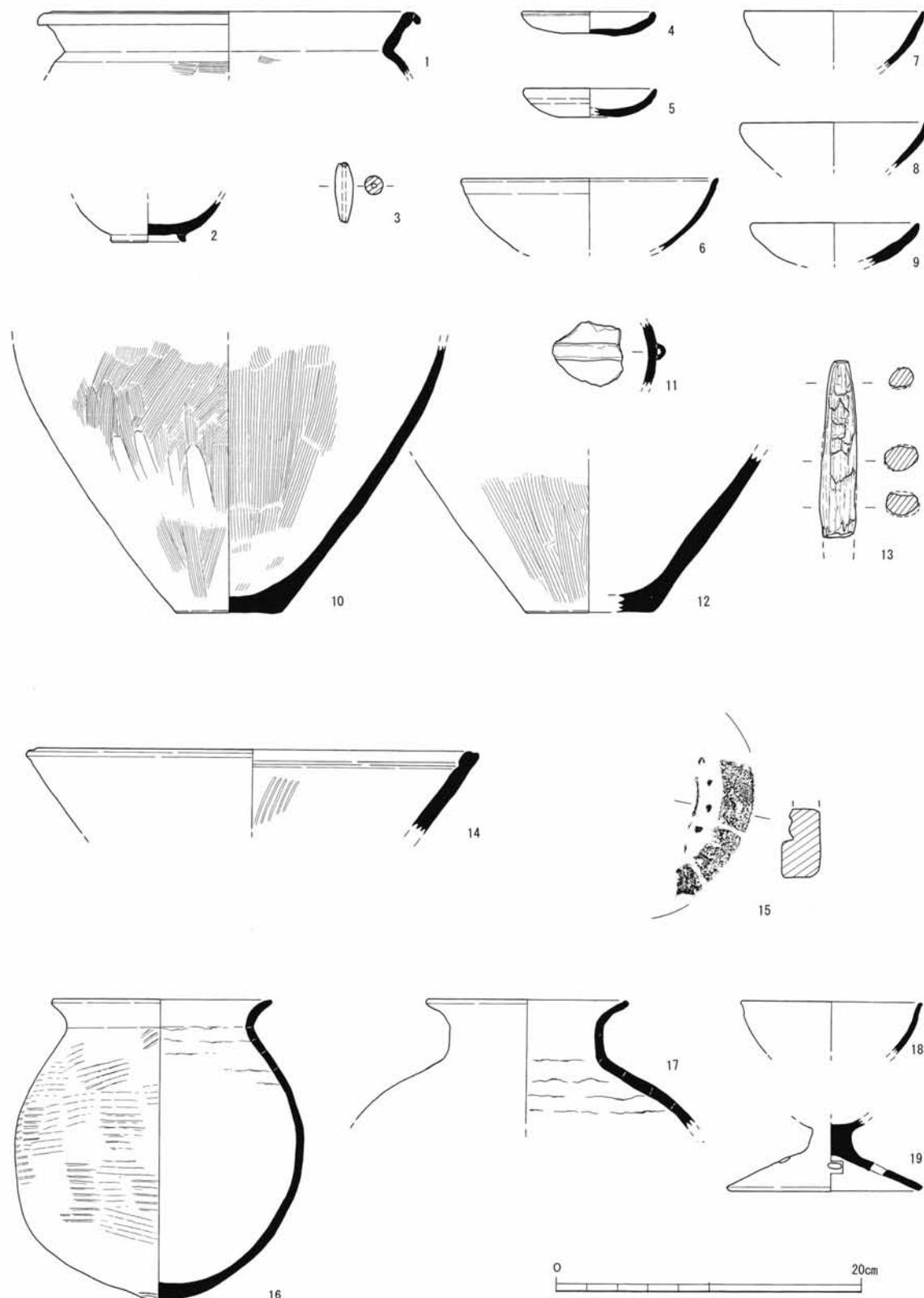
中世の遺物としては、以下のものがある。土師器鍋(1)は口縁部を折り返し、外面に横方向のタタキ調整を施す。S K1105出土。3は土錘である。4・5は瓦器皿で、6~9は瓦器椀である。3~6は、S E1101出土。7~9は、S K1105出土である。

弥生時代の遺物は、10~12である。10・12は甕の体部下半である。10~12は、S D1103出土。13は、包含層から出土した。

(2) 3トレンチ（第18図） 平安時代では、調査地の中央南寄りの土坑やP 25内から軟質の緑釉陶器椀(20)が出土した。S X0306内からは(21)、P 21からは黒色土器A類(22)、須恵器杯A・B類・壺、土師器杯・鍋が出土している。20の緑釉陶器椀は口径21.2cmの大型品である。内外面とも黄緑色に施釉している。9世紀の京都洛北産と考えられる。

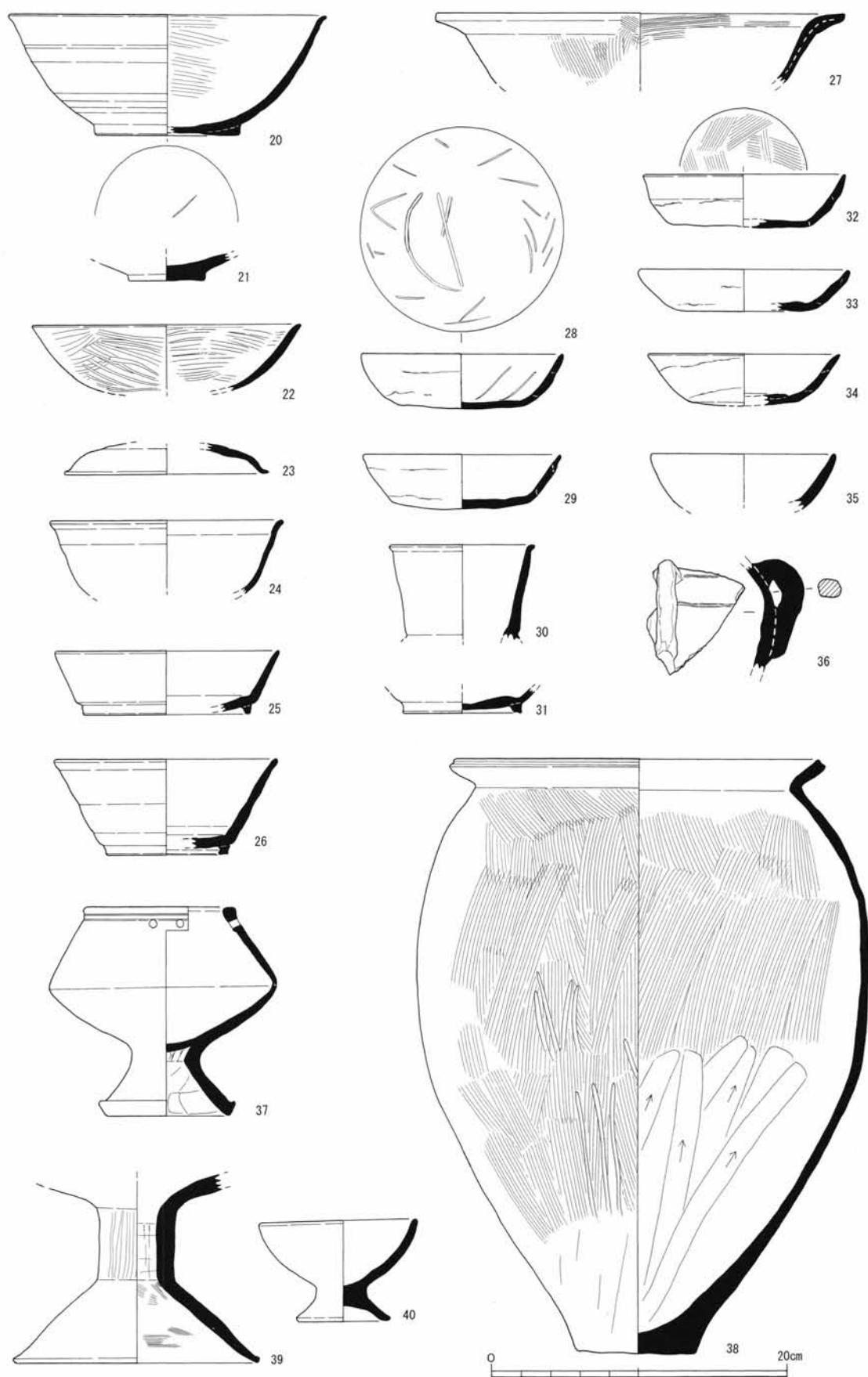
弥生時代の遺物では、竪穴式住居跡 S H0309から弥生土器の器台(39)・高杯(40)が出土している。溝 S D0311内からは、弥生土器の台付無頸壺と完形に復原できる甕(38)が出土している。須恵器の杯蓋(23)・壺(30)はP 14から、須恵器杯(24・25)、土師器杯(33~35)は、S X0307から出土した。

(3) 16トレンチ（第17図） 竪穴式住居跡 S H1602と住居内土坑 S K1603から、弥生土器甕(16)・壺(17)・低脚の高杯(18・19)などが出土している。



第17図 出土遺物実測図(1)

1. 11トレンチ SK1105 2. P106 3~6. SE1101 7~9. SK1105 10~12. SD1103  
 13. 11トレンチ包含層 14. 12-1トレンチ SK1203 15. P06 16~19. 16トレンチ SK1603  
 20. 3-2トレンチ P25 21. SX0306 22. P21 23・30. P14 24・25・33~35. SX0307  
 26. SX0301 27. SX0304 28. SX0305 29・32. P24 31. 3-2トレンチ南端包含層  
 36. P16 37・38. 3-3トレンチ SD0311 39・40. SH0309



第18図 出土遺物実測図(2)

## 5. まとめ

10~12トレンチは、松平忠房が福知山城主であった時期(1649~1669)の福知山城下絵図によると、城下町の南端に相当する位置に設定したことになる。東西道が南を限っており、10・11トレンチで検出した上記東西道に並行する江戸時代のピットは道路と屋敷を画する塀や柵などの施設と考えられる。

11・3トレンチで検出した弥生時代の溝跡や竪穴式住居跡は、第1次調査で検出した同時期の方形周溝墓をあわせて考えると、標高の低い北東部から南西部にかけて墓域を想定することができ、一段高い位置を住居域が占地していたと考えられる。

3トレンチで検出した平安時代の遺構や遺物は、今回の調査で初めて明らかになったものであり、調査地の周辺部には同時代の遺構が広がっていると考えられる。中でも京都産の大型の縄釉碗は福知山市では初出であり、特筆される。

16トレンチで検出した弥生時代末から古墳時代初にかけての竪穴式住居跡は、周辺部でははじめての検出である。この住居跡の南西約1kmには、「景初四年」銘で著名な斜縁盤龍鏡が出土した広峯15号墳が同一丘陵の支尾根上に所在している。丘陵上位でも遺構を検出したことから、今回の調査地全域に集落の広がることが考えられるようになった。

(戸原和人)

### 調査参加者

伊藤智陽・亀井宣彦・小滝悠平・章偉潮・高井亮平・李添錚・藤原恵子・三好ひとみ

### 参考文献

福知山市教育委員会「Ⅲ. 岡ノ遺跡」『福知山市文化財調査報告書 第42集』 2002

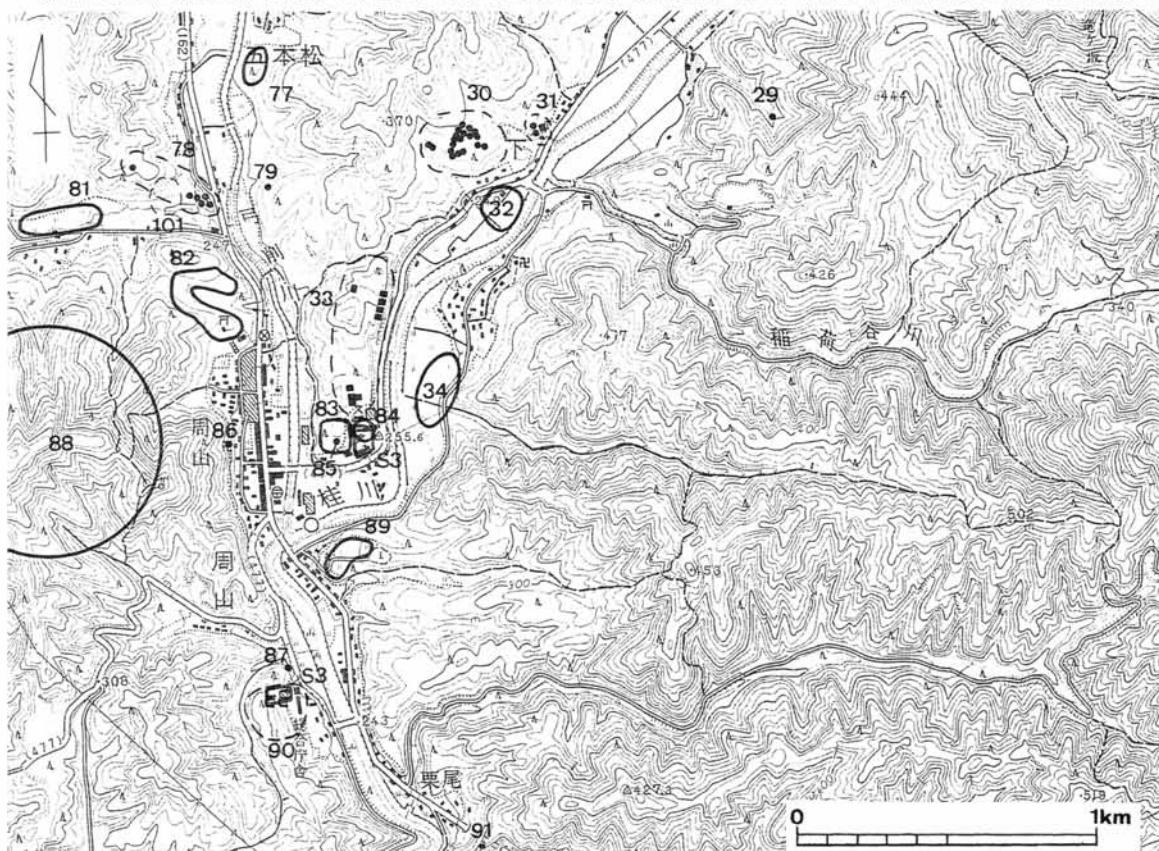
### 3. 高梨遺跡第3次発掘調査概要

#### 1. はじめに

高梨遺跡は、古墳時代に始まり、奈良時代に栄えた古代の集落遺跡である。今回、当該遺跡内において道路建設が計画されたことから、当センターでは、京都府周山土木事務所の依頼を受けて、事前に発掘調査を実施した。調査は、約150m<sup>2</sup>を対象として、平成15年10月30日に着手し、同年12月12日に終了した。調査担当者は、当調査研究センター調査第2課調査第2係長伊野近富、同調査第2係主任調査員田代弘である。調査にあたっては、京都府教育委員会、京北町教育委員会など関係諸機関、地元自治会、調査に参加していただいた方々など、多くの方々にご協力を得た。<sup>(注1)</sup>なお、調査にかかる経費は、全額、京都府土木建築部が負担した。<sup>(注2)</sup>

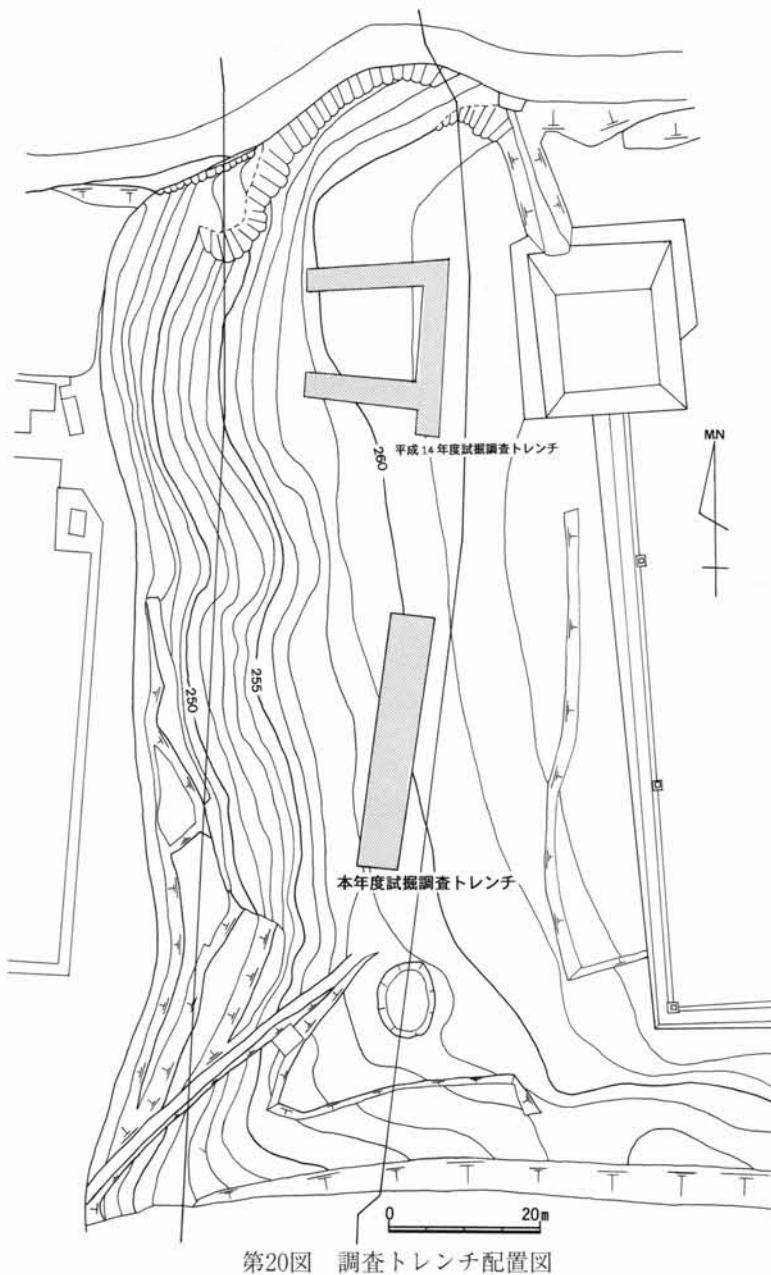
#### 2. 遺跡の位置と環境

京北町は、京都市の北方に位置する。町域の大半を山林が占めており、北山杉を森林が盛んで



第19図 調査地位置図および周辺遺跡分布図(京都府遺跡地図より転載・加筆)

- |          |           |          |          |          |          |
|----------|-----------|----------|----------|----------|----------|
| 83.高梨遺跡  | 84.周山廃寺   | 85.高梨経塚  | 33.周山古墳群 | 34.祇園谷遺跡 | 88.周山城跡  |
| 81.卯滝谷遺跡 | 82.八津良城跡  | 86.慈眼寺経塚 | 89.東山遺跡  | 87.周山経塚  | 90.周山瓦窯  |
| 30.折谷古墳群 | 31.折谷東古墳群 | 32.殿橋遺跡  | 78.大年古墳群 | 79.宮坂古墳  | 91.小栗尾古墳 |



第20図 調査トレンチ配置図

ドから北西約80mの第2次調査地の東に隣接する、標高約260mの丘陵斜面に位置している(第20図)。

バックホーを用いて、一部を深掘りした。掘削断面を観察し、土層堆積状況を検討した結果、調査対象地の基本的層は、上から表土・暗茶褐色土・黒色土・黄色土であり(第21図)、遺構は、黒色土層上にある茶褐色土、あるいは黒色土中から掘削されたと判断することができた。遺構を検出するため、バックホーを用いて黄色土上面まで土層を除去した。土層除去後、人力で精査を行った。この結果、溝・土坑・多数のピット群を検出した。作業の進捗に応じて、図化・写真撮影などの記録作業を行った。検出した遺構・遺物は、次の通りである。

### (1) 検出遺構

地山である黄色粘土上面において、溝・土坑・ピットなど各種の遺構を検出した(第22図)。S

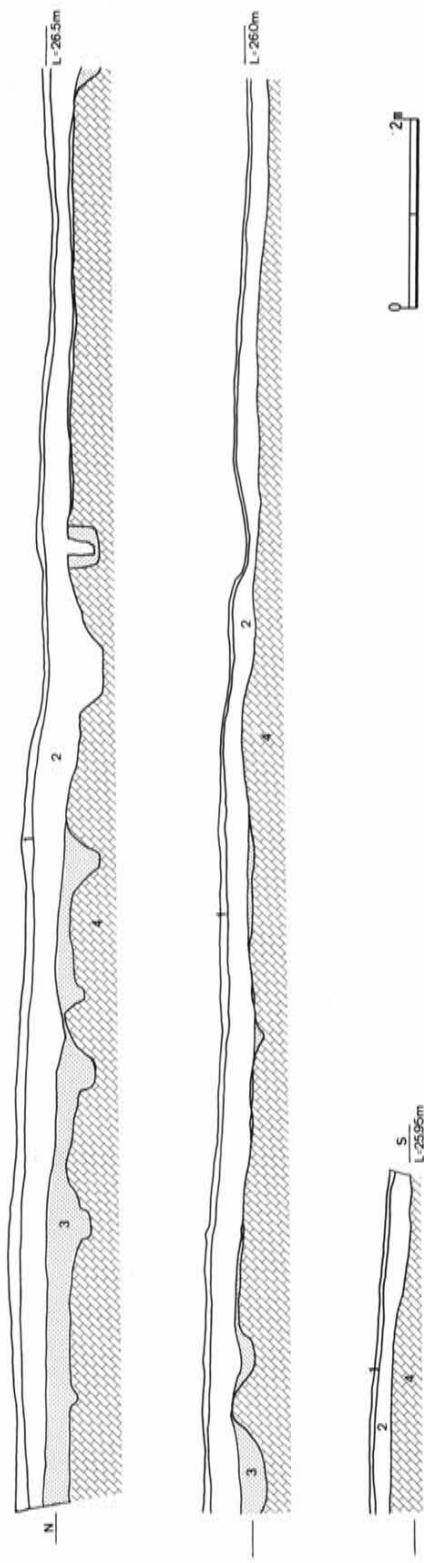
ある。桂川と弓削川に沿って狭長な沖積地が広がり、古代からこの水系に面して人々の生活が営まれてきた。中でも、桂川と弓削川の合流部は自然の要害をなし、京都から日本海へ向かう交通の要衝として栄え、現在、町の中心地域として賑わいを見せている。

桂川(大堰川)と弓削川の間に、流域を分ける丘陵がある。高梨遺跡は、この丘陵先端付近に位置している。

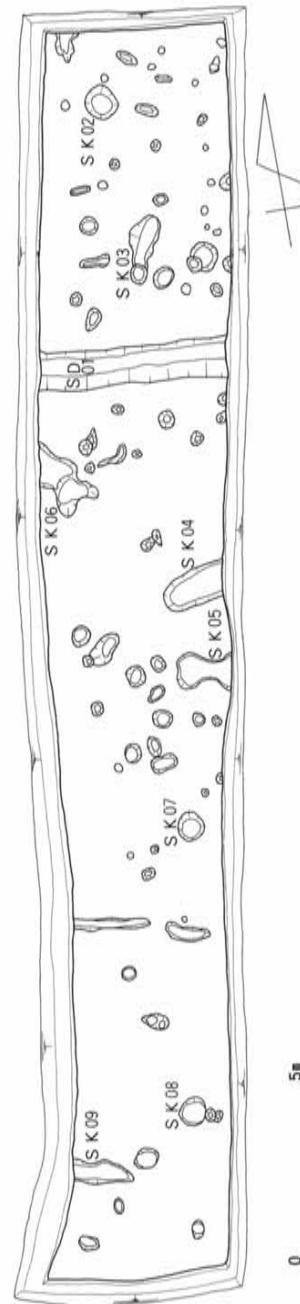
周辺には、周山古墳群・周山廃寺跡・高梨経塚・祇園谷遺跡・東山遺跡・周山瓦窯跡など各時代の遺跡が数多く分布していることから(第19図)、このあたりが古代周山の政治的中心地域であったと考えられている。

### 3. 調査概要

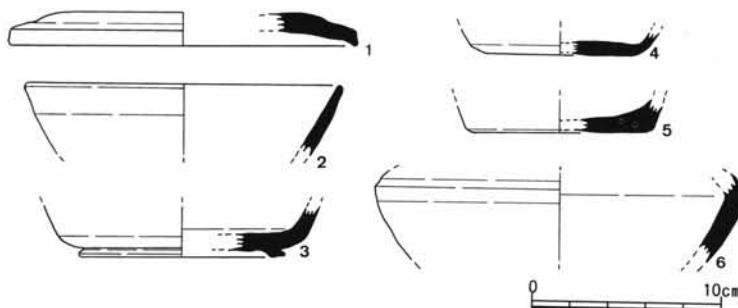
今回の調査地は、第1次調査である周山中学校グラウン



第21図 土層断面図  
1. 表土 2. 暗茶褐色土 3. 黒色土 4. 黄色土



第22図 トレンチ遺構配置図



第23図 出土土器実測図

D01は、丘陵上部から下方へ直線的に掘られた溝で、幅約1m、断面形は逆台形である。暗茶褐色土を埋土とし、須恵器の細片が出土した。奈良時代以降に形成された溝である。SK02・07・08は、円形の小形土坑である。SK03～05・09は楕円形の土坑である。これらの土坑の埋土は黒色土である。遺物を含まないので、形成時期は明らかでない。

## (2) 出土遺物

溝・ピットなどの遺構から須恵器が少量出土した。遺構出土の土器は、いずれも小さな破片であり、時期を特定できるものが無い。包含層から出土した遺物の中から図化しうるものを第23図に示した。いずれも須恵器である。1は、杯蓋である。口縁が屈曲するタイプのもので、口径約18.5cmを測る。2は、口径が16cm前後の杯身の口縁部である。3～5は杯身の底部である。3は、貼り付け高台を持つもので、高台の径は約10.5cmを測る。4・5は高台を持たないタイプのもので、底部はヘラ切りである。6は、長頸瓶の破片である。最大腹径部の一部が残ったものである。

第24図は、縄文時代草創期のサヌカイト製の石槍である。黒色土掘削中に検出した。基部を欠損しているが、遺存状態が良好な資料である。遺存長約8cm、最大幅約2.7cmである。



第24図 石槍

## 4. まとめ

今回の調査で、この地点が古代において当該集落の生活領域の一部をなす地点であり、遺跡の西縁に当たる場所であることを確認できた。調査地の西側は、弓削川により形成された沖積低地へと続く急傾斜面であることから、生活遺構が形成されたとは考えにくい。

また、石槍の出土により、遺跡の形成時期が縄文時代に遡ることが判明した。高梨遺跡は古墳時代以降に形成された集落遺跡と推測されていたので、形成時期を大幅に遡らせて考える必要がてきた。

(田代 弘)

注1 石尾政信「高梨遺跡第2次」(『京都府埋蔵文化財調査概報』第106冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2003

注2 荒田和子・鶴子智慧藏・太田一夫・太田一夫・栗山繁子・名倉尚美・三觜均

## 4. 国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡 平成14年度発掘調査概要

### はじめに

国営農地再編整備事業「亀岡地区」は、亀岡市を貫流する大堰川(保津川)東岸の馬路町、千歳町、河原林町、保津町の未整地農地など635haを対象として、農家の経営規模の拡大と経営の合理化を図ることを目的として農林水産省近畿農政局が区画整理と農地造成を行う事業である。

この地域にある丹波国分寺(国史跡)、御上人林廃寺(国分尼寺推定地)、千歳車塚古墳(国史跡)など貴重な遺跡については、その周辺も含めて事業地区外とし、やむを得ず遺跡に影響を及ぼす地点については発掘調査を実施することとなった。

調査は、京都府教育委員会および亀岡市教育委員会が試掘調査を行い、遺跡が確認された地点を中心として、農林水産省近畿農政局をはじめとする開発部局と充分な調整を行ったうえ、調査範囲を確定し、近畿農政局の依頼を受けて当調査研究センターが実施することとなった。

この調査は、平成13年度から開始しており、平成13年度は保津車塚古墳(案察使1号墳)周濠の調査と案察使遺跡の調査を行い、保津車塚古墳については、同年度にその概要を報告している。平成14年度には、大淵遺跡第4次調査として、C・D地区約2,000m<sup>2</sup>、B地区約2,200m<sup>2</sup>の調査を行い、同年度の前半に行なった大淵遺跡のC・D地区と、前年度後半に行なった案察使遺跡の調査概要を報告している。

今回報告するのは、平成14年度の後半期に実施した大淵遺跡第4次調査B地区の概要であり、今年度調査分については、来年度以降に報告する予定である。

大淵遺跡第4次調査(B地区)は、調査第2課第1係長石井清司、主任調査員戸原和人・田代弘、専門調査員石尾政信が担当した。

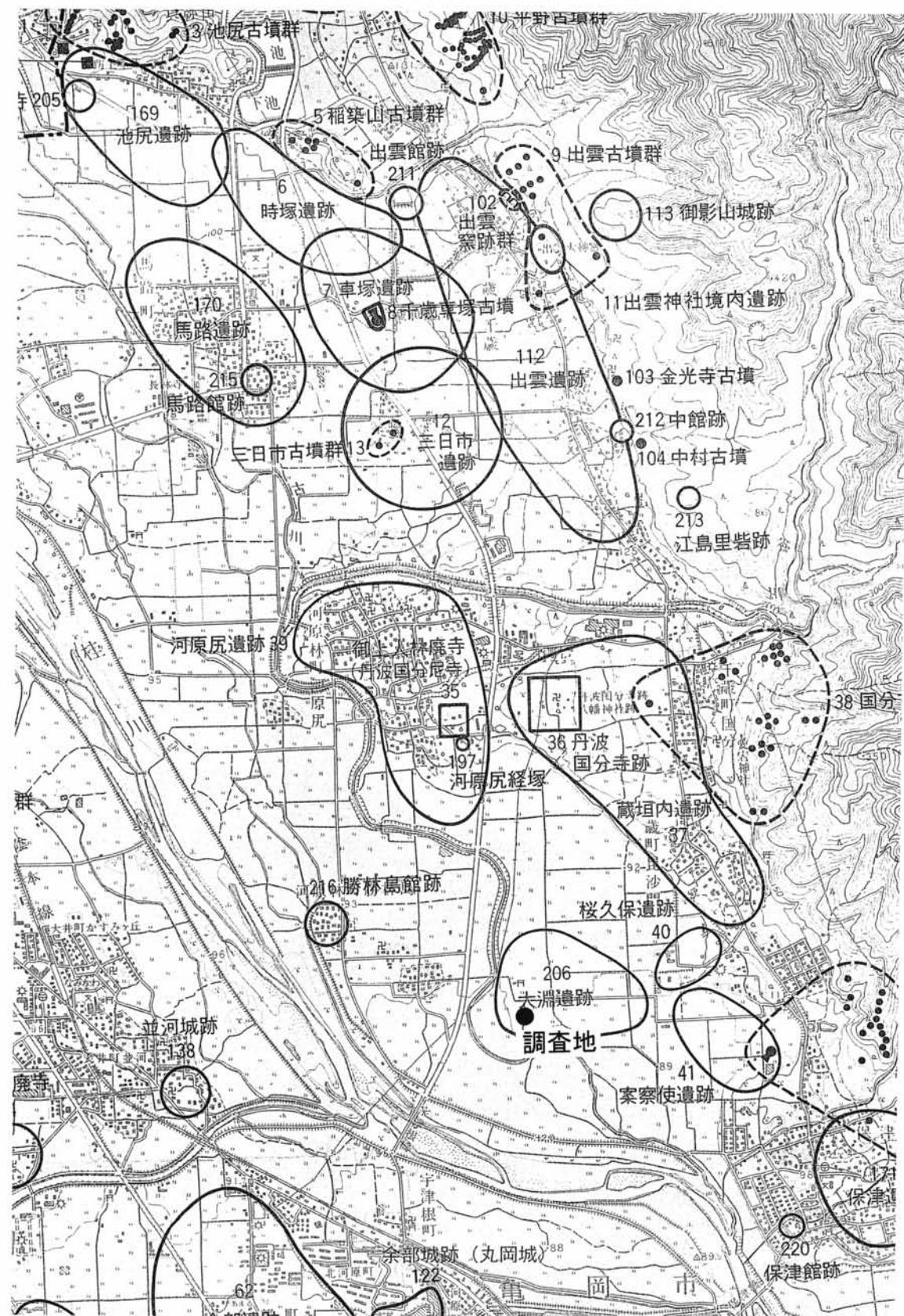
調査には平成14年10月28日～平成15年3月7日までを要し、調査面積は、B地区約1,800m<sup>2</sup>、B地区約400m<sup>2</sup>の合計約2,200m<sup>2</sup>である。調査に関わる経費については、農林水産省近畿農政局が負担した。

調査にあたっては、本事業を計画された農林水産省近畿農政局亀岡農地整備事業建設所・京都府教育委員会・亀岡市教育委員会に数多くの指導・助言を得た。また現地作業では、保津町自治会・地権者・地域住民の方々の御理解と御支援をいただきました。厚く御礼申し上げます。

(戸原和人)

### 1. 調査の概要

調査を行なった大淵遺跡は、亀岡市保津町から河原林町にまたがる弥生～古墳時代にかけての遺



第25図 調査地位置図(1/25,000『新修亀岡市史資料編』付図から転載)

物包蔵地として周知された遺跡である。

今回報告するB地区は、亀岡市保津町替田にあたる標高約91mの水田地である。調査は、京都府教育委員会が試掘調査によって遺物包含層や溝などの遺構を確認した2地点(B W・B E地区)に、調査トレンチを設定し、実施した。調査地の基本的な層序は、現耕作土・床土の直下で、黄褐色の粘質土のベースとなる。B E地区では、耕作土・床土の直下で、調査地の西を南流する古川水系の河川性堆積によると考えられる礫層をベースとしており、遺構の遺存状態は悪い。調査によって検出した遺構は鎌倉・室町時代にかけての井戸・溝や土坑、古墳時代の住居跡などで、その概要は以下のとおりである。

## 2. 検出遺構

### B W地区(第27図、図版第34~36)

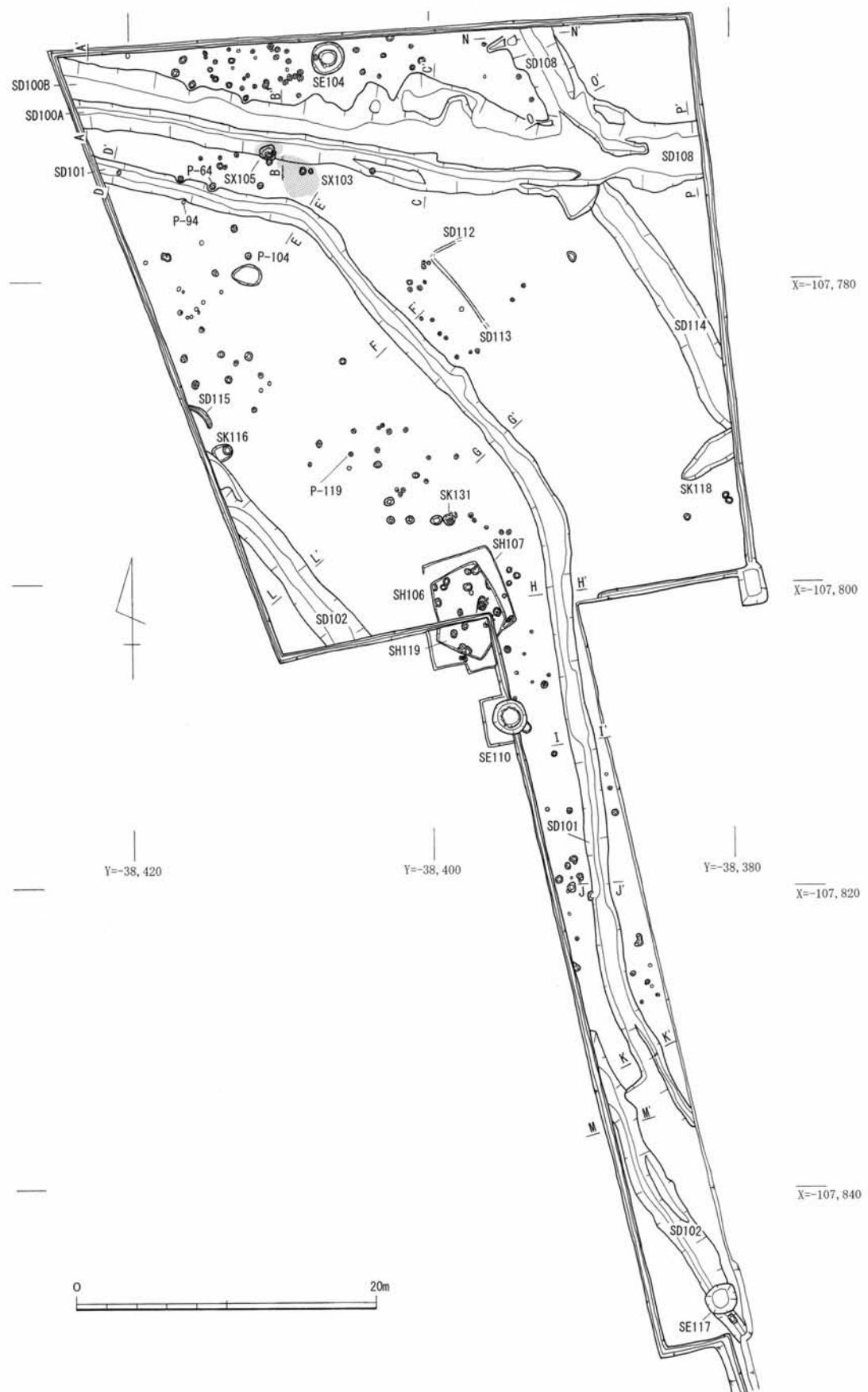
平安~鎌倉時代の井戸3基・土坑・溝・柱穴、奈良時代の溝、古墳時代の竪穴式住居跡3基、溝4条以上がある。

#### (1) 平安・鎌倉時代

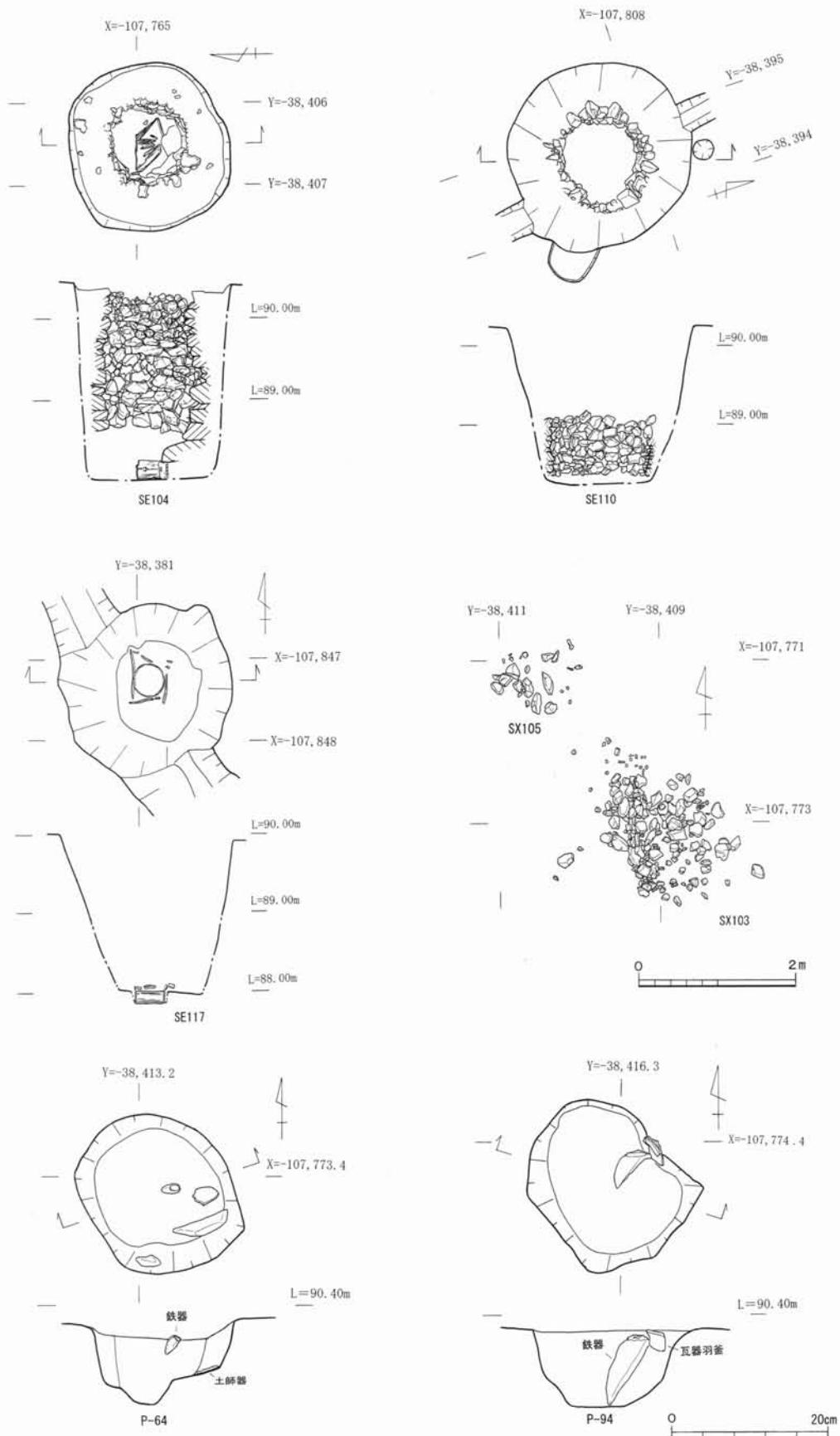
井戸S E 104(第28図、図版第26) 調査地の北辺中央で検出した石組みの井戸である。直径約2mの掘形の中に直径約1mの石組みの井戸側が築かれている。検出した井戸の深さは約2.5mで、井戸の底には、水を溜めるための施設として一辺約0.4mの木枠が組まれていた。埋土の中



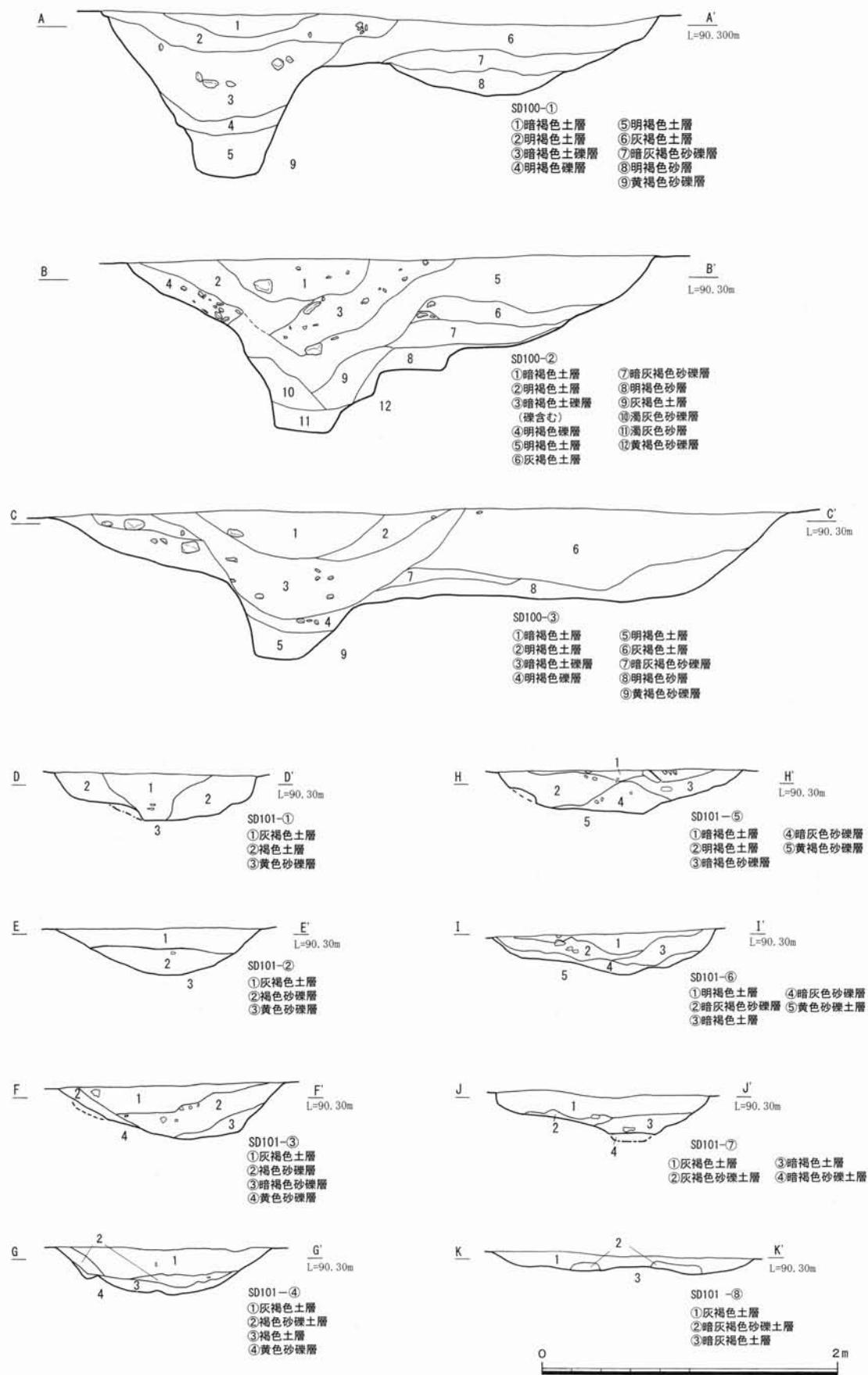
第26図 トレンチ配置図



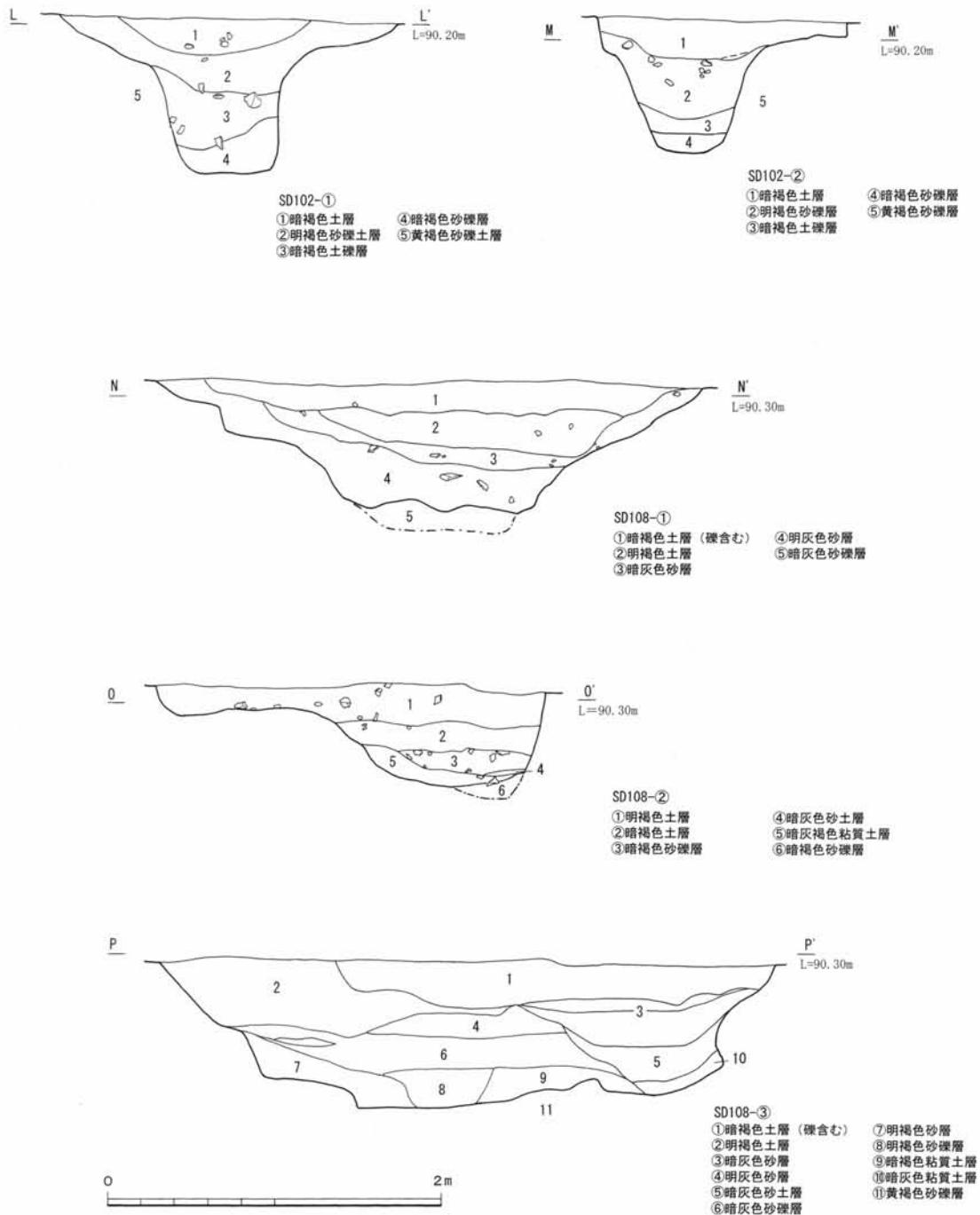
第27図 BW地区遺構配置図



第28図 遺構実測図



第29図 遺構断面図(1)

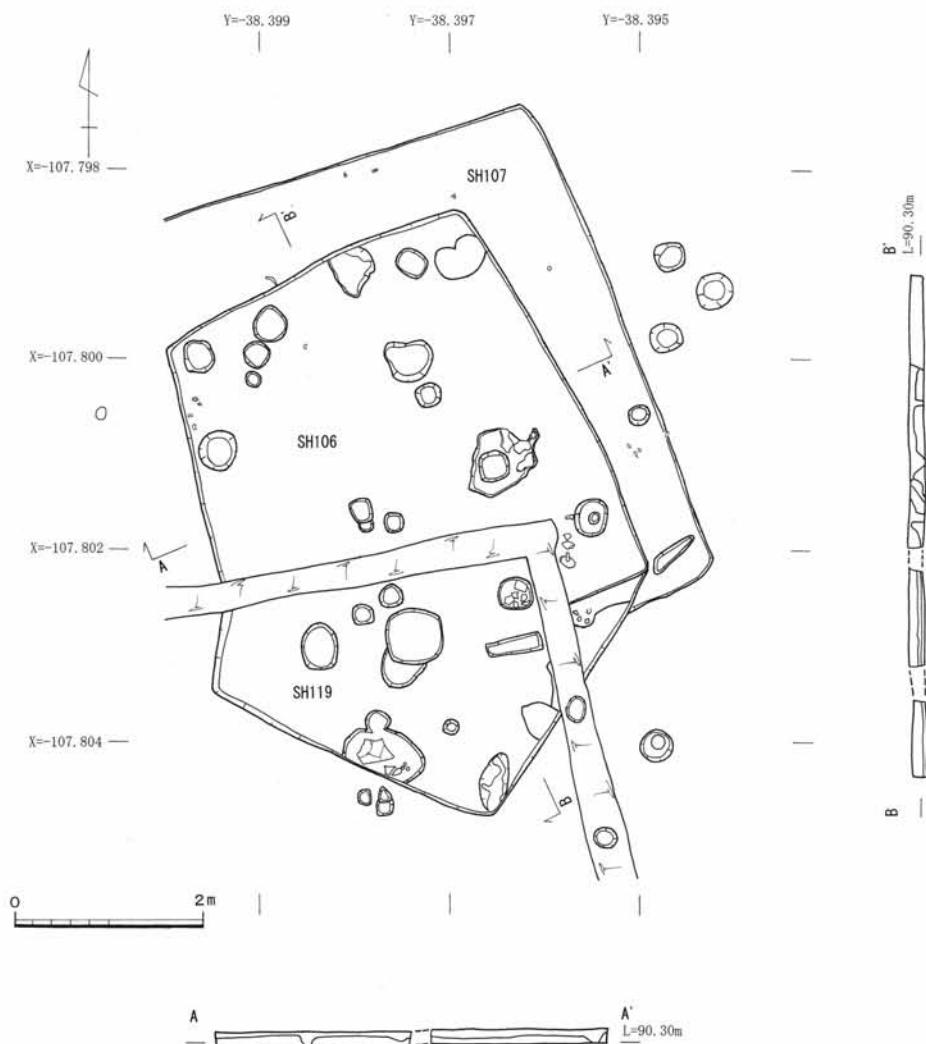


第30図 遺構断面図(2)

からは、瓦器椀や瓦質羽釜、土師器皿などが出土した。

**井戸 S E 110**(第28図、図版第26) 調査地の中央南寄りで検出した。当初、土坑として調査トレンチ内での掘削を行ったが、掘形が深く、井戸であることが判明したため、調査地を拡張して掘削した。直径約2.3~2.4mの掘形の中に直径約1mの石組みが築かれている。検出した井戸の深さは約1.9mで、石組みは下半部の約0.7mが遺存していた。埋土の中からは、瓦器椀や瓦器羽釜・鍋、丸瓦などが出土した。

**井戸 S E 117**(第28図、図版第27) 調査地の南端で検出した。直径約2.0~2.2mの掘形の中に



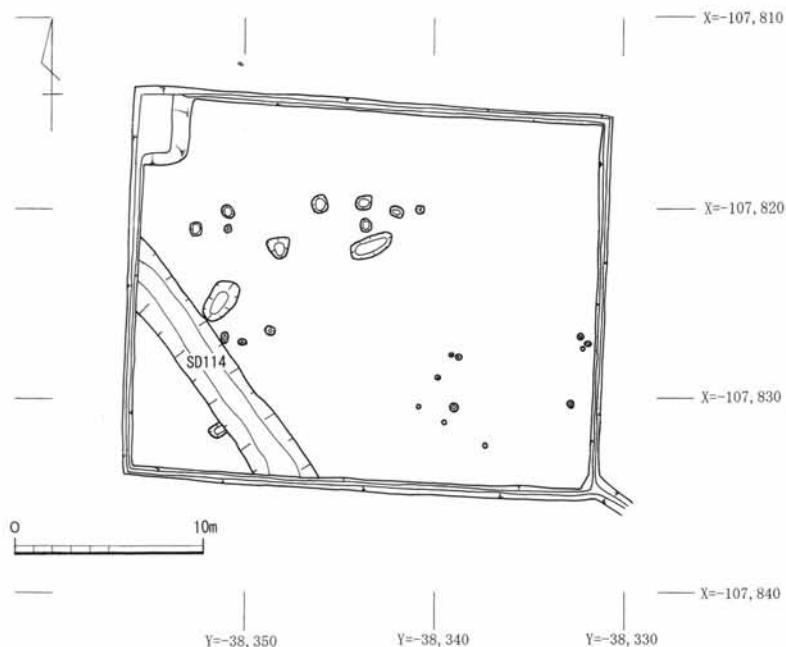
第31図 堅穴式住居跡 S H106・107・119実測図

一辺約0.8mの木組みの井戸枠が築かれており、井戸底には直径約0.4m、高さ約0.2mの曲物が埋設されていた。検出した井戸の深さは約2.1mである。埋土の中からは、瓦器椀や土師器皿などが出土した。

溝S D108(第27図、図版第27) 調査地の北東で検出した幅約2.5m、深さ約0.5mを測る溝である。北西方向から東に曲がって流れしており、溝内からは瓦器椀、瓦質の羽釜、白磁、布目瓦などが多数出土した。

集石遺構S X103(第28図、図版第27-(3)) 調査地の北西よりで検出した遺構である。東西約2.2m、南北約3.5mの範囲に拳大から人の頭程の大きさの石が散乱した状況で検出した。石の間からは、土師器の皿や瓦器椀が出土した。

集石遺構S X105(第27図、図版第28-(1)) S X103の北西側で検出した遺構である。S X103より規模が小さく0.8×1.2mの範囲で石を検出した。この石の下には、直径約0.3mの土坑が掘られており、土坑の中からは土師器の破片が出土した。



第32図 B E 地区遺構配置図

柱穴 P-64・94(第28図、図版第28-(2)(3)) S X105の南西で検出した柱穴で、直径約0.2mで、深さ約0.12mを測る。柱穴の中からは土師器・瓦器とともに鉄器が出土した。

### (2)奈良時代

溝 S D100A 調査地の北よりで東西に流れる溝である。溝の断面が「V」字に近い逆台形で、一番深い西端では上面の幅約2.2m、深さ約1.5mを測る。溝内からは奈良時代の土師器や須恵器が出土した。

### (3)古墳時代

溝 S D100B(第27・29図、図版第29・30) S D100Aの下層になる。南の辺はほぼ同じラインで、北では幅が広く上面の幅約4.2~4.8m、深さ約0.5mを測る。溝内からは古墳時代の土師器や須恵器が出土した。

溝 S D101(第27・29図、図版第30~32) 調査地内を西北から南にまがって流れる溝である。上面の幅約1.4m、深さ約0.3mを測る。溝内からは古墳時代の土師器や須恵器が出土した。

溝 S D102(第30図、図版第32) 調査地の南よりで検出した北西から南西に流れる溝である。断面が「V」字に近い逆台形で、上面の幅約2m、深さ約1mを測る。溝内からは土師器や須恵器が出土した。

溝 S D114(第27図、図版第32) S D108の下層の溝で、この溝の延長をB E 地区でも検出している。溝の断面が逆台形で、上面の幅約2.5m、深さ約0.5mを測る。溝内からは古墳時代の土師器や須恵器が出土した。

竪穴式住居跡 S H106(第31図、図版第33) 調査地の南西よりで検出した。北辺で約3.5m、東辺が約4.3mを測る。西辺および南辺は S H119と重複しているため不明である。住居内からは、

須恵器杯蓋・杯身などが出土している。

竪穴式住居跡 S H107(第31図、図版第33) S H106と重なって検出した住居跡である。東辺で約5.2mを測る。住居内からは、須恵器杯蓋、土師器高杯・甕などが出土している。

竪穴式住居跡 S H119(第31図、図版第33) S H106に切られており、S H107を切る。南辺で約3.2mを測る。

#### B E 地区(第32図、図版第33)

B W地区からのびる古墳時代の溝と、土坑・柱穴などを検出した。

溝 S D114 この溝は調査地の南西よりで検出した。溝の断面が逆台形で、上面の幅約2.5m、深さ約0.5mを測る。溝内からは、B W地区と同様、古墳時代の土師器や須恵器が出土した。

(戸原和人・田代 弘)

### 3. 出土遺物(第33~41図、図版第34~36)

遺構から出土した遺物には、弥生時代の土器、古墳時代の土師器・須恵器、奈良時代の土師器・須恵器、平安時代の須恵器、緑釉陶器、無釉陶器、中世の土師器・須恵器・瓦器・白磁・青磁などがある。それでは、個々の土器について説明する。

S D100から出土したのは、第33図1~28である。S D100Aから出土したのは1・3・6・12・20である。1は須恵器杯身である。3は須恵器杯蓋である。6は須恵器甕である。12は土師器甕である。20は須恵器壺である。これらは古墳時代後期に属する。

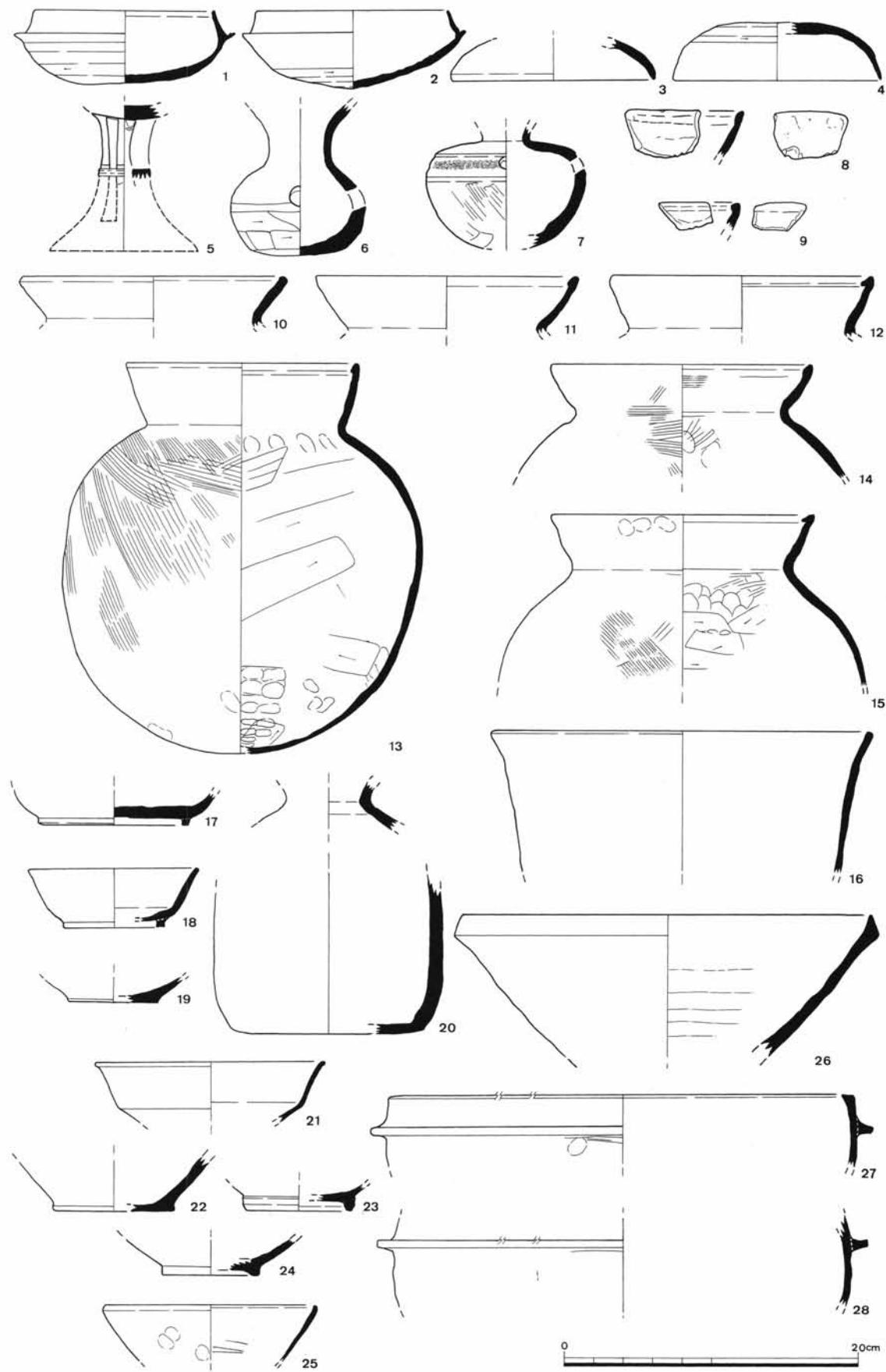
S D100Bから出土したのは2・4・11・17である。2は須恵器杯身である。4は須恵器杯蓋である。11は土師器甕である。17は須恵器杯身である。奈良時代に属する17以外は古墳時代後期である。

S D100A・S D100Bの区別がつかない重複した地点で出土したのは5・7・8~10・13~16・18・19・21~28である。5は須恵器高杯である。7は須恵器甕である。8~10・13~15は土師器甕である。16は土師器甕である。18は須恵器杯身、19は須恵器椀、22は須恵器甕、23は無釉陶器椀、24は緑釉陶器椀、25は瓦器椀、26は須恵器鉢、27・28は瓦器羽釜である。古墳時代以降鎌倉時代のものまで含まれる。

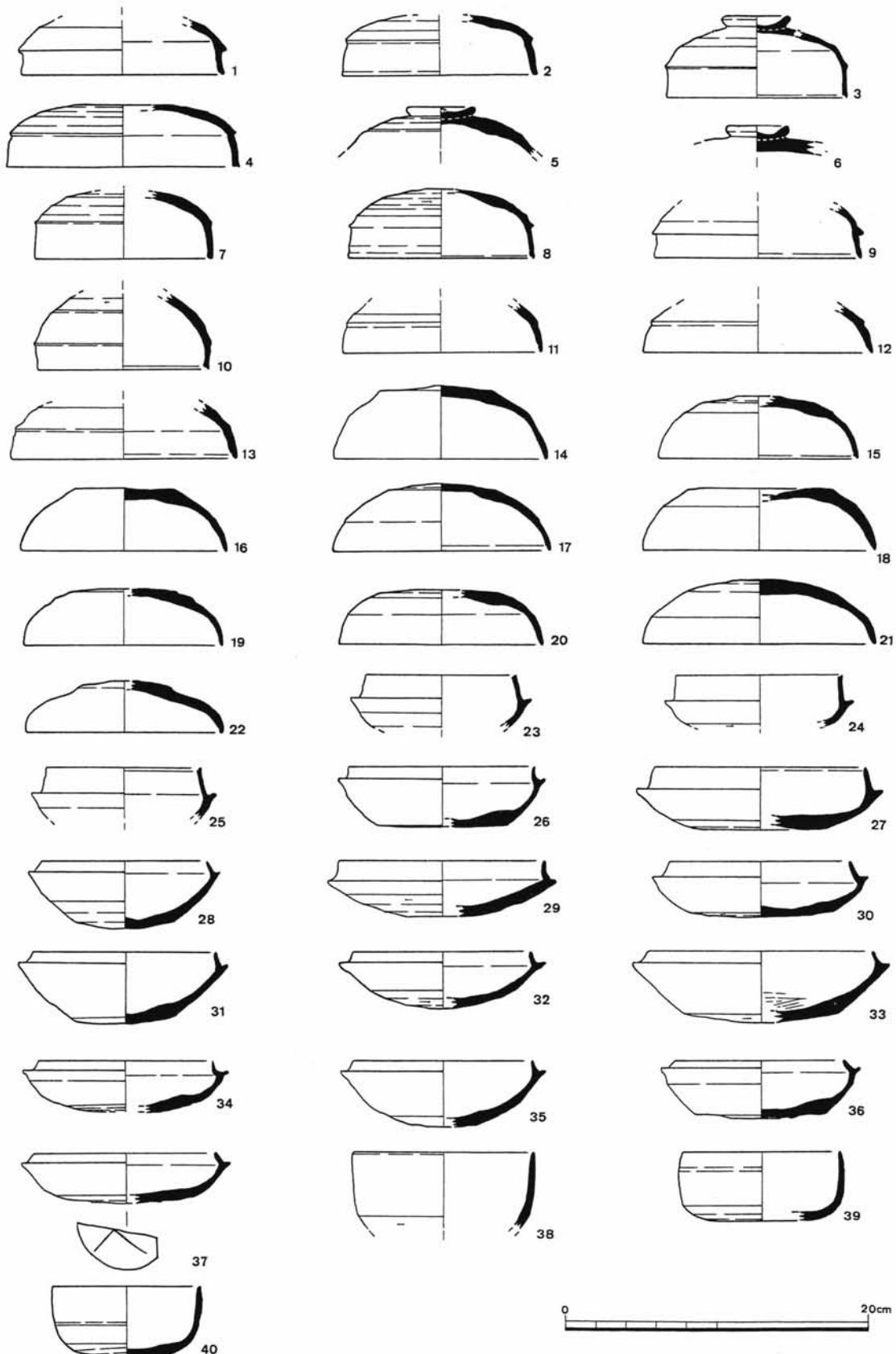
S D101から出土したのは、第35図1~29である。1・2・13~21は須恵器甕である。3~8は須恵器甕である。9・10は須恵器高杯、11は須恵器脚部、12は須恵器提瓶である。22~25は土師器甕、26は土師器高杯である。27は土師器甕の把手、28・29は弥生土器である。

さらに、S D101から出土したのは、第34図1~40である。1~22は須恵器杯蓋である。古墳時代中~後期に属する。23~37は須恵器杯身である。なお、37には外底面に図のようにヘラ記号を施す。38~40は須恵器杯(やや深み)で、古墳時代中~後期に属する。

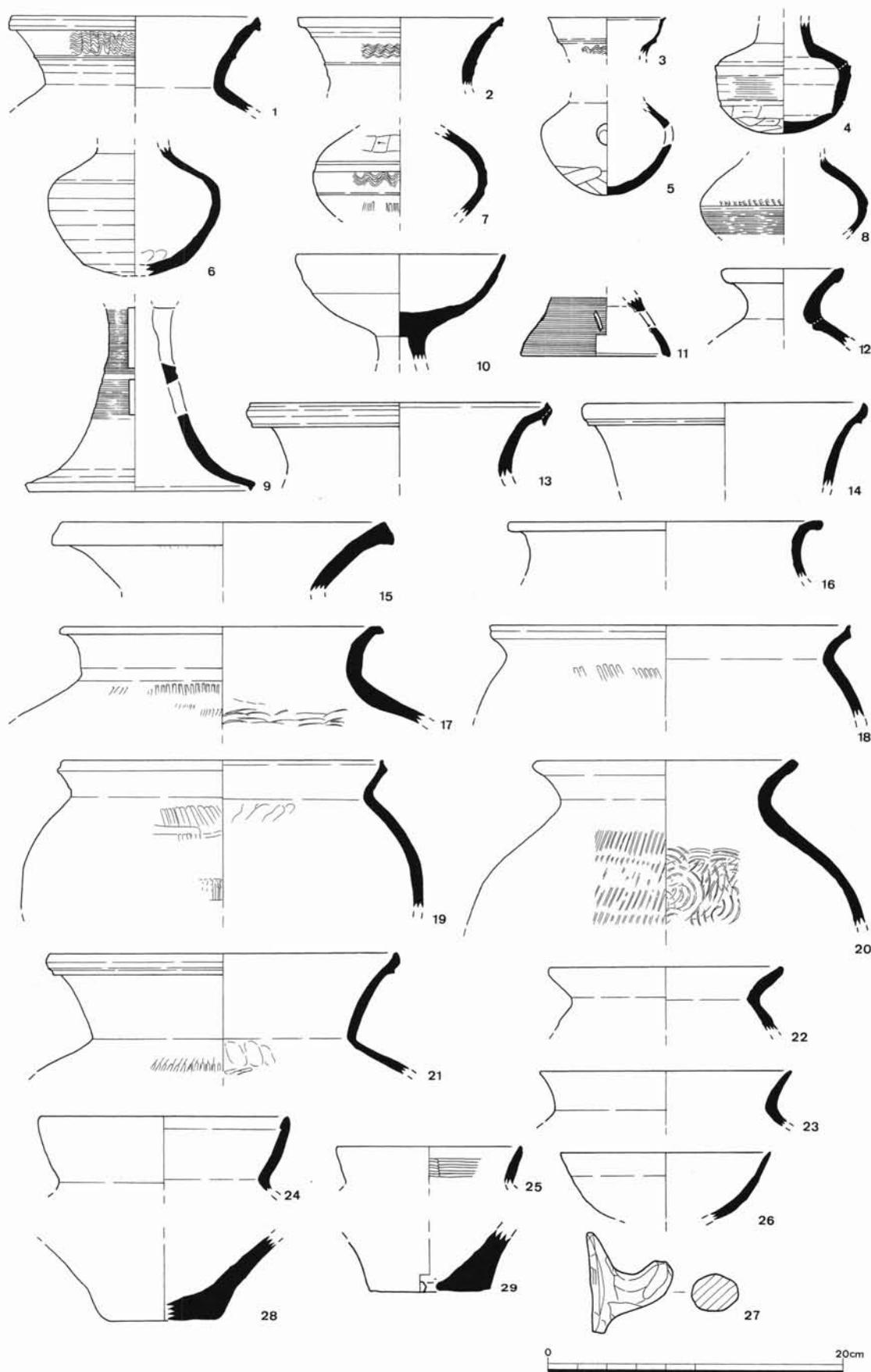
S D108から出土した内、第36図1~30について説明する。1~8は土師器皿である。小皿と中皿がある。平安時代後期~鎌倉時代前期に属する。10~21は瓦器椀である。10のようなやや古相のものもあるが、ほとんどは体部が直線的になる典型的な丹波型の瓦器椀である。体部外面に



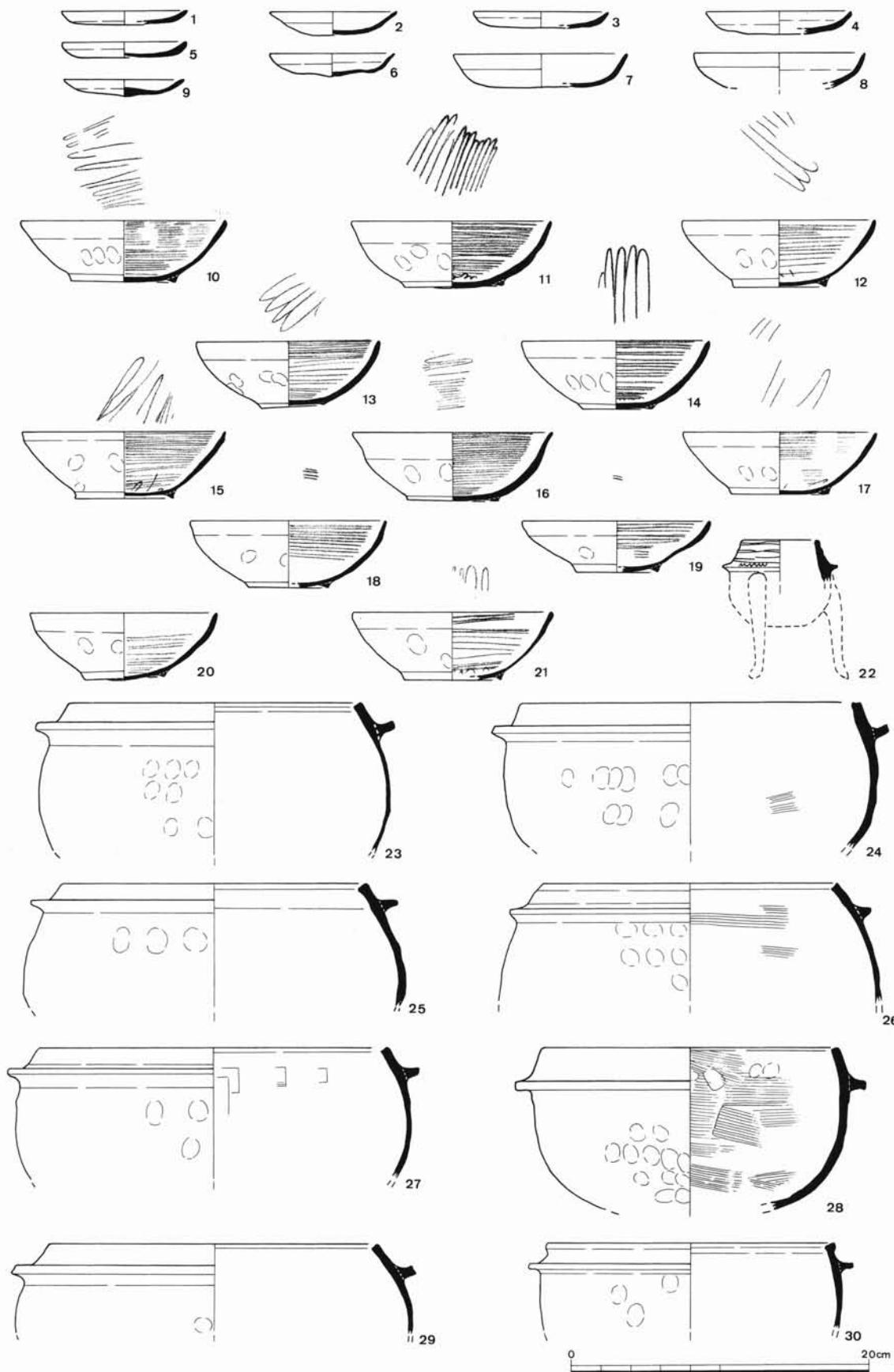
第33図 溝S D100出土遺物実測図



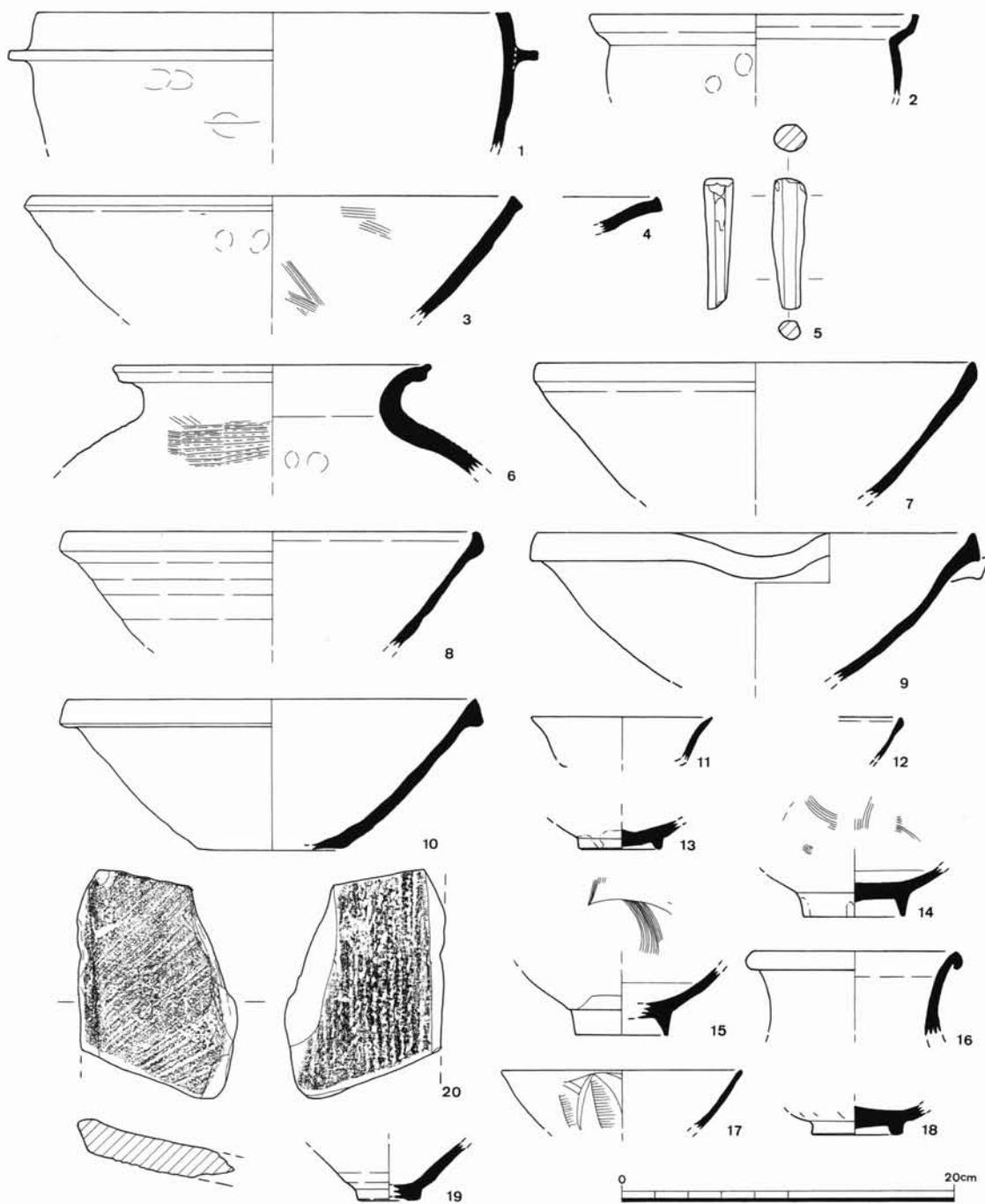
第34図 溝S D 101出土遺物実測図(1)



第35図 溝S D101出土遺物実測図(2)



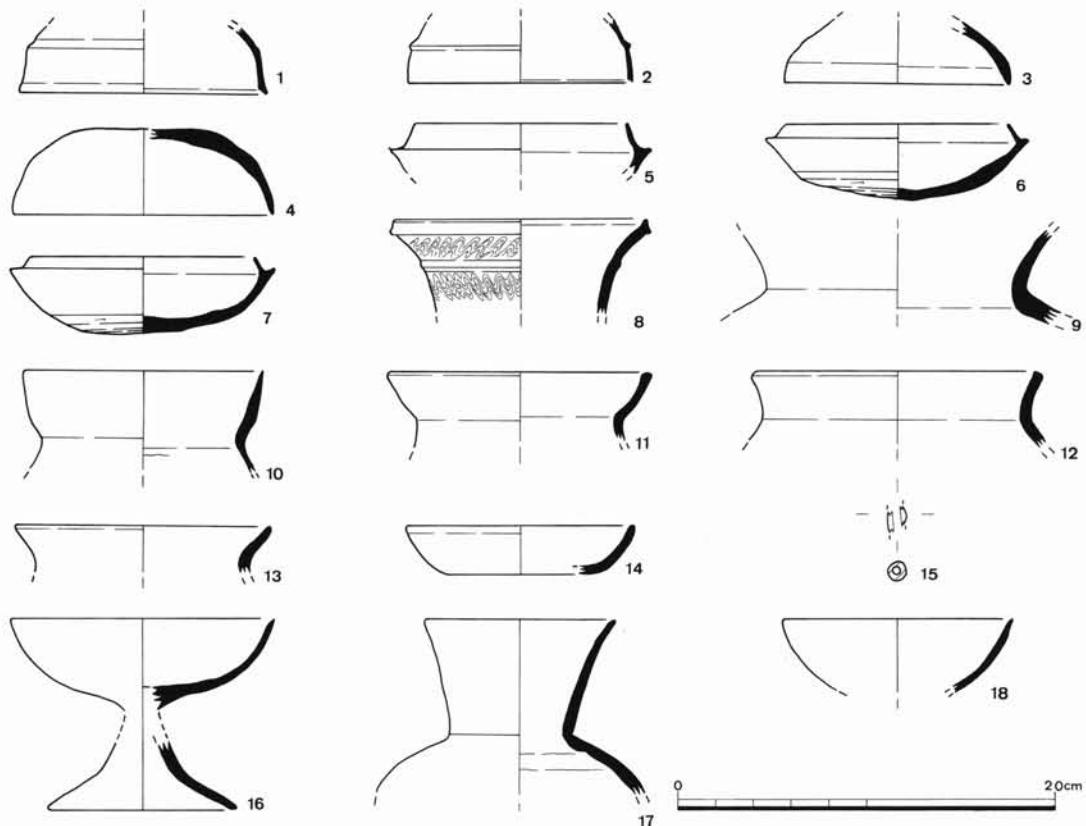
第36図 溝S D 108出土遺物実測図(1)



第37図 溝S D 108出土遺物実測図(2)

ユビオサエ、体部内面は横方向のミガキを施す。見込みにはジグザグ状暗文を施す。22はミニチュアの瓦器の鼎である。つばの上には横方向のミガキを施す。23～30は瓦器羽釜である。内面には横方向ハケメを施す。

S D 108から出土した内、第37図1～19について説明する。1は瓦器羽釜である。2は瓦器鍋である。3は瓦器鉢である。内面にハケメを施す。4も瓦器鉢か。5は瓦器の鼎の脚部である。6は須恵器甕である。7は須恵器鉢である。いわゆる東播系のものである。鎌倉時代後期に属する。11は白磁杯である。12は白磁碗である。小さな口縁をもつタイプで、平安時代中期に属する。



第38図 そのほかの遺構出土遺物実測図(1)  
(1~17: S H106 18: S H107)

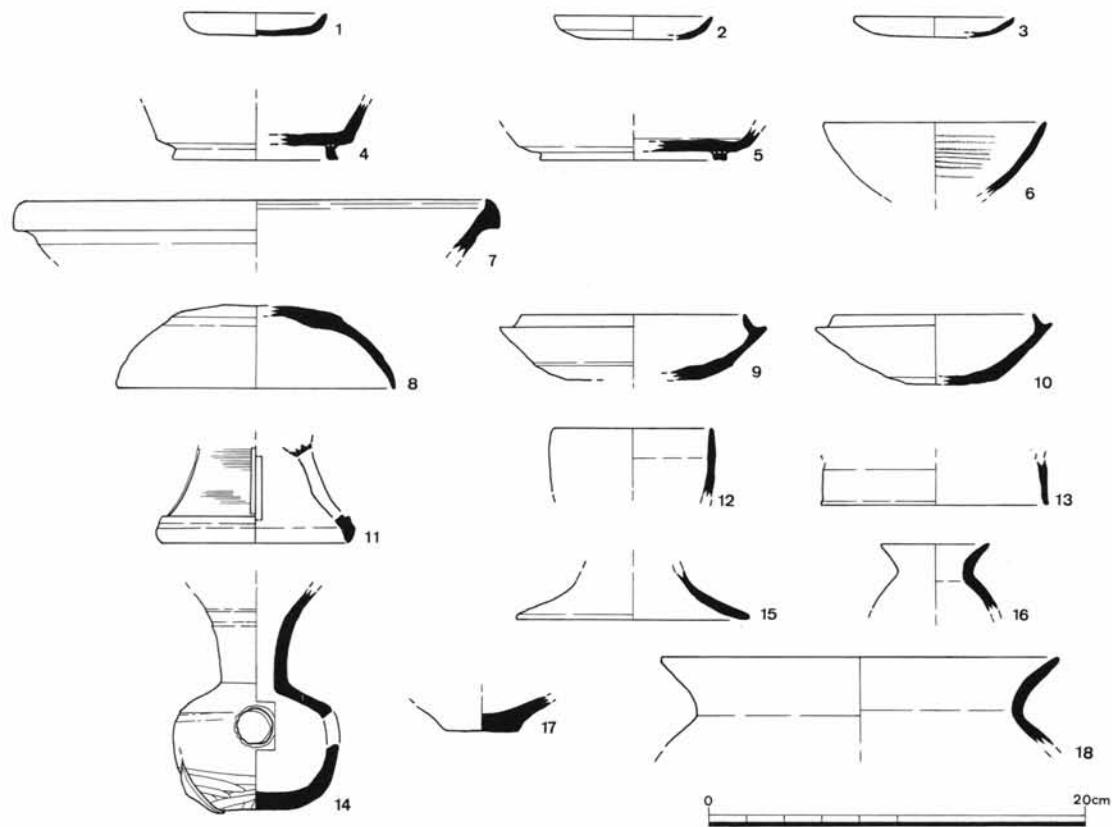
13は白磁碗である。14・15は口縁部が折縁となるタイプの碗である。内面にヘラ書き文を施す。16は白磁壺である。口縁部のみ遺存する。おそらく四耳壺と思われる。17は青磁碗である。体部外面に鎬蓮弁文をレリーフしたもので、龍泉窯系である。18は龍泉窯系の青磁碗である。19は天目茶碗である。高台は小振りで胎土はしまっており、中国製と思われる。20は平瓦である。これらは平安時代中期から鎌倉時代後期までのものである。

S H106から出土したのは第38図1~17である。1~4は須恵器杯蓋である。5~7は須恵器杯身である。蓋は古墳時代中期~後期前半に属する。ほかは古墳時代後期に属する。8・9は須恵器甕である。8は波状文を施す。10~13は土師器甕である。14は土師器皿である。口縁部は、直線的で鎌倉時代的である。15は土錘である。16は土師器高杯である。17は土師器壺である。色調は黄褐色で、ほかは赤褐色系である。

S H107から出土したのは第38図18の土師器高杯である。なお、1・12・13はS H106とS H107の重複した箇所から出土したので所属遺構を確定できない。

S D115から出土したのは、第39図1~3である。いずれも土師器皿で平安時代後期から鎌倉時代前期に属する。

S D114から出土したのは、第39図4~7である。4・5は須恵器杯身である。奈良時代に属する。6は丹波の瓦器碗である。鎌倉時代に属する。7は須恵器鉢である。東播系のものである。鎌倉時代後期に属する。



第39図 そのほかの遺構出土遺物実測図(2)

(1～3：SD115 4～7：SD114 8～18：SD102)

SD102から出土したのは、第39図8～18である。8・13は須恵器杯蓋である。9・10は須恵器杯身である。11は須恵器高杯の脚部である。12は須恵器碗である。14は須恵器壺である。

15は土師器高杯の脚部である。16は土師器壺である。17は弥生土器の底部である。18は土師器蓋である。

P-94から出土したのは、第40図6の鉄刀である。切先から11.5cmまで残存している。

SX103から出土したのは、第40図4・7である。4は瓦器碗である。小振りなタイプで丹波型である。鎌倉時代後半に属する。7は陶器の甕の破片である。

P-104から出土したのは、第40図2の須恵器杯身である。奈良時代に属する。

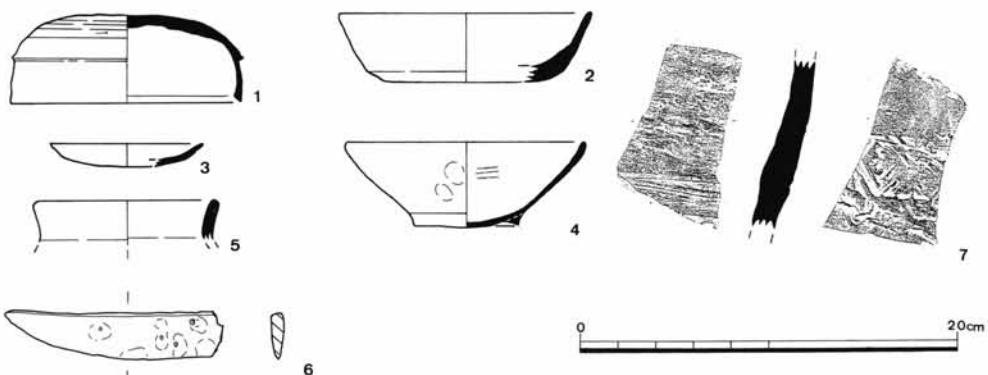
SX105から出土したのは、第40図3の土師器皿である。口径は8.2cmで、鎌倉時代に属する。

P-119から出土したのは、第40図1の須恵器杯蓋である。天井部に明確なヘラケズリが認められ、古墳時代中期に属する。

SK131から出土したのは、第40図5の土師器甕である。

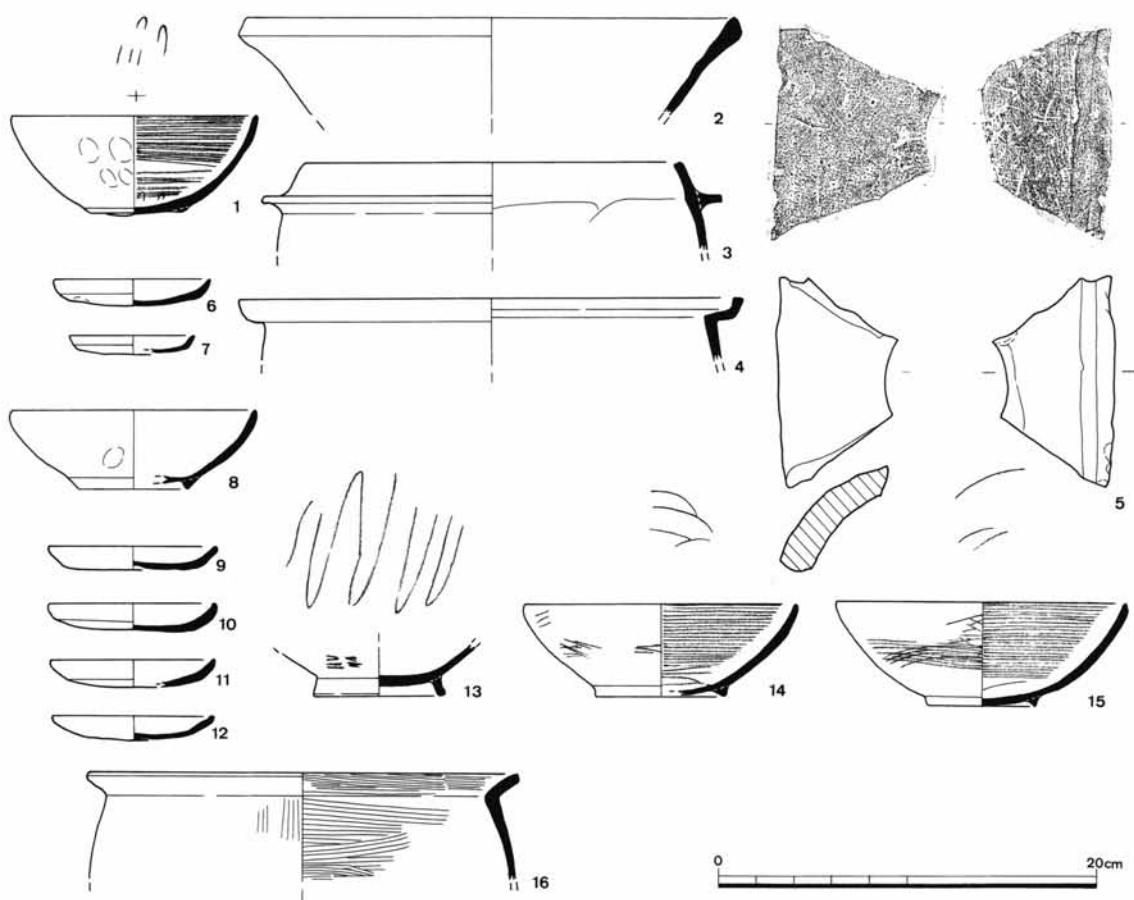
SE104から出土したのは、第41図6～8である。6・7は土師器皿である。8は瓦器碗である。口径は12.7cmでやや大振りで、鎌倉時代前期に属する。

SE110から出土したのは、第41図1～5である。1は瓦器碗である。体部内面にミガキを施す。2は須恵器鉢である。東播系のものである。3は瓦器羽釜、4は瓦器鍋、5は丸瓦である。いずれも鎌倉時代に属する。



第40図 そのほかの遺構出土遺物実測図(3)

(1:P-119 2:P-104 6:P-94 3: SX105 4・7: SX103 5: SK131)



第41図 そのほかの遺構出土遺物実測図(4)

(1~5: SE110 6~8: SE104 9~16: SE117)

SE117から出土したのは、第41図9~16である。9~12は土師器皿である。13は瓦器椀である。内面の見込みにジグザグ状暗文を施す。14・15も同じである。15がもっとも古く、体部外面のミガキが密に施されている。平安時代後期に属する。16は土師器甕である。

(伊野近富)

#### 4. まとめ

今回の調査で、大淵遺跡(B地区)は、古墳時代中頃から中世(鎌倉・室町時代)にかけて形成された遺跡であることが明らかになった。各時代の主な成果は、次のとおりである。

①古墳時代の調査成果としては、竪穴式住居跡S H106・119・107と、溝S D100B・101・102・114を確認した。住居跡は6世紀のものである。最初に竪穴式住居跡S H106が建てられ、その後竪穴式住居跡S H119・107と立て替えが行われている。溝は、S D101・102・114が併行して北西から南東に流れていた。溝S D100Bは、溝S D114が埋まった後で掘られたものである。溝S D101と溝S D100Bは一部併行しており、同時期に機能していた可能性がある。これらの溝は、計画的に掘られた、灌漑用の基幹水路と考えられる。

②奈良時代の調査成果としては、古墳時代に掘られた溝S D100Bを掘り直して作られた溝S D100Aがある。この溝は、奈良時代を通じて使用された。

③平安～中世の調査成果としては、井戸S E104・110・117、溝S D108、掘立柱建物跡とみられる柱穴群を検出した。井戸は、40～50m間隔で分布しており、出土遺物をみると、S E117、S E110、S E104の順に新しくなる。さらに、井戸の構造では、S E117が木製の横桟が井戸底に残っていることから、ほかの石組み井戸より古い構造であるといえる。井戸の周囲には、建物があったと考えられることから、広い範囲にわたって集落が分布していたとみることができる。特に、BW地区の北端に柱穴群がまとまって分布しており、調査地の北側に隣接する地域に集落の中心があると考えられる。BW地区の北には、若宮神社が鎮座しており、その参道の両側の水田4筆には寺域境を示す石柱が残っている。明治期の廃仏棄釈による廃寺と言い伝えられている。若宮神社は、当地西の勝林島の集落の村社であるので当集落との関係が考えられる。

以上のように、今回の調査地付近は、古墳時代に村落が形成され、灌漑用水路が設けられた。流域には水田が広がっていたと考えられる。奈良時代には、溝が掘り直され東西方向の溝が主体となった。中世には、井戸を伴う家々が作られ、村落が広がっていく様子が窺われる。

(戸原和人・田代 弘)

#### 調査参加者

浅田育裕・麻田智也・桂昌裕・川村耕司・草剪大蔵・高橋拓馬・田中洸太郎・本間賢司・前川聰・松田純・峯山博明・三原理・山口卓也

柿谷悦子・牧澤敏子・侯野明子・関口睦美・高田眞由美・原桂・藤井矢壽子・丸谷はま子・山本弥生  
伊津フサ江・井本典子・大西市三郎・大西梅野・大西和子・大西道徳・大西啓之・岡本ユカ・桂孝子・  
桂智春・木村宏昭・草剪和美・栗林昭弘・酒井美也子・関口澄子・関口トシ子・田中千代子・中村恒義・  
西田千代和・春木宗夫・早田金三・古谷すが・前川百合子・前田純一・村上福治・山口アキヨ・山本君代・脇上妙子

#### 大淵遺跡調査一覧

- 大淵遺跡 第1次調査 H. 8 範囲確認調査 亀岡市教育委員会  
大淵遺跡 第2次調査 H. 13範囲確認調査 京都府文化財保護課  
大淵遺跡 第3次調査 H. 14、C地区本調査(千歳町) 京都府文化財保護課  
大淵遺跡 第4次調査 H. 14、C・D地区本調査(保津町) (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

#### 参考文献

- 中澤勝「市内遺跡発濠調査報告書—千代川遺跡第9次発掘調査 保津地区府営圃場整備に伴う発掘調査—」(『亀岡市文化財調査報告書』第33集 亀岡市教育委員会) 1995  
亀岡市教育委員会「市内遺跡発掘調査報告書 国営農地再編整備事業関連遺跡発掘調査—保津車塚古墳・出雲遺跡—」(『亀岡市文化財調査報告書』第45集) 1998  
岸岡貴英「国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡平成12年度発掘調査概要 [1] 案察使遺跡」(『埋蔵文化財調査概報』 京都府教育委員会) 2001  
戸原和人「国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡平成13年度発掘調査概要 保津車塚古墳(案察使1号墳)第2次」(『京都府遺跡調査概報 第103冊』 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2002  
福島孝行・石尾政信・戸原和人「国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡平成13・14年度発掘調査概要 案察使遺跡第4次 大淵遺跡第4次」(『京都府遺跡調査概報 第108冊』 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2003

## 5. 平安京跡右京一条三坊九・十町(第10次調査) 発掘調査概要

## 1. はじめに

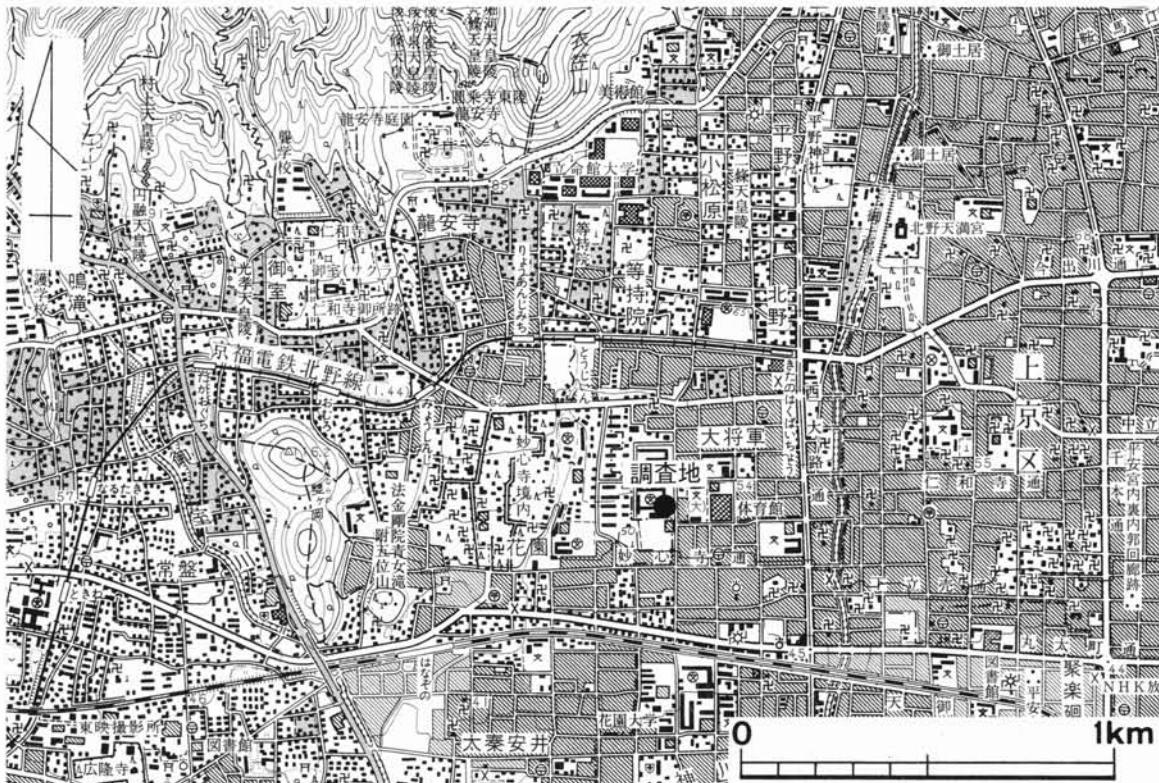
調査地である京都府立山城高等学校は、京都市北区大將軍坂田町29番地に所在する(第42図)。調査地である学校敷地は、平安京の条坊区画では右京一条三坊九町全域と十町の北半部に相当する(第43図)。

今回の調査は、府立山城高等学校校舎改築事業に伴って体育館建設予定地内で面積約1,300m<sup>2</sup>の調査トレンチを設定し発掘調査を実施した。調査地は、苑池跡が検出された第5次(昭和55年<sup>(注1)</sup>)調査区の北側、そして四脚門跡が検出された第8・9次(平成10・11年度<sup>(注2)</sup>)調査区の東側に当たる。

条坊では、九町の南東隅部分と十町の北東隅部分、そして九町と十町の間を通る東西道路の鷹司小路部分である。

今回の調査は、京都府教育庁管理部管理課の依頼を受けて、当調査研究センター調査第2課第1係長石井清司・同調査員村田和弘が担当した。また、本書の執筆は、村田が担当した。

現地調査期間は、平成14年10月28日～平成15年3月10日まで実施し、整理作業は平成15年度に



第42図 調査地位置図(国土地理院1/25,000京都西北部)

実施した。この間、京都府教育府指導部文化財保護課・京都府立山城高等学校をはじめ各関係機関の方々にはご指導・ご協力を得た。また、調査および整理作業においては、作業員・調査補助員・整理員の協力を得た。<sup>(注3)</sup>記して感謝したい。

なお、本調査にかかる費用は、京都府が全額負担した。

## 2. これまでの調査成果

### (1) 遺構の時期区分

過去9度にわたる発掘調査の結果から、遺構の時期を大きく3時期に区分している。平安京造営以前までをⅠ期、平安時代初頭～前期までをⅡ期、平安時代中期以降をⅢ期とした。ここでは、この遺跡での主要な遺構の時期区分について簡単に説明しておく。

なお、今回の調査で検出した遺構についても、この時期区分に従い区分することとした。<sup>(注4)</sup>

#### ①Ⅰ期

おおむね平安京造営以前の遺構をまとめる。これまで平安期の下層から古墳時代後期(6世紀末)から奈良時代末(8世紀末)の遺構が確認されている。これらの遺構は、西側に隣接して所在する花園遺跡と同時期の遺構として位置づけることができる。

#### ②Ⅱ期

平安京の条坊にしたがって建物などが造営され、廃絶するまでの期間を当てる。年代的には平安時代初期～前期(9世紀後半)に相当する。Ⅱ期はさらに細分され3期(a～c)に区分される。

Ⅱ-a期は、邸宅の建物が「コ」の字に配置されて建てられる以前に、正殿SB09に先行して建てられた建物SB08が存続していた時期をあてる。

Ⅱ-b期は、邸宅の「コ」の字型に配置された建物群や築地、南門などが存続していた時期をあてる。これら邸宅に関連する遺構の存続期間は、出土した遺物から9世紀初頭の短い期間であったと考えられている。

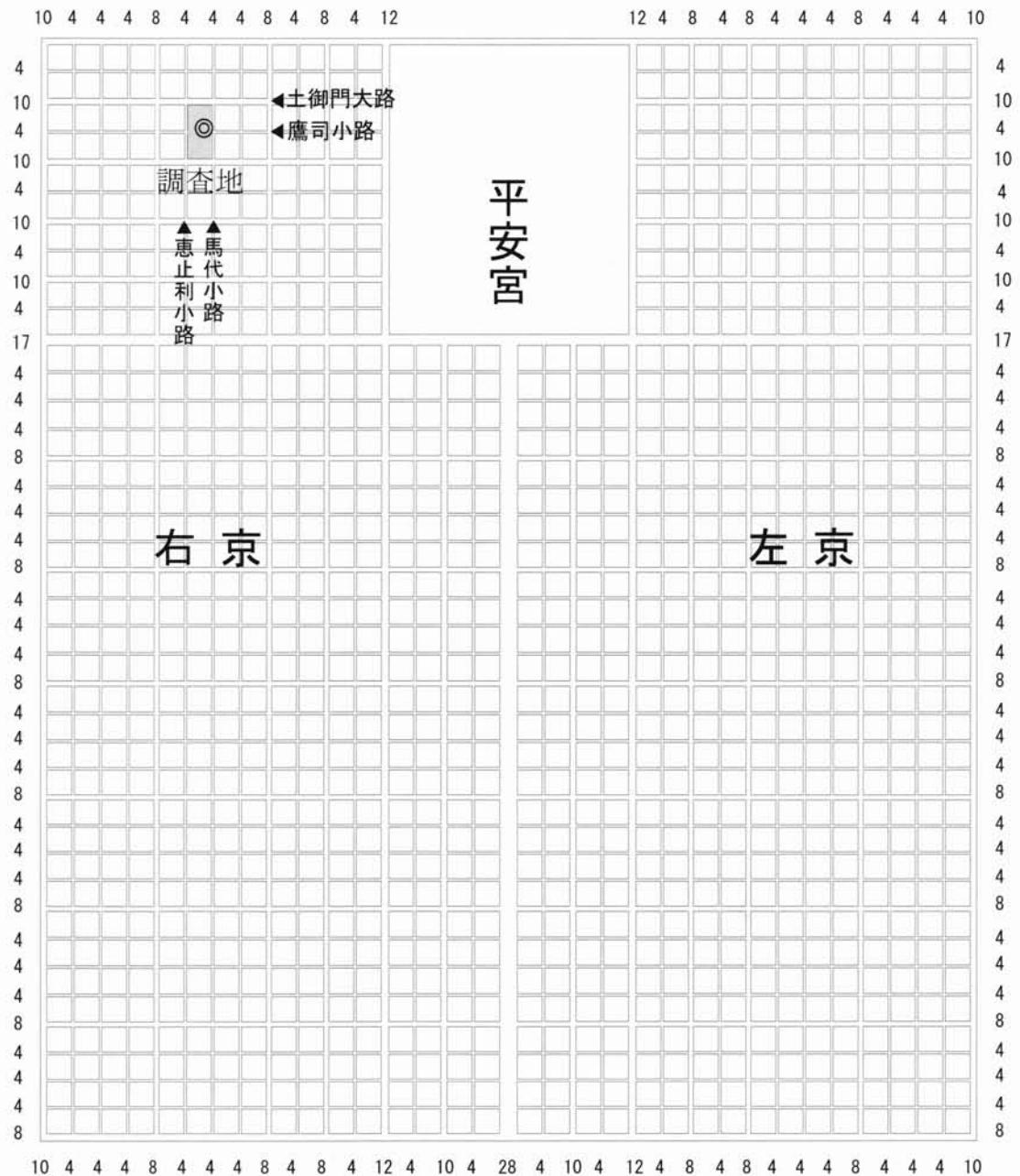
Ⅱ-c期は、邸宅の建物などが廃絶した後に条坊に従って建てられた建物などをあてる。時期は、9世紀後半から9世紀末にあたる。

#### ③Ⅲ期

条坊による方向の規制を受けず不規則に建物が建てられる時期で、平安時代中期～末期までをⅢ-a期とする。また、これまで後世の削平などで中近世の遺構が希薄であったため、区分されていなかったが、今回の調査で中世の溝がまとまった状態で検出された。それら中世以降の遺構については、Ⅲ-b期として区分した。

### (2) 九町域の遺構

第1・2次調査(昭和54年度)時に、九町域の北半中央部においてⅡ-a・b期に属する邸宅の主要建物群が検出された。SB08・09の正殿とSB07・10の西脇殿、SB12・13の東脇殿が検出された。正殿のSB09は、造営途上の仮設的なSB08(Ⅱ-a期)を廂・孫廂を増設することによって規模を拡張し整備していることが確認された。



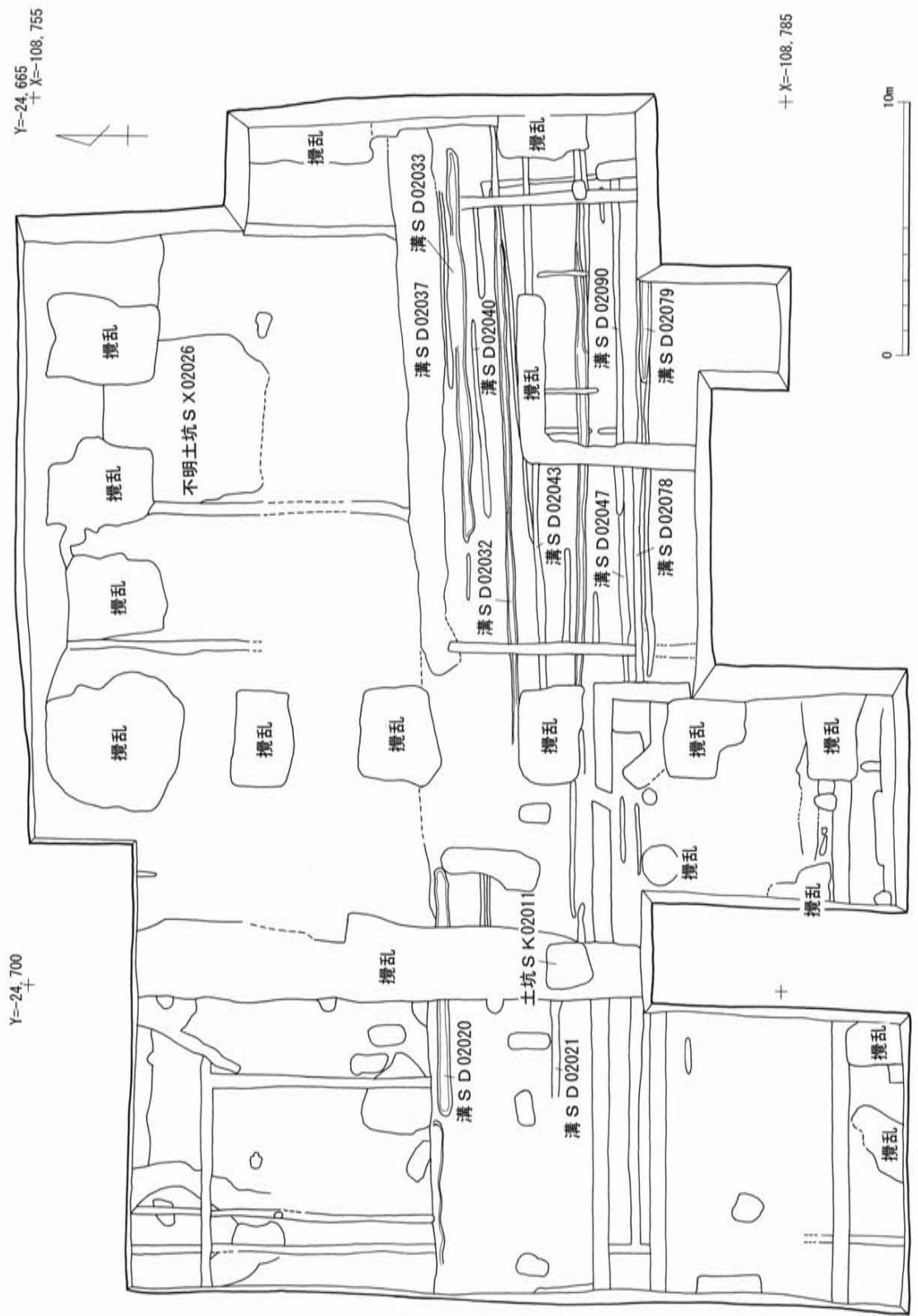
第43図 平安京条坊図と調査位置

第3次調査(昭和55年度)では、正殿S B09の北側で後殿と考えられるS B119が検出された。また、九町域の北限で築地の内側の溝と土御門大路の南側側溝も確認された。

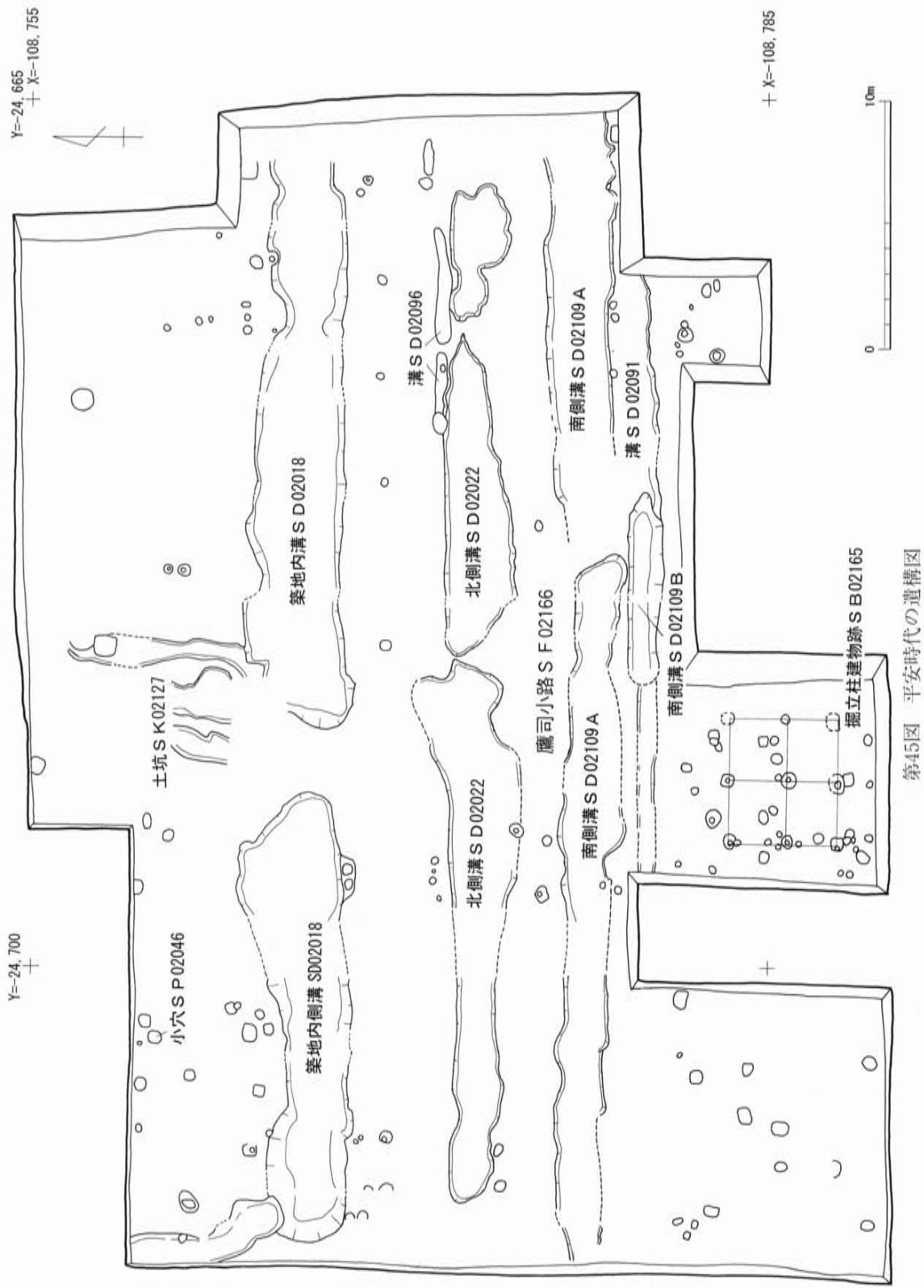
第8・9次調査(平成10・11年度)では、九町域の南限の築地の内側の溝と門跡SB14が検出された。門は6基の柱穴で構成される四脚門であった。南限の築地跡と南門が確認されたことによって邸宅の敷地が一町域であった可能性がさらに高くなった。

### (3) 十町域の遺構

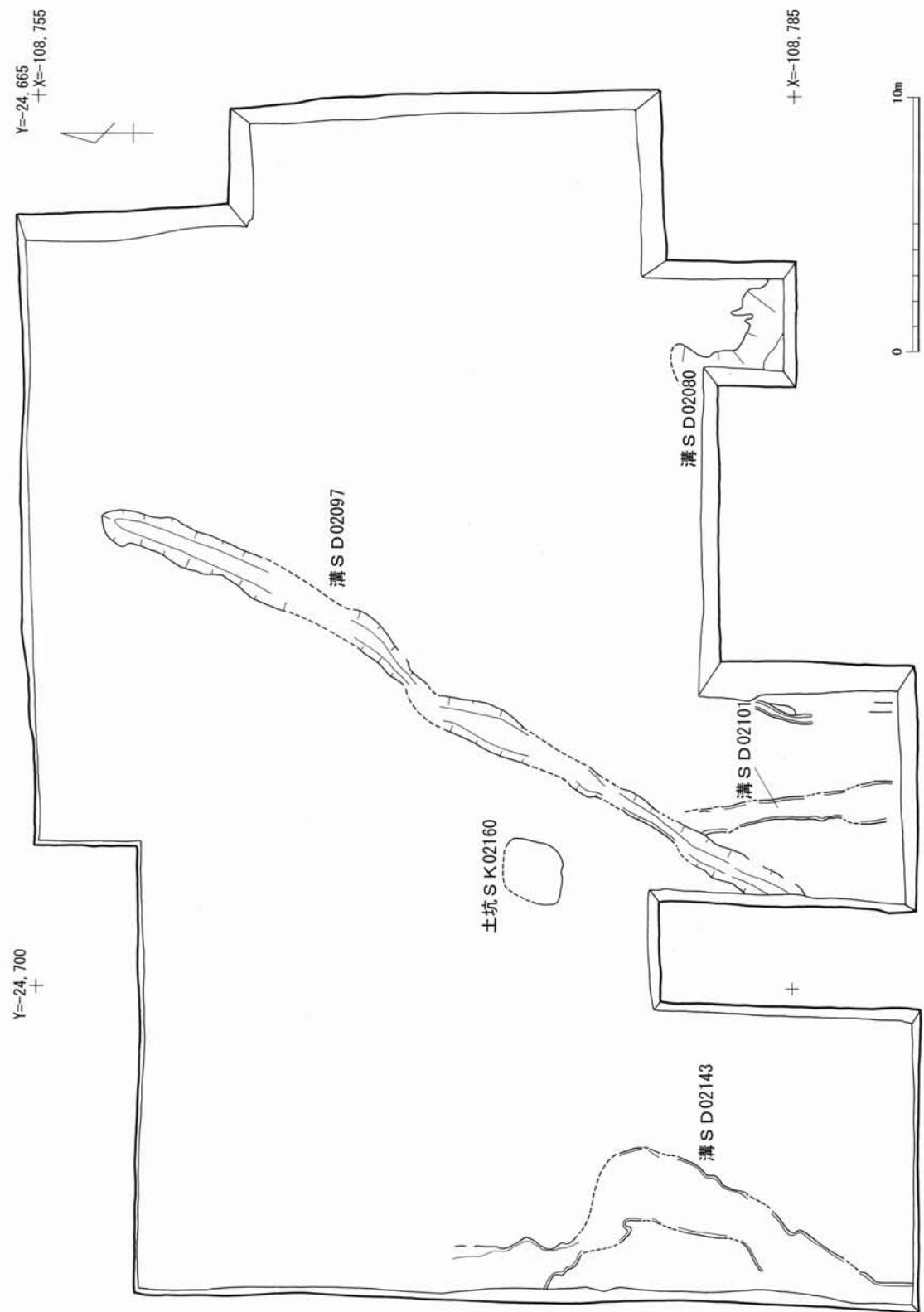
第5次調査(昭和55年度)では、一町域の北東部でI期の掘立柱建物跡やII-b・c期の苑池遺構、III-a期では小規模な掘立柱建物跡や柵などの遺構を検出している。



第44図 上層(中世ほか)遺構図



第45図 平安時代の遺構図



第46図 下層(古墳時代)遺構図

第8・9次調査(平成10・11年度)では、十町の北西側で調査し、Ⅰ期からⅢ期における各時期の属する掘立柱建物跡を検出した。

また、9世紀末～10世紀初めの遺物が多量に出土した大型の井戸S E98058を検出している。井戸には横板井蒸籠組の井戸枠が組まれていた。この井戸は、Ⅱ-c期の終わりごろからⅢ期の初めにかけて存続していた遺構と考えられる。

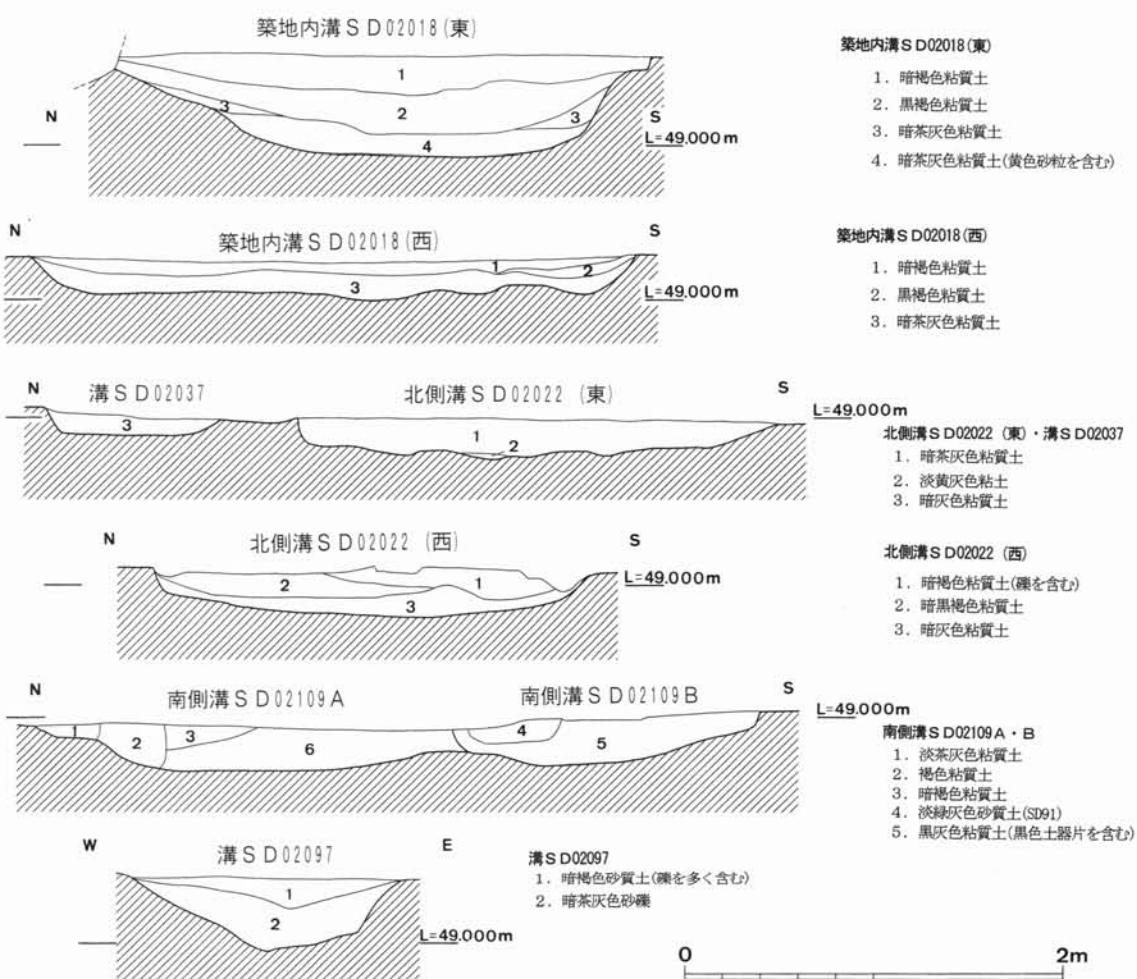
#### (4)条坊について

条坊の概要は、古代の法典の一つ『延喜式』左右京職の京程および町内小径に、平安京の平面規模や各道路の規模および構成部分の規模、町の規模や数値が記されている。条坊道路はその幅を築地心から築地心までの距離とし、築地・犬行・側溝・路面で構成される。

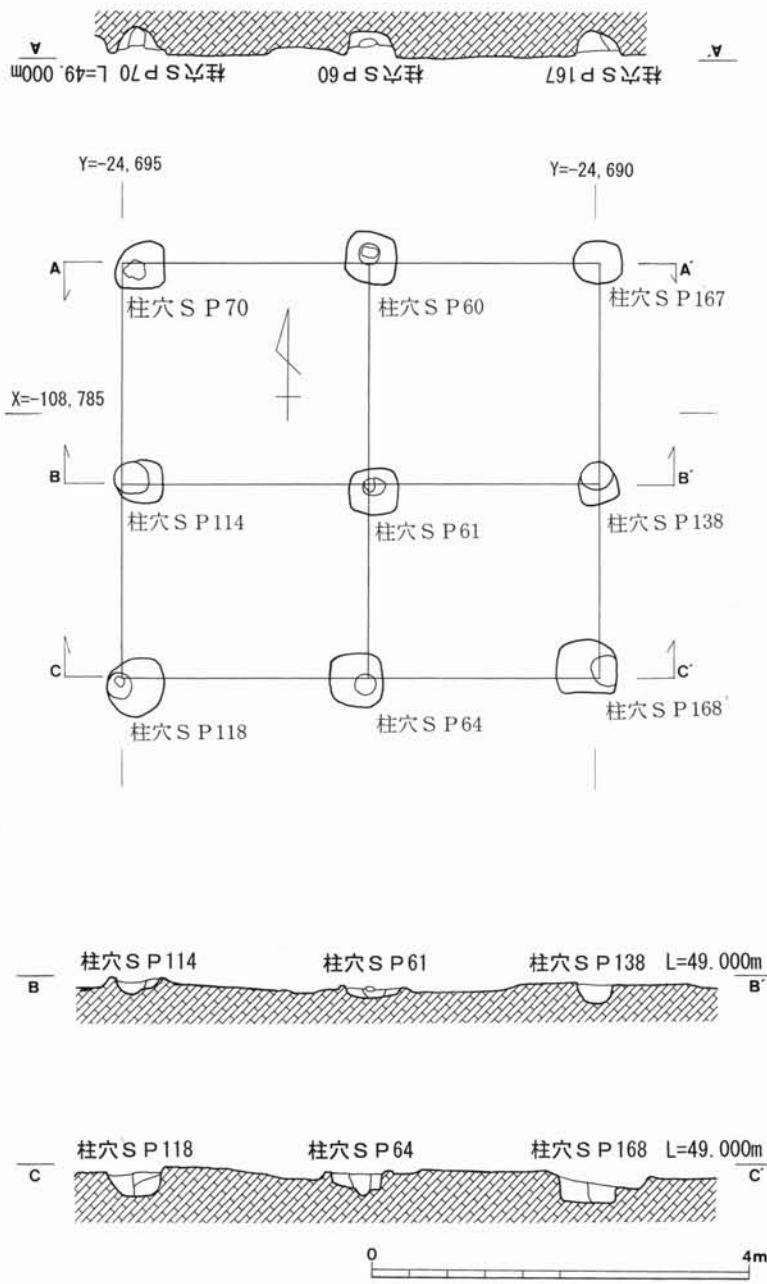
また、一町の規模が40丈四方で、一町を32分割した区画の戸主が東西10丈、南北5丈の規模とされる(1丈=10尺=2.98445m)。今回の調査地内に想定される鷹司小路の規模は4丈で、築地幅の半分が2.5尺、犬行3尺、側溝幅3尺、路面幅2丈3尺から成る。

本書での条坊の復原は、(財)京都市埋蔵文化財研究所が作成した平安京の条坊復原モデルを基に実施した。また、辻純一氏が行った九町の条坊復原についても参考とした。<sup>(注5)</sup>

なお、座標については過去の調査地区との合成を前提としているため、旧国土座標系(日本測



第47図 遺構土層断面図



第48図 掘立柱建物跡 S B 02165平・断面図

調査範囲の東側半分は、前年度まで体育館が建てられていた敷地で西側の旧グランド面から約1mの高さの盛土の堆積があった。また、調査地の南側には、遺構面まで厚さ約10cmの平安時代後期から中世にかけての遺物包含層の堆積があった。

## (2) 調査経過

調査は、調査地の東側にあった旧体育館解体の後、平成14年10月28日から開始した。旧体育館が解体された後、重機による遺構検出面までの掘削を行った。旧体育館は西側のグラウンド面より約1mも盛土されていたが、遺構を検出した面の高さにはさほど変化がなかった。しかし、東

地系)を使用している。なお、新座標系(世界測地系)の数値データについては、当調査研究センターで保管している。

## 3. 調査の概要

### (1) 地形と層位

調査地は京都盆地の北西部にあたり、北側の衣笠山から南方向へ向けて段丘を呈して下がる洪積丘陵上に立地している。遺構を検出した面は後世に削平を受けている可能性が高く、北から南にゆるやかに傾斜している。

調査範囲の西側半分は近年までグランドとして利用されており、北側の校舎の立地面とでは約0.5mの段差がある。旧グランド面から遺構を検出した面までは10cm程度の深さしかなく、グランド整地土と水はけ用のバラス層と若干の包含層(約3~5cm)が確認できるのみであった。



第49図 現地説明会風景

側には旧体育館の柱の基礎などによって、数多くの攪乱を受けていた。攪乱は大きいもので一辺が約3mの規模があり、その部分の遺構はすでに破壊され消滅していた。

その後、重機による旧体育館の基礎部分の盛土とグラウンドの造成土の除去が終了した部分から、人力による掘削および遺構の検出作業を開始した。

調査地の南側の鷹司小路と十町域部分では、北側と同じ検出面で中世以降の遺物包含層を確認した。その厚さ約15cmの包含層を除去し、遺構検出作業を行うと東西方向や南北方向の中世の耕作溝を検出した。溝は幅20cm程度の溝で、ほとんどが東西方向の溝であり、重複して掘り込まれていた。

これらのことから調査地の南側は、中世の段階で耕作地となったことがうかがえる。中世溝などの遺構を完掘したのち、平安時代の遺構検出作業を行った。

調査地北側については、南側に比べると中世の遺構密度が低いことから、平安時代の遺構と並行して遺構検出を行った。また、攪乱土坑も先行して掘削を行った。

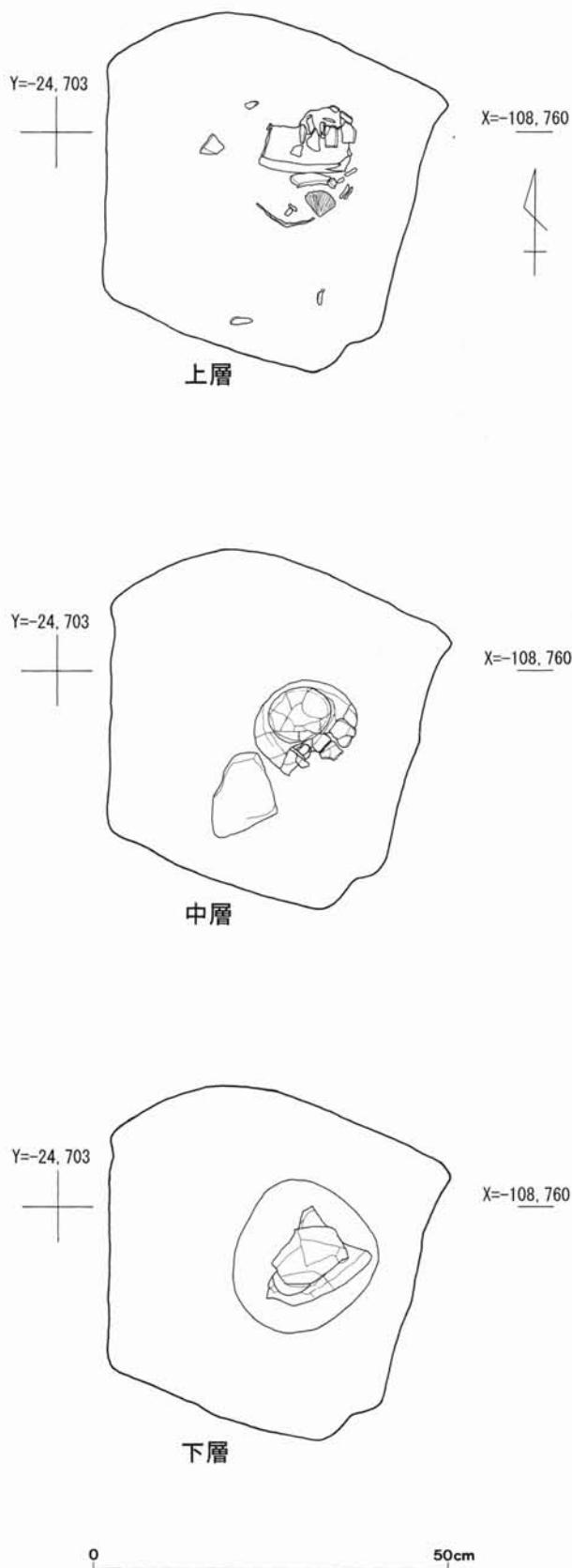
九町域の調査は、旧体育館の基礎による攪乱土坑や盛土の西側コンクリート壁の基礎による攪乱、グラウンドの水はけ用の暗渠によって、遺構は著しく削平および破壊を受けていた。

検出遺構としては平安時代前期の邸宅に伴う築地の内側溝となる東西方向の溝S D02018や柱穴などを検出した。

十町域では中世の耕作溝を完掘したのち、下層の遺構の検出作業を行い、Ⅲ期の遺構と思われる掘立柱建物跡S B02165の柱穴や土坑を検出した。

また、鷹司小路の両側溝と考えられる東西方向の溝の北側溝S D02022・南側溝S D02109を検出した。

さらに、南側溝S D02109については、一度掘り返された痕跡があり、側溝が改修されていたこともわかった。古い時期の溝をS D2109A、掘り返された新しい溝をS D2109Bとして調査



第50図 小穴 S P 02046遺物出土状況

した。

平安時代の遺構の掘削を行っていくと、さらに下層に遺構が存在することが判明した。調査地中央を斜めに横断する、古墳時代と思われる溝 S D 02097を検出した。

検出した遺構を掘削した後、バルーンによる空中写真撮影と図化に伴う写真撮影を平成15年2月21日に実施した。そして、平成15年2月26日に現地説明会を実施した。

その後、遺構の完掘と図面の作成などを行い、平成15年3月10日に撤収、現地作業を終了した。また、調査中、当調査研究センターの井上満郎理事に指導を得た。

#### 4. 遺構の概要

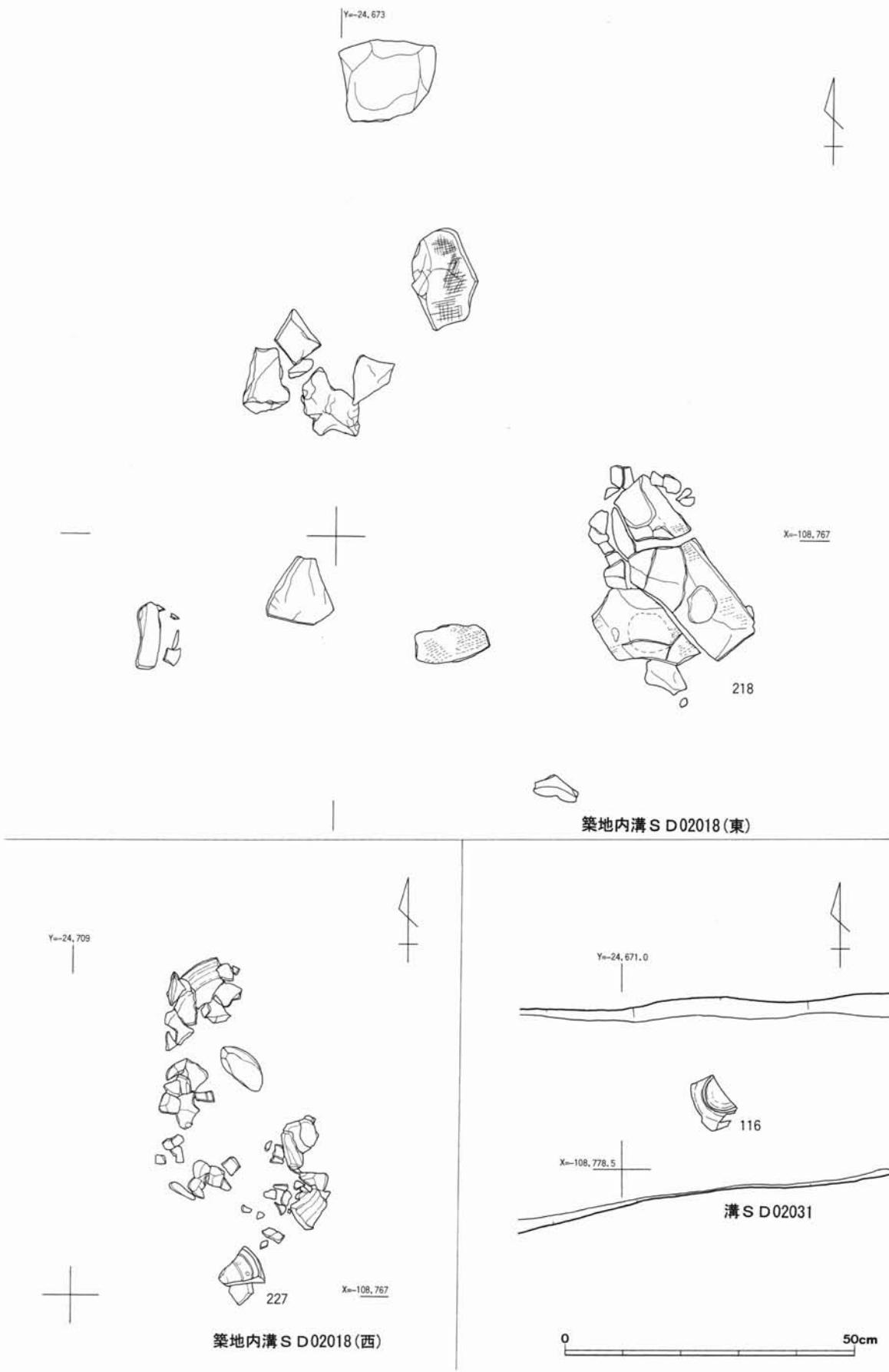
検出した遺構を3時期に区分して報告する(第44~46図)。

##### (1) 上層の遺構(中世以降の遺構など)

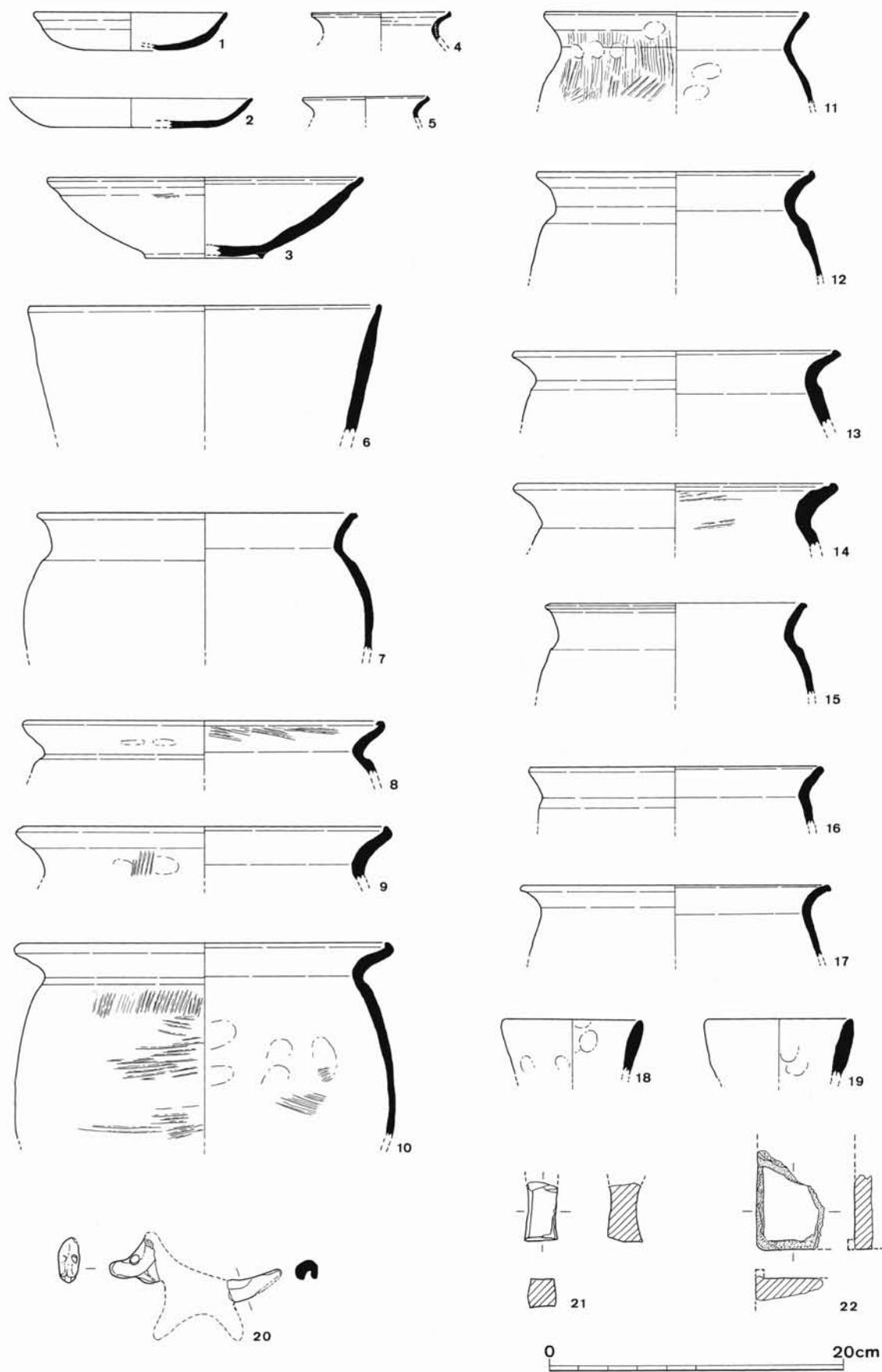
中世の遺構は、今回の調査トレンチ内では南側の十町内で検出した。最も集中しているのは、南東部の鷹司小路の路面部分にあたる(第44図)。

検出した遺構は、東西方向と南北方向の耕作溝と思われる。溝は、東西方向の溝が多く、重なって検出されていることから幾度となく耕作が行われていたことを示す。溝内からは瓦器や黒色土器などの遺物が出土した。

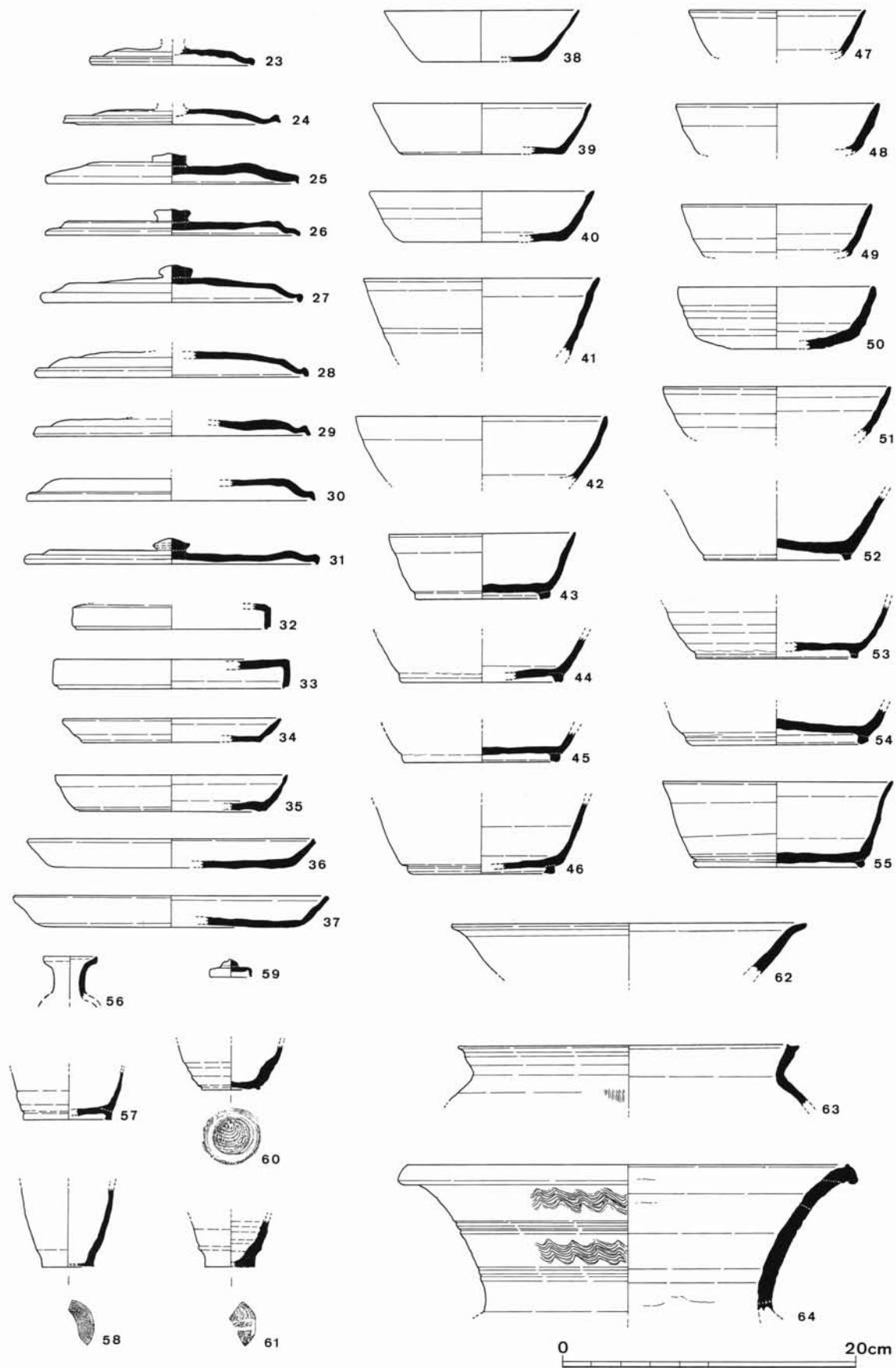
溝 S D 02037 幅約1.1m、深さ約0.1mを測る東西方向の溝である。



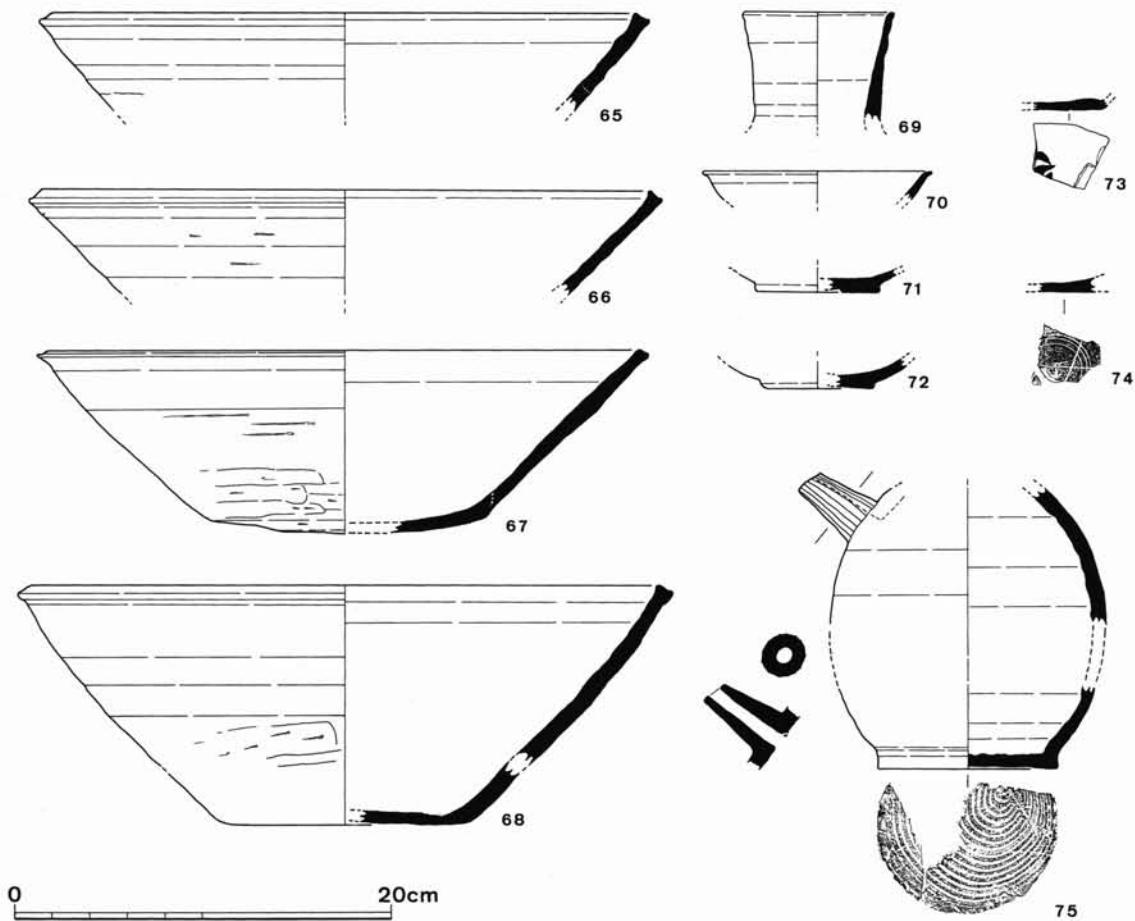
第51図 遺物出土状況



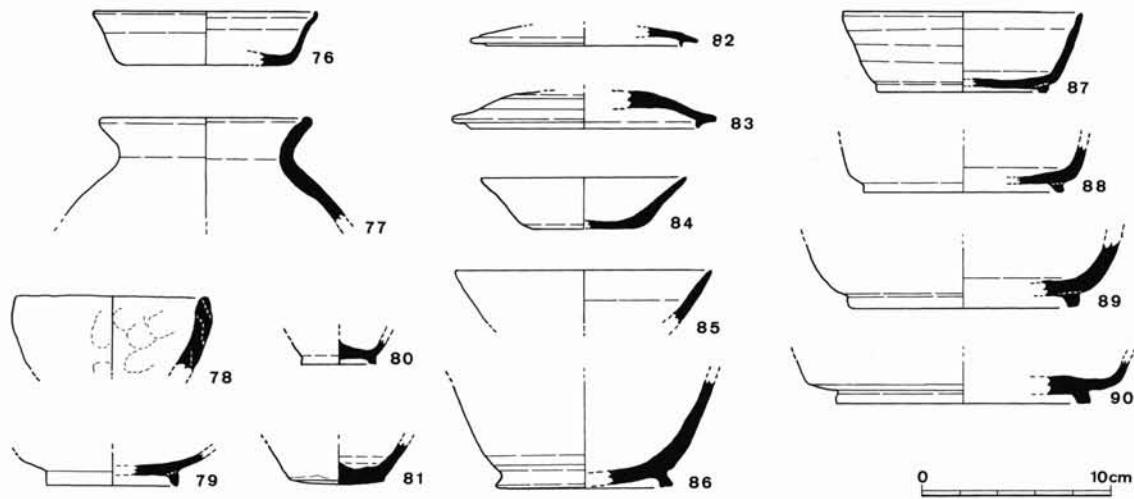
第52図 築地内溝 S D 02018出土遺物実測図(1)



第53図 築地内溝 S D02018出土遺物実測図(2)



第54図 築地内溝 S D 02018出土遺物実測図(3)

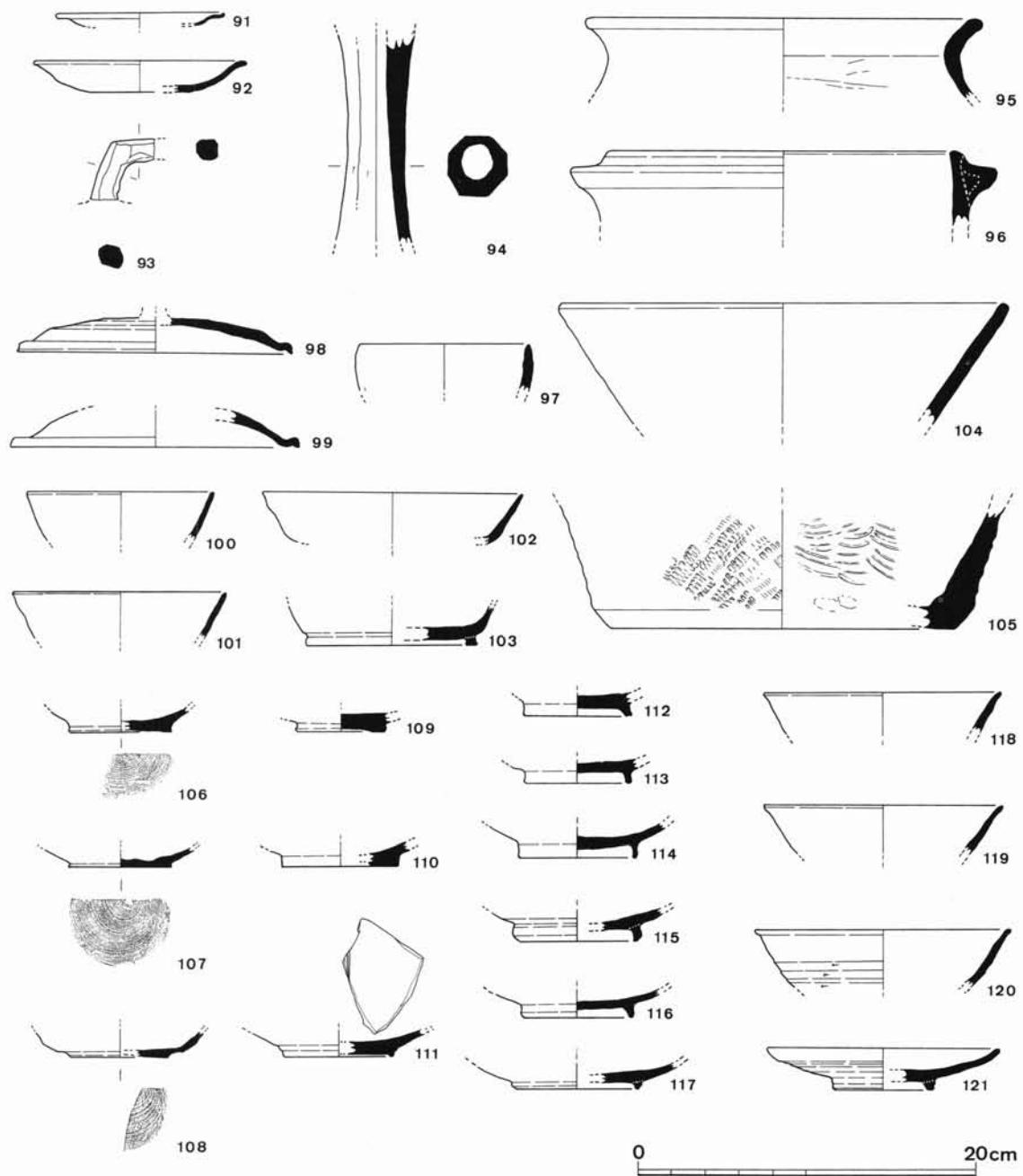


第55図 北側溝 S D 02022出土遺物実測図

築地があったと思われる基底部の南側を浸食して溝を掘削している。そのことから平安時代前期以降の遺構と思われる。

不明土坑 S X 02026 この土坑は調査トレンチ内の北東側で検出した遺構である。土坑は一辺が約 6 m を測る規模の大きなものであるが、深さは約 10cm と浅い。

時期については、築地内溝 S D 02018を切り込んで存在するため、平安時代前期以降と思われ



第56図 南側溝 S D02109出土遺物実測図

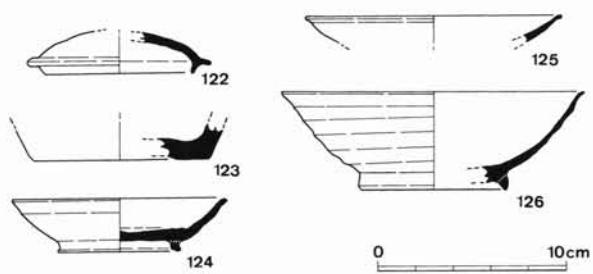
るが詳細は不明である。

そのほかに、時期不明の土坑・ピットを検出した。旧体育館の基礎や暗渠などの攪乱が顕著で、それによって遺構が破壊・消滅していた。

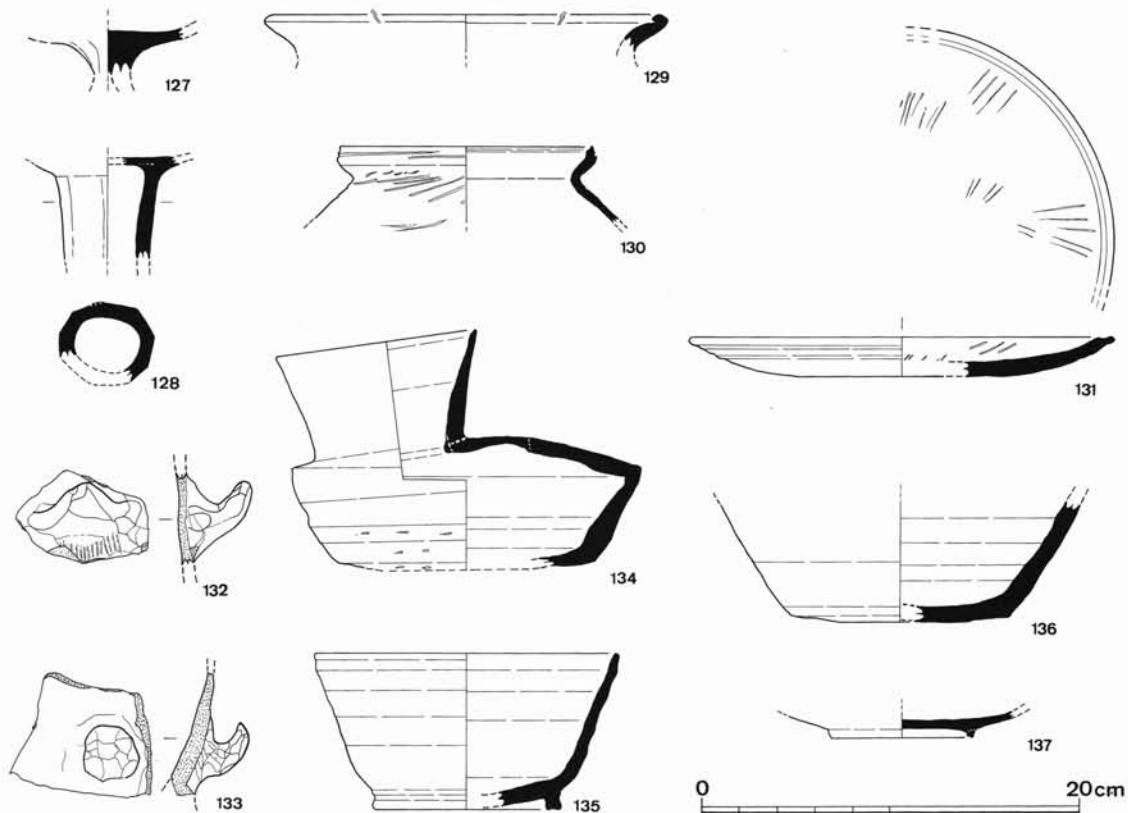
## (2) 平安時代の遺構

平安時代の遺構としては、II-b期とII-c期に属する遺構を検出した。

九町の邸宅に関連する遺構と条坊道路はII-b期、掘立柱建物跡 S B02165についてはII-c



第57図 溝 S D02090出土遺物実測図



第58図 溝 S D 02097出土遺物実測図

期に属する遺構として区分した(第45図)。

### ①九町の遺構

**小穴 S P 02046** 調査トレンチの北西側で検出したピットである。周辺にもピットが検出されたが、建物や柵などの遺構を構成するにはいたらなかった。埋土からは土器や瓦が重なった状況で出土した(第50図)。

**築地内溝 S D 02018** 東西方向の幅約3.5m、深さ約0.5mを測る溝である。この溝は、第8・9次調査の際に検出した溝 S D 99064に繋がる溝である。

溝の埋土からは、土師器・須恵器・綠釉陶器・瓦類、土馬などの土製品が出土している(第52~54図)。

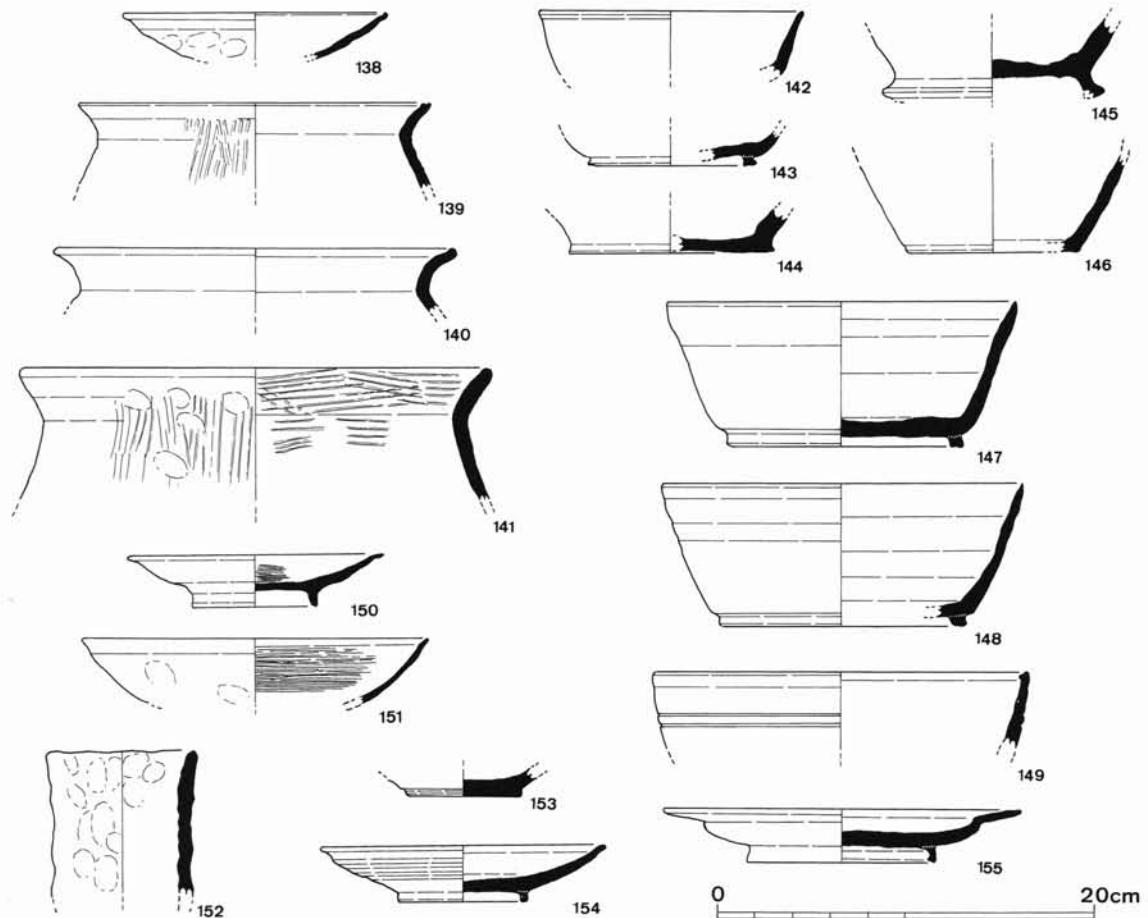
**土坑 S K 02127** 調査トレンチの北側に位置する土坑で、攪乱穴の間にわずかに残るもので規模は不明である。土坑は残りが悪く、5cm未満と浅いものであった。

しかしながら、土坑からは灰釉陶器や綠釉陶器・須恵器や土師器・製塩土器などの遺物が多く出土している(第59図)。

### ②鷹司小路関連遺構

中世の遺構によって破壊されており、後世の削平によって、遺構の残存状態は良くなかったが、鷹司小路に関連する遺構を検出することができた。

**鷹司小路(路面) S F 02166** 後世の遺構および削平によって、路面の残存状態は悪く、路面の表面自体は残っていない。最も残存するところでも幅は約1.2mであった。



第59図 土坑S K02127出土遺物実測図

北側溝 S D 02022 幅約3m、深さ約0.3mを測る東西方向の溝である。この溝も中世段階に削平を受けているため残りが悪く、部分的に途切れる部分も存在する。

南側溝 S D 02109 A 幅約2.7m、深さ約0.2mを測る東西方向の溝である。この溝も中世段階に削平を受けているため残りが悪い。

南側溝 S D 02109 B 幅約1.3m、深さ約0.25mを測る東西方向の溝である。南側溝 S D 02109 Aとは時期が異なり、溝心を南に約2mずらして再掘削されている。埋土からは土師器・須恵器のほかに綠釉陶器・灰釉陶器・黒色土器などの遺物が出土している。

### ③十町の遺構

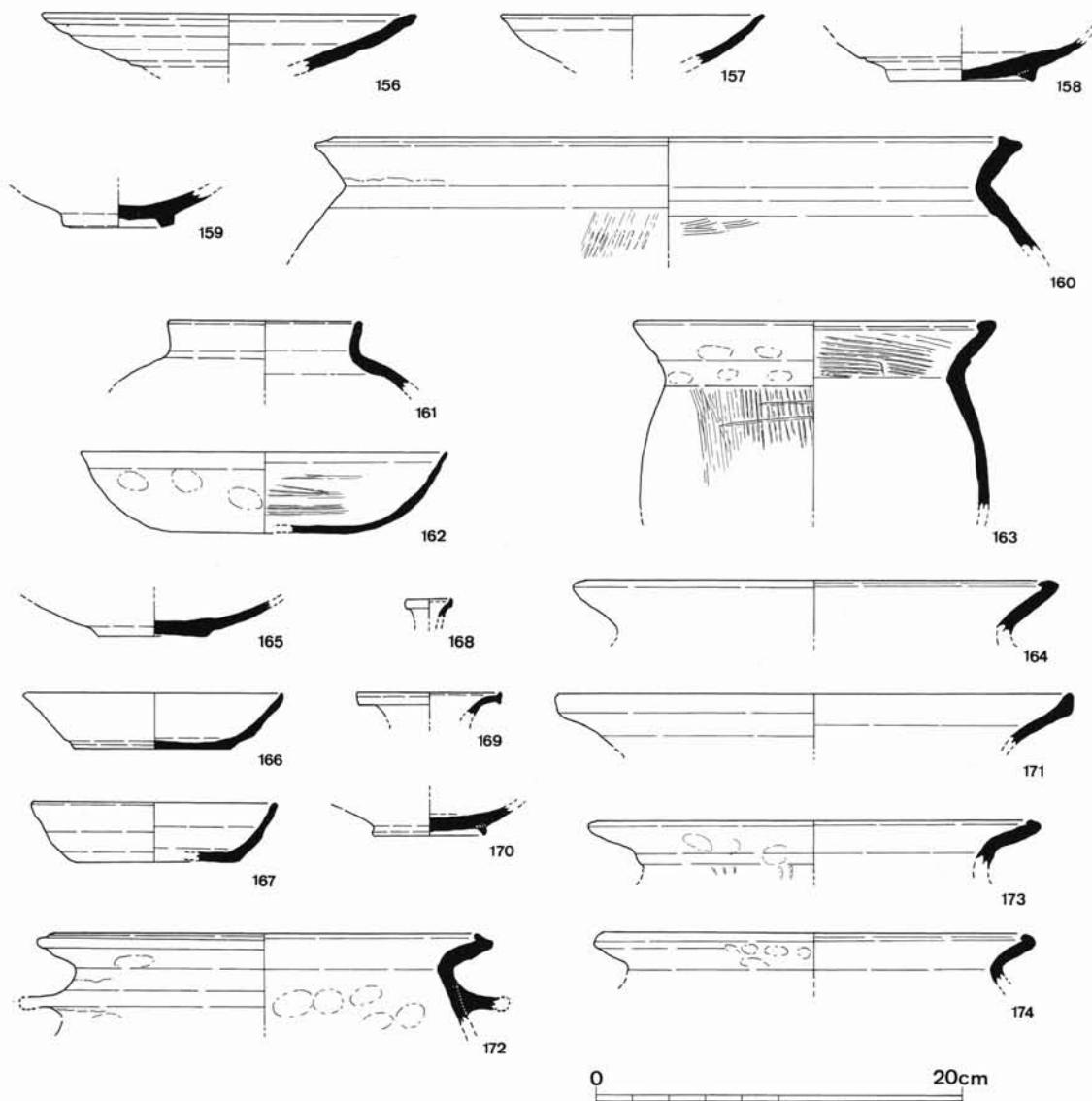
掘立柱建物跡 S B 02165 建物は2間×2間の総柱で、柱間は不揃いではあるが、東西方向の柱間が約2.5m、南北方向の柱間が約2mを測る。

掘立柱建物跡の柱穴は、S P 60・61・64・69・114・118・138・167・168で構成される(第48図)。

### (3)下層の遺構

下層においては、調査トレンチ内を斜行する溝 S D 02097や溝 S D 02080などの遺構を検出した(第46図)。

溝 S D 02080 この溝は、南東側の拡張区で検出した溝である。溝の性格は不明であるが、第5次調査で検出された苑地跡との関連も考えられる。遺物は、古墳時代末から平安時代のものが



第60図 そのほかの遺構出土遺物実測図(1)

混入していることもあり、Ⅱ期の遺構に属する可能性もある。

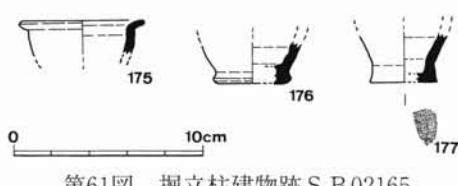
溝 S D 02097 この溝は、幅約1.5m、深さ約0.4mを測る古墳時代後期～末にかけての遺物を埋土中に含む溝である。時期区分としては、Ⅰ期に区分される遺構である。溝 S D 02097は、旧地形から推測すると北から南へ蛇行しながら流れていったと思われる。

## 5. 出土遺物

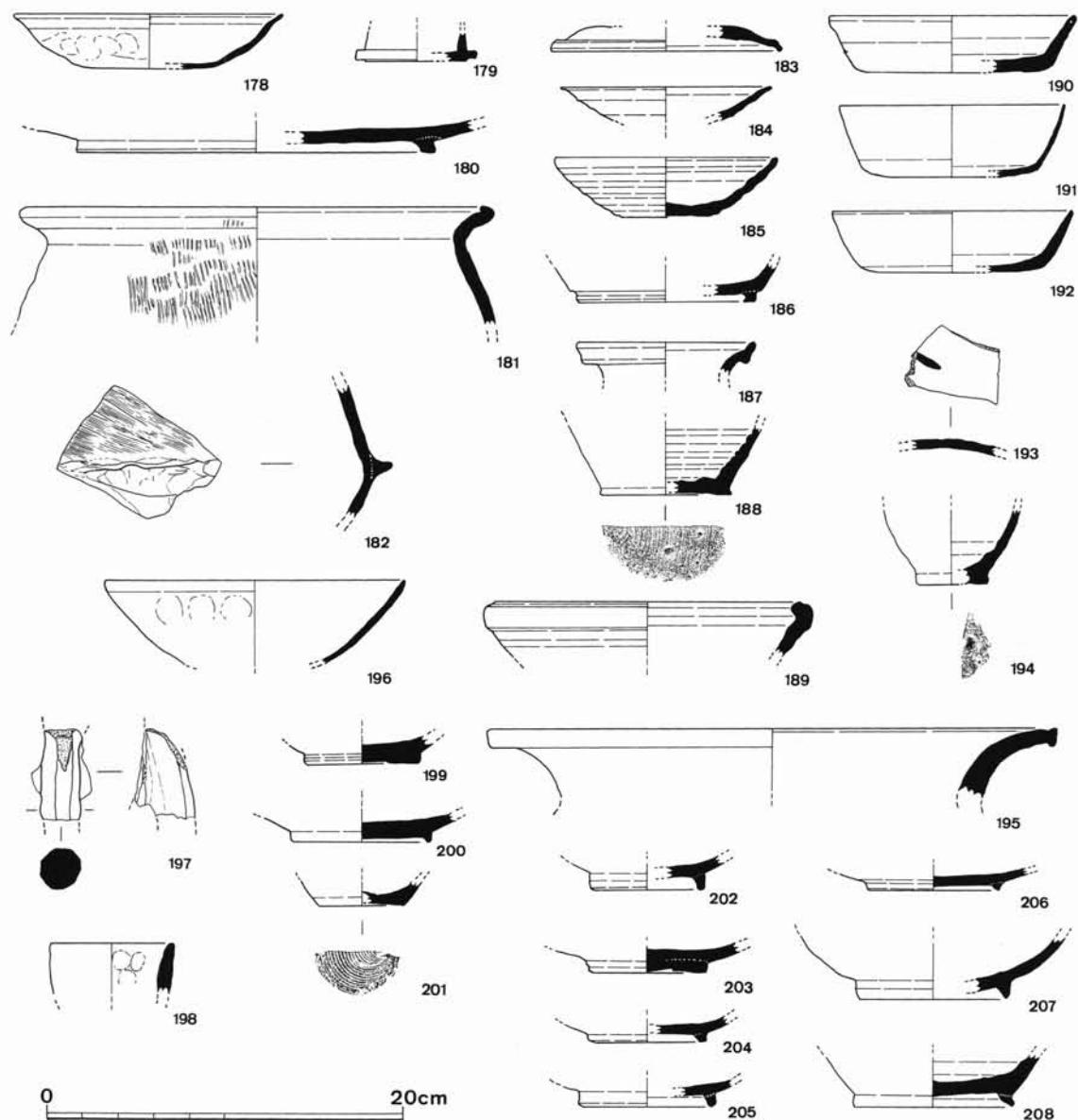
出土した遺物は、土器類・瓦類ともに破片としては多く出土したが、復原・実測可能となった

点数は少ない。出土遺物は、遺構ごとに分けて報告することにする。(第52～65図)

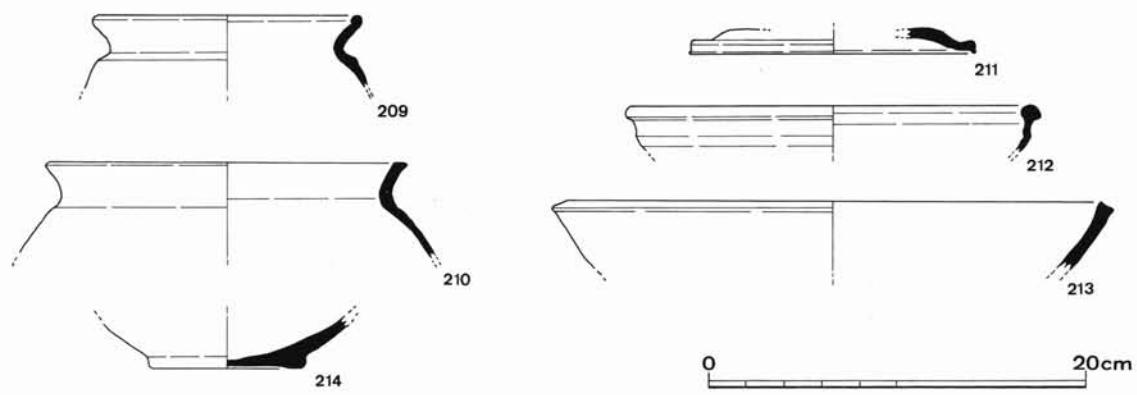
1～75は溝 S D 02018から出土した遺物である。1・2は土師器の皿である。3は土師器の椀である。4・5は土師器の小型甕の口縁部である。6は土師器の鉢の口



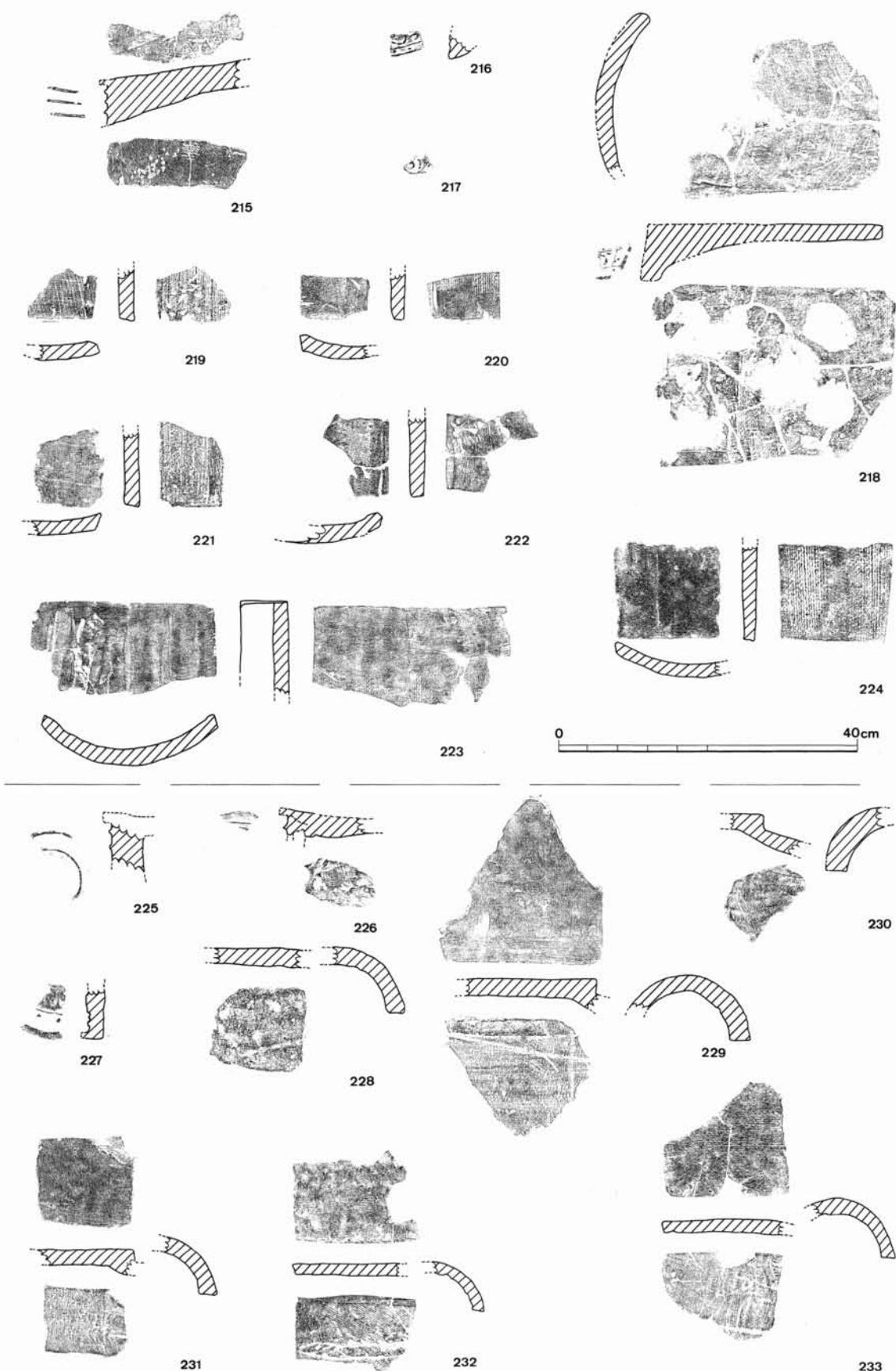
第61図 掘立柱建物跡 S B 02165  
出土遺物実測図



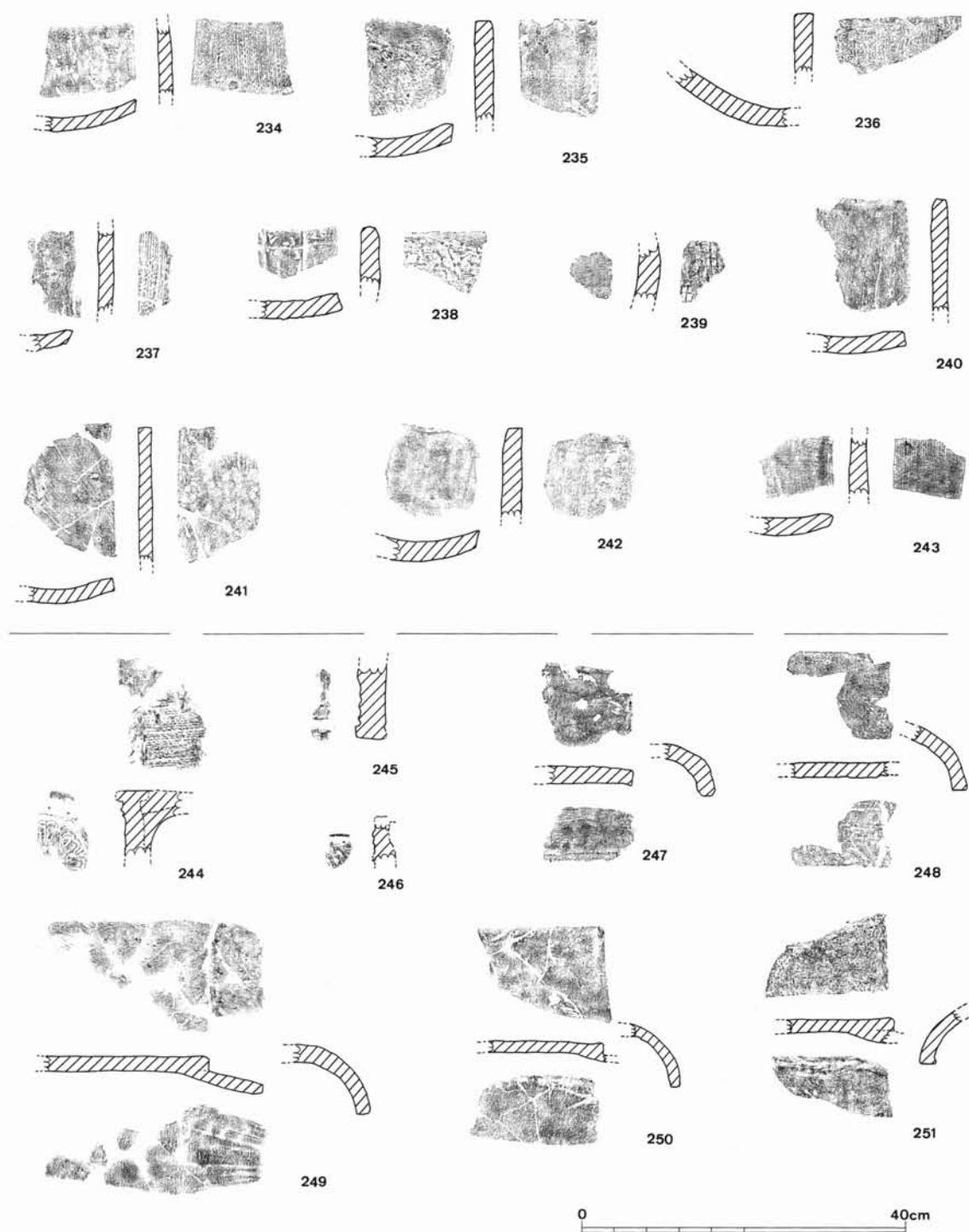
第62図 包含層出土遺物実測図



第63図 不明土坑 S K02026出土遺物実測図



第64図 築地内溝 S D02018出土遺物実測図



第65図 そのほかの遺構出土遺物実測図(2)

縁部と思われる。7~17は甕の口縁部である。8~10・11・14の内外面には、ハケメと指おさえの調整がみられる。18・19は製塙土器の口縁部である。胎土は粗く、器壁の厚いものである。20は土製品の土馬で頭部と尾の部分が出土している。21は硯の脚部と思われるが、非常に粗雑な調整が施されている。22は石製の硯であるが、最上層から出土したもので後世の混入遺物と考えられる。23~31は須恵器の杯蓋である。おそらく中世の遺物であろう。32・33は須恵器の短頸壺の蓋である。34~37は須恵器の皿である。38~55は須恵器の杯で、なかには高台を持つものもある。

56～61は須恵器の小型の壺である。特に59は口縁部の径が2.8cmしかない小型の蓋である。62は須恵器の杯の口縁部、63は須恵器の壺、64は須恵器の甕で口縁部外面に沈線と波状文で構成される文様がみられる。65～68は須恵器の大型の鉢である。69は須恵器の壺の口縁部もしくは、平瓶の口縁部と思われる。70は灰釉陶器の杯の口縁部、71は灰釉陶器の高台部、72は綠釉陶器の高台部である。71は削り出し高台である。73は須恵器の杯の底部片であるが、外面に墨書がみられる。しかしながら、小片のため文字は判読できない。74は灰釉陶器の底部片であるが、外面に「×」のヘラ記号がみられる。75は綠釉陶器の水注で、上部に注ぎ口が付く。外面全体に緑色釉が施されている。また、底部は糸切り未調整である。

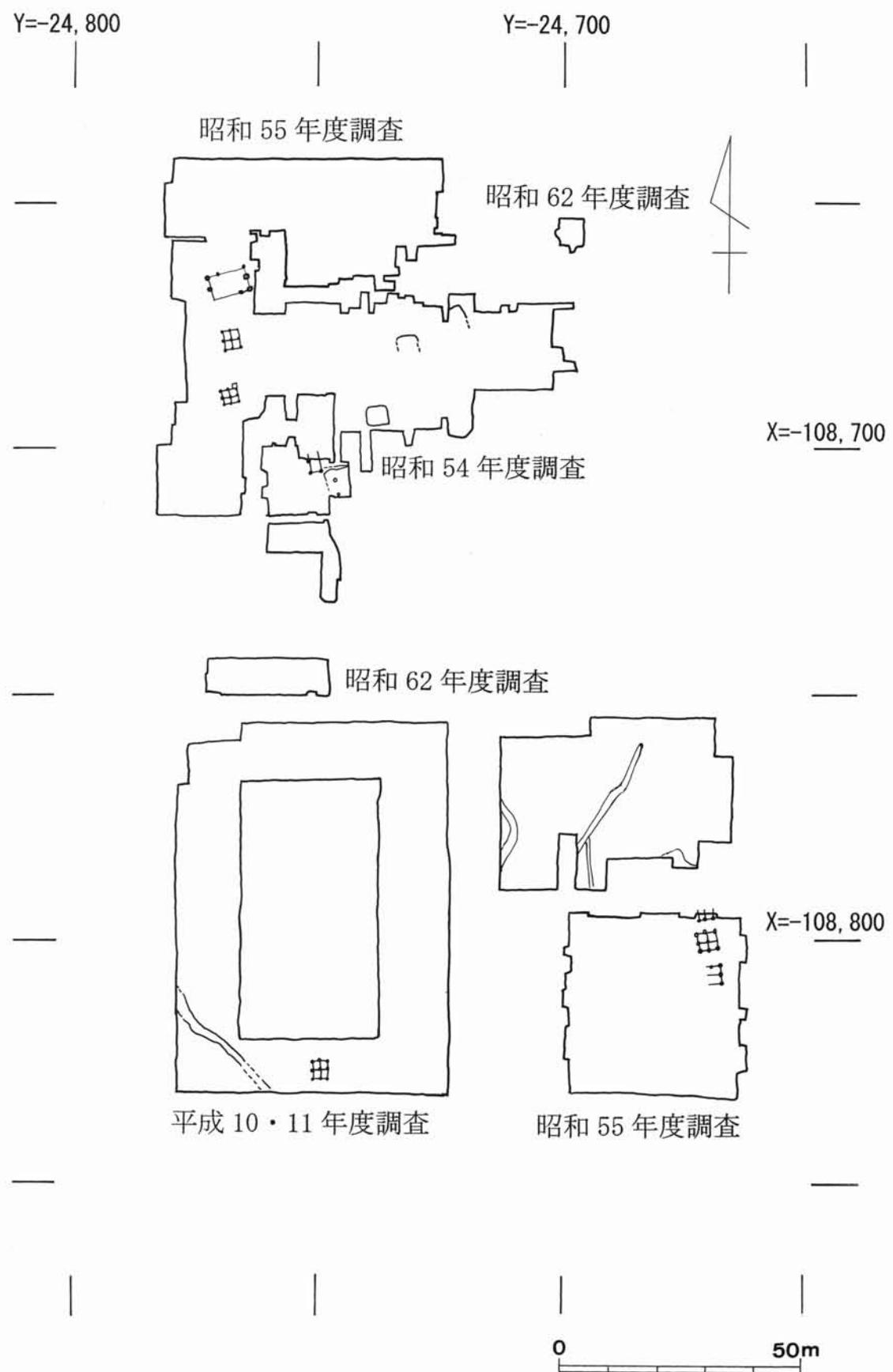
76～90は鷹司小路北側溝 S D02022から出土した遺物である。76は土師器の杯である。77は土師器の壺の口縁部である。78は製塩土器の口縁部である。こちらの胎土も粗く、器壁が厚いタイプのものである。79は綠釉陶器の高台部で、貼り付け高台である。80は須恵器の小型壺の高台部である。81は須恵器の壺の底部と思われる。82・83は須恵器の杯蓋である。84は須恵器の杯である。85は須恵器の杯の口縁部である。86は須恵器の壺の底部である。87は須恵器の杯で高台が付く。88～90は須恵器の底部で高台が付く。

91～121は鷹司小路南側溝 S D02109から出土した遺物である。91・92は土師器の皿である。93は須恵器の瓶の把手と思われるが、器種は不明である。94は土師器の高杯の脚柱部分である。95は土師器の甕の口縁部である。96は土師器の羽釜の口縁部である。97は製塩土器の口縁部である。98・99は須恵器の杯蓋である。98は、上部につまみが付くと思われる。100～102は須恵器の杯の口縁部である。103は須恵器の杯の底部で、高台が付く。104は須恵器の鉢の口縁部である。105は須恵器の甕の底部と思われる。外面にタタキ痕、内面には同心円の当て具痕がみられる。106～108は須恵器の杯の高台部で、糸切り高台である。109～114は綠釉陶器の高台部分である。111の内面にはヘラ記号と思われる沈線がみられるが、残っている部分が少なく記号は判別できない。115～117は灰釉陶器の高台部分である。116は中世溝 S D02031の掘削時に出土したが、遺物の時期から下層のものと判断した。118～120は綠釉陶器の口縁部である。121は無釉陶器の皿である。灰釉陶器と綠釉陶器のなかには、近江や猿投の特徴をもつものもみられる。

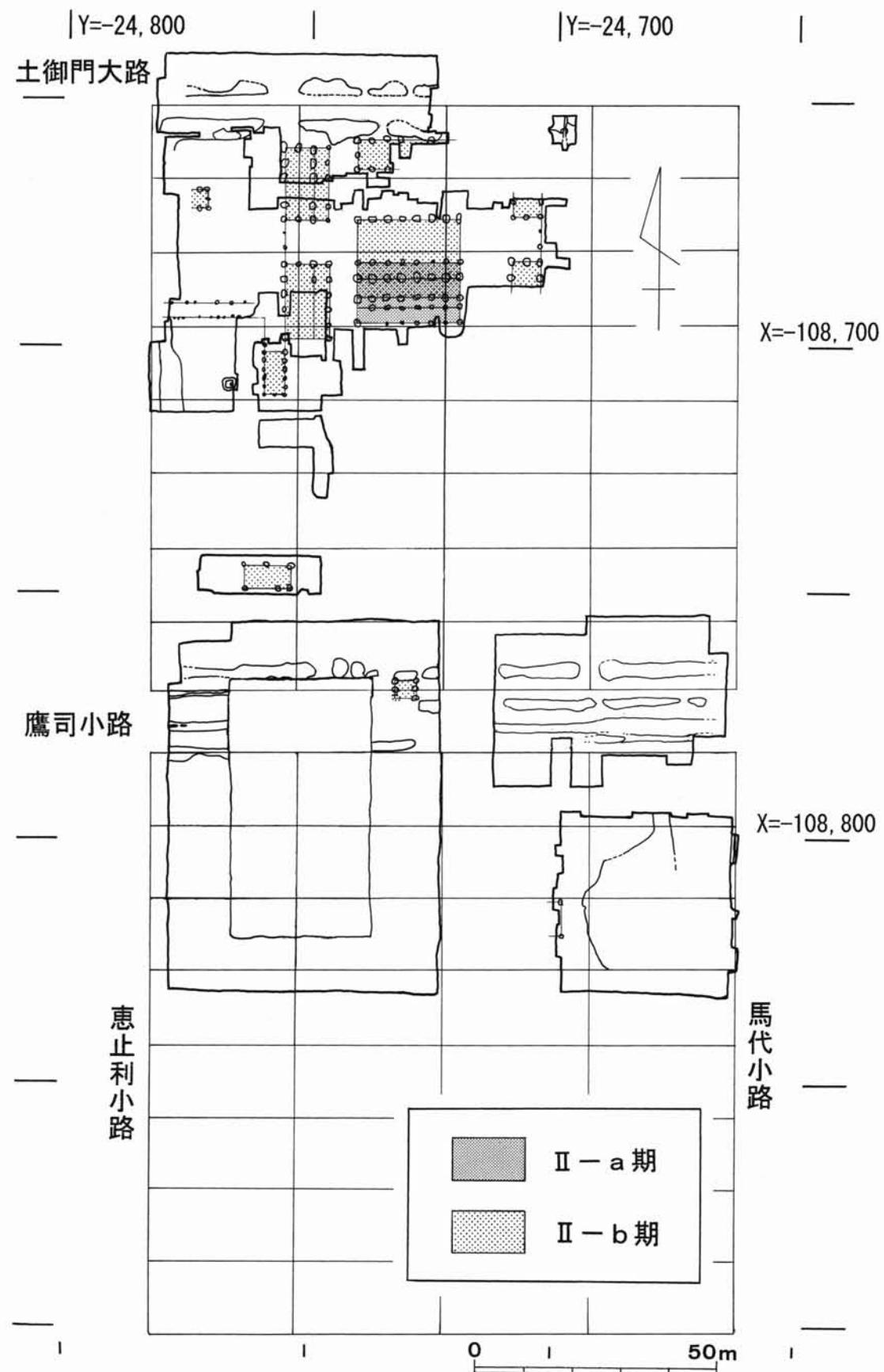
122～126は溝 S D02090から出土した遺物である。この溝は、溝 S D02109が埋没したあとに掘削された溝である。122は須恵器の杯蓋である。123は須恵器の底部片である。124は綠釉陶器の皿である。125は灰釉陶器の皿の口縁部である。126は灰釉陶器の碗である。

127～137は溝 S D02097から出土した遺物である。この溝は、古墳時代後期～末にかけての時期の遺構と思われるが、埋土上層には平安時代の遺物も若干混入している。127・128は土師器の高杯の脚部である。129・130は土師器の甕の口縁部である。131は土師器の皿で、内面に暗文がみられる。132・133は須恵器の甕の把手である。134は須恵器の平瓶で把手が付かないタイプである。135は須恵器の杯で、高台が付く。136は須恵器の鉢と思われるが、口縁部が欠損している。137は灰釉陶器の高台部である。

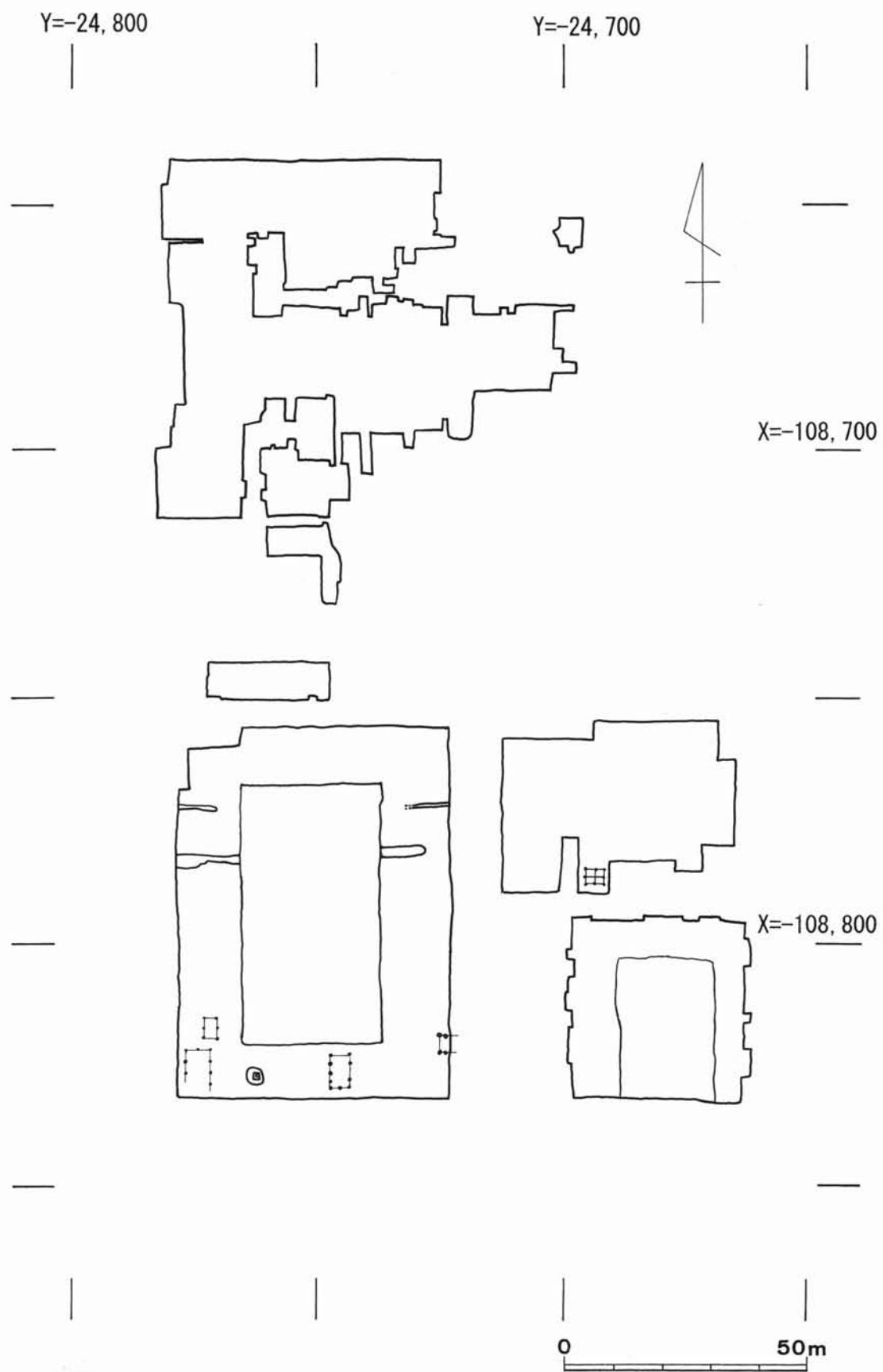
138～155は土坑 S K02127から出土した遺物である。138は土師器の皿で、外面に指押さえ痕が



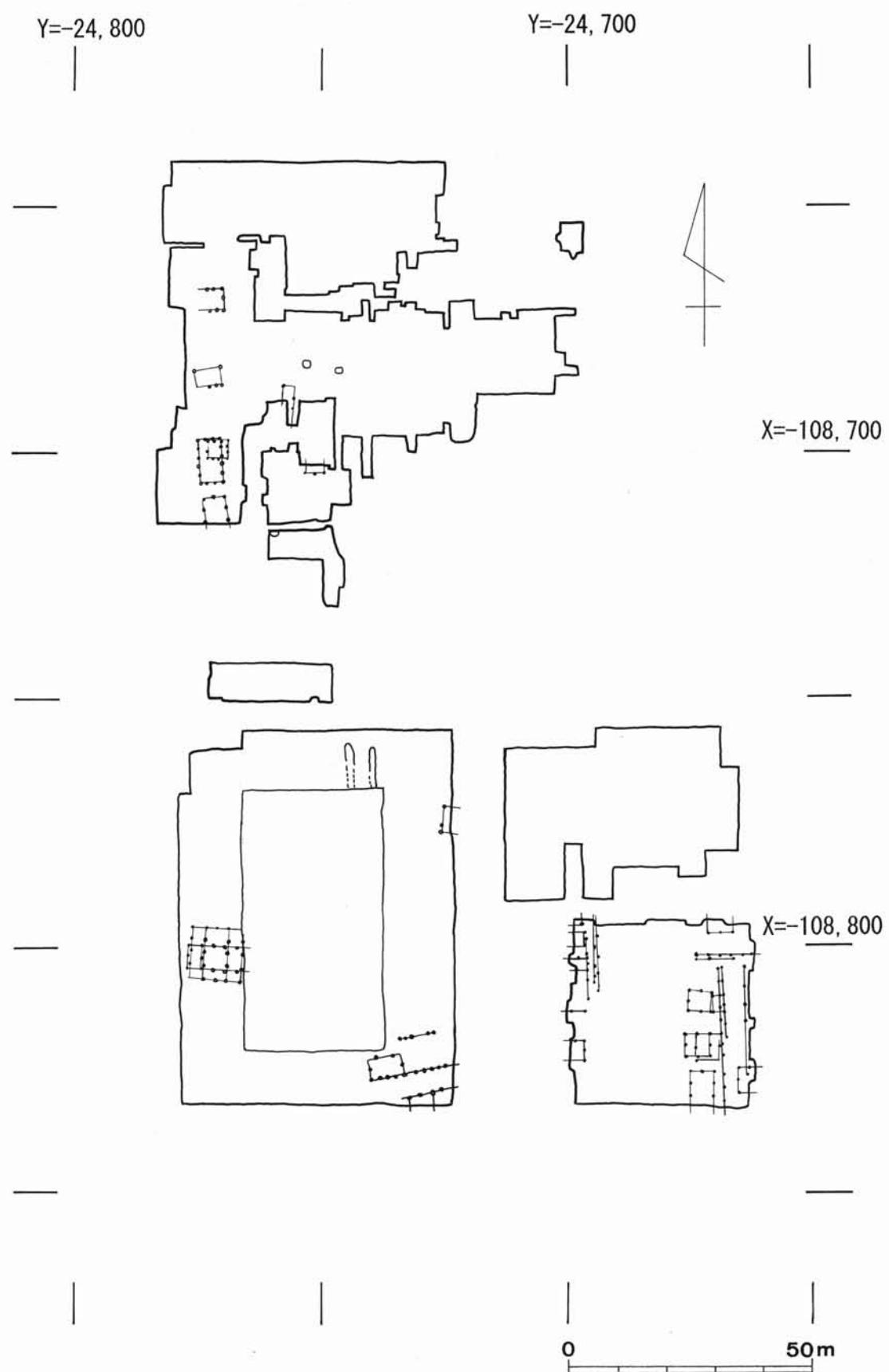
第66図 九・十町Ⅰ期の遺構



第67図 九・十町II-a・b期の遺構



第68図 九・十町II-c期の遺構



第69図 九・十町Ⅲ期の遺構

ある。139～141は土師器の甕の口縁部である。142は須恵器の杯の口縁部である。143は須恵器の杯の底部である。145は須恵器の壺の高台部分である。146は須恵器の壺の底部である。147・148は須恵器の杯で、底部に高台が付く。149は須恵器の鉢の口縁部である。150は黒色土器の皿で、高台が付く。内面底部にミガキの調整がみられる。151は黒色土器の椀で、内面にミガキの調整が見られる。152は製塙土器で、胎土が粗く器壁の厚いタイプのものである。153は緑釉陶器の杯の底部である。154は緑釉陶器の皿である。155は灰釉陶器の皿である。内面のみ緑色の自然釉が付着している。

156～174は上記の遺構以外から出土した遺物である。156は中世溝 S D 02025から出土した古瀬戸と思われる陶器の皿の口縁部である。157は中世溝 S D 02029から出土した灰釉陶器の皿の口縁部である。158は中世溝 S D 02031から出土した緑釉陶器の皿の口縁部である。159は中世溝 S D 02145から出土した中国製の白磁の底部である。160は中世溝 S D 02077から出土した須恵器の甕の口縁部である。161は溝 S D 02096から出土した須恵器の短頸壺の口縁部である。162は溝 S D 02096から出土した黒色土器の椀で、内面に暗文がみられる。外面にはユビオサエ痕がみられる。

163は下層遺構と思われる溝 S D 02080から出土した土師器の甕である。164も溝 S D 02080から出土した土師器の甕の口縁部である。165は小穴(ピット) S P 02046から出土した緑釉陶器の皿の底部である。166も小穴 S P 02046から出土した須恵器の杯である。167は小穴 S P 02065から出土した須恵器の杯である。168・169は小穴 S P 02068小型の壺の口縁部である。170は小穴 S P 02113から出土した灰釉陶器の皿の底部である。171は小穴 S P 02110から出土した土師器の鍋の口縁部と思われる。172は小穴 S P 02113から出土した土師質の羽釜である。173は小穴 S P 02115から出土した土師器の甕の口縁部である。174は小穴 S P 02150から出土した土師器の甕の口縁部である。

175～177は、掘立柱建物跡 S B 02165を構成する柱穴から出土した遺物である。175は柱穴 S P 02060から出土した土師器の小型の鉢と思われる。176と177は底部は異なるが、小型の壺の底部である。177の底部は糸切りである。

178～208は遺構面検出上層に堆積していた遺物包含層から出土した遺物である。178は土師器の皿である。179は土師器であるが、器種は不明である。蓋もしくは茶托のようなものと思われる。180は土師器の大型の皿の底部である。181は土師器の甕の口縁部である。182は土師器の鍋か甕の把手である。183は須恵器の杯蓋である。184は須恵器の皿である。185は須恵器の椀である。186は須恵器の杯の底部で高台が付く。187は須恵器の壺の口縁部である。188は須恵器の壺の底部である。189は須恵器の鉢の口縁部である。190～192は須恵器の杯である。193は須恵器の破片であるが器種は不明である。また、外面には墨書がみられるが、文字は判読できない。194は須恵器の壺の高台部分である。195は須恵器の大型の甕の口縁部である。196は黒色土器の椀である。197は瓦器の鼎である。脚の付け根部分が出土している。198は製塙土器である。199・200は緑釉陶器の皿の底部である。両方ともに削り出し高台であるが、形状が異なっている。201は灰釉陶器の壺の底部と思われる。202～206は灰釉陶器の皿の底部である。207は灰釉陶器の椀の

底部である。208は灰釉陶器の壺の底部で、高台が付く。

209～214は不明土坑S X 02026から出土した遺物である。209・210は土師器の甕の口縁部である。211は須恵器の杯蓋である。212・213は須恵器の鉢の口縁部である。214は綠釉陶器の底部である。

215～251は、今回出土した瓦類の一部である。大半は小片で磨滅が著しく図化できるものは少なかった。215～224は築地内溝S D 02018から出土した軒平瓦と平瓦である。215は重弧文の瓦当面をもつ軒平瓦である。難波宮6574CまたはD形式に属するものと思われる。216・217は唐草文を配する軒平瓦であるが、小片であるため形式は不明である。218は、ほぼ完形に復原できた軒平瓦であるが、瓦当面は重弧文であるが、ごく一部しか残っていない。219～224は、凹面には布目痕跡、凸面には縄目のタタキが残る平瓦である。

225～233は築地内溝S D 02018から出土した軒丸瓦と丸瓦である。225・226は重圈文の瓦当面をもつ難波宮の軒丸瓦である。摩滅が著しく小片のため形式は不明である。227は軒丸瓦の瓦当面の一部であるが、摩滅が著しく形式は不明である。228～233は凸面には縄目のタタキ、凹面には布目痕跡が残る平瓦である。

234～243はそのほかの遺構から出土した軒平瓦と平瓦である。234は小穴S P 02046から出土した平瓦である。235は包含層から出土した平瓦である。236は溝S D 02090から出土した平瓦である。237は土坑S K 02127から出土した平瓦である。238・239は、土坑S K 02127から出土した平瓦であるが、凹面に布目痕跡、凸面には斜格子文のタタキが残る。240は溝S D 02113から出土した平瓦である。241～243は包含層から出土した平瓦である。

244～251は、そのほかの遺構から出土した軒丸瓦と丸瓦である。244は磨滅が著しいが、複弁八葉蓮華文と思われる軒丸瓦である。245は鷹司小路の南側溝S D 02109から出土した重圈文の瓦当面をもつ軒丸瓦である。246は鷹司小路の南側溝S D 02109から出土した軒丸瓦であるが、文様および形式は不明である。247は鷹司小路の南側溝S D 02109から出土した丸瓦である。248～251は包含層から出土した丸瓦である。

今回の調査での瓦類の出土量は、土器類に比べるとごく少量で、小片がほとんどであった。九町の邸宅の調査においても、瓦類の出土量は少なく、主要な建物群には瓦を葺いていなかった可能性があることが指摘されている。

## 6. まとめ

今回の調査によって、以下のような成果が得られた(第66～69図)。まず、第8・9次調査に検出した邸宅に付随する南門(門跡S B 99014)より東側で築地の延長部分を検出した。築地自体は残っていなかったが、そのほかの邸宅に関連する築地の内側溝S D 02018を検出した。溝からは多くの土器類・瓦類が出土した。

九町域では建物跡や遺構は検出できず、遺構自体も希薄であった。このことから、邸宅の主要な建物などは北側半分に集中していたことが考えられる。

また、今回の調査区内では、これまで未検出である築地の南東隅部分や東側の築地や内側の溝などの遺構は検出できなかった。このことによって、さらに東側に築地や内側の溝が、現在の一般道である馬代通りの位置に当たることが推測できる。

鷹司小路については、第8・9次調査時でも確認しているが、さらに検討されるべき資料が得られた。鷹司小路の北側溝はほぼ想定ラインで検出したが、南側溝は条坊復原ラインや文献資料などから想定される位置では検出できず、より北側へ約3mの位置で南側溝SD02109を検出した。しかし、削平や後世の溝によって残りはよくなかった。このことから、延喜式「京程」には、鷹司小路の両側溝の心々距離が2.6丈(約7.8m)と記載されているが、今回検出した両側溝の心々距離は約5mであり、鷹司小路の路面幅が狭かった可能性がでてきた。しかし、検出した鷹司小路の距離もほんの一部であり今後も検討が必要である。

また、中世段階で道路としての利用はなくなり、耕作地となっていたことも確認できた。

十町域では、掘立柱建物跡SD02165を検出したが、そのほかの遺構は確認できなかった。今後、十町の土地利用についても考えていく必要があろう。下層では、古墳時代の斜行する溝SD02097などの下層遺構を検出すことができた。

今回の調査では、九町域の邸宅遺構に関連する遺構は築地の内側溝SD02018のみであり新たな建物などの発見には至らなかった。また、邸宅の主や邸宅の性格・役割などを知る資料も得られなかった。

しかしながら、第8・9次調査と今回の調査によって、邸宅の南側には建物などの施設は配置されていなかったことが明確となり、今後の邸宅の建物配置を考えるうえで一つの検討資料を得ることができた。

今回の調査で得られたこれらの成果は、今後の邸宅研究の貴重な資料となった。

(村田和弘)

注1 平良泰久ほか「平安京跡(右京一条三坊九・十町)昭和55年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報1981-1』京都府教育委員会) 1981

注2 村田和弘「平安京跡右京一条三坊九・十町(第8・9次)」(『京都府遺跡調査概報』第92冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000

注3 調査補助員 穂積優子・村上奈弥・尾上忍・渡辺咲子・山本茜・山口由希子・山内彩子・金原寿江・竹井千実・石橋達郎・長沼暉

整理員 清水あけみ・荻野富紗子・田中美恵子・内藤チエ・久米政代・中島恵美子・山中道代・長尾美恵子・長谷川マチ子

注4 注2の報告でこれまでの調査を時期別に区分したものを基準としている。

注5 辻純一「平安京の条坊復原」(『京都府埋蔵文化財情報』第27号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988

辻純一「条坊制とその復原」(『平安京提要』 (財)古代學協會・古代学研究所) 1994

#### 参考文献

平良泰久・石井清司ほか「平安京跡(右京一条三坊九町)昭和55年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査

概報1980-3』 京都府教育委員会) 1980

平良泰久・伊野近富ほか「平安京跡(右京一条三坊九・十町)昭和55年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報1981-1』 京都府教育委員会) 1981

山口博「平安京跡右京一条三坊九町昭和59年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第16冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995

石井清司「平安京跡右京一条三坊九町(第7次)発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第28冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988

村田和弘「平安京跡右京一条三坊九・十町(第8・9次)」(『京都府遺跡調査概報』第92冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000

村田和弘「平安時代前期の邸宅遺構—平安京跡右京一条三坊九町の邸宅から—」(『京都府埋蔵文化財論集第4冊—創立二十周年記念誌—』 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001

太田静六「平安初期における貴族の邸宅」(『寝殿造の研究』 吉川弘文館) 1987

角田文衛『平安京提要』((財)古代學協會・古代学研究所編集 角川書店) 1994

独立法人奈良文化財研究所編『古代の官衙遺跡・I 遺構編』 2003

中尾芳治「重圈文軒瓦の製作年代と系譜についての覚書」(『難波宮の研究』 吉川弘文館) 1995

平安博物館編『平安京古瓦図録 図録・解説篇』 1977

## 6. 長岡京跡右京第787次(7ANNM-4地区)・ 友岡遺跡発掘調査概要

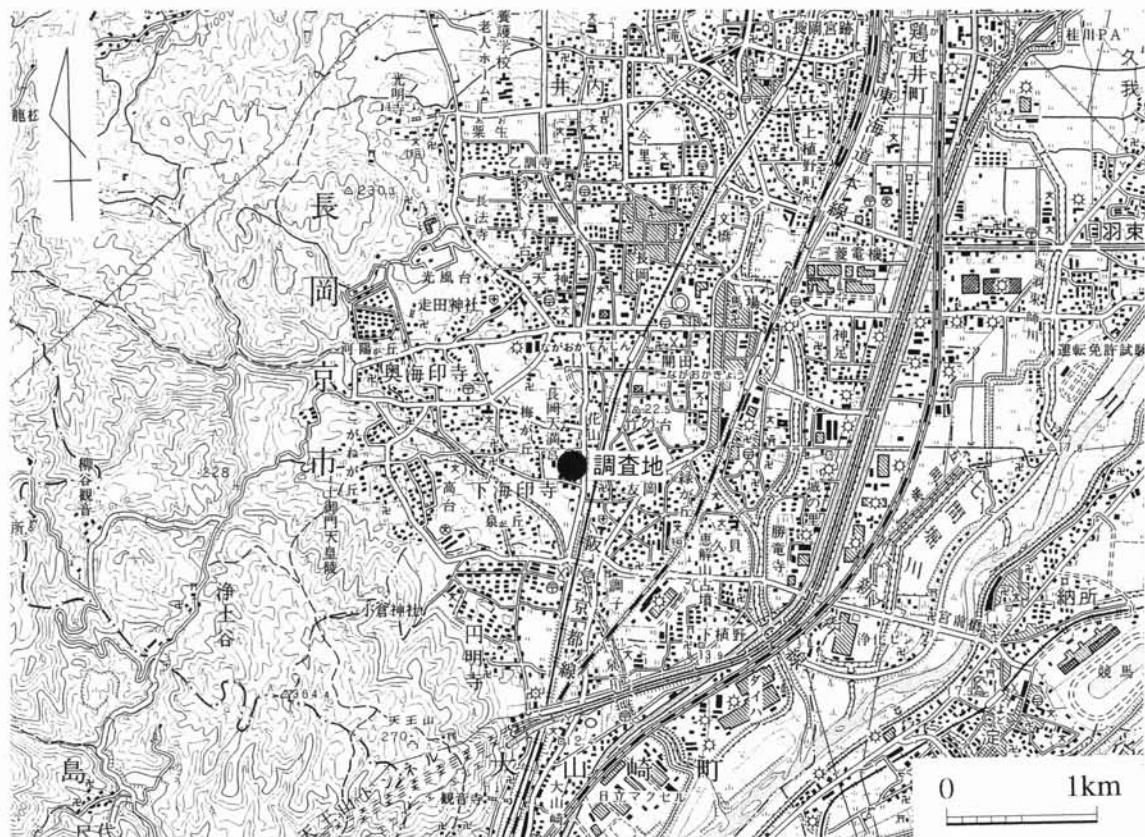
### 1. はじめに

今回の調査は、石見府道下海印寺広域幹線アクセス街路整備事業に伴う事前調査であり、長岡京市梅ヶ丘一丁目ほかに所在する。

当調査地は長岡京跡の条坊復原によると、長岡京右京七条三坊九町・六条大路・西三坊坊間小路(新呼称では、長岡京右京七条三坊十一町・六条条間大路・西三坊坊間小路)にあたり、現在の大山崎大枝線が、長岡京の西三条坊間小路の痕跡ではないかと推定されている。

長岡京以前には縄文時代の船元式の土器が多量に出土した友岡遺跡の北縁部に位置する。また調査地の南方には、7世紀初めの素弁蓮華文の軒丸瓦、8世紀の複弁蓮華文軒丸瓦などが出土した鞆岡廃寺<sup>(注1)</sup>がある。

当調査地周辺の主な調査成果として、右京第70次調査<sup>(注2)</sup>では、古墳時代、6世紀末～7世紀前半の竪穴式住居跡7基と土坑1基・ピット群が検出されている。また、鎌倉時代の掘立柱建物跡6



第70図 調査地位置図(国土地理院1/50,000京都西南部)

棟・土坑3基・ピット群などが検出されており、掘立柱建物跡群は、文献史料にみられる摂関家の荘園であった鞆岡荘の荘官クラスの邸宅跡と位置づけられている。なお、古墳時代後期の竪穴式住居跡は、右京第70次調査地の北方の右京第324次調査でも確認されている。<sup>(注3)</sup>

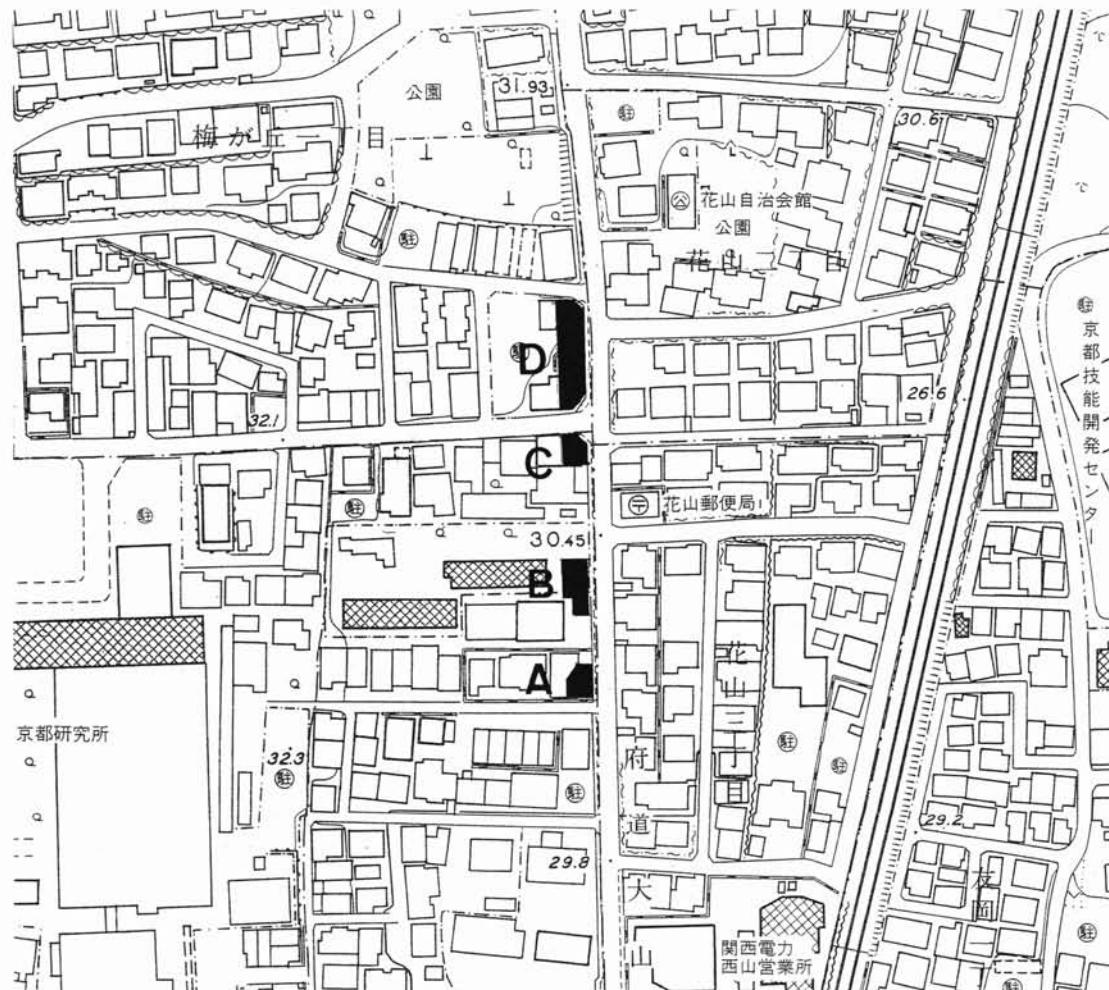
右京第118次調査では長岡京期の遺構は検出されず、中世の溝・土坑・ピット群が検出されており、特に地山直上の極小礫含淡黒茶褐色土から出土した青白磁の合子の身・蓋など、鞆岡荘との関連が指摘されている。また、右京第661次調査では、南北2間×東西2間の南北棟の鎌倉時代の掘立柱建物跡のほか、長岡京期の東西溝や平安時代頃の流路状遺構などが検出されている。<sup>(注4)</sup> <sup>(注5)</sup>

このように、調査地周辺では、長岡京期の遺構とともに縄文時代～中世に至る各時代の遺構・遺物が検出されており、今回の調査でも長岡京期の遺構や、縄文時代～中世に至る遺構・遺物の検出が予想された。

現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第3係長石井清司、同調査第3係専門調査員竹井治雄が担当した。

調査期間は平成15年10月20日～12月19日までで、調査面積は約500m<sup>2</sup>である。

調査にあたっては、京都府教育委員会をはじめ、長岡京市教育委員会・(財)長岡京市埋蔵文化財センターなどの関係諸機関のほか、地元自治会および地元の方々の協力を得た。



第71図 A～D調査区位置図(長岡京市都市計画図1/2,5000に加筆、転載)

なお、調査に係る費用は、全額、京都府土木建築部が負担した。

## 2. 調査の経過

調査対象地は幅約10m、総延長約140mにわたる南北方向の道路の拡幅工事に伴うものであるが、調査地の東側は府道大山崎大枝線であり、西側は民家が建ち並ぶ部分である。このため、民家から府道に通じる通路を確保するとともに、生活スペースを確保する必要から、調査対象地の全面にわたって調査することが困難であったため、調査地を四分割して、トレンチを南からA～Dトレンチと設定して順次調査を行った。

各トレンチは、現地表面から0.6mを重機による掘削を行ったのち、人力による包含層の除去、遺構検出作業を行った。各トレンチでは一部現在使用されている埋設管を確認するとともに近・現代の攪乱、旧家屋のコンクリート基礎などにより遺構の遺存状況はあまり良くなく、特にC・Dトレンチでは攪乱などにより遺構の多くが削平されていた。一方、A・Bトレンチでは攪乱などは少なく、旧状をそのままとどめていることが明らかとなった。

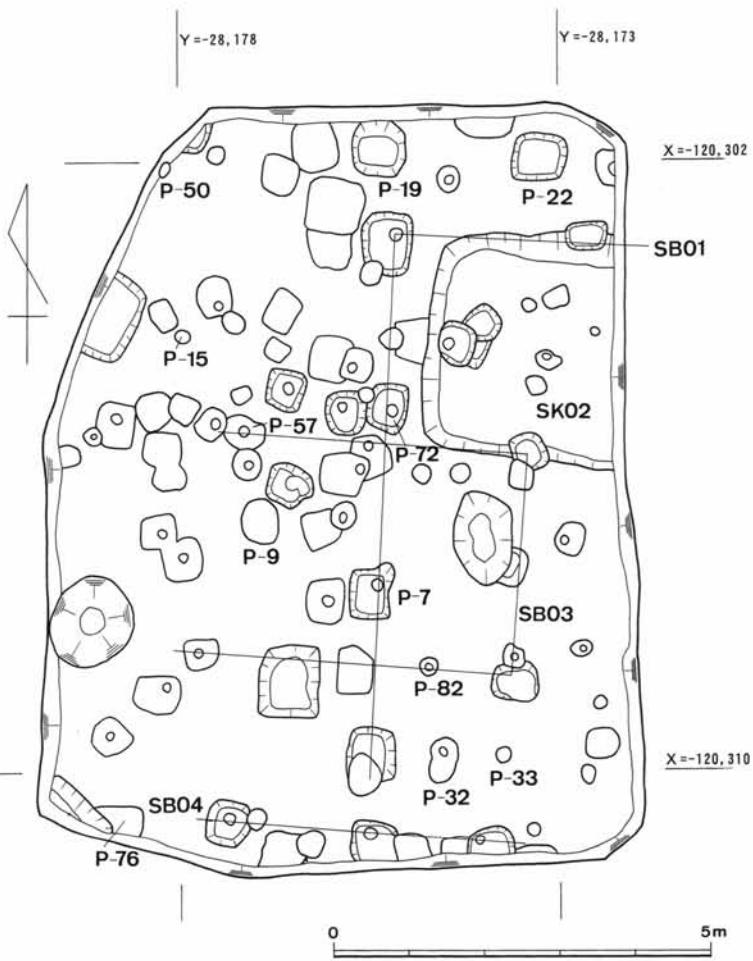
## 3. 調査概要

### a. 基本層序

調査地は西山丘陵から南西にのびる小支丘(標高30～31mの高位段丘)に位置する。現況は道路、宅地化されており、わずかに南に傾くが、ほぼフラットな面が広がる。

基本的な層序は表土(アスファルト・コンクリート)、盛土(現代)、茶灰色砂質土、茶褐色粘砂質土、黄褐色粘砂質土、礫層の順に堆積する。この層序は調査地全体に見られるが、A地区では黄褐色粘砂質土と礫層が混在する。

表土・盛土は宅地、生活道路などの造成によるもので厚さ20～40cmである。茶灰色砂質土は厚さ10～20cmで水平に堆積し、土師皿・陶磁器

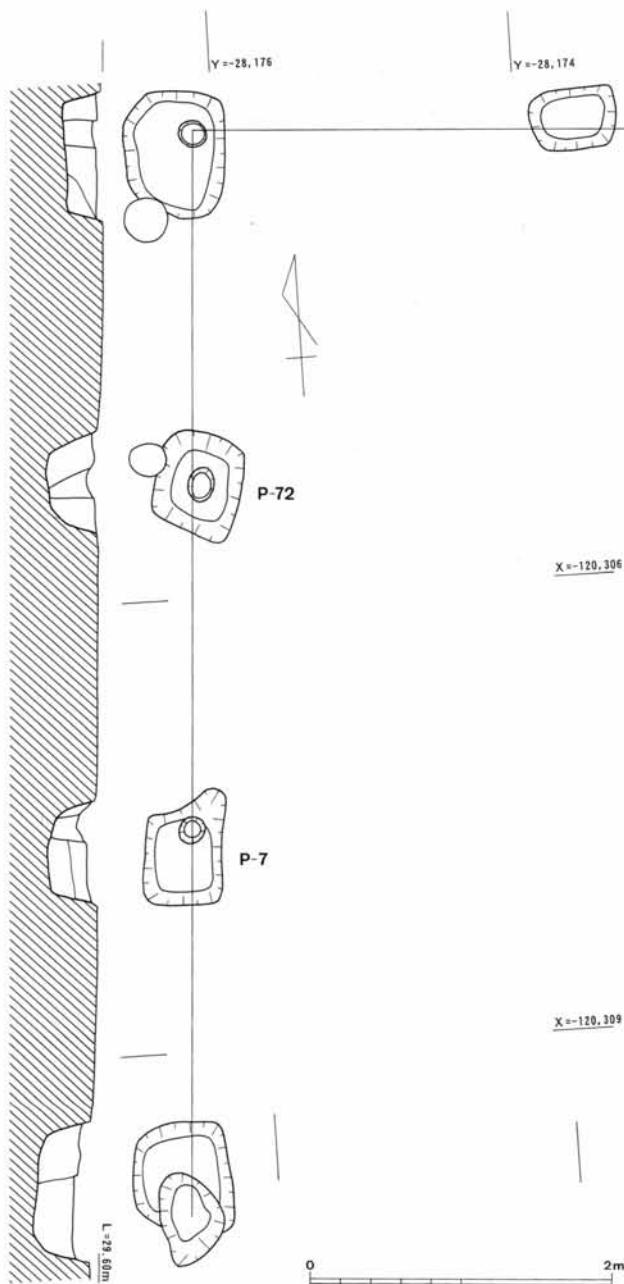


第72図 A地区遺構平面実測図

(染め付け)などの近世遺物がある。畑地・藪などであったものと思われる。茶褐色粘砂質土は厚さ10~20cmを測り、各調査区にみられるが、A・C地区では炭化物、焼土が混在し、固く締まったところもあった。これは明らかに遺構面(基盤層)として認められることから、人力による掘削調査はこの面より実施した。時期は中世に属するものである。黄褐色粘砂質土は段丘の表層であるが、砂礫の混入が見られることから二次的な堆積層と思われる。礫層は風化した円礫が大半を占めるが角礫もあり、純粹の段丘礫層ではない。遺物は確認していないが、いわゆる「地山」とは言い難い。遺構の多くは、茶褐色粘砂質土上面と黄褐色粘砂質土から検出されたものである。

### b. 検出遺構

調査地は、道路拡幅計画線内に4か所の調査区を設定した。南から順にA~D区と呼称し、各



第73図 A地区掘立柱建物跡SB 01平・断面実測図

調査区で、掘立柱建物跡・土坑・溝・柱穴(ピット)など多数検出した。しかし、いずれもが狭小なトレチのため一棟の建物跡として認定するには困難であった。

#### (1) A地区(第72図、図版第53)

調査地全域に多くの柱穴があり、重複関係が認められるものもある。

掘立柱建物跡は、掘形内出土遺物から平安~鎌倉時代のもので、掘形の重複関係などから少なくとも時期差の異なった3棟以上に復原できる。

**掘立柱建物跡SB 01(第73図、図版第54)** 調査区の東半で検出した南北3間以上×東西1間以上の南北棟である。主軸はN 3° Eである。掘形は一辺0.6mの方形を呈し、柱間寸法は南北2.10m、東西2.25mを測る。掘形内には土師器・須恵器の細片があり、ほかの遺構との重複関係から平安時代(10世紀前半)の建物と推定される。

**掘立柱建物跡SB 03** 調査地の中央で検出した東西2間以上、南北2間の建物跡である。主軸はN 4° 30' Eである。掘形は一辺0.5mの方形を呈し、柱間寸法は東西2.1m、南北1.5mを測る。時期はSB 01と前後する平安時代に属するものと

思われる。

**掘立柱建物跡 S B04** 調査地の南端で検出した東西3間以上の建物である。主軸はN5°Eである。掘形は一辺0.5mの方形を呈し、柱間寸法は東西1.8m、1.5mの不等間隔である。掘形内からは瓦器椀(第81図19)が出土した。12世紀後半である。

**土坑 S K02(第74図、図版第54)** 調査区の東北側で検出した一辺2.7m、深さ0.35mを測る方形の土坑である。断面は皿状を呈し、炭化物・焼土・泥土などが堆積しており、土師器杯・甕、須恵器杯蓋・皿・壺・平瓶などの平安時代前期の土器類が壊れた状態で出土した。出土遺物(第81図1~9)は9世紀前半が多い。この土坑の性格については、調査当初、井戸跡と思われたが今のところ判然しない。

#### (2) B地区(第75図、図版第55)

多くのピットを検出したが、建物としてまとまるものはなかった。その中で東西方向に2間以上、直線的に並ぶ掘形が確認できた。S A05の掘形は一辺0.2~0.3mの方形を呈し、柱間寸法は2.5m等間で、主軸はN11°Wである。柵列と思われる。時期については不明であるが、そのほかの多くのピットには瓦器が含まれており、ピット群と同時期の鎌倉時代のものと思われる。調査地南東隅で検出した不整形の土坑S K08は、直径約1m、深さ約0.2mを測るもので、染め付け茶椀、土師皿などが出土した。時期は近世以降である。

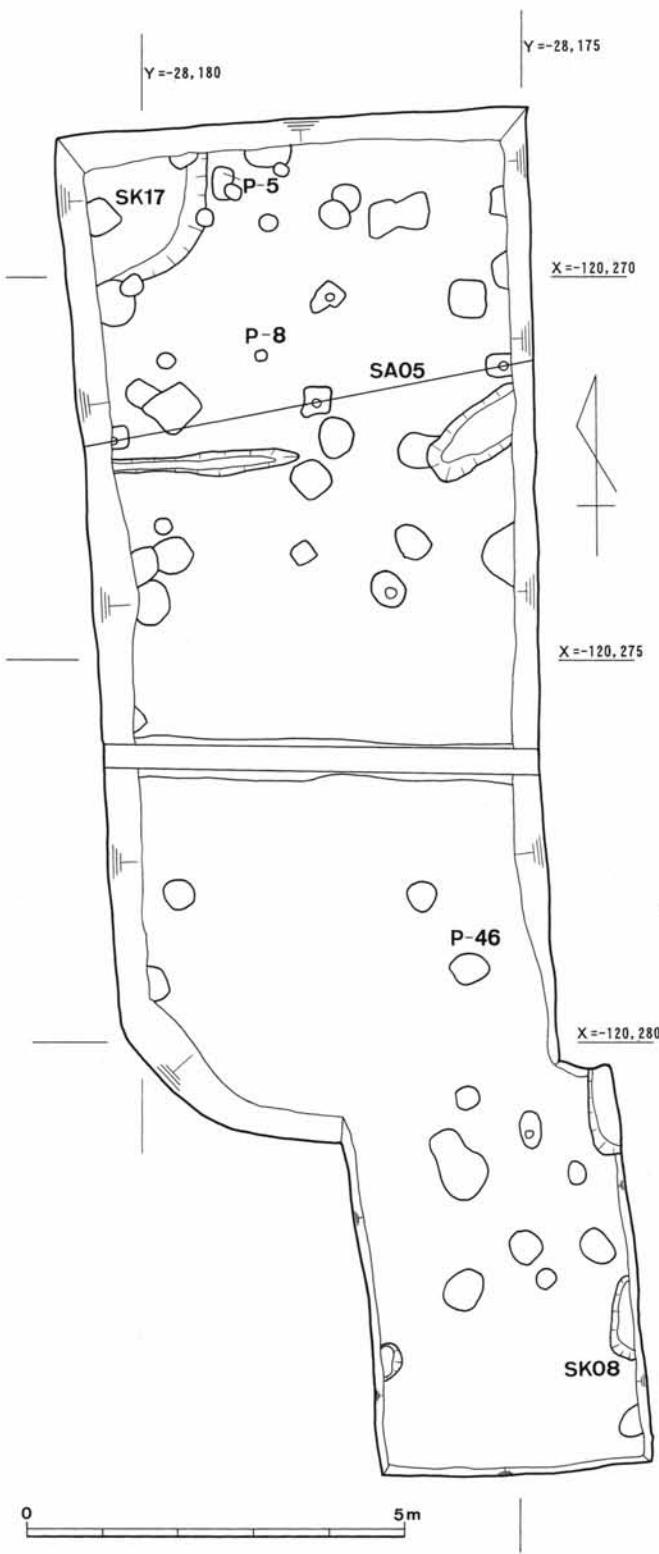
#### (3) C地区(第76図、図版第56)

C地区は、近・現代の攪乱が著しく、特に東・南半部は現代の建物の基礎等により削平されており、遺構が検出できたのは北西半部のみである。そのうち、建物としてまとまったのは掘立柱建物跡S B02のみである。

**掘立柱建物跡 S B02(第77図、図版第56)** 東西2間以上、南北2間以上の建物である。主軸はN3°Eである。掘形は一辺0.5mの方形を呈し、柱間寸法は東西1.5m・2.3mの不等間、南北1.8m等間を測る。柵列の可能性もある。時期については須恵器杯(第81図26)が掘形内(ピットP4)から出土しており、平安時代(9世紀後半)と考える。

#### (4) D地区(第78図、図版第57)

調査区南半では、柱穴・土坑・溝などが重複しており、平安~鎌倉時代の遺構が確認できた。少なくとも4時期に分かれる。新しい時期から、土坑S K04、掘立柱建物跡S B03、溝S D01、



第75図 B地区遺構平面図

褐色砂質土が堆積する。埋土には炭化物・焼土などが混在しており、多数の土器類(第81図29～34・39～41)が出土した。時期は9世紀前～後半である。性格については判然としないが、A地区の土坑SK02と土層の堆積状況および遺物の出土状況と近似する。

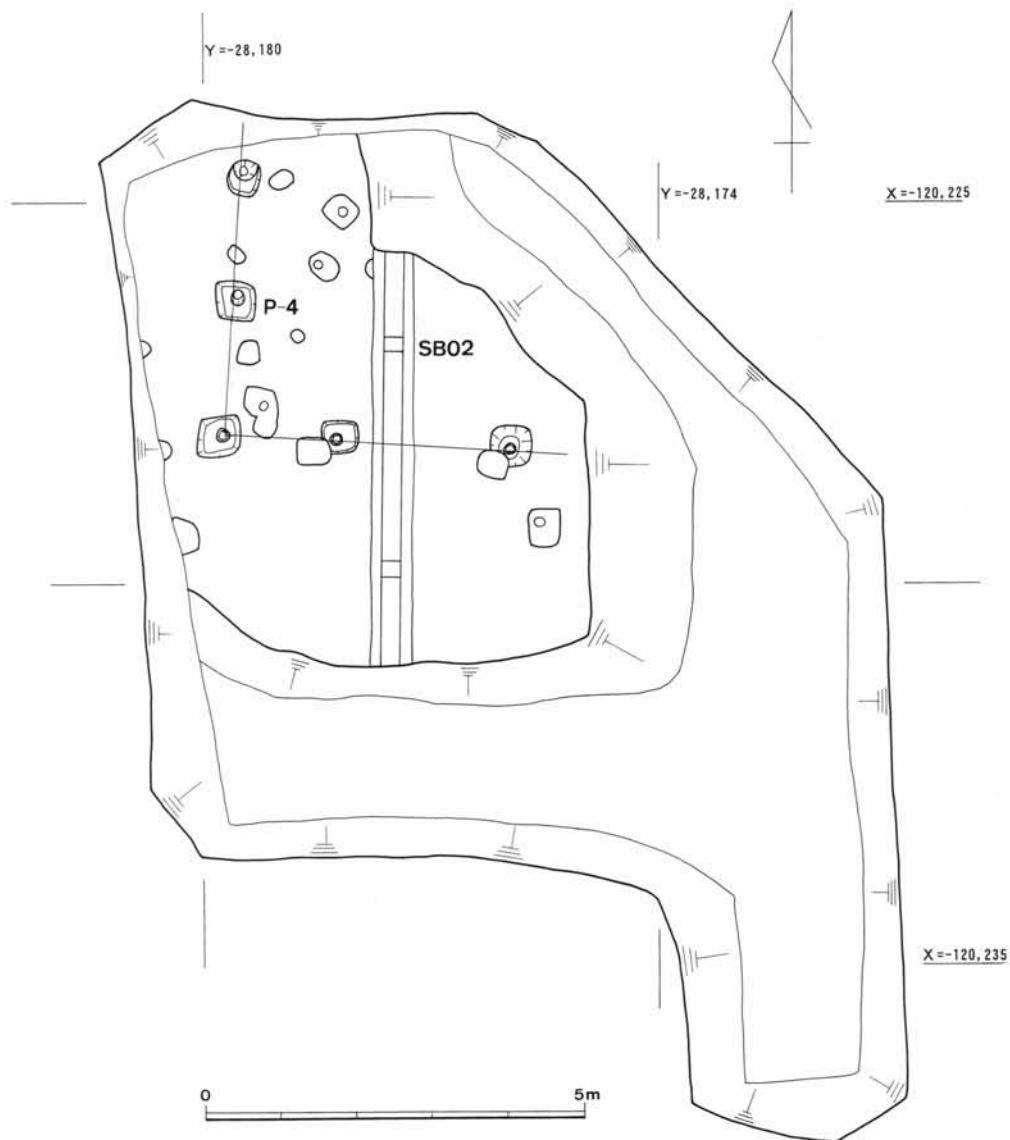
土坑SK07の順に検出した。これらの遺構の基盤層は黄褐色土と礫の混合層であり、人為的な平坦面・整地層と思われる。

**土坑SK04(第78図、図版第58)** 溝状を呈し、幅0.6m、深さ0.2mを測る。断面は皿状で、拳大の礫が堆積する。この礫の間隙から瓦器・土師器などの土器類(第81図35～38)、土馬(第81図46)などが出土した。時期については中世に属する。

**掘立柱建物跡SB03(第79図)** 東西1間以上、南北3間以上の建物である。主軸はN18°Eである。掘形は一辺0.35mの方形を呈し、柱間寸法は東西1.35m、南北1.35m・1.50mを測る。所属時期は、平安時代後期～鎌倉時代と思われる。

**溝SD01(第78図)** 調査区西側で南北に蛇行して掘り込まれたものである。幅1.0m、深さ0.4mを測る。断面は椀状を呈し、淡茶褐色砂質土が堆積する。出土遺物は極少で、土師器細片があり平安時代に属するものと思われる。

**土坑SK07(第80図、図版第58)** 西側の溝SD01に切られた土坑である。東側は現代の搅乱のため削られている。調査当初は、断面の形状から溝と思われたが、精査の結果、土坑であることが判明した。南北の長さ1.8m、深さ0.4mを測る。断面は皿状を呈し、暗茶

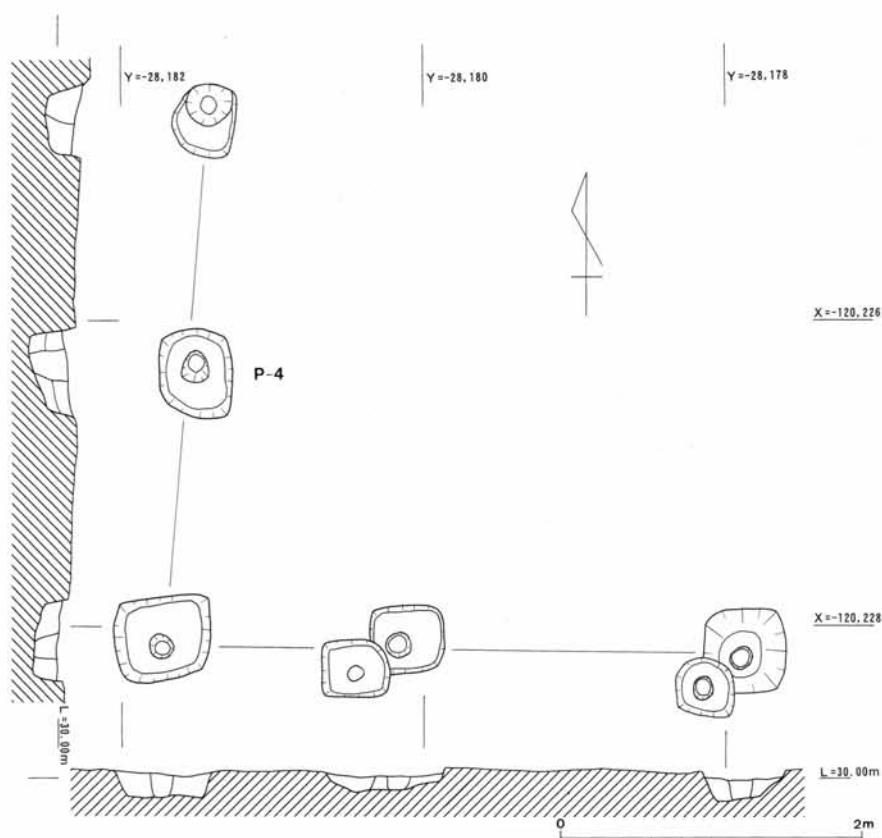


第76図 C地区遺構平面実測図

#### 4. 出土遺物

##### (1) A地区出土遺物(第81図1~19)

土坑SK01 1は須恵質の緑釉陶器皿である。口径15.8cm、器壁には薄い釉薬が施されている。2・3は土師器である。2は口径16cm、器高4.5cm、椀である。胎土は赤褐色を呈し、内面は輪花文状の暗文、口縁端部は内側に肥厚し、ていねいな仕上げである。外面は押さえの痕跡が明瞭に残る。3は口径17.6cm、器高2.1cmの皿である。胎土はやや粗く、淡茶褐色を呈する。内外面ともナデ調整、底部外面に指の圧痕がある。4~8は須恵器である。4は口径18.8cm、器高1.05cmの杯蓋である。胎土は緻密で、色調は明灰色である。5は口径15.2cmの杯身である。体部は直線的に深く立ち上がり、端部で丸くおさめる。6は平瓶の口・頸部片で、口径15.2cm、高さ7.7cmを測る。7は壺Gの底部片で、底径5.2cmである。底部外面に糸切り痕がある。8は口径9.6cmの短頸壺である。頸部は垂直に立ち上がり、端部を丸くおさめる。9は口径17.6cm、器高



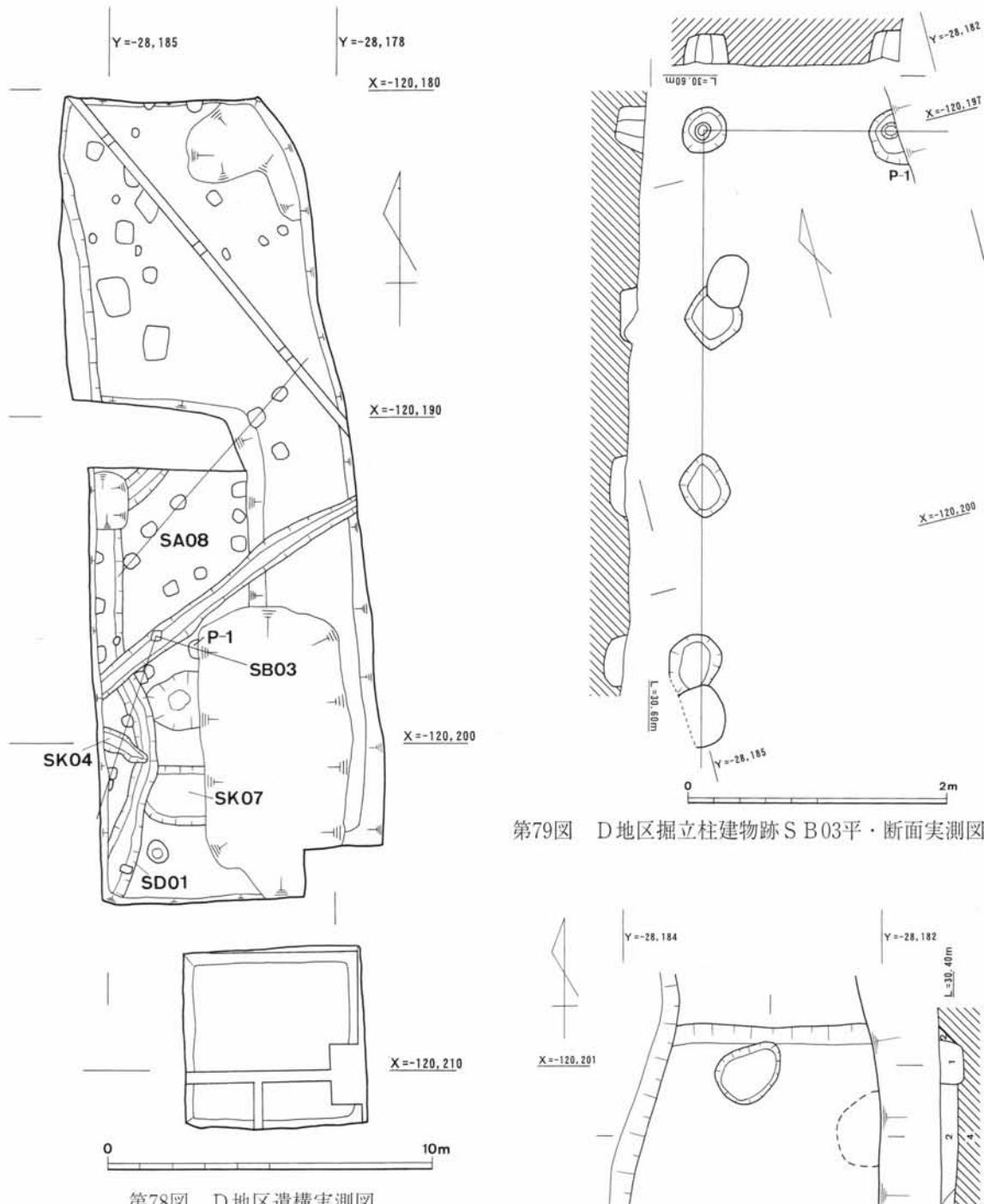
第77図 C地区掘立柱建物跡 S B 02平・断面実測図

17.8cmの土師器甕である。体部外面と口縁部内面にハケメ調整、体部外面は指押さえが残る。時期については、1～9のうち1を除いて概ね9世紀前半から後半に属し、1は10世紀初頭である。

ピット群 10～19は各ピットから出土した遺物である。10はピットP 82から出土したもので、口径15.8cm、残存器高2.6cmの無釉陶器碗である。11～13は土

師器類である。11はピットP 22から出土したもので、口径15.6cm、器高2.4cmの杯である。体部はやや内湾ぎみに立ち上がり、端部は丸くおさめる。内外面はナデ調整。12はピットP 3から出土したもので、口径23.0cm、器高3.7cmの杯である。胎土は緻密で赤色斑粒があり、赤褐色を呈する。内面は細いミガキ、外面はヘラミガキを施す。13はピットP 76から出土したもので、口径14.2cm、器高2.3cmの皿である。内外面はナデ調整。14はピットP 19から出土したもので、口径23.0cmの須恵器甕である。15はピットP 57から出土したもので、口径16.0cm、器高4.8cmを測る高台をもつ10世紀中頃の黒色土器碗である。器壁は全体に薄く、内面と口縁部外面に黒色を呈し、内面には細いミガキが緻密に施される。16はピットP 15から出土したもので、口径16.0cm、器高3.0cmの高台をもつ綠釉陶器碗である。体部は底部から低く立ち上がり、口縁部でやや屈曲ぎみに斜め上方に外反し、端部は丸くおさめる。口縁端部では、ヘラで押し当てた輪花技法がある。胎土は土師質に焼成され、淡茶褐色を呈する。器壁の表面は薄い光沢があり、生地の色の影響で黄緑色を呈する。17は綠釉陶器碗の高台である。胎土は土師質、淡白燈色を呈する。器面の釉薬にむらがある。18はピットP 32から出土したもので、口径14.4cm、器高5.2cmの12世紀後半の瓦器碗である。内面はミガキが密に施される。高台は断面逆台形を呈し、器壁は全体的に薄い。19はピットP 50から出土したもので、口径14.2cm、器高5.8cm、12世紀後半の瓦器碗である。ミガキは内面と口縁部外面に施され、底部内面の見込み部分に螺旋状の暗文がある。

## (2) B地区出土遺物(第81図20～24)

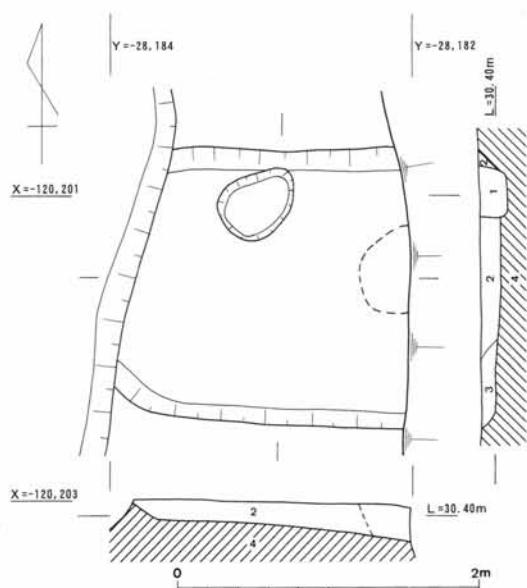


第78図 D地区遺構実測図

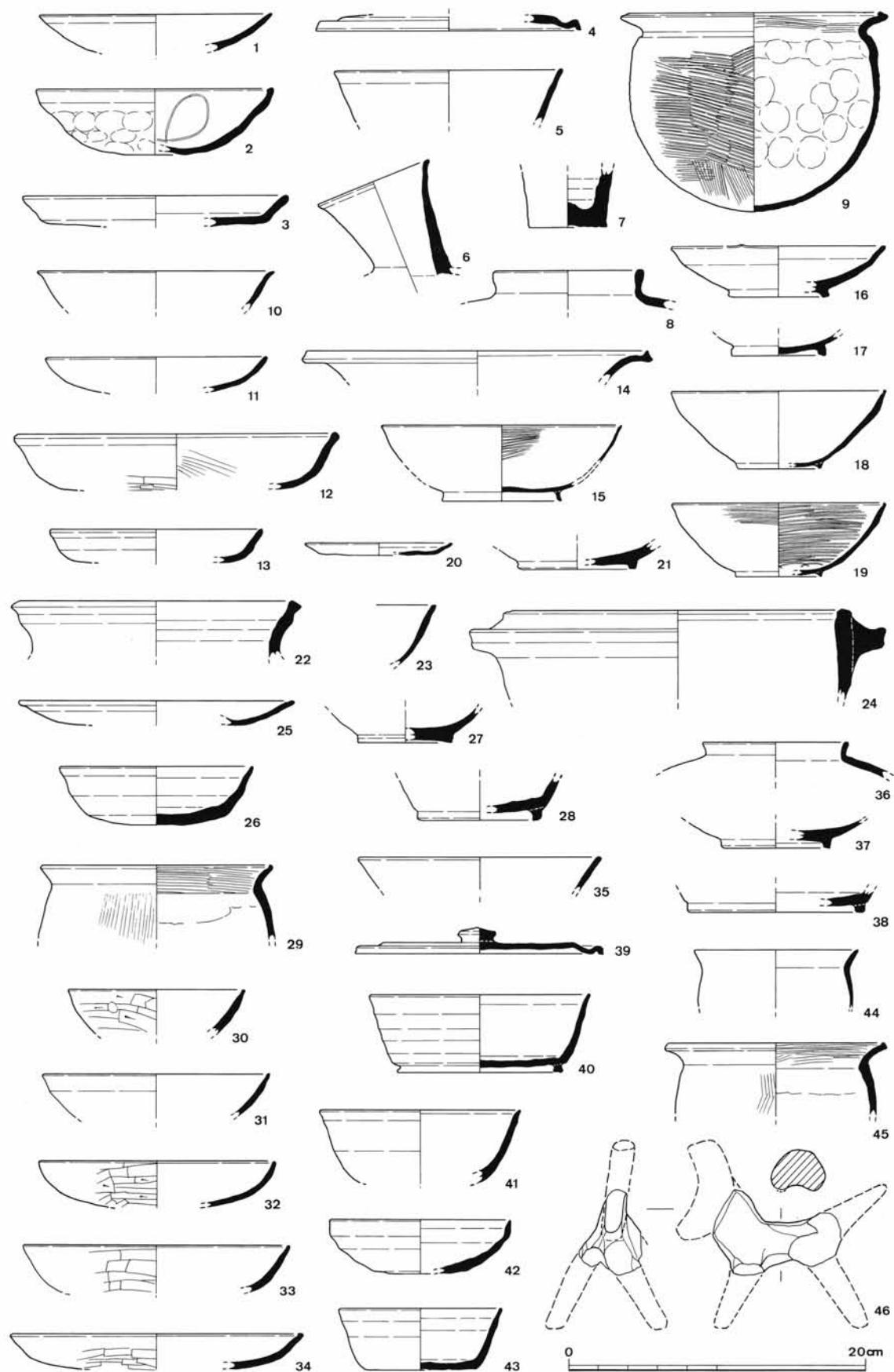
B地区では、土坑およびピット内から平安時代を中心とした土器が出土した。

20は土坑SK17から出土したもので、口径10.0cm、器高1.0cmの土師器皿である。21はピットP46から出土した高台径7.8cmの須恵器杯である。22はピットP8から出土した口径14.4cmの須恵器甕である。23は土坑SK17から出土した須恵質の縁釉陶器碗である。細片のため口径が復原できない。器面は光沢のある深い緑色を呈

第79図 D地区掘立柱建物跡SB03平・断面実測図



第80図 D地区土坑SK07平・断面実測図



第81図 出土遺物実測図

する。24はピットP 5から出土した、口径22.0cmの土師質の羽釜である。胎土は粗く、長石・石英などの砂粒を多く含む。

#### (3) C地区出土遺物(第81図25~28)

25は茶褐色粘砂質土の包含層から出土したもので、口径18.4cm、残存高1.6cmの高台をもつ無釉陶器皿である。胎土は密で、淡灰褐色を呈する。外面はヘラミガキを施す。26はピットP 4から出土した口径13.0cm、器高3.8cmの9世紀後半の須恵器杯である。色調は白灰色を呈する。底部外面はヘラおこしの痕跡がある。27は茶褐色粘砂質土の包含層から出土したもので、底部径6.4cm、無釉陶器碗である。底部外面はていねいなヘラミガキ調整。28も茶褐色粘砂質土の包含層から出土したもので、底部径8.2cmの須恵器杯である。

#### (4) D地区出土遺物(第81図29~45)

D地区では南半部で各遺構から土器が出土した。

**土坑S K07** 29~34は土師器である。29は口径15.2cmの甕である。体部外面と頸部内面に明瞭なハケメ調整が残る。30・31は、それぞれ口径11.8cm、同15.2cmの碗である。30には外面はヘラケズリの調整がある。32・33は、それぞれ口径15.8cm、同17.8cm、器高3.1cm、同3.3cmの杯である。ともに外面はヘラケズリの調整がある。34は口径19.8cm、器高2.6cmの皿である。体部・口縁部は直線的に斜め上方に立ち上がり、端部は内側に肥厚する。体部外面にヘラケズリの痕跡が残る。29~34は、すべて9世紀前半におさまる。39~41は須恵器である。39は口径16.4cm、器高1.7cmを測る擬宝珠状つまみをもつ杯蓋である。40は口径14.7cm、器高9.8cmの杯Bである。高台は断面台形を呈し、体部は垂直ぎみに立ち上がり、口縁部は外反して端部は丸くおさめる。41は口径13.4cm、残存高4.9cmの杯である。胎土、焼成は軟質であるが色調は白灰色を呈する。39~41は前述の土師器と同様、9世紀前半におさまるものと思われる。

**土坑S K04** 35は口径16.2cmの須恵器杯である。36は口径9.8cmの須恵器短頸壺である。口頸部はやや外反ぎみに立ち上がり、端部は丸くおさめる。37は底径7.0cmの無釉陶器碗である。46は土馬である。頭部・脚部は欠損するが、首・胴部が残存する。色調は赤褐色を呈し、鞍、手綱などは表現されていない。

**ピットP 1** 44は口径11.0cmの土師器甕である。

**包含層** 42・43は茶褐色粘砂質土の包含層から出土したもので、それぞれ口径12.0cm、同10.9cm、器高3.8cm、同4.0cmの須恵器杯である。45は口径16.2cm、土師器甕である。調査地北半部の茶褐色粘砂質土から出土した。頸部は肩部から屈曲して外反し、端部は内側に三角状に肥厚する。体部外面と口縁部内面にハケメ調整を施す。

#### 4.まとめ

今回の調査は調査面積が狭く、検出遺構のうち、掘立柱建物跡の全容を把握するまでには至らなかったが、各トレンチでは掘立柱建物跡や柵列の一部を検出したほか、土坑・ピットなど数多く検出した。これらの成果について、過去の調査資料を踏まえて簡単にふれる。

(1) A・C・D地区で検出した平安時代前期の掘立柱建物跡などは、ほぼ真北方向に揃っており、長岡京廃都後の土地利用の一端を窺い知ることができる。今回の調査地の西側約150mで調査された長岡京跡右京第661次調査では、平安時代の遺構が確認されており、当調査地との関連が指摘できる。

(2)長岡京跡右京第70・661次調査では、鎌倉時代の掘立柱建物跡を検出しているが、今回の調査でも掘立柱建物跡と思われる掘形の並びを検出しており、平安時代の遺構とあわせて、広い範囲での集落の広がりが考えられる。

(3)長岡京跡に関連する遺構は、過去10数回の周辺の調査でも、稀にしか発見されていない。今回の調査でも、少量の遺物を除き検出されなかった。なお、A・D地区の土坑はその利用時期について長岡京期までさかのぼる可能性もあるが、その廃絶時期は出土遺物からみて平安時代前期と思われる。調査地周辺における長岡京造営プランについて、今後大きな課題の一つとして残る。

(竹井治雄)

注1 長岡市史編さん室「『長岡市史 本文編1』 長岡市」 1996

注2 高橋美久二ほか「長岡京右京第70次(7ANOIR地区)調査概要」(『長岡市文化財調査報告書』第9集 長岡市教育委員会) 1982

注3 木村泰彦「長岡京跡右京域の調査 右京第324(7ANOIR次-2地区)調査略報」(『長岡市埋蔵文化財センター年報』昭和63年度 (財)長岡市埋蔵文化財センター) 1990

注4 繢伸一郎「長岡京右京の調査 右京第118次(7ANNM地区)調査概報」(『長岡市埋蔵文化財センター年報』昭和57年度 (財)長岡市埋蔵文化財センター) 1983

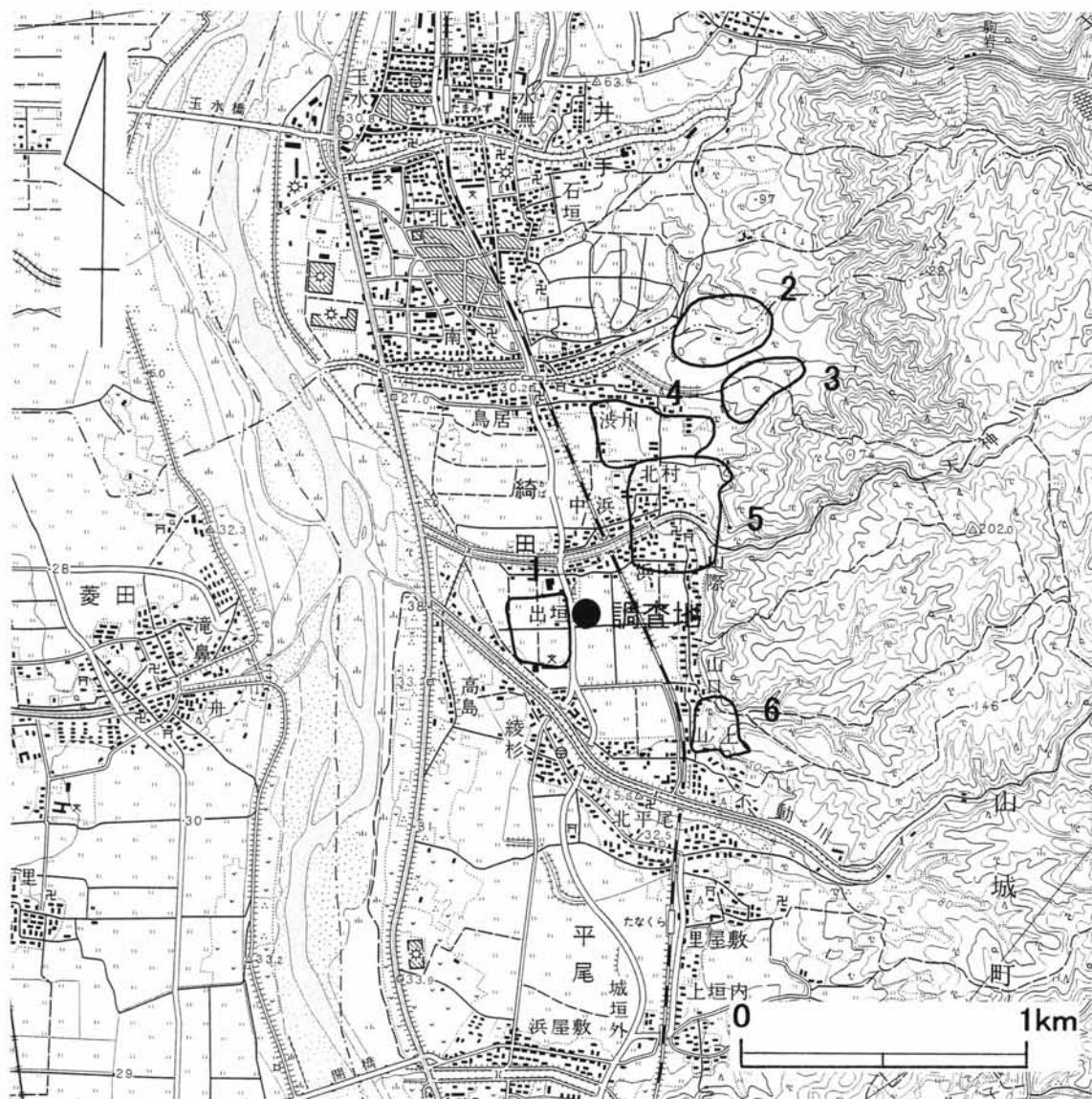
注5 中島皆夫「長岡京右京第611次(7ANNM-2地区)調査概要—長岡京跡右京七条三坊十町、友岡遺跡」(『長岡市文化財調査報告書』第42集 長岡市教育委員会) 2001

## 7. 西ノ口遺跡発掘調査概要

### 1. はじめに

西ノ口遺跡は、相楽郡山城町綺田に所在する。今回の調査地は、京都府遺跡地図によると遺跡の東端隣接地にあたる。<sup>(注1)</sup> 今回の調査は府道の拡幅に伴う事前調査である。調査期間中は、京都府教育委員会・京都府木津土木事務所・山城町教育委員会をはじめ、地元住民の方々、調査補助員・整理員のお世話になった。記して感謝する。<sup>(注2)</sup>

なお、調査に係る経費は、京都府土木建築部が負担した。



第82図 調査地位置図(国土地理院1/25,000田辺)

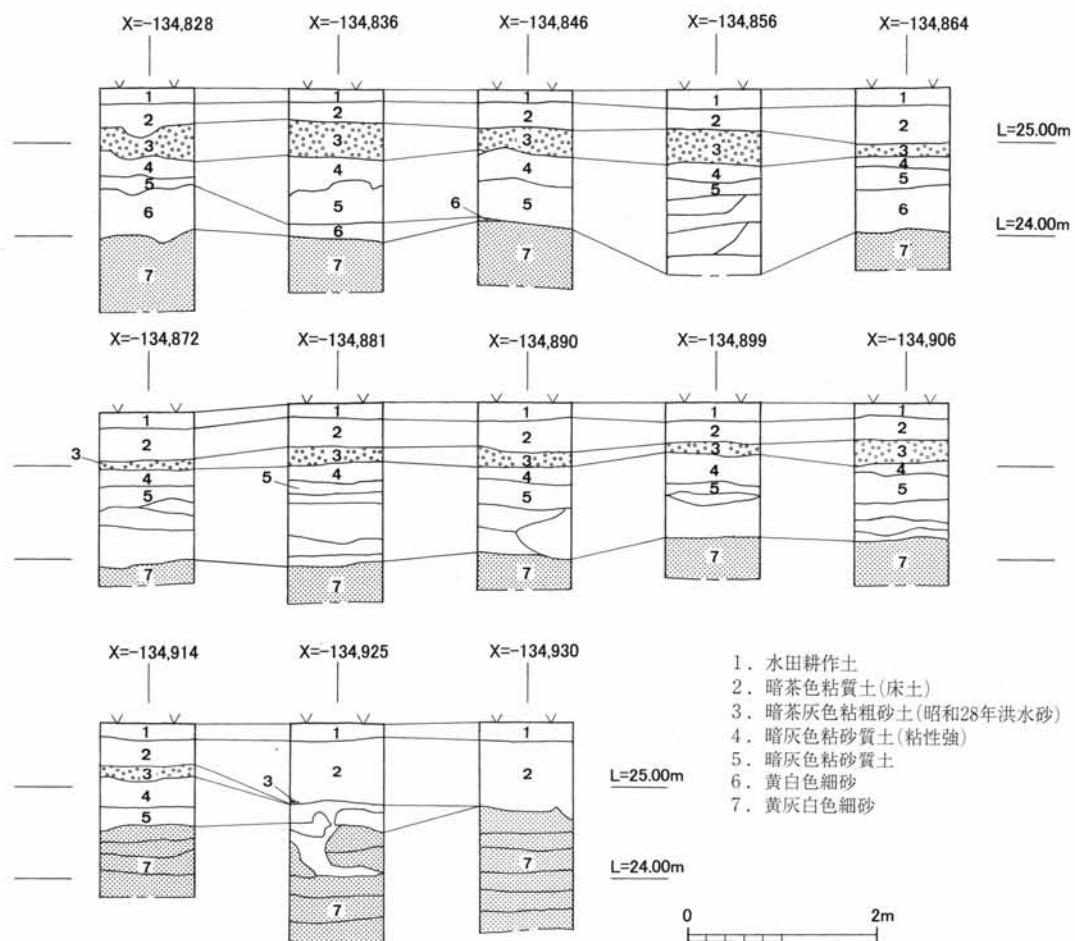
1. 西ノ口遺跡 2. 烏休遺跡 3. 柏谷遺跡 4. 渋川遺跡 5. 蟹満寺遺跡 6. 山ノ上西遺跡

## 2. 周辺の環境

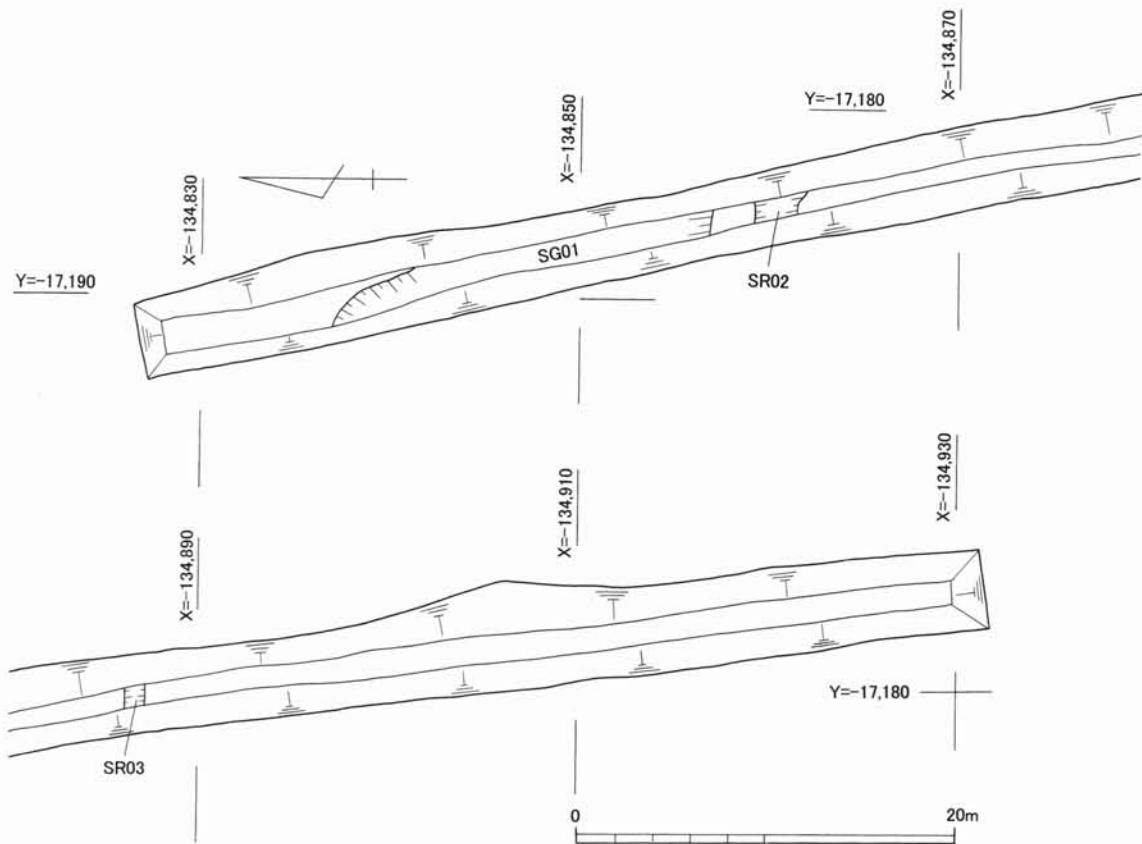
当遺跡の北側には、東から西へ流れる天井川である天神川、南側には不動川が流れている。この2つの天井川に挟まれる木津川右岸の沖積地に西ノ口遺跡は所在する。また調査地周辺の遺跡の分布として天神川に程近い左岸域には白鳳期創建とされる蟹満寺(蟹満寺遺跡)が所在する。このほか調査地周辺には、鳥体遺跡・柏谷遺跡・渋川遺跡・山ノ上西遺跡など遺物散布地は認められるが調査事例が少なく、遺構の所在は明確ではない(第82図)。

今回の調査地である西ノ口遺跡の現状は水田であった。この天神川・不動川といった天井川で囲まれた地区は、昭和28年8月14・15日の寒冷前線の通過による集中豪雨、同年9月25日における台風13号で河川の堤防が決壊し、田畠に土砂が流入する被害や、調査地東側に位置する山裾の集落では、山崩れによる土石流により家屋倒壊などの被害が発生している。またこの8月の土砂被害によって蟹満寺の山門の石段8段が完全に埋没してしまった。

この災害時の災害記念塔が、当調査地の東方約120mのところに位置しており、現在は水田に囲まれた綺原神社跡地に建てられている。この碑文には「昭和二十八年八月十五日の未明南山城地方を襲った未曾有の大豪雨により天神川・不動川の堤防は崩壊し、田畠は砂礫泥濘の慘たる荒原と化す。同年十月これが復旧に立ち、住民不屈の協力により、同三十四年五月工事全く成る。同年八月十五日これを立つ。耕地二七八反。水路七〇九五メートル。道路三二四七メートル。」とあり、この



第83図 基本土層柱状図



第84図 調査地平面図

碑文の上に「ないと思うな不時災難」と横書きされている。<sup>(注3)</sup>

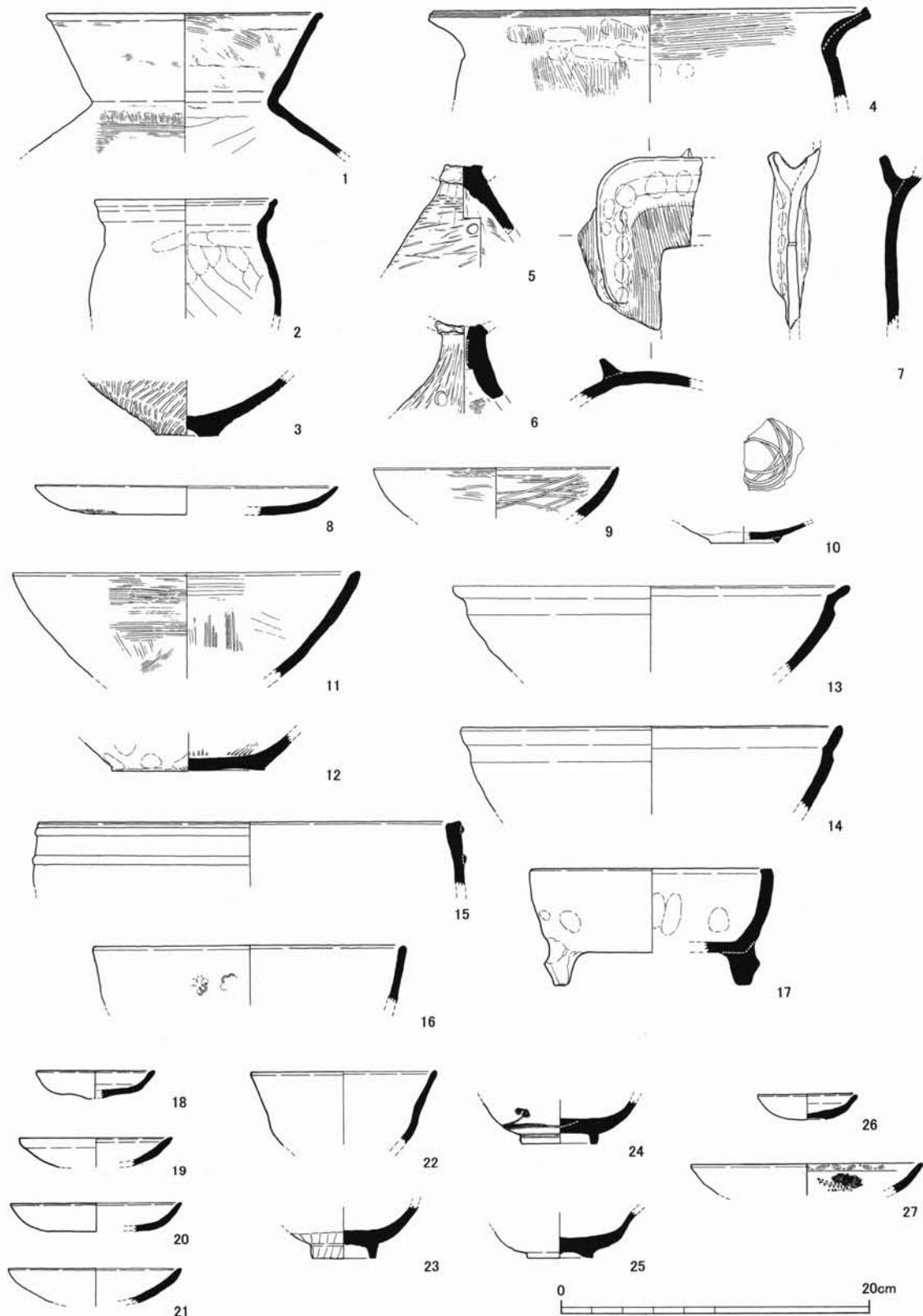
### 3. 調査概要

調査は府道に沿って幅4m、長さ約107mのトレンチを設定し重機により掘削した。面積は約430m<sup>2</sup>である。深さは現水田面から約2mまで掘削した。重機掘削では安全対策上から中世面までに止めた。水田面の標高は約25.5mを測る。部分的に深掘りをしたが、現水田面から約4m掘削すると黄白色細砂層に到達し湧水も見られた。この砂層からは古墳時代の遺物がわずかに出土した。水田耕作土の床土から下には昭和28年の水害の洪水砂と見られる暗茶灰色粘粗砂層を介して暗灰色粘砂質土が堆積し、この層からは古墳時代から近世にかけての遺物が出土した。この層は湿地状の堆積をしている。この層の上層には杭が打ち込まれており、近世の段階では湿地ないしは池状の遺構の護岸施設であったと考えられる。このほか東西方向の流路跡を2か所で確認している。また調査地の壁面の観察によって調査地の南側で地震による液状化現象(噴砂)を確認している。しかし昭和28年の水害による洪水層は北半部で見られたものの、調査地南部までは及んでおらず明確には確認できなかった。

調査の最終段階で1×1m、深さ約1mでグリット掘りを15か所で行ったが、この深さでは遺構は確認できず、各グリッドからわずかに遺物の出土を見たのみであった。下層の堆積状況は基本的に砂と粘土混じり砂質土との互層となっていた。

(1) 基本層序(第83図)

調査地の基本層序は水田耕作土面(1層)、床土(2層)、昭和28年の洪水層(3層)、湿地状堆積の暗灰褐色粘砂質土層(4・5層)、黄灰白色細砂層(7層)となっている。旧地形は南側が高く、



第85図 包含層出土遺物実測図

北側に傾斜している。湿地状堆積はこの地形に伴って北側が厚く堆積している。

## (2) 検出遺構(第84図)

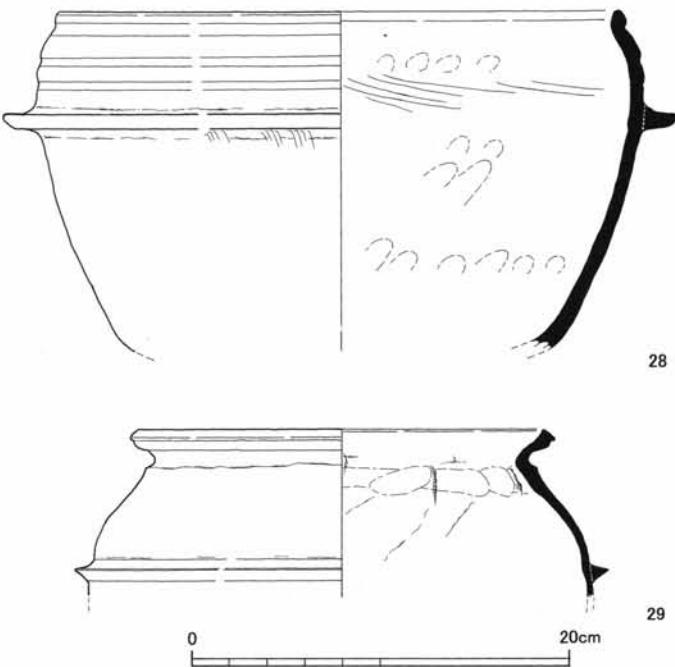
池状遺構 S G01 中世から近世の段階で池状(湿地状)をなしていたものと考えられる。長さは約20m、深さ2.3mを測る。暗灰色粘砂質土が堆積しており、近世段階で埋没し、埋没後杭が打ち込まれていることが壁面で観察できた。杭の用途は不明なもの護岸施設(地業)と考えられる。下層からは中世段階の瓦質土器や土師器の羽釜が出土している。

流路 S R02 東西方向の流路である。幅は9m、深さ1.3mを測る。壁面の状況からS G01を切っている。S G01と同じく埋土は暗灰色粘砂質土である。

流路 S R03 幅6m、深さ1.3mを測る東西方向の流路である。近世面から掘削されている。流路の両肩部分には杭が打ち込まれており流路の護岸施設と考えられる。

## 4. 出土遺物(第85・86図)

1~27のすべてが包含層から出土している。28・29はS G01から出土した。1は古式土師器の壺である。口径は17.6cmを測る。2は土師器の小型甕である。口径は11.6cmを測る。色調は内外面とも淡橙褐色をなす。3は甕底部である。底径は4cmを測る。色調は外面が赤褐色、内面は淡黄褐色をなす。4は土師器甕である。口径は28cmを測る。色調は内外面とも淡桃褐色をなす。5・6は土師器高杯脚部片である。5は色調が内外面とも淡橙褐色、6は淡黄褐色をなす。7は移動式竈である。焚き口部分は方形の切れ込みを持ち、焚き口上部には廂状の鍔が付く。色調は淡黄褐色をなす。8は土師器杯である。外面はミガキが施され、内面は放射状暗文を持つ。色調は淡黄褐色をなす。9は黒色土器碗である。口径は15.8cmを測る。色調は黒灰色をなす。10は瓦器碗底部である。底径は4.4cmを測る。色調は暗灰色をなす。11・12は瓦質土器のすり鉢である。色調は淡灰色をなす。13・14は瓦質土器の鉢である。13は色調が内外面とも青灰色をなし、14は淡灰褐色をなす。15・16は瓦質土器火舎である。16は色調が内外面とも暗灰色をなす。17は瓦質土器の脚付鉢である。口径は15.5cm、器高7.6cmを測る。色調は外面が淡灰色、内面は暗淡灰色をなす。18~21は土師器皿である。口径は7.6cmのものと10~11cmのものの2種類がある。22・23は灰釉陶器碗である。23は底径4.2cmを測る。24は染付け碗底部である。底径は4.7cmを測る。



第86図 池状遺構 S G01出土遺物実測図

25は灰釉陶器皿である。底径は4.3cmを測る。見込み部分には重ね焼きのトチンの痕跡が残る。内面の釉調は緑褐色をなす。26は灰釉陶器の灯明皿である。口径は6.4cm、器高は1.6cmを測る。内面見込み部分には重ね焼きのトチンの痕跡が残る。内面に釉が施される。27は口径15cmを測る。色調は内外面とも淡青色をなす。28は瓦質土器の羽釜で口径29.4cmを測る。外面に煤が付着している。29は土師器の羽釜である。口径は21.4cmを測る。色調は内外面とも淡褐色をなす。

## 5. まとめ

今回の調査では顕著な遺構は見られなかった。ただ水田の床土下層では昭和28年の洪水層を介して暗灰色粘砂質土中で護岸状の杭列が見られたことから、池状の遺構 S G01(湿地状堆積)が存在していたものと考えられる。この層からは古墳時代から近世にかけての遺物が出土したが、これは池へ古墳時代の遺物が流入したものと思われる。また、東西の流路跡(S R02・03)は近世面から及んでおり木津川へ流入していた支流と考えられる。

(柴 晓彦)

注1 京都府教育委員会(『京都府遺跡地図 [第3版]』第3分冊) 2003

注2 調査参加者(敬称略) 小野彰子・柴田文恵・辻井和子・船木登喜江・徳田智恵子

注3 山城町史編さん委員会(『山城町史』本文編) 1987

## 参考文献

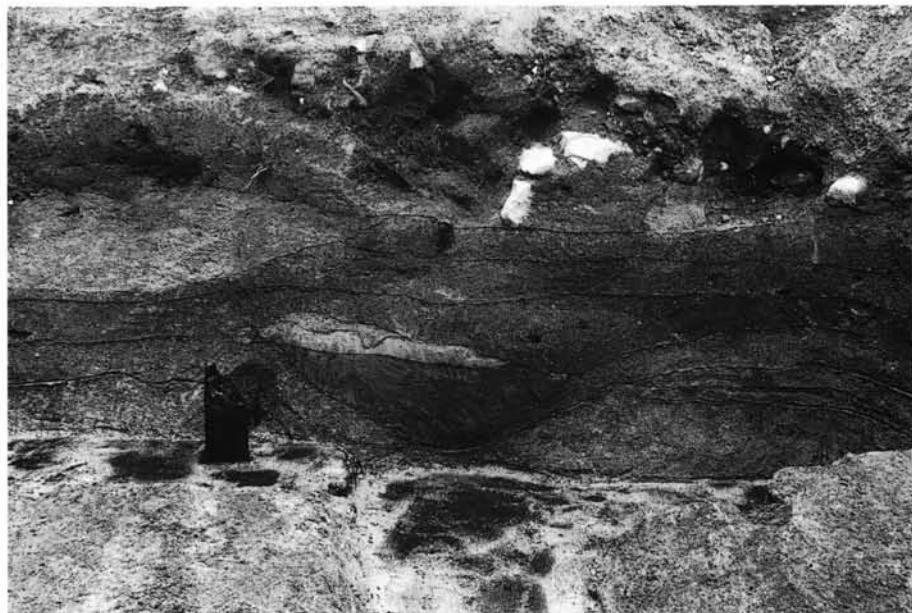
京都府立山城郷土資料館『特別展 水とのたたかい—南山城水害から50年—』 2003

# 図 版

図版第1 大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野条里制遺跡



図版第2 大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野条里制遺跡



(1) 大垣遺跡・一の宮遺跡 2 トレンチ溝 S D01断面、推定道路  
断ち割り状況(西から)



(2) 大垣遺跡・一の宮遺跡 3 トレンチ近世耕作遺構(畝・溝)  
(西から)



(3) 大垣遺跡・一の宮遺跡 3 トレンチ溝 S D01西壁(東から)

図版第3 大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野条里制遺跡



(1) 大垣遺跡・一の宮遺跡 3 トレンチ柱列検出状況(西から)



(2) 大垣遺跡・一の宮遺跡 3 トレンチ柱列完掘状況(西から)

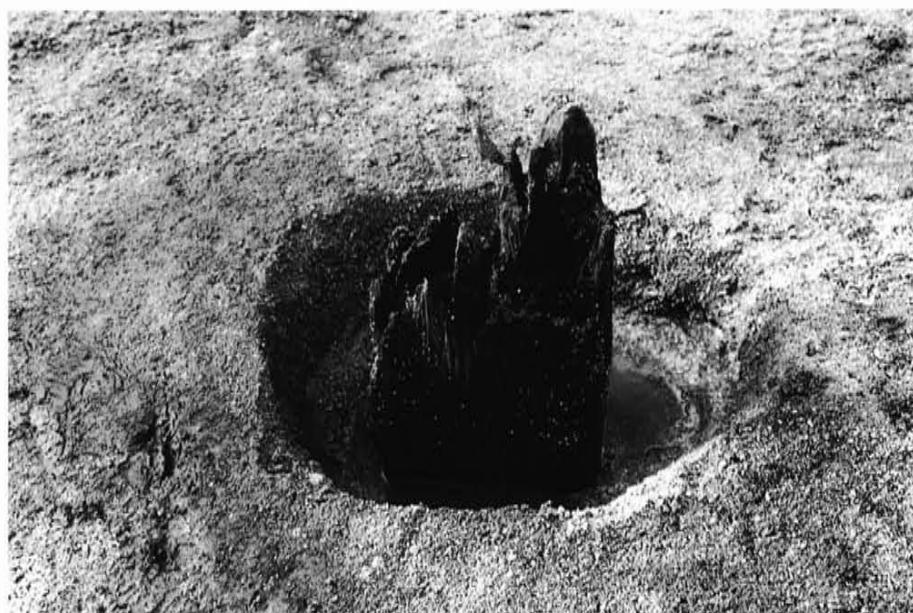


(3) 大垣遺跡・一の宮遺跡 3 トレンチ柱列完掘状況(東から)

図版第4 大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野条里制遺跡



(1) 大垣遺跡・一の宮遺跡3 トレンチ溝SD01内の柱列3・4  
(西から)



(2) 大垣遺跡・一の宮遺跡3 トレンチ柱列1-3 検出状況  
(西から)



(3) 大垣遺跡・一の宮遺跡4 トレンチ全景(東から)

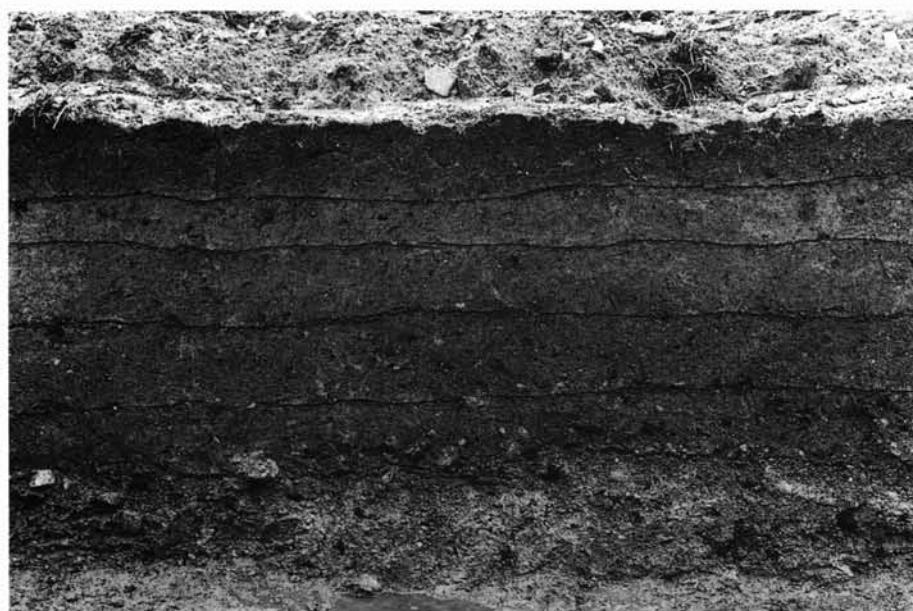
図版第5 大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野条里制遺跡



(1) 難波野条里制遺跡 1・2 トレンチ調査前風景(西から)



(2) 難波野条里制遺跡 1 トレンチ  
全景(西から)



(3) 難波野条里制遺跡 1 トレンチ  
北壁断面(南から)

図版第6 大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野条里制遺跡



(1) 難波野条里制遺跡 1 トレンチ  
東端土器出土状況(南から)



(2) 難波野条里制遺跡 1 トレンチ  
下層土器出土状況(南から)



(3) 難波野条里制遺跡 4 トレンチ  
全景(東から)

図版第7 大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野条里制遺跡



(1)難波野条里制遺跡4トレンチ  
柱穴群検出状況(東から)



(2)難波野条里制遺跡5トレンチ  
全景(東から)



(3)難波野条里制遺跡5トレンチ  
北壁断面(南から)

図版第8 大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野条里制遺跡



(1) 難波野条里制遺跡 6・7トレンチ調査前風景(東から)



(2) 難波野条里制遺跡 7トレンチ全景(東から)



(3) 難波野条里制遺跡 7トレンチ北壁断面(南から)

図版第9 大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野条里制遺跡



2



60



4



5



62



59



67



65



66



54



68



69

出土遺物(1)

図版第10 大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野条里制遺跡



70



71



72



73



74



75



76



77



78



—



43



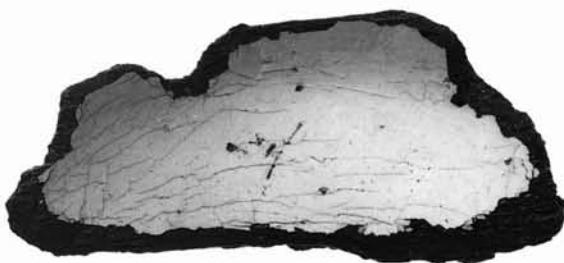
40



26



27



29



30



28

出土遺物(2)

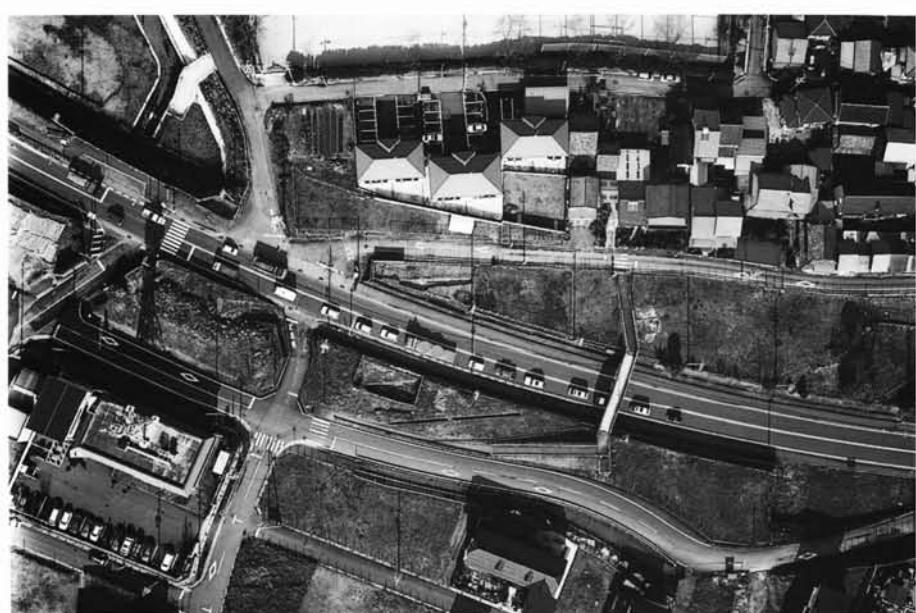
図版第11 岡ノ遺跡第2次



(1)調査地遠景(東から)



(2) 3・10~12トレンチ全景  
(上が北)



(3) 6・16トレンチ全景(上が北)

図版第12 岡ノ遺跡第2次



(1) 10トレンチ全景(北西から)



(2) 11トレンチ全景(東から)



(3) 11トレンチ溝 S D1103検出状況  
(北東から)

図版第13 岡ノ遺跡第2次



(1)11トレンチ溝S D1103断面  
(北東から)



(2)11トレンチ溝S D1103遺物出土  
状況(北から)



(3)12-1トレンチ全景(西から)

図版第14 岡ノ遺跡第2次



(1) 12-2 トレンチ全景(東から)



(2) 3 トレンチ全景(北西から)



(3) 3-1 トレンチ全景(南から)

図版第15 岡ノ遺跡第2次



(1) 3-2 トレンチ遺構検出状況  
(北から)



(2) 3-2 トレンチ S X0301  
検出状況(北から)



(3) 3-2 トレンチ P24検出状況  
(北から)

図版第16 岡ノ遺跡第2次



(1) 3-3 トレンチ堅穴式住居跡  
S H0309検出状況(南から)



(2) 3-3 トレンチ堅穴式住居跡  
S H0309遺物出土状況(1)  
(南から)



(3) 3-3 トレンチ堅穴式住居跡  
S H0309遺物出土状況(2)  
(南から)

図版第17 岡ノ遺跡第2次

(1) 3-3 トレンチ溝 S D0311検出  
状況(東から)



(2) 3-3 トレンチ溝 S D0311遺物  
出土状況(1)(東から)



(3) 3-3 トレンチ溝 S D0311遺物  
出土状況(2)(北から)



図版第18 岡ノ遺跡第2次



(1) 3-3 トレンチ溝 S D0311遺物  
出土状況(3)(北から)



(2) 3-3 トレンチ溝 S D0311遺物  
出土状況(4)(西から)



(3) 6 トレンチ全景(西から)

図版第19 岡ノ遺跡第2次



(1) 16トレンチ調査状況(西から)



(2) 16トレンチ堅穴式住居跡  
S H1602検出状況(東から)



(3) 16トレンチ土坑SK1603検出  
状況(北から)

図版第20 岡ノ遺跡第2次



出土遺物

図版第21 高梨遺跡第3次



(1)調査トレンチ全景(北から)



(2)調査トレンチ全景(南東から)



(3)東壁土層堆積状況(西から)

図版第22 高梨遺跡第3次



(1) 遺構検出状況(南東から)



(2) 遺構検出状況(北から)



(3) 下層遺構確認グリッド  
掘削風景(西から)

図版第23 高梨遺跡第3次



(1) 溝 S D01検出状況(東から)



(2) 土坑 S K04検出状況(西から)



(3) ピット検出状況(西から)

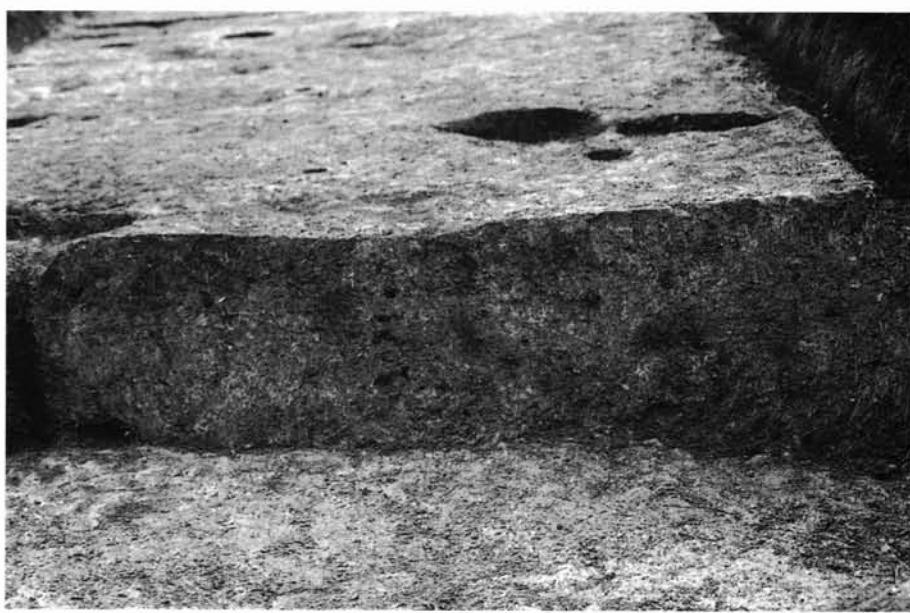
図版第24 高梨遺跡第3次



(1) 土坑 S K03検出状況(北西から)



(2) 土層堆積状況(南西から)



(3) 土層堆積状況(西から)

図版第25 大淵遺跡第4次



(1)調査地遠景(北から)

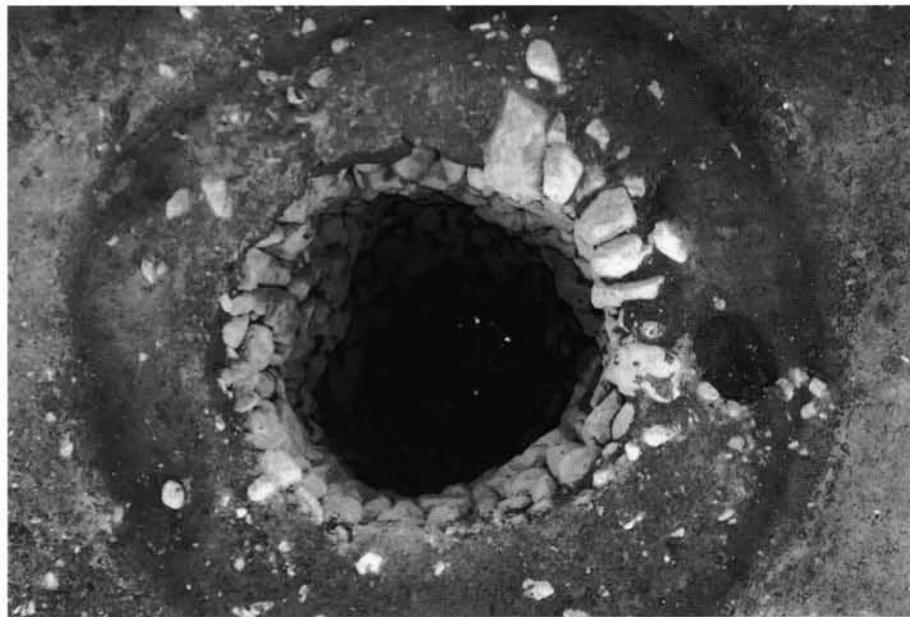


(2)調査地遠景(南から)

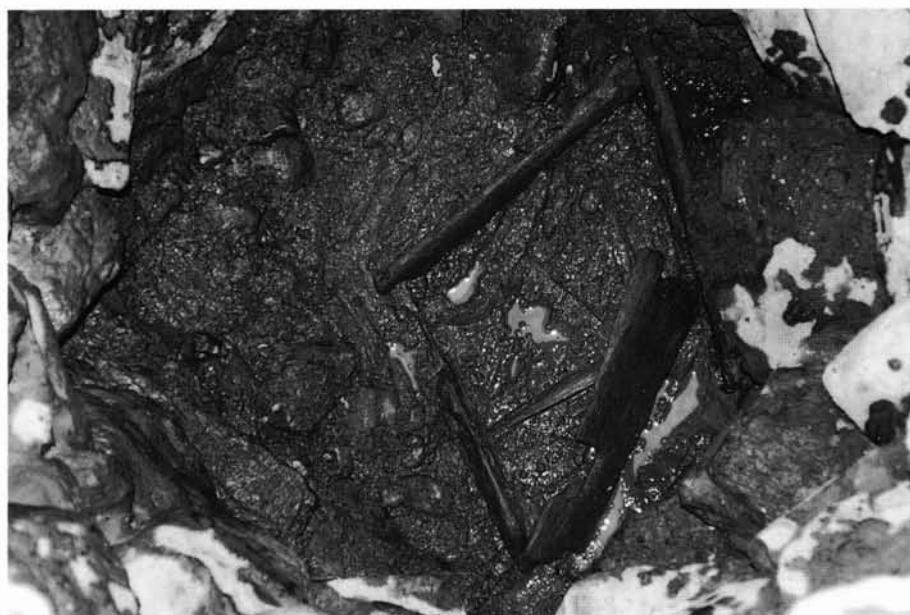


(3)調査地全景(上が北)

図版第26 大淵遺跡第4次



(1) BW地区井戸 S E 104(南から)



(2) BW地区井戸 S E 104木枠  
(上が東)



(3) BW地区井戸 S E 110(東から)

図版第27 大淵遺跡第4次



(1) BW地区井戸S E 117(東から)



(2) BW地区溝S D 108 P-P'断面  
(西から)



(3) BW地区集石遺構S X 103  
(東から)

図版第28 大淵遺跡第4次



(1) B W地区集石遺構 S X105  
(東から)



(2) B W地区柱穴 P-64 (南東から)



(3) B W地区柱穴 P-94 (南から)

図版第29 大淵遺跡第4次



(1) B W地区溝 S D 100(東から)



(2) B W地区溝 S D 100A 出土遺物  
(東から)



(3) B W地区溝 S D 100 B 出土遺物  
(東から)

図版第30 大淵遺跡第4次



(1) BW地区溝S D 100 A-A'断面  
(東から)



(2) BW地区溝S D 100 C-C'断面  
(東から)



(3) BW地区溝S D 101北半  
(南から)

図版第31 大淵遺跡第4次

(1) B W地区溝 S D101南半  
(北から)



(2) B W地区溝 S D101 D-D'断面  
(東から)



(3) B W地区溝 S D101 G-G'断面  
(南から)



図版第32 大淵遺跡第4次



(1) BW地区溝SD 101 J-J'断面  
(南から)



(2) BW地区溝SD 102 L-L'断面  
(南から)



(3) BW地区溝SD 114断面  
(南東から)

図版第33 大淵遺跡第4次

(1) B W地区堅穴式住居跡  
S H106・107・119(北から)



(2) B E地区溝S D114(南東から)



(3) B E地区溝S D114(南東から)



図版第34 大淵遺跡第4次



33-1



33-2



34-14



33-6



34-31



34-40



35-1



33-13



35-4



35-17



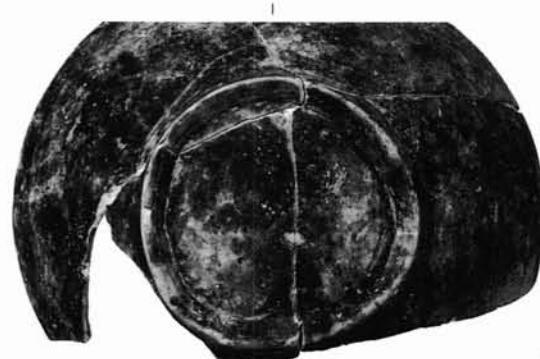
35-10

出土遺物(1)

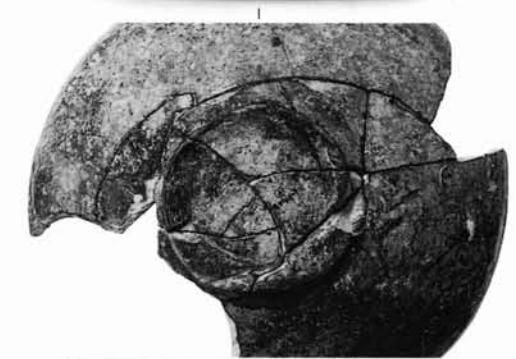
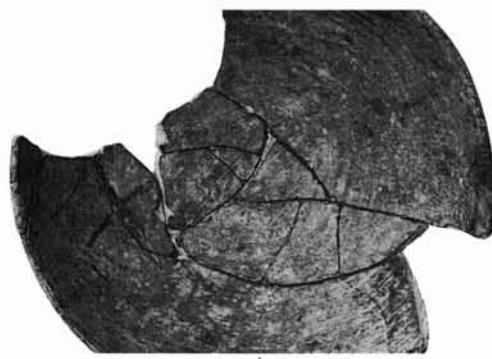


35-27

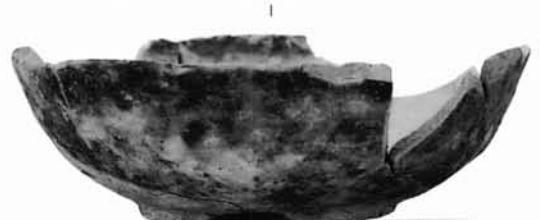
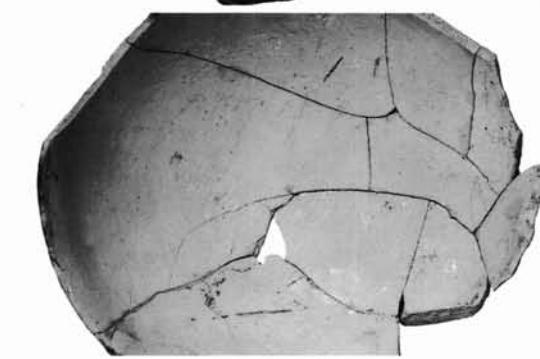
図版第35 大淵遺跡第4次



36-10

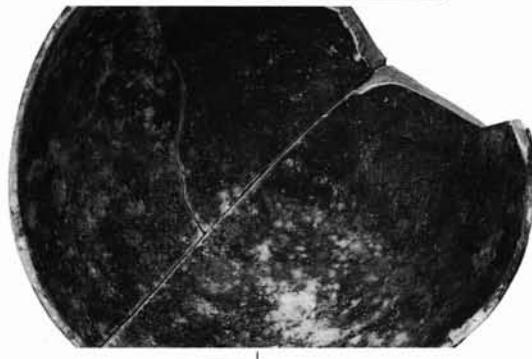


36-13



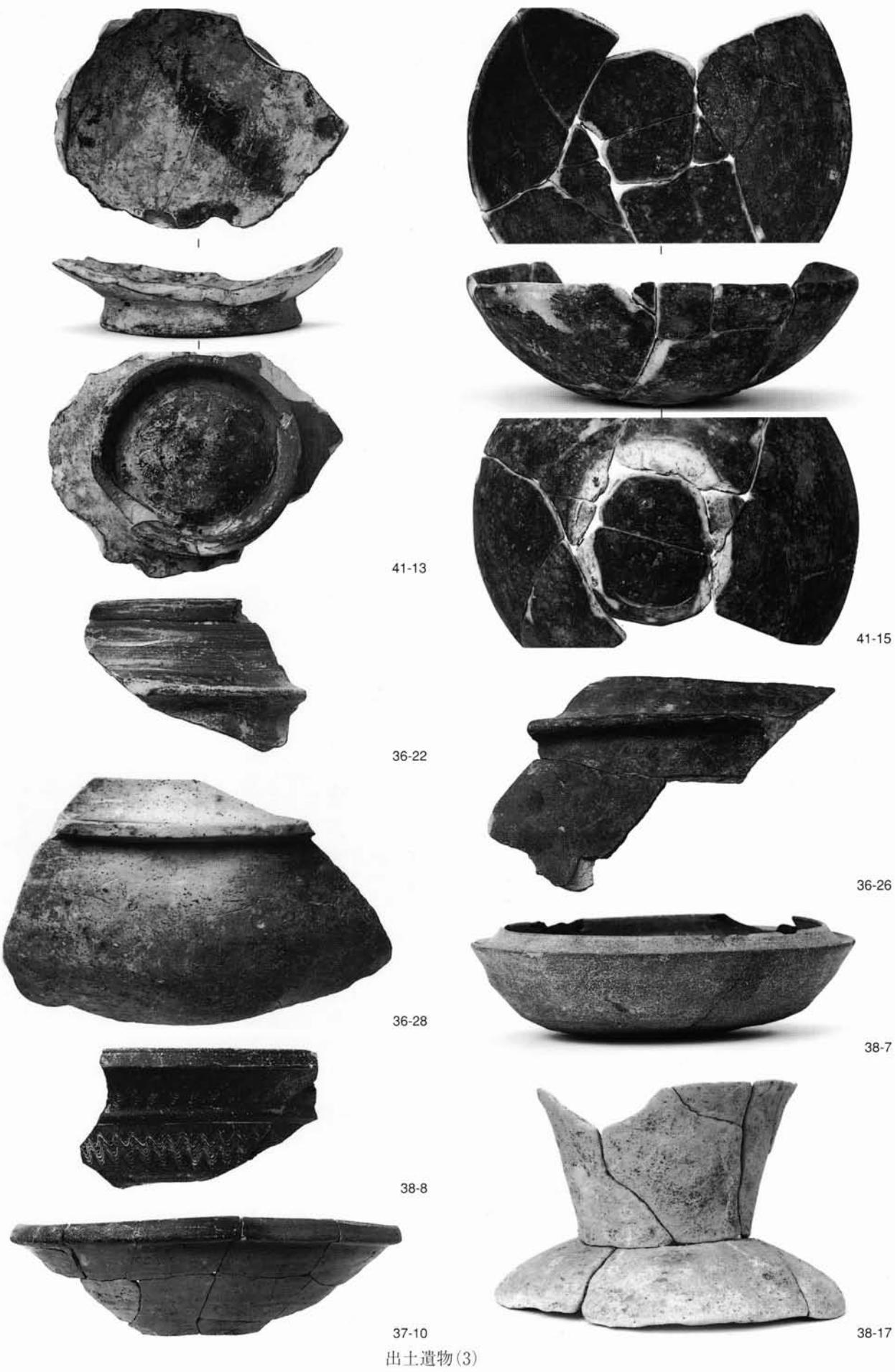
36-11

出土遺物(2)



41-1

図版第36 大淵遺跡第4次



図版第37 平安京跡右京一条三坊九・十町(第10次調査)



図版第38 平安京跡右京一条三坊九・十町(第10次調査)



(1)調査前風景(北東から)



(2)調査前風景(北西から)



(3)重機掘削作業風景(南西から)

図版第39 平安京跡右京一条三坊九・十町(第10次調査)



(1)上層遺構(攪乱)掘削作業  
(南東から)



(2)中世遺構検出作業(東から)



(3)溝 S D 02018掘削作業  
(南東から)

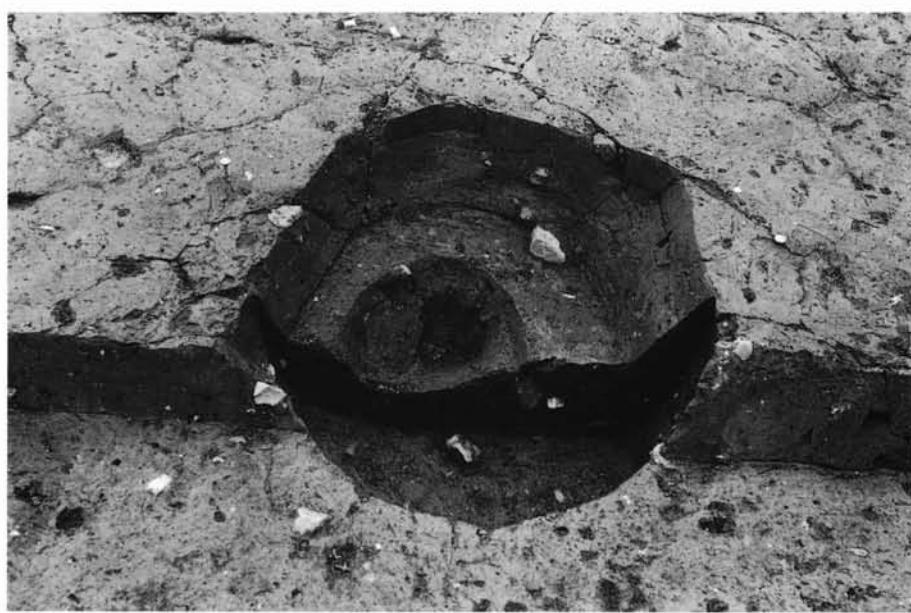
図版第40 平安京跡右京一条三坊九・十町(第10次調査)



(1) 小穴 S P 02046遺物出土状況・  
上層(北から)



(2) 小穴 S P 02046遺物出土状況・  
中層(北から)



(3) 小穴 S P 02046遺物取り上げ後  
(北から)

図版第41 平安京跡右京一条三坊九・十町(第10次調査)



(1)溝S D02018検出状況(西から)



(2)溝S D02018完掘状況遠景  
(西から)

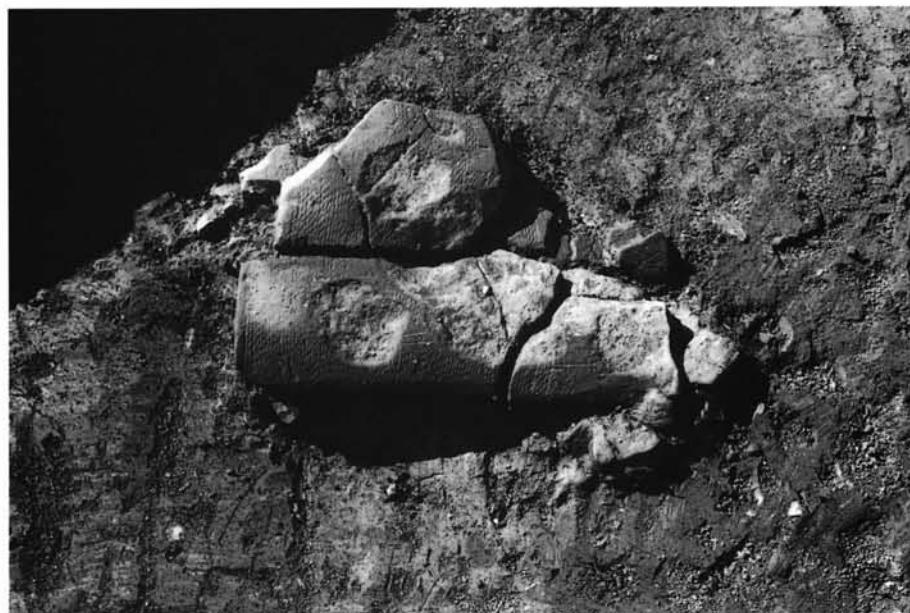


(3)溝S D02018内出土石材  
(西から)

図版第42 平安京跡右京一条三坊九・十町(第10次調査)



(1)溝 S D02018内瓦出土状況  
(東から)



(2)溝 S D02018内瓦出土状況  
(東から)



(3)溝 S D02018内瓦出土状況  
(南から)

図版第43 平安京跡右京一条三坊九・十町(第10次調査)

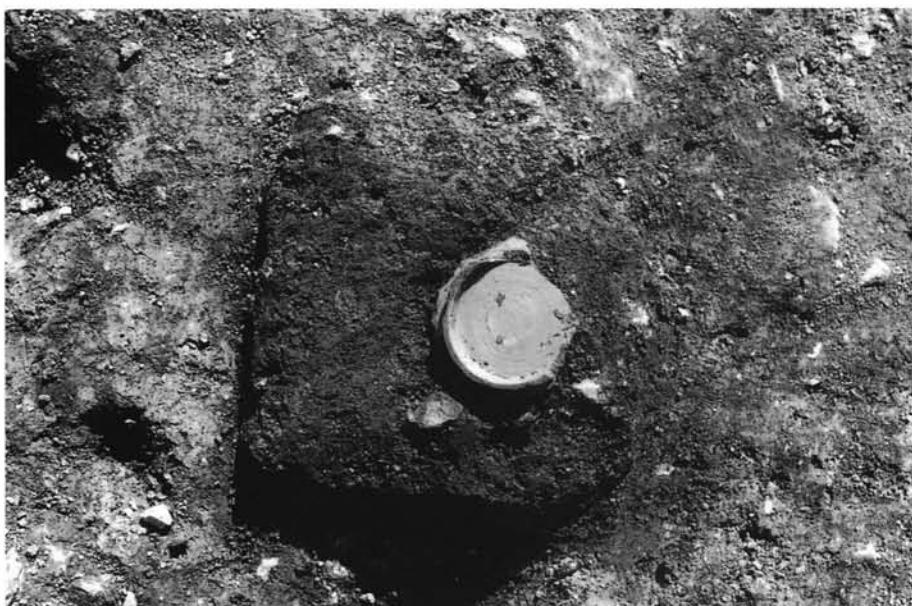
(1)土坑 S K02127出土遺物No. 155  
(上が東)



(2)土坑 S K02127出土遺物No. 141  
(上が北)



(3)溝 S D02109出土遺物No. 111  
(上が南)



図版第44 平安京跡右京一条三坊九・十町(第10次調査)



(1) 完掘状況遠景(北東から)



(2) 完掘状況遠景(東から)



(3) 完掘状況遠景(西から)

図版第45 平安京跡右京一条三坊九・十町(第10次調査)



(3) 築地内溝 SD 02018(西から)



(2) 鷹司小路北側溝 SD 02022(西から)



(1) 築地跡遠景(東から)

図版第46 平安京跡右京一条三坊九・十町(第10次)



(1) 南西拡張部全景(南から)



(2) 南東拡張部全景(南から)



(3) 空中撮影作業風景(南東から)

図版第47 平安京跡右京一条三坊九・十町(第10次調査)



(1) 築地基底部断ち割り(西から)



(2) 溝 S D02097完掘状況  
(北東から)



(3) 溝 S D02097完掘状況  
(南西から)

図版第48 平安京跡右京一条三坊九・十町(第10次調査)



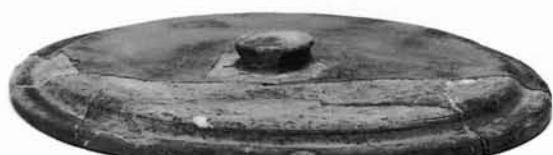
3



67



25



26



27



31



37



124



126



64



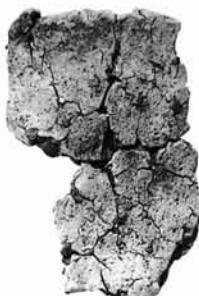
18



19



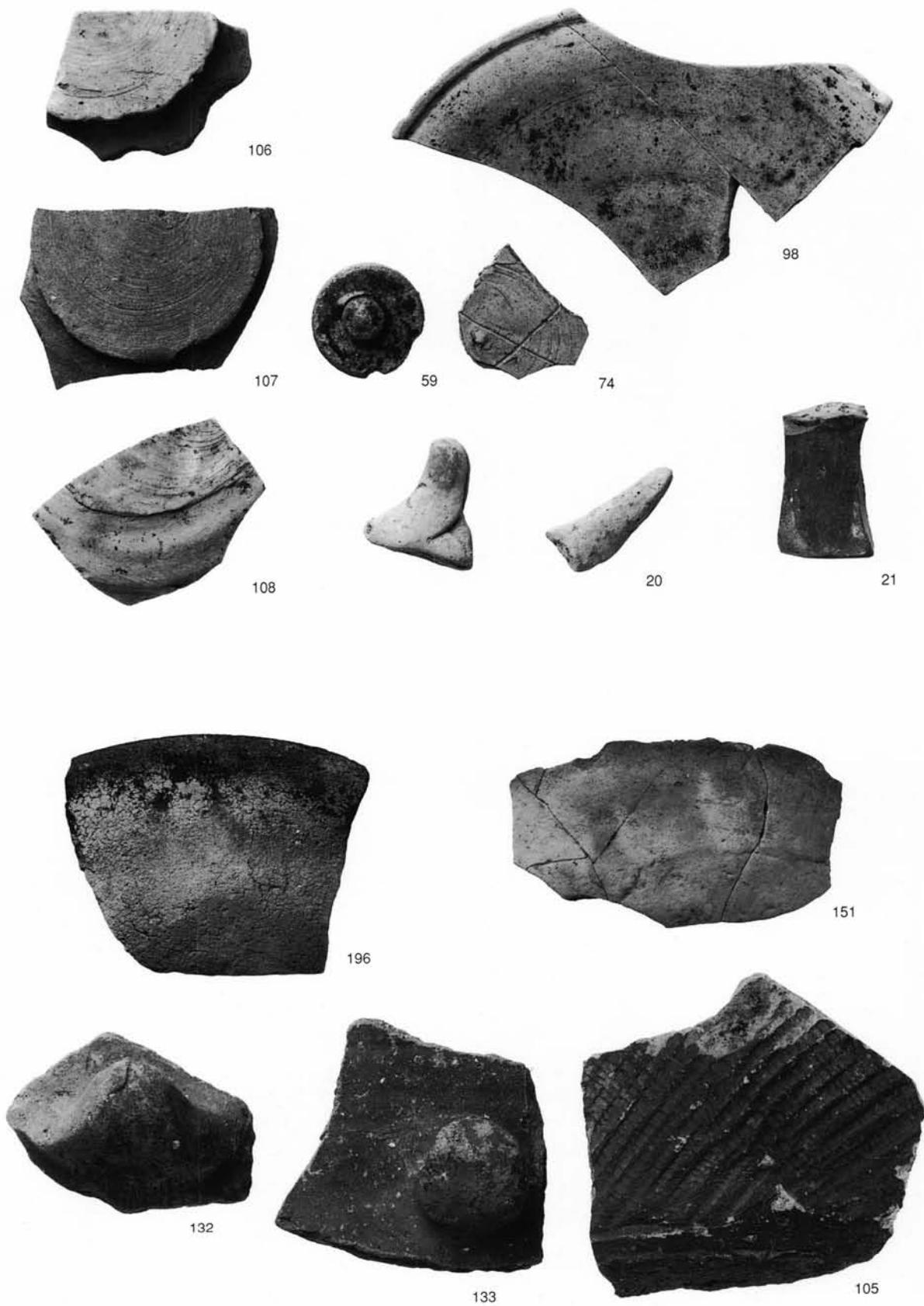
78



152

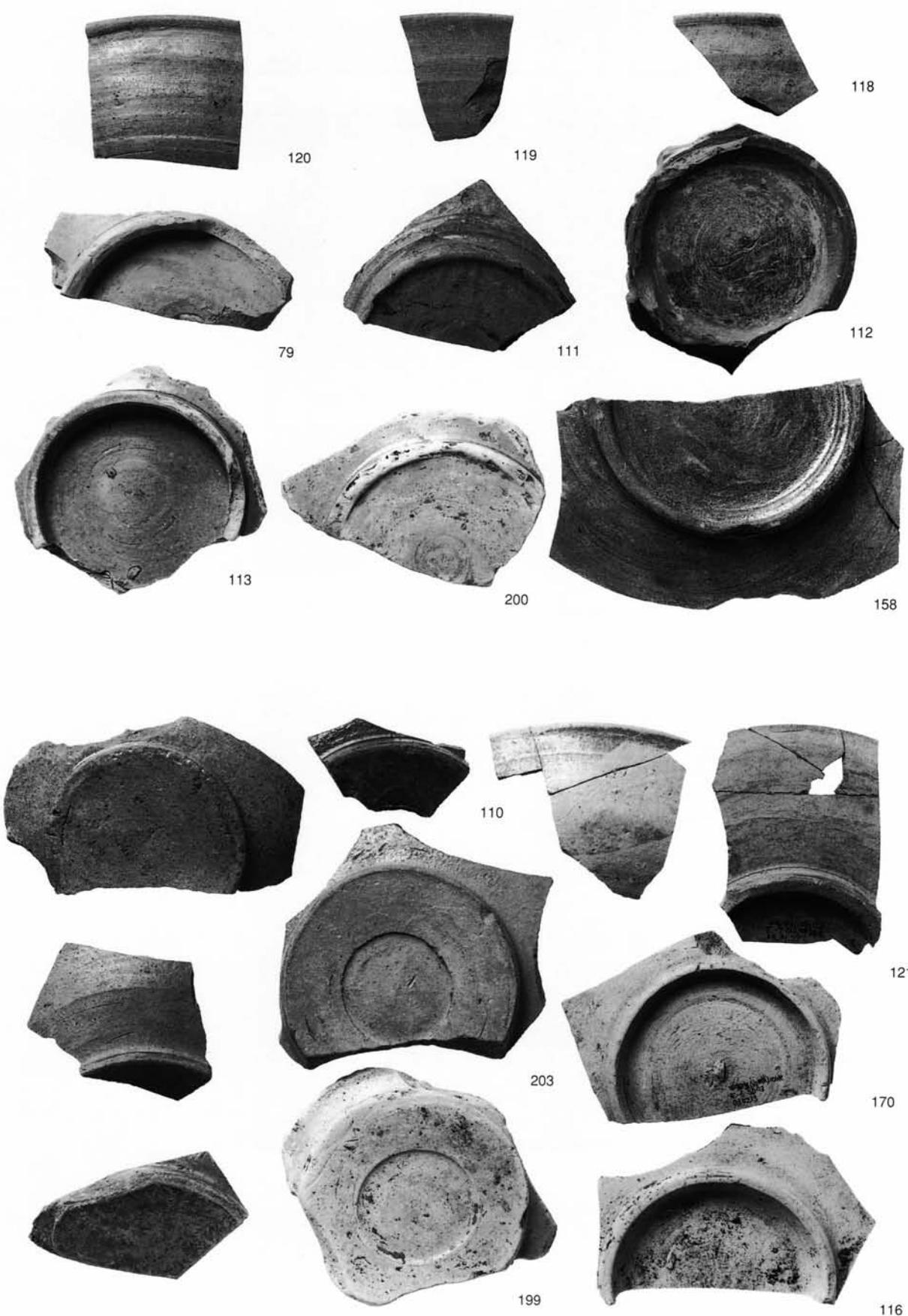
出土遺物(1)

図版第49 平安京跡右京一条三坊九・十町(第10次調査)



出土遺物(2)

図版第50 平安京跡右京一条三坊九・十町(第10次調査)



出土遺物(3)

図版第51 平安京跡右京一条三坊九・十町(第10次調査)



134



154



155



147



172



215



218



244

出土遺物(4)



227



246

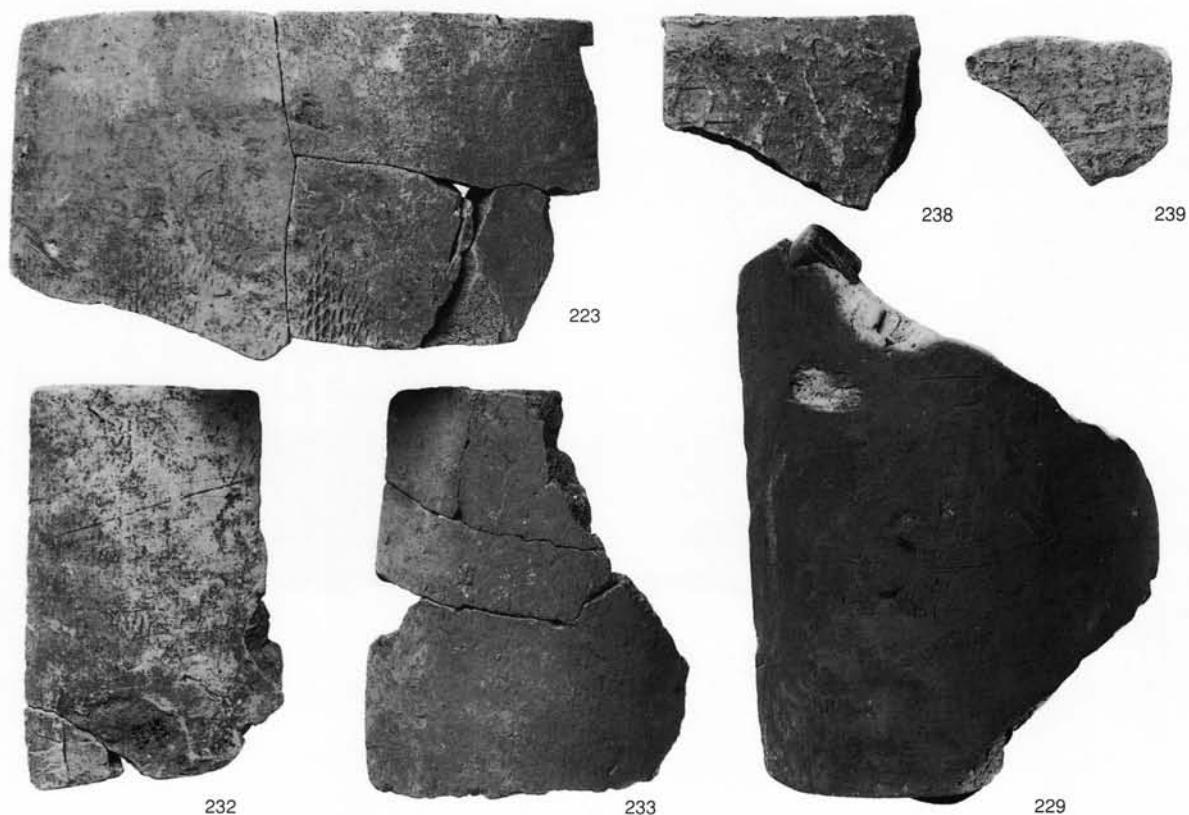
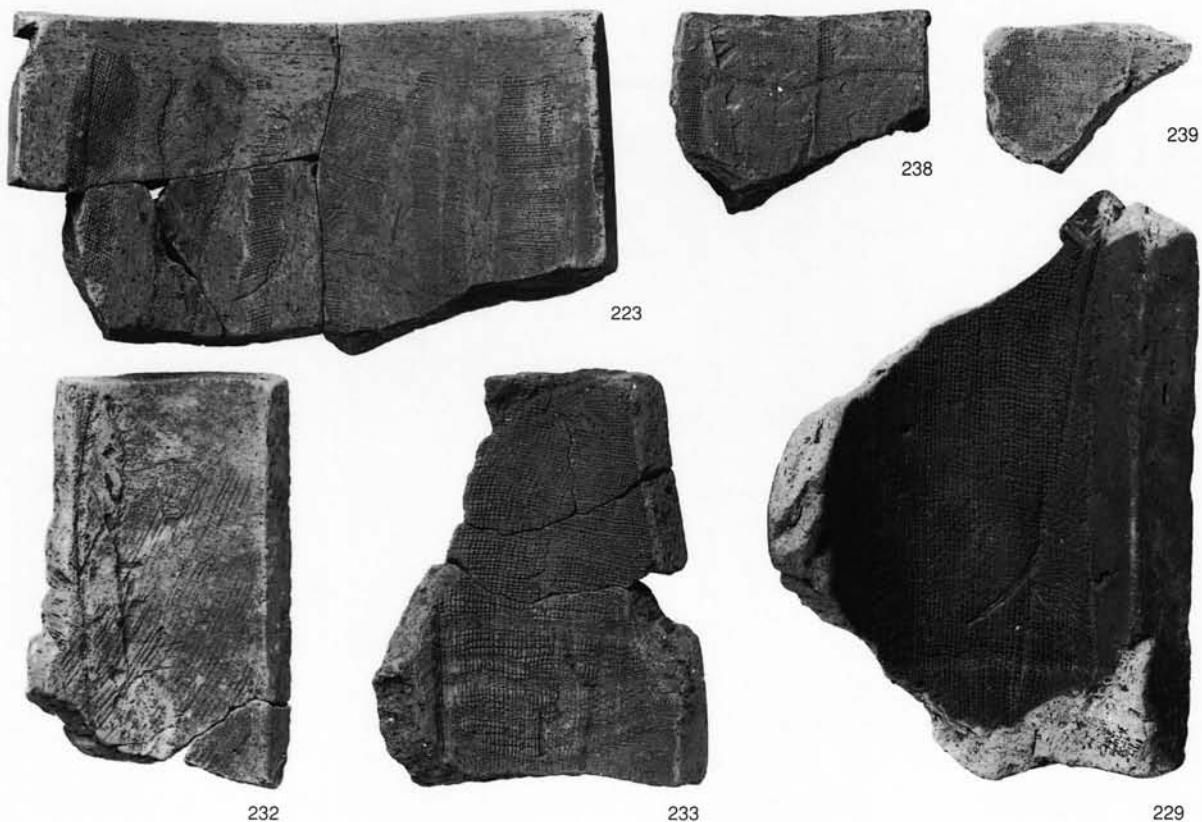


216



217

図版第52 平安京跡右京一条三坊九・十町(第10次調査)



出土遺物(5)

図版第53 長岡京跡右京第787次(7ANNM-4地区)・友岡遺跡



(1)調査前風景(南から)



(2)調査前風景(北から)



(3)A地区トレンチ全景(北から)

図版第54 長岡京跡右京第787次(7ANNM-4地区)・友岡遺跡



(1) A地区土坑 S K02(北から)



(2) A地区掘立柱建物跡 S B01  
柱穴 P-7 断面(東から)



(3) A地区掘立柱建物跡 S B01  
柱穴 P-72断面(南から)

図版第55 長岡京跡右京第787次(7ANNNM-4地区)・友岡遺跡



(1) B地区トレンチ全景(南から)



(2) B地区北半部分(北から)



(3) B地区東壁断面(西から)

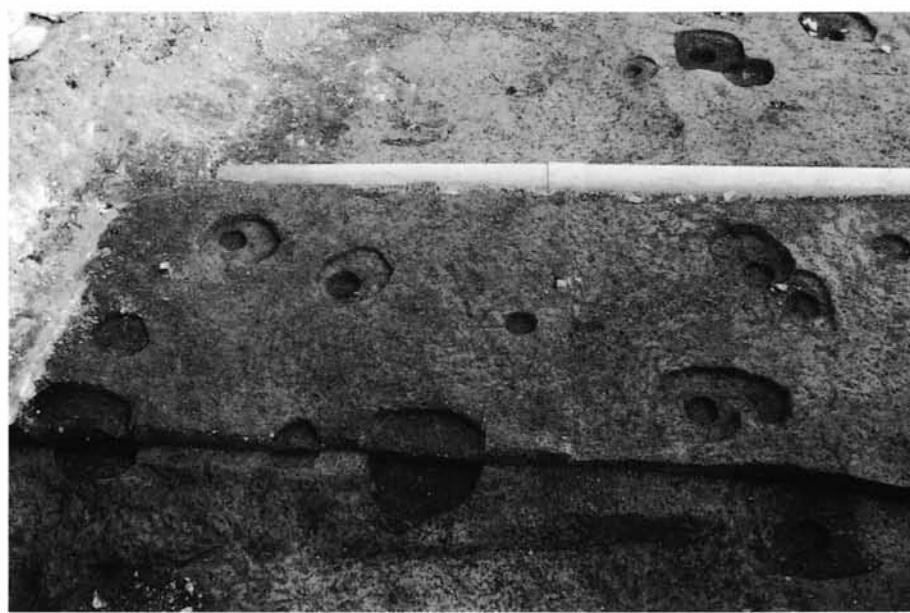
図版第56 長岡京跡右京第787次(7ANNM-4地区)・友岡遺跡



(1) B 拡張区(西から)



(2) C 地区トレンチ全景(南から)



(3) C 地区掘立柱建物跡 S B 02  
(西から)

図版第57 長岡京跡右京第787次(7ANNNM-4地区)・友岡遺跡



(1) C 地区柱穴 P - 5 (南から)



(2) D 地区トレンチ全景(北から)



(3) D 北拡張区(南から)

図版第58 長岡京跡右京第787次(7ANNM-4地区)・友岡遺跡



(1) D地区土坑SK07(東から)



(2) D地区土坑SK07  
遺物出土状況(北から)



(3) D地区土坑SK04(東から)

図版第59 西ノ口遺跡



(1)調査前の状況(北から)



(2)災害記念塔(西から)



(3)記念塔碑文(東から)

図版第60 西ノ口遺跡



(1)調査地全景(北から)



(2)調査地全景(南から)



(3)流路跡 S R 02断面(西から)

## 報告書抄録

ふりがな								
書名								
副書名								
卷次								
シリーズ名	京都府遺跡調査概報							
シリーズ番号	第111冊							
編著者名								
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3			Phone 075(933)3877				
発行年月日	西暦 2004年		3月 26日					
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″	m <sup>2</sup>		
おおがきいせき・いちのみやいせき・なんばのじょうりせいいせき 大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野条里制遺跡	みやづしおおあざお おがきこあざみやの したほか 宮津市大字大垣小字 宮の下ほか	26205	89・91・ 90	35° 34' 55"	135° 11' 44"	20031015 ～ 20040120	800	道路建設
おかのいせき だいにじ 岡ノ遺跡第2次	ふくちやましひがし おか・みなみおか 福知山市東岡・南岡	26201		35° 17' 26"	135° 07' 33"	20030729 ～ 20040220	1,785	道路建設
たかなしいせ きだいさんじ 高梨遺跡第3次	きたくわたぐんけい ほくちょうしゅうざ んなかやま 北桑田郡京北町周山 中山	26381		35° 09' 26"	135° 38' 02"	20031030 ～ 20031212	150	道路建設
おおぶちいせ きだいよじ 大淵遺跡第4次	かめおかしほづちょ うかえだ 亀岡市保津町替田	26206	25	35° 01' 54"	135° 34' 42"	20021028 ～ 20030307	2,200	ほ場整備
へいあんきよ うあとうきよ ういちじょう さんぼうきゅ うちょう・ じゅちょう (だいじゅう じちょうさ)	きょうとしきたくだ いしょうぐんさかた ちょう							
平安京跡右京 一条三坊九・ 十町(第10次 調査)	京都市北区大將軍坂 田町	26101	1	35° 01' 22"	135° 43' 35"	20021029 ～ 20030310	1,300	校舎改築
ながおかきよ うあとうきよ うだいなな ひやくはち じゅうなな じ・ともおか いせき	ながおかきょうしゅ めがだにいっちょう め							
長岡京跡右京 第787次・友 岡遺跡	長岡京市梅ヶ谷一丁 目	26209	91・98	34° 55' 06"	135° 41' 17"	20031020 ～ 20031219	500	道路建設

にしのくちい せき	そらくぐんやまし ろちょうかばた							
西ノ口遺跡	相楽郡山城町綺田	26361	39	34° 47' 01"	135° 48' 43"	20040106 ~ 20010217	500	道路建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
大垣遺跡・一 の宮遺跡・難 波野条里制遺 跡	集落	平安 中近世	溝 構・土坑・柱列		土師器・須恵器・黒 色土器・木製品・土 錘 土師器・中国製陶磁 器・木製品・漆器・ 銭貨・銅製品・石製 品			
岡ノ遺跡第2 次	集落	弥生 奈良・平安 中世・近世	竪穴式住居跡・溝 土坑・ピット 井戸・土坑		弥生土器 土師器・須恵器 瓦器・陶器			
高梨遺跡第3 次	集落	縄文草創期 奈良	溝・ピット		石槍 須恵器			
大淵遺跡第4 次	集落	古墳 奈良 平安・鎌倉	竪穴式住居跡・溝 溝 溝・井戸・集石遺構・土坑・ 柱穴		土師器・須恵器 土師器・須恵器 須恵器・緑釉陶器・ 無釉陶器 土師器・須恵器・瓦 器・白磁・青磁			
平安京跡右京 一条三坊九・ 十町(第10次 調査)	都城	古墳 平安 中世	溝 掘立柱建物跡・条坊側溝・土 坑・柱穴 溝	須恵器 須恵器・土師器・黒 色土器・緑釉陶器・ 瓦・土馬 瓦器	鷹司小路 両側溝			
長岡京跡右京 第787次友岡 遺跡	都城・集落	平安 鎌倉	掘立柱建物跡・溝・土坑 柵・ピット	須恵器・土師器・土 馬 土師器・瓦器				
西ノ口遺跡	散布地	近世	流路	土師器・須恵器・瓦 質土器				

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

## 京都府遺跡調査概報 第111冊

平成16年3月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3  
Phone (075)933-3877 (代)

印刷 河北印刷株式会社  
〒601-8461 京都市南区唐橋門脇町28  
Phone (075)691-5121